葉牡丹の花

水鳥中学生徒会シリーズ
2

舞夜じょんぬ

――もし、おとひっちゃんと中学で出会っていたら、僕は親友でいられただろうか。

今年に入ってからいつも思うのは、おとひっちゃん……僕の親友関崎乙彦の仇名だ……が、どうしてこうもおばかなことばかりしているのかってことだった。
たぶん僕だったら、もっと楽なやり方するのにな、どうしてこんな面倒なことばっかりするのかな。いつもそんなことを考え、いつのまにか話を聞き流すくせがついていた。
――おとひっちゃん、もごもごしてないで言っちゃえばいいのに。
「雅弘、聞いてくれないか」
とうとうおとひっちゃんが口を切った。ずうっと三十分くらい、僕は待っていた。やっとだやっと。
「うん、いいよ。おとひっちゃん」
僕は少し笑顔をこしらえてみた。にっと笑ってみた。こうするとおとひっちゃんは機嫌よくなるってことを、十年間の経験上、よく知っているからだ。
「来週の日曜、悪いんだけどな、一緒に着いてきてほしいんだ」
「どこに？」
野球とかサッカーの試合を観にいこうと誘っているんだろうか。悪いけど、それは勘弁してほしい。やっと風邪が治って学校に行く前日なんだって奴にだ。
「あそこにだ」
「あそこってどこ」
――ははあ、もしかして、この前言ってたことかなあ。
僕の直感は大抵当たる。先週、本当だったら行くはずだったんだけど、キャンセルせざるを得ない事情があって、行けなかった、あそこだ。
「雅弘、青大附中に付き合ってくれないか」

先週から僕は、ひどい風邪を引いて寝込んでいた。インフルエンザではないけれど、熱も出たししっかり学校も休んでしまった。そんな中、違うクラスのおと ひっちゃんは毎日、僕のうちへプリントだとか、ノートだとかいっぱい用意して来てくれた。そろそろ熱もひいた頃だし、学校へ行ってもいいかな、というちょ うどの時期だった。
「いいけど、けど俺が行っていいの」
「いいに決まってる。最初からお前と一緒にいくつもりだったんだ。っていうか、生徒会では今回動けないし」
――おとひっちゃん、また熱くなってるな。
外の雪も一気に溶かす、関崎乙彦水鳥中学生徒会副会長様。
僕はだまって話を聞いていた。パジャマのままで炬燵に入り、みかんの皮をむきながら。おとひっちゃんは片膝を立てて、学生服の襟を外した。こうやるとなんとなく、おとひっちゃんも

学校の番長っぽくみえる。こうすれば総田と見かけだけでも、対張れるのにな。

「お前が学校を休んだ次の日さ、俺と総田とふたりで行ったんだ。本当は雅弘だけ連れて行くつもりだったけど、お前が倒れたんだったらしょうがねえよ。あれだけ乗気でない総田がだぜ、ぎりぎりになって付き合うなんて言い出したから」
　――きっと修羅場だったんだろうなあ。
　あとで総田幸信……水鳥中学生徒会、もうひとりの副会長様で、かつおとひっちゃんのライバルだ……に電話をかけておこう。こっそり決めた。
「で、青大附中に行ったんだけどな。なんか、評議委員会の方で、渉外の仕事は担当することにもう決まってるんだとさ。総田はあんまりいい顔してなかったけどな。とにかく、そこの評議委員長と話して、今週もういちど、集まろうってことになったんだ」
「じゃあ総田とか、あと内川会長と行けばいいのに」
　天敵総田よりも、一年下の生徒会長・内川くんといきゃあ一番丸く収まると僕は思う。おとひっちゃんのことを慕っている、数少ない味方のひとりなんだから。
「いや、内川も、三月の卒業式式典の準備でてんてこ舞いなんだ。手が空いているのは俺だけだし、総田はもう行く気ないみたいだし」
　――だからなんで俺が行くんだ？
　前からおとひっちゃんには、青大附中との交流会に参加するように頼まれていた。僕は一切生徒会とは関係がない。単におとひっちゃんの親友だっていう、そ れだけだ。なのに、総田にしろ内川にしろ、僕にしょっちゅう頼みごとをしてくる。単純なおとひっちゃんだったらしかたないと思って手伝うけれど、それ以上 の見る目持っている総田がなんで僕なんかに頭下げるんだろう。まあそっちの方が一番丸く収まるってこともあって、僕はしょっちゅうおとひっちゃんの目を盗 んで連絡を取り合っていた。
「そうか、じゃあいいよ。もう病院でも、学校行っていいって言ってたし」
　まだ鼻水が垂れてきて、ティッシュが手放せない。くずかごの中はくしゃくしゃのティッシュで一杯だ。あとで捨ててこなくちゃいけない。
「あれ、おとひっちゃんどうした？　なんかこう、すっごくほっとしてるようなんだけど」
　僕は鼻の下を人差し指でこすった後、おとひっちゃんの顔を見つめた。
　気付かれないけれどゆっくりと、注意深く。
「なあにがほっとしてるだよ。お前、昨日までは具合悪いって布団の中から出てこなかったくせにさ」
　――おとひっちゃん、心配してくれてるんだよな。
　ほこっと、嬉しくなる。
「じゃあな、期末試験用のノート、四組の分と、ほら、三組の分、両方持ってきた」
「両方ってなんだ？」
　昨日まで持ってきてくれたのは、おとひっちゃんのクラス……僕は二年三組で、おとひっちゃんは四組。別なのだ……の授業ノートだけだった。全くないよりはましだけど、先生によって出

題範囲が異なるから困ったなあ、とは思っていた。
　おとひっちゃんは顔の筋肉を妙に引き締めつつ、つなげた。
「水野さんが、たまたまノート取ってたって話してたから、そっちもコピーしてもらったんだ。技術と保健体育だけは別だけどな」
　――さっきたんかあ。
　水野五月さん、通称さっきたんが、おとひっちゃんとどういう風に話をしていたんだろう。ちょこっと気になる。一瞬だけ想像し、すぐにイメージが湧いてや めた。わかりきってる。きっとさっきたんはおとひっちゃんに、はつかねずみの表情で見上げたんだろうな。その一撃でおとひっちゃんは、ぼおっとしてしまっ て夢うつつってか。
「ありがとう。おとひっちゃん、こういうところがすごいよな。俺ならそこまで気付かないよ。ごめん」
「じゃあな、明日、朝、迎えに行くからな」
「ちょっと、いいよ。大丈夫だよ」
　おとひっちゃんは首を振って、手も軽く振って、僕の部屋から出て行った。食べ終わったみかんの皮が散らばっている。皮を出さずにみんな飲み込むのがおとひっちゃん流の食べ方だ。僕はくずかごにそれを詰め込み、袋の口を閉じた。
　机のノートとコピー、両方を開いた。
　おとひっちゃんは今回、コピーじゃなくて、自分のノートを全部手書きで写してくれたらしい。学年トップを譲らないおとひっちゃんのノートは貴重品だ。けど、でも。
　――実はさっきたんの方が使い勝手いいんだよな。
　コピー紙のきれいな文字。ノートごと借りたんだろうか。もしそうなら僕は断言したっていい。おとひっちゃん、僕の分の他、絶対自分用にもコピー取っているはずだ。

　窓の雪が凍っている。
　咳き込みながら窓の外を眺めると、おとひっちゃんが背中を丸め、ジャンバーに手を突っ込みながら歩いていくのが見えた。
　僕のうちはおとひっちゃんとこから近いけれど、一週間毎日、わざわざ僕の部屋まで上がってきて、ぶっきらぼうな言い方で元気付けた後帰っていくなんて、 そう簡単にできることではないと思う。僕だけじゃない。きっと、おとひっちゃんにとって友だちといえる奴には、きっと誰にでもそうするんじゃないかって思 う。
　そういう奴だ。おとひっちゃんは。
　だから僕の親友なんだ。
　インフルエンザかもしれないのに、期末試験前だっていうのに、関係なく僕の側にきてくれるなんて、まずいやしない。
　――おとひっちゃん、いい奴だ。けどな。
　寝すぎてちょこっと痛む片一方の頭をさすりながら、僕はもう一度ベットにもぐりこんだ。病人の特権を利用して、もう少し寝ていよう。

水鳥中学生徒会が行った昨年度の大イベント「学校祭三日目・自主企画」は、いろいろ修羅場もあったにせよ、喝采の中終わった。おとひっちゃんの爆弾発言 を初めとして、かなり衝撃が走ったことも多かった。でも、なぜかわかんないけれど、水鳥中学の先生はあまりうるさく言う人がいなかった。僕もこれは意外だ なあ、と感じた。

どうやら、おとひっちゃんの燃やした情熱の炎が、大人にはすうっと伝わったらしい。

肝心要の生徒たちには全くだったけれども、それは気付かせないようにしておけばいい。

その辺は総田副会長がうまく立ち回って片付けたらしい。

その後生徒会改選は、おとひっちゃんの後輩・内川くんがあっさり信任投票で生徒会長に任命され、二年副会長も自然と再選。書記と会計も一年がひとりずつ プラスされた以外はあっさりとスライドした。なあんだ、あれだけおとひっちゃんが悩む必要もなかったってわけだ。僕としてはおとひっちゃんを会長にしたい 気持ちでいっぱいだったのだけど、今思えばそれは危険なことだったと思う。

純粋で、ひたむきで、不器用なおとひっちゃん。

幼稚園の頃から、僕をかばっていじめっ子たちに立ち向かってくれたおとひっちゃん。

今日も、見舞いに来てくれたおとひっちゃん。

すっごく、すっごくいい奴なのだ。　僕はおとひっちゃんが大好きなはずなのだ。　なのに、こうやって寝ていると、妙な気持ちが湧いてきて、気持ち悪くなる。　熱がまた出てしまいそうだ。

――おとひっちゃんがもし、俺の親友じゃなかったら。

　炬燵の上におきっぱなしのコピーを、ベットから無理やり手に取った。　さっきたんのノートコピーだ。

――明日、学校に行ったらありがとうっていっとこうかな。

さっきたんとは小学校五年の時に、同じクラスになって以来、女子の中でもちょくちょくおしゃべりするようになった。きちんと男子にも「くん」付けで呼ん でくれるし、誰に対してもやさしいはつかねずみっぽい笑顔を見せてくれる。僕に対しては、ほんの少しだけど、サービスしてくれているような気もするけれ ど、友だちづきあい長いんだからしかたない。そのくらいは、嬉しいこととしてもらっとこう。

――でも、おとひっちゃんは相変わらず気付いていないのかな。

――さっきたんにはもろにばれてるってこと、気付いてないんだろうな、あの調子だと。

僕は信じて疑わない。

おとひっちゃんの想い人がさっきたんであることと、それがすでに、生徒会役員全員にばれているってことを。みな、同情を持って内緒にしてくれている。紳士同盟だ。

――僕だったらたまったもんじゃないな、ってなんとかしようとするけどなあ。

――それすらしようとしないおとひっちゃんって、やっぱり、なんというか。

続けると、僕は親友としてあるまじき言葉を口走ってしまう。

もしかして僕はおとひっちゃんのことを見下してるんじゃないだろうか。

裏表のないこんないい奴を、せせら笑ってるんじゃないだろうか。

もやもやしたものが抜けきらず、僕は慌ててテレビをつけた。落ち着かない時に限って、画像は映らない。白黒のままでかえっていらいらする。すぐに消してラジオを入れた。これもだめだ。電波が悪天候のため受信しづらくなっているみたいだ。
――ああ、全くなんだよ！
もう風邪が鼻以外に残っていないせいか、むしょうに動きたくってならない。病人の時間は終了だ。僕はベットの上に投げっぱなしの青いはんてんを羽織り、 そっと階段を降りた。父さんも母さんも、まだ店に出ているはずだ。僕ひとり、誰にも聞かれないように電話ができるのは、この時間帯だろう。　期末試験一週 間前は、生徒会活動もお休みだ。もちろん部活もそうだけど。
僕が電話したのは、もうひとりの生徒会副会長、総田幸信だ。
今年こそ、万年二番順位返上に燃えているんじゃないだろうか。邪魔したら悪い、とおとひっちゃんには思う。でも総田には全然そんなこと考えないですむ。勉強だけが命じゃないだろ、ってことだ。
運よく、一発で総田が電話口に出た。相変わらずへらへらした口調に凄みが増している。
この調子だと日々おとひっちゃんと遣り合っているんだろう。あっさり勝利なんだろう。
「佐川かあ、お前、一週間寝込んでるって聞いたけど、元気そうじゃねえか」
「うん、明日から学校行くよ」
僕はまだかすれた声で答えた。
「それより、今いいかな。ちょっとおとひっちゃんのことで聞きたいことあるんだけど」
「おおさ、なんだ」
声は明るい。生徒会室での戦いは勝利の連続に違いない。
「この前、青大附中におとひっちゃんと一緒に行ったって聞いたんだけど、その時なにかあったのかなあ。ちょっとだけ気になったんだ」
「ちょっとだけってなんだよ。関崎がまたぐちってたのか」
「いや、そうじゃなくてさあ」
天井の木目が少し濃くにらみつけてくる。僕は見上げながらぐっと腹に力を入れた。
「なんで総田、青大附中の交流会に乗気じゃないのかなあって思ったんだ」
ぐっと言葉に詰まったようすだ。ふうっと息を吹く気配があった。
「俺が乗気にならないとおかしいか」
「いや、総田のことだから、なんか考えてるんだろうなって思ってはいたんだ。けど、おとひっちゃんだけに全部任せておくなんて、何かまずいってことあるんじゃないかなあ。俺はおとひっちゃんにそういうこと、言う気なんて全然ないよ。ただ」
ちょっと咳き込んだ。まずい、店に聞こえないようにしなきゃ。
「俺も青大附中にくっついて行く以上、総田に迷惑かけるようなへま、したくないからなあ」
思いっきり気の抜けた声を装った。僕の得意技と、人はいう。別に普通に話をしているだけなのに、総田はものすごく僕を買ってくれているらしい。

「へまな。確かにな」
　総田は沈んだ声で返事した。
「まあなあ、佐川が一緒に行くんだったら、一安心ってとこか。関崎は俺の想像をはるかに越えることやらかして、大騒ぎに仕立てちまうから、正直なところ心配ではあったんだ」
「だから一緒に行けばいいのに。それかさ、内川会長だけでもさ」
「いや、待て、俺の話を聞けよ。佐川参謀殿」
　――参謀か。
　少しじらして、相手に話をさせるのがコツ。
　あとは一切口を挟まず、最後まで聞くこと。
　総田にせよおとひっちゃんにせよ、自分でしゃべりたくてなんないことがたくさんありすぎるのだ。そういう奴にはとことん、聞き役に廻ってやって、気持ち よくさせればいい。そうすれば大抵の情報は簡単に手に入る。どうしてふたりとも、こんな簡単なことに気付かないんだろう。僕もあまり教えてやらないから、 わからないのかもしれないけれど。

　咳払いをした後、総田の口はするすると僕の聞きたいことを吐き出してくれた。
　僕はずっと耳に受話器をつけて、寒気が走るのをこらえていた。
「佐川がぶっ倒れて青大附中の評議委員会にいけなかった時のことなんだな。実は」
　総田の言い方は秘密めかしていたけれどたいしたことじゃないようにも聞こえた。
「関崎ひとりで舞い上がらせておくのもいろいろまずいし、内川にうまく話をつなげてやることも必要かなと考え直して、俺もくっついていくことにしたんだ。関崎のことだ、青大附中の連中たちの顔を見て、赤い布をひらつかされた牛状態にならないとも限らんしな」
　今年の一月に、一度生徒会同士の交流ということで出かけたことはあると言っていた。その時は生徒会役員全員で青大附中へと乗り込んだわけだ。ただ、総田はその時あまり、いい印象を受けなかったらしい。おとひっちゃんとは正反対にだ。
「関崎本人は非常に、青大附中の連中に対して仲良くしたいような顔をしてたな。向こう側の連中ってのは、やたらと女たらしで一本ねじの抜けたような奴が多 くて、どうも見ていて虫唾が走るタイプだったんだな。女子はともかく、男子連中、お前ら男だろ、もっとしゃきっとしろよ！って怒鳴りたくなるような感じな んだ」
　――おとひっちゃんとは正反対ってことかな。
　なんとなく、わからないでもなかった。僕は黙って聞いていた。
「で、今回は生徒会を抜きにして、向こうの評議委員会ってとこと直接交流会をいたしましょう、ってことで話が来たわけだ。おい、評議委員会ってなんだ よ、って聞いたらな。単なる水鳥中学の学級委員の集まりときたもんだ。おい、なんで生徒会が学級委員と仲良しこよししなくちゃいけないんだって、俺として はかちんと来たわけだ」
　――評議委員会、と学級委員会とは別なんだ。
　その辺はよくわからない。やっぱり、私立中学にはいろいろあるんだろう。
　いきなりまた声を潜め出したのは、総田にもさしさわりのある話題なんだろう。

「でもまあ、関崎が機嫌よく話を聞いて、向こうの評議委員長と仲良くしゃべっているので、害はないだろうと俺も安心していたわけだ。単なるお友達づきあいを止める気ねえよ。女子は別だしな」
　――総田好みの女子がたくさんいたんだね、きっと。
　僕は思わず咳払いで笑いを隠した。
「四月以降少しずつ、青大附中の部活動関係のイベントとかに参加させてもらおうとかいろいろ話は盛り上がっていた。うちの中学、バスケ部だけはやたら強い だろ。それ、向こうの評議委員長も知っててさ、ぜひ一度練習を一緒にさせてもらうことできないかとか、交流を部活動中心でどうだろうかとか、提案してくる んだ。やたらと！」
　――全国大会出場したもんな。去年の中体連で。
　水鳥中学バスケ部を絶賛されたからには、総田はもとより、おとひっちゃんだって機嫌よくなるだろう。ずいぶん、青大附中の人は水鳥中学のことを調査している。
「けど、本当に盛り上がるのは俺たち二年連中が引退してからのことになるだろうってことも言ってたな。やっぱりいろいろよんどころなき事情ありありなの で、すぐに交流会をやるのは、青大附中でも難しいんだそうだ。ま、俺も一応は来年受験生だし、あまり生徒会にもかかわってられないしさ。とりあえずは内川 にバトンを渡すだけでもいっかということで、その場は納まった。それにしてもあいつら、野郎のくせに、お茶、出すんだぜ」
「お茶って、出すって？」
　言っている意味がわからず問い返した。
「ほら、家庭訪問の時なんかにうちの父ちゃん母ちゃんが、先公に出すような感じだぜ。すっげえ濃い緑色の液体を、茶碗に入れて持ってくるんだぜ。お茶くみって奴」
「それを、男子がやるのか？」
「そうなんだ。俺だったら会計連中にやらせるようなもんだが」
　――総田、それって男女差別だよ。川上さんの前で言ったらまずいよ。うちの父さんも母さんに夜、番茶入れてあげて飲んでるよ。
　知ったことじゃないけれど、心の中ではちゃんと注意しておいた。
「とにかく、青大附中は変だ。絶対、変だ。なにがおかしいって、まず茶道の授業があるだろ。委員会活動はほとんど部活動と一緒で、評議委員会は別名演劇部 なんだと。要するに学級委員会がいきなり下手な演劇やらかすようなもんだぜ。あとな、規律委員会ってのがあるんだけどな、こっちでは生活委員会とおんなじ ことしているらしい。ちゃんと週番もあるんだぜ。違反カード切って制服のことぐたぐた言うだけじゃないんだ。あいつら、暇があると洋服屋に出かけて、『青 大附中ファッションブック』ってもん、作るんだぜ！」
「『青大附中ファッションブック』って何？」
　全く謎だ。青大附中の理解できない組織関係に僕も思わず問い返してしまった。
「ほら、漫画ばっか描いて集まってる連中いるだろ。いかにももてないって感じの奴。そう奴らがコピー取って本を回したりするだろ。ああいうことを、委員会 の経費で堂々と落として、イラスト本作ってるんだ！　佐川想像してみろ！　お前のクラスの水野さんがいきなり、漫画同人誌

を生活委員会の主催で作り出し た、なんてことになったらどうする」
――さっきたんなら、描くんでなくて、モデルになって描いてもらうほうじゃないかな。
――総田、そういう案もらってきたんだったらどうして利用しないのかなあ。
僕はさらに続く青大附中の委員会最優先主義疑惑を聞き流した。
――おとひっちゃんに内緒で、生活委員会をうまく丸め込んで、さっきたんをモデルにした「違反防止のファッションについて」みたいな冊子を作るようもち かければいいんだ。おとひっちゃん、喜ぶぞ。校則最優先主義にも反しないし、おとひっちゃんは舞い上がる。総田にも迷惑がかからない。一石三鳥じゃない か、そういう風にどうして総田、利用しないのかなあ。もったいない。

核心に進むにはまだ十分くらい時間が必要で、僕も風邪がぶり返しそうな寒い廊下で足をばたばたさせていた。そんなに青大附中が変わった学校だってことを聞かなくたっていいのだ。総田だって本音を言っちゃえば、
「どうみたって情けない連中が、なんでこうも好き勝手やってるんだばっかやろう！」
ってとこだろう。僕も聞いていて、面白そうだなとは思う。やることは面倒そうだけど、これだけイベントが揃っていたら、水鳥中学の生徒も喜ぶんではないだろうか。
「で、おとひっちゃんは何て言ってたの」
僕は無理やり話を引き戻した。
「あいつか？　もう、度真面目の極地で話を聞いてたぜ。相当、あのうすらぼけ評議委員長と相性が合ったみたいでな、『ぜひ自分たちの代で、青大附中との交 流を軌道に乗せたい』と烈火のごとく語っていたぞ。まあ、いつものことながら、どうでもいいことに熱をあげるのが関崎のいいとこなんだろうが、振り回され る俺たちの身にもなってみろ。これからどうする？　顧問の萩野先生あたりに話を持って行って、拝み倒すのか？　青大附中の連中は受験がないけどな、俺たち には地獄の公立入試って奴があるんだ！　どうするんだよいったい」
――公立高校入試か。
そういえば、総田は公立にするんだろうか、それとも私立に……。
おとひっちゃんと対を張る成績なんだから、青大附属高校を受験しないとも限らない。ちなみに青大附属中学・高校ともに、青潟市では難易度ナンバーワンレベルの学校だ。僕にはおよびじゃない。
「総田、今のところ青大附属を受ける気ないのかなあ」
「ねえよ、あんな金のかかるとこ、誰が行くかって！」
即座に却下だった。
「俺はな、自由にやりたいことができる公立で十分なんだ。もっとも落ちたらしゃれにならねえけど、青大附属みたいなぬるま湯階級の連中としゃべくってた ら、もう腹が立ってなんねえよ。なあにが、自慢下に『奇岩城』だ？　女子と抱き合ってポーズとってビデオ撮るなんて、お前らなにか欲求不満なんじゃねえ かって突っ込みたくなるぜ」
――女子と抱き合ってポーズ？　なあんだ、そういうことか。

総田には悪いけど、本音が透け透けだ。
――さっきから総田は女子のことにやたらこだわってたよなあ。やっぱり、川上さんと仲良くするだけではものたりないのかなあ。女子と抱き合ってポーズし てみたいのかなあ。なんか今話している総田、かなり、欲求不満なんだね。川上さんも親切にしてあげればいいのに。ノートをコピーしてあげるとかすればいい のにな。さっきたんみたいに。

長話をした割には、得るものは少なかったというのが正直なところだ。
要は、総田が青大附中の連中と相性が合わなかったという、ただそれだけのことなんだろう。僕もそれは想像がつく。おとひっちゃんと仲よく話をしている評 議委員長ってことだから、きっと器用な奴ではないだろう。かなりとろい奴だったのかもしれない。でもおとひっちゃんはそいつと仲良くしゃべりつづけ、次回 の青大附中訪問をＯＫしてしまったという。それはそれでいいんじゃないだろうか。どうせ総田が文句言いながらも、萩野先生にごますってお願いすること だろ うし、おとひっちゃんはそれを自分の手柄だと勘違いして、青大附中にせっせと通うことになるんだろう。おとひっちゃんの居ぬ間に総田は内川会長を懐柔すれ ばいい。万万歳だ。
「佐川、もしあの学校に行くんだったら、ひとつだけ注意しとけ」
もう一度、声がひそやかに聞こえた。車の音が響き、聞き取れずに大声で聞き返した。
「注意ってなんだよ」
「ひとりな、ちょっと、やばいのがいる」
「やばいってなんだよ」
――最重要情報かな。
みしっと天井が軋んだ。雪が積もって落ちる寸前なのかもしれない。
「一回目、二回目と共通して、評議委員にひとり、なんともいえず、いやあな感じがするのがひとりいるんだ」
「ふうん、性格が悪いんだ」
「いや、そういうわけじゃあないだろ。性格悪だったら、うちの川上以上の奴はいない」
――愛の裏返しだね。
この辺はつっこまずに僕も流した。
「さっき俺が、お茶を出してくれたとか言っただろ。評議委員の野郎連中が」
「うん、すっごく濃い緑色のお茶を出してくれたってね」
「俺には一杯だったんだけどな、関崎には五杯くらい出したんだ」
――そんな飲んだらおなかがちゃぽちゃぽになっちゃうよ。
おとひっちゃんに同情しつつ、気になるものをどんと待つ。
「それがな、佐川」
総田は少し黙って、言葉の準備をしているようだった。こういう言葉が、大切だ。
「二杯目からは、その女子が十分ごとにお茶を、関崎の分だけ代えていったんだ」
――女子？
なんか、総田の話には「女子」が絡んでいて困る。

こういうのって、半年前の学校祭でもいやというほど経験した。
また変な方向に話が進むといやだ。
「そのいやな奴って、女子なの」
「そうだ。お前も見たらわかる。あの雰囲気といい存在といい、なんとも言えない」
総田はその女子に対して、それ以上話さなかった。やはり、男たるもの言葉を慎みたいんだろう。言わないってことは、言葉に尽くせないってことだ。言葉に尽くせないってことは、そうとうの、むかむかするタイプだってことだ。
「総田、ひとつ聞きたいんだけど、その女子のお茶を、おとひっちゃんは飲んだの？」
「全部、無理して飲んでたな。あいつのうち、どういうしつけしてたんだ？　お茶は全部飲まなくてはならないとでも思ってたのかよ。一気に飲み干すもんだか ら、その女子がすぐしゃしゃり出てきて、また濃いお茶を持ってくるんだ。で、関崎もしっかと飲み干して、まるでわんこそばみたいなことしてるんだよ」
――おとひっちゃんらしいや。
人のうちで出されたものは、きちんと食べきらねばならないというしつけをされていたのは、僕も知っている。おとひっちゃんの性格上、そういうきっちりし たところは抜けていない。でも、お茶を五杯ってのも飲み過ぎなんではないだろうか。帰りのバスで、ものすごくトイレ行きたくなったに違いない。
「でもそれは、その女子が問題あったんじゃなくて、おとひっちゃんに問題があったんじゃないかなあ。飲み終えてからになってたら、気を遣って出す人もいるしさ」
「ああそうだな。うちの川上とは大違いだな」
やたらと川上さんの名前が出てくる。もう笑う寸前で僕は片腹を押えた。
「でも、あの女子は違うぜ。なんというかなあ、ねばっこい。じっと関崎の手元を見詰めていて、隣りであの評議委員長の茶碗がからからになっていても全然気 にせずに、ただ関崎だけ見つめてるんだ。まあな、悪いことしているわけじゃねえから俺も何も言わなかったけど、とにかくお茶はちびちび飲むように心がけた ぜ」
「変わった女子なんだね。評議委員なの」
「らしい。二回目のご訪問時は俺たちも用心して、できるだけお茶を注がれないですむように、ほとんど手付かずにしておいたんだ。関崎もそうしてた。けど な、相手はもっと上手だった。冷めたんだろ、ってことでまたお茶の準備をして、関崎の茶碗だけ持っていくんだ。それも全く手をつけずにだぜ」
僕も行く時は、お茶を一切飲まないようにしようと決意した。
「けど、なんでおとひっちゃんにだけ、そんなお茶注ぎ攻撃してくるのかなあ」　まさか、という直感が走った。こういう時の僕の直感は百パーセント当たる。総田に答えを言わせたかった。
「まあ、あいつにも、新しい春が来たってことかねえ。どうですかい、佐川の旦那」
――おとひっちゃんはさっきたん命だって、知ってるくせに。
ラスト五分の興味深い情報を耳に納め僕は受話器を置いた。
すっかり風邪をぶり返しそうで、あわててベットにもぐりこんだ。母さんにばれたら大変なこ

とになる。また、怒られて学校を休まなくちゃなんなくなる。学校好き嫌いあるかもしれないけど、僕は勉強以外学校って大好きだ。

――さっきおとひっちゃんは、あまり乗り気じゃない感じで僕を誘ってたよな。
おとひっちゃんに関する情報について、僕は誰よりも持っているつもりだ。
なにせ付き合いが半端じゃない。幼稚園の頃からあいつは僕のことを守ってくれたし、今でも「雅弘、お前は俺の一番の親友だからな！」と言ってくれている。
おとひっちゃんが今、誰のことを好きで、誰を信頼していて、何をどうしたいか、不思議なくらいわかるのは、たぶん一緒に過ごした月日の長さにもあるのだろうと、僕は思う。
そう、ほとんどのことはそうだと思うんだ。
ただ、ひとつだけわからないのは。
――どうして俺は、おとひっちゃんみたいな奴と親友でいたいんだろう。

もちろん理由はたくさんあって、数え切れないくらいだ。小さいころからの仲良しだからと一言で片付けることもできなくはない。けど、中学に入って以来僕 としては、おとひっちゃんのお間抜けなところばかりが目について、かつてのかっこいいおとひっちゃんの姿が見えなくなってきている。　自分でも、それはや だなあと思う。
元陸上部だから運動万能は折り紙つきだし、成績は学年トップだし、性格さえ見なければかっこいい奴の部類に入るだろうし。
　でも、おとひっちゃんがなんで、自分の行動がみえみえだってことに気付かないのが不思議だった。僕がいつも、おとひっちゃんのしたことについて影で動 いていることすら、想像していないんだろう。ばれないように気を遣ってはいるけれど、僕は総田としょっちゅう連絡を取り合っている。いつばれてもしかたな いのに。そうだ、さっきたんのことだってそうだ。おとひっちゃんは堂々と隠しているつもりかもしれないけれど、実は当のさっきたんにも、好きって気持ちを 気付かれているなんて知らないんだろう。クラス全員にお見通しだってことすらも。
まったく、おとひっちゃんは僕よりずうっと、ガキだとしか言いようがない。
影で立ち回っているのが僕と総田だと知ったら、きっとぶっちぎれるだろう。
絶対に、これを知られてはならない。
僕はおとひっちゃんの親友でありたい、大好きなおとひっちゃんだと思っていたい。
でも、だんだん僕の中でずるずると下降気味な価値ランク。
――ごめん、おとひっちゃん。けど、どうしようもないよなあ。
布団の中で思いっきりくしゃみをした。廊下にいた母さんに気付かれて、また苦い粉薬を飲まされた。ああ、やっぱり早く学校行きたいよ。

――その気持ち悪い女子ってどんな女子なのかなあ。きっと兎をがぶっと食べてしまうようながっちりした人なのかもしれないなあ。さっきたんとは正反対だ よきっと。相変わらず今でも、おとひっちゃん、さっきたんの前に出るとろくに口、利けなくなるし。お茶くみの女子のこと

はなんとも思ってないよなあ。

おとひっちゃんがなぜ、僕を連れて行こうとしたのか。
ふたりで行こうと誘ったのか。総田じゃなくたって、僕には見え見えだ。
――今度はジュースを一缶、もって乗り込もうよ。おとひっちゃん。
僕は口直しに甘いみかんをもう一つ皮むき、ほおばった

　天井が果てしなく高い青潟大学附属中学の体育館。しかも広い。水鳥中学の体育館とは大違いだ。床もてかっているし、しかもつるつるだ。
　スポットライトが天井全開の中、おとひっちゃんはひたすら体育館内を全力疾走していた。
　ひとりではない。
　もちろん僕でもない。
　僕は入り口付近でもたれながら眺めていただけだった。
　――おとひっちゃん、息、切れないよなあ。
　元陸上部でしかも長距離ランナーだったのだから。今はだいぶ身体もなまったと言っているけれど、高校に入ったら陸上に復帰したいようなことを話していた。
　一緒に背中にくっついて白い息を吐いているのは、伸びかけのスポーツ刈り頭をきりりと整えた、青大附中の男子だった。制服のブレザーではない。濃い青に白い線の入ったジャージ姿だった。
　――しかし、挨拶もそこそこに、
「じゃあ、少し一緒に走りませんか」
はないよな。
　おとひっちゃんも即座にＯＫした。僕には理解不能だ。
　何が楽しくて、「体育館三十周持久走」やろうって言うんだろう。

　　ふたりとも顔は険しい。がはがはと白い息を吐きながら、それでもフォームを崩さないところが、やはり運動部。あと五周回ればゴールだ。疲れてるんなら いいかげんやめろよ、誰も誉めるわけでもないんだから、と僕は思う。でもおとひっちゃん、無駄な努力が大好きなんだからしかたない。
　――けど、日曜だってのになんでこんなことしてるんだろ。
　後ろの方でまたひとり、入ってくる気配がした。髪の毛をお下げ編みにして、耳のところでくるくる巻いてカンフー映画の女の子みたいな感じにしている女子だった。この人はちゃんと制服できたらしい。軽く頭を下げてくれたので、僕も帽子を脱いで挨拶した。
「水鳥中学の人ですか？」
　おっとりした口調で聞かれて、僕もつい笑顔で答えた。
「あと、向こうのひとりと一緒に」
　女の子はこっくり頷くと、黙ったまま持久走を観戦し始めた。青潟大学附属中学の評議委員かなんかだろう。唇が少し光っている。瞳もきょとんとしているけど大人みたいだった。なんとなくだけど、さっきたんに似てると思った。

　持久走は大詰めだ。マッチレース、と思わず実況をしてみたくなった。僕の前を走り抜けたふたりの顔を見るとまだまだ余裕が感じられる。ただちょっとだけ 相手の男子、分が悪そうだ。歯

を食いしばり、あごが出ている。おとひっちゃんはもくもくとフォームを変えていない。あと二周。
　――ちょっと相手が悪かったよな。
　勝利はまず、おとひっちゃんの手にありってとこだ。
　青大附中の彼も相当馬力あると思うけど、やはり陸上部上がりの長距離走者と勝負するというのは、かなり無謀だそんなこと知るわけないだろうから持ちかけたんだとは思うけど。おとひっちゃんの性格上、遊びでも手は抜かない。どんな時も全力投球。
　たとえこれから、青大附中評議委員会主催で、お茶を注がれつつ交流準備会が行われるとしてもだ。

　また後ろから人の入る気配がした。横目でちらっと伺うと、ブレザー姿の男子がひとりと、一緒に連れられてもうひとり女子が姿をあらわしていた。僕の隣り にいる女の子も同じく視線を向けた。男子の方は僕とその子へ礼をしてくれたけれど、もうひとりのポニーテール女子はつんと向こうを向いたままだった。態度 悪い。
　――もしかして、例の彼女だろうかな。

　いよいよラスト一周。ここで声をかけなくちゃ。
「おとひっちゃん、勝負だ！」
　はっと、隣りの女の子が僕の方を見た。
　おとひっちゃんはまったく無視。しかし踏み出す足が心持速くなったように見えた。たぶんラストスパートだ。
「健吾、がんばって！」
僕の隣りでちろっとえくぼをこしらえてみせ、女の子もかすかな声をかけた。もちろん体育館内には聞こえる。そいつ……たぶん健吾という名なんだろう……はその子に向かい、何かを言いたげな視線を送ってきた。
　――もしかして、おつきあいの人なのかな。
　帰ったら総田にこの話どう伝えようか、ちょこっとだけ考えた。
　ラストスパートの直線でおとひっちゃんは形相変えて二メートルくらい引き離した。勝負をあきらめたのか、健吾くんは距離を無理に縮めず、立ったままゴールした。僕の立ち位置がゴールだ。
　僕の目の前で、見事全力疾走。水鳥中学元陸上部の血は、見事に青大附中の覇者を倒したってわけだった。

　後ろで数人、まばらな拍手あり。立ったまま両膝に手を当てて、かがみこんではあはあ言っている青大附中の彼に、僕の隣りの女の子は近づいていった。
「おとひっちゃん、こんな本気出してどうするんだよ。これからだよ」
　答えはない。とにかく、心臓が相当苦しいらしい。学生服を脱いで、ワイシャツ一枚汗ぐっし

ょりかいたままで倒れている。こういう時はタオルを渡すのがベストなんだろう。僕はおとひっちゃんの学ランを上からかけてやった。ついでにポケットティッシュを袋ごと渡した。
「雅弘、ありがと」
　僕はしゃがみこみ、まじまじとおとひっちゃんの横顔を眺めた。マラソン大会後に精魂尽き果ててぶったおれているおとひっちゃんと同じだった。髪の毛は汗で濡れていた。息も大きい塊が白く浮かんで消えていた。
　――まったく、おとひっちゃん、手抜きできないからなあ。
「関崎さん、すげえ、あんたやっぱり、すげえよ」
　おとひっちゃんよりもダメージが低そうな彼が近づいてきて、側にしゃがみこんだ。今度はおとひっちゃんをはさむ形でさっきの女の子が、僕の前に立っていた。ちょうど足首の細いところに目が行った。すぐに逸らしたので気付かれてないはずだ。
「やっぱしなあ、生徒会でもこういうすげえ奴がいるから、水鳥中学のバスケ部ってすごいんだよなあ。ほんと、負けました。俺、尊敬します！」
　――うちの学校では絶対に言ってもらえない台詞だよな。　おとひっちゃんが腕立て伏せの要領で起き上がった。そのまま座り込み、いつのまにか円陣をこしらえている集団ひとりひとりに目を向けた。
「いや、俺もひさびさ、真剣勝負できて、すげえ楽しかった。ありがとう」
　だいぶ息も落ち着いたらしい、座ったまま、おとひっちゃんは手を差し伸べた。勝負相手の彼も、唇をぎゅっとかみ締めたまま、それでも笑みは隠し持ったまま、手を握り合った。また、周りから拍手が沸いた。いつのまにか青大附中評議委員会の連中がみな集まっていたらしい。
　あと、ぽんぽんと二回、タイミングのずれた手招き。
「時間です、立村先輩、早くしてください」
　――盛り上がってるのになあ。
　握手中のふたりが、その声に思いっきり顔をしかめていた。おとひっちゃんはすぐ無表情にもどったがもうひとりの彼はにくにくしげに一点を見つめていた。例の声が聞こえるところに。
「そうだな、では、場所を変えましょう。とりあえずみな二年Ｄ組へ集合」
　別の声……男子だった……が後をひきとる格好で指示を出した。
　円陣を構成していた連中がひとり、ふたりと固まって入り口に流れていく。最後に残った僕とおとひっちゃんと、勝負相手の健吾くんと彼女らしく女の子、そしてポニーテールの女子がひとり。
「一緒にきてくれないか。二年の女子たちと一緒に準備手伝ってほしいんだ」
「わかりました」
　廊下から聞こえるのは、やはり指示を出していた男子の言葉。
　ポニーテールの女子は僕たちをじっとにらみ据えた後、ひとつのところを見つめるような形で、入り口から出て行った。
　――なんか、変だなあの人。
　僕だけじゃない。残っていた他の連中も同じことを考えていたらしい。姿が見えなくなったと

たん、ほおっと息をついたのがその健吾くんだった。
「うざってえなあ。気持ちいいことやってるとこだってのに」
　意味ありげに、隣りの女の子へ視線を投げ、すぐに唇を一本に結んだ。
「健吾、じゃあ私、部室で待ってるね」
「ああ、すぐ連絡するからな」
　女の子は僕とおとひっちゃんにまたこくっと礼をした。手を口元に当てて僕の方をじっと見つめ、また笑った。
「ほら、早く行っちまえ」
　――照れ隠しってやつだな。これ。
　浅黒い肌が少しほてっているみたいだ。これは僕がよく、総田を恋愛ネタでからかう時、よく見る肌の色だった。
　見送った後、彼は膝をまたぽんぽんと叩いた。
「じゃあ、二年Ｄ組まで案内します」
　おとひっちゃんも急いで学生服をまとい、ボタンをかけないままジャンバーを羽織った。おまぬけな格好だ。おとひっちゃんの名誉のために、この姿が総田一同に見られなくて本当によかった。つくづくそう思った。

　生徒玄関ロビーに赤いじゅうたんが敷かれているとことか、廊下を歩いてもそれほど寒くないこととか、壁が白く明るいところとか、目が奪われっぱなしだっ た。僕もほとんど、他の学校に足を踏み入れたことがない。どこの学校もみな、木目の焦げ茶壁、風が吹き抜ける窓、冬場に廊下出る時は、防寒を完璧にしない とひどい目に合う。学校ってそういうもんだと思い込んでいたんだけど、やはり青大附中は別世界だ。
　――やっぱし、私立は違うよな。
「さっきの人、評議委員じゃないの」
「違うっす」
　またまた、照れた風に答える健吾くん。後ろで小さく、
「雅弘、黙れ」
とささやくのはおとひっちゃん。はしゃぎ過ぎと思われているようだ。おとひっちゃんは自分で仕切りたい性格だ。その辺は忘れないようにしておかなくては。
「あ、今日は最初だけ顧問の駒方先生がいますけど、すぐにいなくなってあとは、俺たちが好きにやっていいってことなんで、気楽にお願いします。あと、それとですね」
　敬語を使ったり妙にフレンドリーになったり、変わった男子だ。、
「もし、無理に飲みたくないとか食べたくないとかだったら、一切無視していいです。まじで俺もいらんもの飲めっていわれたら、相手にぶっかけるし」
　――ははん、例の「お茶五杯わんこそば事件」を知ってるんだな。
　隣りで学ランの金ボタンを必死にかけつつ、おとひっちゃんは無言だった。
　答えられるわけ、ないだろう。

一応僕の提案で、おとひっちゃんと僕の分、缶コーヒーを二本用意してきた。ちゃんと領収書ももらって。緑色濃いお茶なんて、怖くて飲めないし。

階段を上がって一番奥の教室へ向かった。扉式の教室に健吾くんとおとひっちゃん、それからきんぎょのふんみたく僕が入って行った。すでに青大附中の評議 委員が八人くらい、机をコの字型にならべて席についていた。各一席ごとに、全員の分、お菓子が紙皿にセットされていた。なんとなくお誕生会の延長って感じ だった。椅子もみな、白っぽい。いろいろと名前の彫りこみとか、カンニング用の英語の落書きも残っていたけれども、雰囲気がさっぱりしているのだけは強く 感じた。
まずは、教壇のパイプ椅子に腰掛けている、おじいさんっぽい先生に、おとひっちゃんが挨拶した。
「水鳥中学生徒会、副会長の関崎乙彦です。本日はお招きいただきありがとうございました。よろしくお願いします」
元陸上部。腹から出した声。僕の方をちらっと見て続けた。
「今日は生徒会外なんですが、渉外を担当してもらってる佐川雅弘も連れてきました。どうかこいつもよろしくお願いします」
ちゃんと僕だって挨拶するつもりだったけど、無理やり肩を小突くようにするのはどうかと思う。ま、そういうとこがおとひっちゃんだけど。
先生は口を結んだまま、にこやかに僕らを眺めていた。ふんふん頷きつつ、
「こちらこそ、よく来たね。青大附中は委員会活動の方が活発だから、今回評議委員会とのお付きあいをお願いすることになったけれども、堅苦しいことはいいからな。ゆっくりと、まずは友だちになって帰ってもらえれば大成功だよ。さ、どうぞ」
右の一番端っこにいる、色のやたらと白い人形みたいな男子生徒に頷いてみせた。
「委員会の交流会とはいうが、今日は日曜日だ。無理に堅い話をする必要はないよ。私は職員室で待っているから、ゆっくりとおしゃべりをしていきなさい」
立ち上がった男子生徒は、きちんと一礼して、先生を見送った。他の連中もつられて起立。もちろんおとひっちゃんも、僕も。
――ずいぶん、いいかげんな学校だよなあ。　気楽なことは確かなんで、僕としてはちょっぴりほっとしたんだけど。
扉が閉まり、足音が消えるまで青大附中の連中は立ちっぱなしだった。だいぶかすかに聞こえる程度のところで、僕ら水鳥中学ふたりに向き直った。
「今日は本当に、わざわざいらしてくださってありがとうございます」
おとひっちゃん、そして僕にまた一礼した。先生もいないのに、ずいぶん形式ばったことする奴だ。
僕たちふたりの席は、窓際だった。首すじが冷える以外はあったかかった。

青大附中の制服は少し茶の入った灰色のブレザーにネクタイだった。遠めで見ると、会社に向

かうおじさんたちに似ている。おとひっちゃんがああいう格好を していたら、本当に歳がわかんなくなっちゃうんじゃないだろうか。思いつつ、僕はお菓子をつまみ始めた。チョコレート、ポテトチップス、クッキー、家でお 客さんに出すようなお菓子ばかりだった。

隣りのおとひっちゃんはというと、手をつけずにノートとカンペンを取り出して、じっと例の蝋人形男子生徒に合図を送っていた。どうやらそいつが、総田の 言う「うすらぼけ評議委員長」らしい。胸に貼り付けている金の名札を読むと「立村」とかかれている。「たちむら」だろうか、それとも「りつむら」だろう か。僕の視線に気付いて、一瞬目を合わせた。でもすぐに逸らし、隣りの男子連中と二言三言話をしていた。紙コップにジュースを注いでくれたのは男子だっ た。お茶ではなかったみたいでほっとした。かばんの缶コーヒーも無事なようだ。　僕が座っている席は、蝋人形の彼の斜め左だった。真っ正面にいるのがおと ひっちゃん。今日の話し合いはたぶん、おとひっちゃんと、蝋人形との語り合いになるんだろうな。

――真面目なんだろうけど、やっぱり、すこしぼーっとしている感じするなあ。

僕は少し考えつつも、注がれた炭酸のグレープジュースをなめた。

青大附中の評議委員……いわゆる学級委員……がなぜ、そんなに交流を求めるのか、僕にはよくわからなかった。おとひっちゃんに前もって聞かせてもらって はいたけれども、そんなんだったら生徒会同士で友だちになればいいじゃないか。けど、青大附中の評議委員会は顧問の先生も、その形でいいと思っているみた いだし、あまり深いことは考えない方がいいんだろう。

なによりもおとひっちゃんの顔ときたら、すっかり溶けている。

水鳥中学生徒会室ではいつ爆発してもおかしくない地雷状態の顔してるくせにだ。

――もしかして、おとひっちゃん、青大附中でものすごくリラックスしてる？

口を尖らせながら、おとひっちゃんはさらさらと何かを書いていた。ページが左側、ぼわっとふくらんでいた。

「あの、水鳥中学生徒会からの、まず挨拶をしていいですか」

おとひっちゃん、やっぱり仕切り屋の本能発揮だ。大抵水鳥中学だと、総田や川上さんが「けっ」っとばかりに冷たい相槌を打つのだろうが、やはり青大附中、その点大人だ。全員、きちんと机の上に手を組んで、身を乗り出してきた。

「すみません。この前の続きですね」

みな敬語を遣っている。蝋人形がかすかに笑みを浮かべている。細くて人形みたいだった。委員長らしくない。

「そうです。まず、この会は水鳥中学生徒会と青大附中評議委員会の交流準備会、だと思ってます。それでいいですか」

――当たり前だろ、そう言ってたくせにさ。

ばかみたいなこというおとひっちゃんだ。僕はチョコレートを口に放り込み、がりりとかんだ。

「そうです。まだ、しばらくは、『交流準備会』扱いでやりたいと思っています」

「それはいいんですが、うちの学校は」

おとひっちゃんは言葉を切り、紙コップのジュースを一気に飲んだ。おとひっちゃん分はどう

も炭酸入っていなかったらしい。オレンジジュースだった。「やっ ぱり、公立なので、公立高校入試があります。僕の学校では、生徒会の改選が十月にありますが、その後は三年生が一切参加できない形になります。受験勉強が あるからです」
　――そうだよ。おとひっちゃんの言うとおりだ。
「たぶん、合同で何か集まりができるとしたら、一学期だけじゃないかと思います」
　――そうだな。けど、誰がこれ提案したのかな。
　たぶん、総田あたりからの案だろう。おとひっちゃんは総田に吹き込まれたことを、自分が考えたんだと思い込んで話すくせがある。
「また、六月の最初に中間試験、七月の頭に期末試験があるので、できれば五月か六月の半ばにやってもらいたいと思ってます」
　――思います思いますって、おとひっちゃん、見てみろよ。他の連中よくわからない顔しているよ。こういう時はちゃんと相手の学校に説明させてからの方がいいってのにな。
　つっこみはしなかった。だって、おとひっちゃんの顔、見事に真っ赤だ。さっき走った後だとは分かっているけれども、なんかかんかあるとすぐ頬を火照らせ るのはみっともない。こういう場所ではむしろ、総田の方がずっと分かりやすく説明できるだろうになあ。　けど、意外にも、目の前の蝋人形委員長は笑みを絶 やさなかった。遅れてきた女子ふたりに席に着くよう、指先で合図し、その後はずっとおとひっちゃんを見つめていた。総田も言っていたけれど、前回、前々会 の集まりでは、妙にこいつとおとひっちゃんが盛り上がっていたらしい。なんか、わかるような気がした。
　――おとひっちゃんのせられやすいからな。
　　おとひっちゃんのわかりづらい説明に見切りをつけたのかどうかわからない。でも蝋人形委員長はもう一度大きく頷いて、隣りの男子にまたささやいた。「あらよっと」とつぶやいた相手方は、コピーした紙かなにかを渡している。
「ありがとうございます。実は今日、青大附中評議委員会でもあまり話が通じていない人がたくさんいるので、あらためて説明します。関崎くん、繰り返しになりますけれど、よろしくお願いいたします」
　――やっぱりわけわかんなかったんだ。なるほどな。蝋人形委員長さんもおとひっちゃんに手を焼いてるんだ。
　僕は立村評議委員長の顔を見上げた。いわゆる男子たちがしている普通の髪型に前髪といった感じだった。ただ色が白すぎて、一瞬女子っぽく見える時があ る。女子の好きな漫画だったらきっと人気ものになりそうなんだけど、男子からすると、すぐに骨折しそうでめんどくさそうな奴に見えた。僕もそう思われてい るとこ、あるのかもしれないけれど、幸い学習委員のみの担当だから目立たないですむ。青大附中評議委員長というのはいやおうなしに目立たなくてはならない地位だから、大変だろう。ちょっとだけ同情した。
「それでは、説明します。始まりは去年の十月に、学校祭を通じて水鳥中学生徒会のみなさんが青大附中生徒会を訪問してくださったことです。その時に、水鳥 中学生徒会顧問の萩野先生と、評議委員会顧問の駒方先生がぜひ一度交流みたいなことを行いたいという話合いを持ったそう

です。この段階ではまだ、評議委員 会の出番はありません」
　――そうなんだ。最初は生徒会きっかけだって言ってたもんな。
　立村評議委員長はちらっと僕に目を向けた。すると僕のひとつ置き隣りに座っていた女子がチョコレートをふたつみっつ、僕の紙皿にのっけてくれた。包み紙が机に山積みとなっていたのをチェックしたんだろうか。神経質な奴らだ。
「ただ、青大附中の場合、生徒会よりもむしろ、委員会活動の方に力を入れているところがあります。通称『委員会最優先主義』と言われています。先日関崎く んにはお話しましたが、部活動が低迷している理由として、運動部に入りたい人がみな委員会活動に吸い取られてしまうという問題が挙げられています」
　ちっと、舌打ちする音。発信源はどこだと覗くと、僕の斜め左の席でふんぞりかえっている健吾くんの姿。ジャージ姿。浮いている。
　――仲、悪そうだなあ。　　気付いたのか、ちらっと視線を健吾くんに向ける評議委員長。
「そこで、今年からは他の中学と交流を持つ時にお互い部活動のレベルアップも図れるような仕組みをつくりたい、と僕は考えています」
　――核心だ。
　おとひっちゃんと話していて今ひとつわからなかったことが、やっと解けた。
「生徒会同士での交流もいいとは思ったのですが、ただできれば、他の部活動や委員会活動、それと個人個人の生徒たちとのいい付き合いもできればベストでは ないか、というのが僕なりの考えです。もちろん僕の任期中にすべてできるとは思ってませんが、せめて踏み出すためのきっかけくらいはこしらえておきたいと いうのが本音です」
　――なんていうか、無駄なこと考えてるよなあ。おとひっちゃんとおんなじだ。
　僕はもらったばかりのチョコレートをさらに口へ放り込んだ。
「そこで、今回あえて評議委員会の集まりにお招きしたのは、その交流準備会をこれから九月までの間、少しずつ進めていきたいからです。今、関崎副会長も おっしゃられましたが、公立と私立との学校事情はみな異なりますし、決して無理にということは言えません。でも、何度か顔を合わせて互いの学校の違いや問 題点について話し合う機会を持つことができれば、もっといい方法が見つかるはずだと信じています。ここでうまくいい方法が見つかったら、あらためて生徒会同士の改まった交流会を行ってもいいと思いますし、六月中旬くらいに一般生徒たちを含めた集会を行っても面白いでしょう。でも、急がないでゆっくりと、先 を見据えて話し合うことが、今の両校には必要なことではないかと思っています。だいたいこんなところでどうでしょうか」
　最後の一言に力をこめ、立村評議委員長は席についた。こういう時拍手するもんなんだろうけれど、他の連中は黙って聞いているだけで何も言わなかった。悪 意がなさそうなのは丸見えで、立村評議委員長の両隣にいる男子たちが軽く背中を叩いたり小突いたりしているのは見える。おとひっちゃんも真剣にノートを 取っていた。別に取る必要もないことなのに妙な奴だ。唯一、椅子にふんぞりかえっている健吾くんが、僕たちの方をみて、肩をすくめて見せているのが笑え た。
　暖房効きすぎで暑い。

「もう一つ付け加えておくと」
　今度は意味ありげに、立村評議委員長は黒板の上にくっついているスピーカーを指差した。
「今日話している内容なんですが、全部、職員室の駒方先生のところに筒抜けです。別に聞かれてまずいことしゃべるわけではないのですが、その点、心に留めておいてください」」
　――だれか驚けよ！
　知らないのは僕だけらしい。おとひっちゃんもちらっと視線を向けただけだ。当然青大附中の評議委員連中も落ち着いたものだった。僕ははっとして、立村評議委員長の顔をまじまじと見詰めた。
　――俺だけのために、今の長ったらしい演説聞かせてくれたってわけか。
　蝋人形には脳みそが入っていたってことだ。人を見かけで判断してはいけない。僕は深く反省し、炭酸の抜けたジュースをちびちびなめた。

　ちゃんと先生に盗み聞きされているとわかっていても、青大附中の評議委員連中の発言は遠慮がなかった。敬語を遣ったり僕たちに「関崎くん」「佐川くん」 と呼んだりするところは、いろいろ考えるところあるのかなと思う。話し合いそのものは面白かった。おとひっちゃんも打ち解けて言いたい放題しゃべってい た。水鳥中学生徒会室にいる時よりも楽しそうだった。向かい側の立村評議委員長に何度も発言を求めたり、いきなり話を脱線させて運動部部活動関連の話に燃えたりしている。
「うちの学校は、バスケ部だけが誉められてますけど、他の運動部もそれなりにがんばってます。僕も、前は陸上やってましたけれども……」
　ひとり、浮き上がっている奴。健吾くんがこのあたりの話題だけは目を輝かせておとひっちゃんを見つめている。机から身を乗り出さんばかりというのが笑えてならない。
「だから、運動部の練習試合などを通しての交流会を行うってのもいいんではないでしょうか」
「賛成賛成！」
　立村評議委員長は静かに発言源の健吾くんに視線を送った。
「そうっすね。やっぱり、水鳥中学バスケ部の人たちと一度、まともに話をしてみたいっていうか、練習の方法とかそういうことについての話を聞かせてほしいってか。うちの先輩連中だとほとんど、話が盛り上がらないし、レベルも上がらない。やはり外部の風がほしいんですよね」
　わざわざ立ち上がり、おとひっちゃんにだけ話し掛けている。心なしか、他の男子評議委員連中は冷めた顔で頬杖ついていたりしている。仲、よくないんだろうな。きっと。
「そうだな、新井林。まずは三月あたりに部活動同士の交流から開始した方がいいかもしれない。そのあたり、運動部の顧問の先生に頼まないと難しいですか、関崎くん」
　――新井林か、あいつの苗字って。
　健吾くんもとい、新井林くんは鼻をごしごしと指でこすり、席についた。
　おとひっちゃんの方を見る。
　シャープを何度もぐるぐると回している。
「難しくないと、思います」

――どこがだよ！
おとひっちゃんは言葉を切って、立ち上がった。また演説だ。
「公立受験関係が絡まなければ部活動関係での交流は問題ないと思います。水鳥中学の場合、一般生徒はあまり活動に関心がないので、もっと情熱のある人たちを中心に動いた方が、最初はいいと思います」
――要するに、部員同士で友だちになってもらえば十分って奴だな。
――けど、どうやって顧問のみなさまを説得するんだよ。また総田に尻拭い頼むのか？
いつも総田に
「また関崎のおぼっちゃんに押し付けられたぜ。関崎よりも俺の方が先生転がしできるからか？
しかもあいつ、自分の手柄だと勘違いしてるんだぜ。ま、そういうとこがあいつだし、無理に俺も文句言う気ねえけどな」
と愚痴られている。
「最初はできれば、バスケ部でお願いできますか」
立村評議委員長はもう一度、新井林くんに細い目線を向け、おとひっちゃんに答えた。
「今、うちの新井林も発言していましたが、青大附中で今少しずつ、部活動のレベルアップが叫ばれてます。新井林は次期青大附中バスケ部を率いることが義務 付けられてます。評議委員でかつバスケ部ということだと、ちょうど一石二鳥ということで、かなり活動に幅が出るのではないかと思います。いきなり繋がりの ない部活動と交流活動するのはなんだと思うんですが、もしよければ、ぜひそちらからお願いしたのですが、どうでしょうか」
ふかぶかと一礼した。
「新井林」と立村評議委員長が口にするたび、他の連中が顔をしかめるのが目立つ。ここにいるのがほとんど、二年評議委員だと考えると、相当新井林くん は、青大附中評議委員会で立場のきつい思いをしているのだろう。相性が合わなさそうなのはわかる。きっと新井林くんも蝋人形立村委員長を馬鹿にしているに 違いないし、そういう気持ちも僕にはわかる。当然だ。
――まあおとひっちゃんのことだから、大喜びで受けるんだろうな。
「わかりました。バスケ部交流が成功したら、今度は陸上部でお願いします」
おとひっちゃんもまた、頭を机につくぐらいい下げた。
総田のしかめっつらが思い浮かび、僕はふっとため息をついた。
なんとなく気になっていたのだが、ジュースやお菓子を注ぎ足してくれる連中……男子も女子もいるが……の中に、体育館で目にしたポニーテールの女子がいなかったのはなぜだろう。ねめっちいまなざしと納豆みたいな匂いのしそうな感触。
僕はあまり女子の悪口言うの好きじゃない。けど、さっきの持久走後、体育館の中で初めて、「いるだけでむかつく」という感情を経験した。
――お茶のわんこそば事件って、たぶん。
間違っていたら恥ずかしいので口には出さないでいた。
さっき立村評議委員長に「女子たちと準備を手伝ってくれないか」と指示されていたところみると、学校の中にはいるんだろう。

――待ち伏せしてるなんて言わないだろうな。
いないんだったらそれに越したことはない。おとひっちゃんも安心してジュースをがぶがぶ飲んでいるようだし、隣りの青大附中男子にもいろいろと語っている様子だし。僕だけがひたすらチョコレートを食べつづけているだけだ。
ふと、斜めに位置する立村評議委員長と目が合った。今日、何度目だろうか。
妙に僕の方を観察している。でもすぐに逸らす。
――何か言いたいんだったら言えばいいのにな。
生徒会と関係ない僕をうさんくさく思っているんだろうか。
それとも、やたらとチョコレートばっかりぱくついている僕がおかしく見えるんだろうか。
全くしゃべらないわけにもいかず、食い気をそこそこに、隣りの席の男子と互いの学校について話したりしていた。あまり生徒会関係のことに突っ込まれないでよかった。 なにせ僕は万年学習委員なんだから。
「今日は女子の参加者っていないのかなあ」
いきなり無言になるのが気になる。
「これからはどっさり参加すると思うけど、でもなあ。今日は特別な事情があってな」
意味ありげにむっつり顔でささやく隣りの男子。二年のバッチを胸につけていた。いろいろ、青大附中にも事情があるんだろう。

全部先生に筒抜けになっているにも関わらず、みんなそんなこと忘れてしゃべりまくっているうちに、一時間くらい経った。立村評議委員長が立ち上がり、心持スピーカーに向かう格好で締めのお言葉を述べた。
「では、第二回、青大附中評議委員会と水鳥中学生徒会の合同交流準備会を終了させていただきます。次回はお互いの期末試験が終わった頃を予定してます。できるだけ早く行いたいですね。関崎くん」
――俺の方ばっかり見てたくせに、なぜおとひっちゃんだけなんだろ。
でもとりあえずはこれにて終りだ。
「こちらこそ、どうもお招きいただきありがとうございました」
空の紙コップとペットボトル、食べ散らかしたお菓子包み、すべてを男子連中がみな、燃えるごみ、燃えないごみにより分けて片付けていた。女子のひとりが こっそり身をかがめて出て行ったのを僕は気になって目で追った。窓辺に近づいて見下ろすと、すうっと伸びた雲がくるくるうねっているのが見えた。晴れてい る。空はすっきりしている。今日来た時には、雪がゆるみかけていた。道が悪くなってないといいんだけどな。
立村評議委員長が例の蝋人形みたいな顔をほころばせるようにして、おとひっちゃんに近づいた。
「本当に今日はありがとう。また、来てくれるよな」
――いきなりこいつ、ため口たたいてるよ。
おとひっちゃんはそういうところ、礼儀を重んじる性格のはずなのだが、僕の気付かないとこ

ろで立村とお友だち感覚を通じ合わせているらしい。
「ああ、もちろんだ。三月、絶対ここに来る」
「それまでには、できるだけ青大附中の方も公立にあわせられるようタイムスケジュール組んでおくから」
「どうも、助かる。じゃあまた」
　ぶっきらぼうながらも、おとひっちゃんは機嫌よく答えた。僕の見る限り、生徒会関連でここまで顔をほころばせているところは見たことがなかった。情熱の炎だけが燃え盛りわめきちらしているところばかり覗いていたせいか、なんとなくおとひっちゃんが違う人みたく思えた。
「それでは、またあらためて」
　他の二年男子たちに片手をあげて合図すると、立村評議委員長はすばやく扉を開けたまま教室を出て行った。
「ごみの片付け終わってないのに先に帰っちゃうんだ」
「ばあか、何考えてるんだ」
　こつんと小突かれた。
「最初に言ってただろ。附中の委員長、顧問の先生に終わってから報告しに行くってな」
　――ああそっか。スピーカーで丸聞こえなんだもんな。
　スピーカーの電源切ってもらわないとしゃれにならない。

　ひとりだけ、片付けに入らず僕たちをじっと見つめている視線に気付いた。しゃっきりした髪型の健吾くんだった。
「あの、すいません、いいっすか」
　どまじめに、僕たちに近づいてきて、どすの利いた声でささやいた。
　たぶん、ビニール袋を結んだりしている二年生たちには気付かれないだろう。
「これから、少しだけ時間もらえないっすか」
　時間はある。バスで帰るつもりだけども、たぶん本数はまだあるだろう。チェック済み。
　あとはおとひっちゃんの気持ち次第だが今なら何でもＯＫだろう。
「別にかまわないけれど、何か」
「二年連中にはばれないように、少しお話したいことがあるんだけど」
　敬語と友だち言葉、混ぜ合わせた感じの、微妙な言い方だ。
「バスケ部の交流会のことか」
　さすが元陸上部。運動部に関する話題にはアンテナがはたらくおとひっちゃんだ。まだ頬が緩んでいる。ひきしめてない。
「それもありますが、しかし」
　健吾くんは時計をちらっと眺めた。教壇側で、視線の塊がぶつかってくる気配を感じた。他の男子三人、じとっと健吾くんをにらみつけている。
「新井林、何しゃべってるんだ」
「あ、すんません、じゃあお先に」

　ここだけ大声で。おとひっちゃんにはかすかな声で。
「じゃあ、ちょっと玄関ロビーのとこで待っててもらえますか。そこから案内します。今日は俺が水鳥中学の人たちの案内役です」
　――じゃあ別に隠さなくたっていいのにな。
　僕は、おとひっちゃんが頷くのを待って、大きくこっくりした。健吾くんがわざとらしくでかい声で、
「じゃあ、ごみ捨て場にごみ捨ててきます。それでいいっすか」
　もごもご、曖昧な返事をする二年生男子。やはりどこの学校も、人間関係いろいろあるんだろう。隣りでおとひっちゃんは、机をきちんとならべ直しながらつぶやいた。「やっぱり、やる気のない奴は連れてこれないってことだ。わかったか、雅弘」
　――単に総田に邪魔されたくないんだろ。せっかく手に入れた天国みたいなとこ。
　挨拶して廊下に出た。健吾くんに対してよりも、ずっと愛想よく、笑顔一杯の返事が返って来た。ってことは、また来てもかまわないってことかな。

　言われた通り僕とおとひっちゃんは、生徒玄関のロビーで健吾くんを待っていた。でっかい柱の周りを囲むような椅子が備え付けられていた。二年たちが片付けをしている間に、健吾くんが帰り送ってくれる手はずになっているらしい。
「雅弘、今日の会、どう思った」
「おもしろかったよ、おとひっちゃんもそうだろ」
「まあな」
　おとひっちゃんはそれ以上何も言わなかった。最近無口になりつつあるおとひっちゃんだけど、「青大附中交流準備会」に参加するに当たってはかなり熱心だったと聞く。もちろん総田からの情報もあるし、僕が観察したものもある。とにかく燃えている。
「やっぱり、学校全部暖房入ってるっていいよね。風邪ぶり返すかと思ったけど、大丈夫そうだ」
「雅弘、もう大丈夫なのか」
　話がそれた。おとひっちゃんはかばんから、すっかり冷えた缶コーヒーを僕にくれた。
「とりあえず飲まずにすんだからな」
「よかったよ、ほんとにね」
　深い意味はある。あえて言わないのがおとひっちゃんだ。
　なにはともあれ、「お茶のわんこそば事件」が繰り返されないでよかった。
　さっそく一気に飲もうとした。口をつけたとたんだった。

「関崎さん、待ってください！」
　――関崎さん？
　おとひっちゃんのことをそんな呼び方する奴は、僕の知っている限り全くいない。
　女子の声だった。妙に棒読み調、端々に険しいものが響く。

　隣りのおとひっちゃんと顔を合わせる。明らかにおとひっちゃん、顔色が鈍く変わっている。心持、顔が四角くなった風に見えた。
「呼んでるの、誰？」
「隠れられないか」
　――隠れられるわけないよ、何言ってるんだよ！
　呼ばれた以上は振り向かないと失礼だ。僕が先に顔を向けた。向かって右側に伸びている階段を降りたところで、紺色のワンピース姿の女子が何かを抱きかかえて立っていた。
「おとひちゃん、女子がいる」
「わかってる」
　小さい声で答えるおとひっちゃん。まだ振り向こうとしない。しかたないので、僕が先に声をかけた。
「関崎はここだけど、何か用ですか」
「私は関崎さんに用があるのです」
　――すごい失敬な女子だ。

　一歩、また一歩と近づいてくる。僕は片手でおとひっちゃんの膝を叩いた。なんかわかんないけれど、僕の片手に握り締められている缶コーヒーが少しこぼれた。
　――あの子だ。
　納豆みたいなまなざしを向け、にこりともしないで、じっとにらみつけていた女子だった。一瞬誰かわからなかったのは、髪の毛を長く解いていたからだっ た。腰まで伸びる髪の毛。どろんとした瞳の色が怖い。幽霊が取り付きそうなおかっぱ髪の人形だ。夜中に髪の毛が伸びそうな市松人形だ。紺色の上下繋がった スカート姿で、とうとうおとひっちゃんの前に立ちはだかった。距離として五十センチくらいの接近。かわいそうにおとひっちゃん、腰を抜かしたみたいで立てないでいる。
「また、お会いできたのですね」
　手元の物体が、妙に毒々しい薔薇みたいな花の鉢植えだったと気付いたのはこの時だった。
　おとひっちゃんはその子の顔を見ないで、花ばかり見つめている。一言、
「ああ、この前はどうも」
「私は今日、男子たちに今までずっと閉じ込められてました。せっかくお会いできるのに、出るなと言われてました。でもやっと、関崎さんにお会いすることができました」
「ああ、こちらこそ」
　完全におとひっちゃん、思考能力失っている。
　鉢植えには白いビニールのカバーが半分かかっている。手提げみたいになっている。しかし顔を出しているのは、見たことのない平べったい花だった。一見、 花なのだけれども、真っ二つに切ったキャベツに色づけしただけのようにも見える。ぐしゃぐしゃと薄い紙を折って、ティッシュの花を作って卒業式の準備をし た、そんな感じの花だった。一輪だ。
「私はずっと、男子は救いようのない馬鹿か不細工しか存在しないと思っていました」

　ゆっくりと手提げ部分をおとひっちゃんに差し出す。
「立村先輩だけはまともだと思っていましたが、結局新井林のような馬鹿男子だったことを知りました。そういうものです。男子はみな狂ってます」
　――いや、狂っているのは……。
　うっかり変なことを口走ったら何をされるかわからない。たぶん彼女は僕の方なんて一切眼中にないだろう。かすかに夢を見ているような、酔っ払ったよう な……酔っ払ったことなんてないけど、うちの父さんが酒飲んだ時の状態に似てるので……目をしている。学校で酒飲んだなんてことないだろうな。
　おとひっちゃんも何かを言いたそうだったが、言わない。単におびえてるだけに決まってる。
「でも、関崎さんだけは、まともだって信じられます。人間として、男として、確かな私のローエングリン様として」
　――ローエングリンってなに？
　身体をひくひくさせているおとひっちゃん。片手で僕の膝をなんどかつついている。でも僕だって怖い。女子にここまで接近されるのも経験ないけれど、なぜかこの子がいると空気がゼリー状になりそうで苦しい。
「どうか、また、いらしてくださいませ。私、関崎さんのことをずっと、人間らしい人間のいない青大附中でお待ちしてます。それまでどうか、この花を私だと思って、お側に置いてくださいませ」
　――完全にこの子、変だよ。おとひっちゃん。
　相槌を求めたいけど、おとひっちゃんはただ、口をあけたままじっと花を一点凝視しているだけだった。きっとどうしていいのかわかんないんだ。僕だってそうだろう。これがいわゆる「恋の告白」だったら、僕だって気を利かせて椅子から立っただろう。せめて一言、
「すみません、関崎さんとふたりにしてもらえますか」
くらい言ってくれれば。でもこの女子はそういう手続きを一切、取っ払っている。単刀直入に、演劇の台本みたいなしゃべり方をしている。今時こんな白々しい台詞のラブストーリー、ないぞ。
　僕はあらためて思い当たった。
　なんで僕をおとひっちゃんが誘ったのか。
　なんで、僕と一緒に来たかったのか。
　――三度もこんな、おぞましい迫られ方、したくないよ。わかるよおとひっちゃん。
　ドラマに取り込まれてしまったおとひっちゃん。
　僕だけが現実の視聴者だった。
　――早く逃げようよ、おとひっちゃん。
　チャンネルを替えたい。僕は一気に缶コーヒーを飲みほした。

　ずん、と花の手提げをひったくった。結構重たかった。
「おとひっちゃん、良かったよね。この花、さっきたんにあげなよ」

　市松人形っぽい女子を背に、僕はあらためておとひっちゃんに手渡した。
「さっきたんって花、大好きだって話してたんだ。きっとプレゼントされたらすっごく喜ぶよ。ほら、せっかくだからもらっちゃおうよ。な」
　肩越しにちらっと振り向き、僕お得意のガキっぽい笑顔を繰り出した。
「ごめん。おとひっちゃん、こういうの慣れてないからびっくりしてたけど、花が大好きな女子の友だちはいるから、きっと喜んでると思うよ。な、おとひっちゃん」
　僕の顔を見つめつつ、数回、口を開け閉めするおとひっちゃん。かなり情けない。
「で、この花の名前、なんていうの？」
　もう一度、今度もあどけない感じで尋ねた。すでに「さっきたん」という言葉を出した段階で、市松人形の彼女は微動だ似せず、ただ手を下ろしていた。僕の持っている手提げ花を覗き込み、ぽつりと答えた。
「そんなことも知らないのですか」
「うん、俺、あまり花の種類知らないし。おとひっちゃんもそうだろ」
　頷くだけ。やっぱりおとひっちゃん場慣れしてない。
　よくよく見ると、唇に赤いものがちらちらした。おとひっちゃんを撃墜するためにすべて勝負してきたんだろう。
　けど、この女子はわかってない。おとひっちゃんには意味がない。
「葉牡丹です」
　一言だけ、棒読みでつぶやいた。
「教えてくれてありがと。さっきたんに言おうよ、この花、葉牡丹だって」
　僕はもういちど、「さっきたん」という言葉に力を込めて、おとひっちゃんに告げた。

「水鳥中学のみなさん、こっちです、急いできてください！」
　――救いの声だ！
　僕より先に、おとひっちゃんが飛び上がった。ジャンバーとかばんをひっつかみ、なにやら「あ、あ」と発音した後、
「ありがとう」
　と無理やり絞り出した。
　――そんなこと言うことないよ。押し付けられたんだから。
　僕はからの缶コーヒーをポケットにつっこみ、一声高く返事した。
「わかりました、今すぐ行きます！」
　一刻も早く、あのねめっちい視線から逃げ出したかった。もらった以上は持っていくしかない。返すのも変だ。おとひっちゃんの手をぎゅっと引き、僕は健吾くんの声がする職員玄関まで走った。重たい葉牡丹の鉢植えで腕がひっぱられた。いやな重力だ。

「やっぱり、間に合わなかったっすか。すんません」
　健吾くんが玄関で、もうひとりの女子と一緒に待っていた。

僕と一緒に、体育館でおとひっちゃんと健吾くんとの持久走を眺めていた、あの子だった。

泥でぐしゃぐしゃの体育館脇抜け道を通った。ちっちゃな足跡が残っていた。梅の花みたいだ。きっと猫のだ。

　おとひっちゃんと健吾くんが屋根の下を走り抜けていった。屋根からぶらさがっている氷柱が落ちないうちに、早く、ってことだった。バスケ部と元陸上部の足に追いつけるわけもなく、僕ともうひとりの女の子はのこのこと雪道を進んでいった。

「さっきはびっくりしましたよね」

　おしゃべりする余裕はあった。 僕はほっとして頷いた。

「呼んでくれなかったらどうしようかと思った」

「健吾が……新井林くんが、一生懸命走ってたんですけど、間に合わなかったって」

　――呼び捨てにしてるんだ。

　やっぱり、そういうお付きあいの人なのだろう。僕はあらためて隣りの女の子を見つめた。「女子」なんだろうけれど、なんとなく僕にとっては「女の子」と呼び分けしたいタイプの子だった。

　髪を編み上げてくるくる巻きにし、耳の上にのっけている。

　ちょっと頬が赤らんでいて、感じふわふわしている。

　さわったらたぶん、ぎゅっとやわらかいんじゃないかな。ほっぺたとか。

　――やらしいこと、考えてると思われるかもな。

　僕としてはそんなつもりない。比較している相手が相手なだけだ。

　――人形みたく、気持ち悪くない人だなあ。

　振り返っているふたりに僕は、わざとらしく息を吐いてみせた。急いでたんだと強調するためだ。

「遅えぞ、佐賀」

　健吾くんが女の子にもう一言何かを言った。「さがわ」か「さが」かわからないけれど、その子の苗字なんだろうか。コートで名札が隠れているのでわからない。ちょこっと気になった。

「雅弘、悪い。走らせちまったな」

　おとひっちゃんは簡単に心配してくれた。なにせ病み上がりなんだから。さっき押し付けられた重たい鉢植えだってぶら下げているんだから。僕は膝のところに、キャベツみたいな花を抱えるようにして、もう一度息を吐いた。

「とにかくここは誰もいないから、入ってください。佐賀、悪いけど電気ストーブの電源入れてくれ」

「うん」

　女の子ははにかみながら頷いて、目の前の木造建物の中に入って行った。木造で、かなりぼろぼろ、地震がきたら一発でつぶれそうなあばら家だった。青大附中にもこんな建物が残っていたんだ。意外だった。

「寒いけど、入ってください」

おとひっちゃんと僕も促されるまま、中に足を踏み入れた。

右脇にはサッカーボールのつぶれた山と、野球の木製バット、白線引き用に使うチョークみたいなもの。その他スコアボード、などなどいろんなものが置きっぱなしになっていた。たぶん体育用具室なんだろう。
「ここじゃないっすよ。今、ここどかしますから」
床にしゃがみこんでボールを片付けている女の子を小突いてどかし、 健吾くんはすばやくサッカーボールの山をくずした。スペースを広げた。隠れてて見えなかったんだけど、引き戸の手が出てきた。意外とほこりは被っていない。佐賀さんが素早くすべりこんでいった。
「ほとんど使ってねえってことだからかまわねえし、今日はどこの部活も練習試合でこんなとこにこねえし。なによりも、運動部以外の人間こんなところ知らねえし」
――隠れ家みたいだなあ。
秘密の基地みたいで、胸がどきどきしてきた。こういうのを発見すると、僕は思わずもっと掘り進んでみたくなる。おとひっちゃんもきっとそうに違いない。目が輝いている。さっき、葉牡丹を押し付けられた時とは違う。
「さ、入ってください」
健吾くんの後について僕たちも上がった。背のないベンチとダンボールでこしらえたテーブルらしきもの。体育道具の残骸も転がっていたけれども、外よりは 整理されていた。窓はない。佐賀さんが僕の足下に赤い電気ストーブを持ってきてくれた。電気は通っているらしい。動いた後なのでそれほど寒いとは思わな かった。
おとひっちゃんと健吾くんが向かい合い、その隣りに僕と佐賀さんという女の子。
四人顔を合わせたとたん、急に笑いたくなり、にっこりしてしまった。
「なあににやついてるんだよ、雅弘」
「いやあ、ごめん」
一緒ににっこりしてくれたのは佐賀さんだった。さっきからそうだけど、佐賀さんの頭を見ているとむしょうに笑いたくなるのだ。おとひっちゃんに言うと誤解されるので黙っておくけれども。おとひっちゃんは咳を数回した後、健吾くんに頭を下げた。
「さっきはどうもありがとう」
「いや、俺の方がへましちまったもんで、すみません」
このふたりについては真面目な雰囲気を崩さない。どうも健吾くんは、葉牡丹の彼女とおとひっちゃんを会わせないようにしたかったらしい。そうしてくれたら助かったけど、追いかけられちゃったんだものしかたない。健吾くんのせいではない。あの、気持ち悪い女子のせいだ。
「で、今から俺が話すことなんですが」
健吾くんは唇を噛み、目を伏せた。鼻をすすり上げた。お互い風邪がはやってるってことだ。
「青大附中の評議委員会についての恥さらしだって気がしてなんねえんだけど、でも、ここで言っとかねえと、あとあとろくでもねえことになると思う。だから、すげえ恥ずかしいけど、聞いてください。お願いします」

　健吾くん、また頭を下げた。隣りの佐賀さんも健吾くんの方を心配そうに見つめていた。やっぱりお付き合いってこういうもんなんだろうなあ。
「今から話すことは、悪いんだけど、二年の連中にはしゃべんないでくれると助かります。こう言ったらなんだけど、俺、二年の連中とはあまりうまくいってないんです」
　――同じ二年のおとひっちゃんには妙に懐いてるのにか？
　驚いている様子のおとひっちゃん。こういうところが鈍い。
「二年と、ってことは、立村とも？」
　すでに呼び捨てにしているおとひっちゃん。
「いや、立村……さんとは、去年の段階で決着つけたし。それはいい」
「決着って？」
　割り込んだ。おとひっちゃんが「よけいなこと言うな」という目でにらんだ。
「そのことも含めて、全部話します。で、ひとつだけお願いがあるんですが」
「お願いって」
　健吾くんが両腕をテーブルのダンボールにくっつけて立ち上がり、おとひっちゃんを見下ろした。目が必死だった。
「この話を聞いて、きっと青大附中の連中は馬鹿野郎ばかりだと思うんじゃねえかって思います。けど、きっちりと交流活動したいと思ってる奴もたくさんいる し、俺はなんとしてもバスケ部との交流を成功させたいって思ってます。裏話ばかりで情けねえけど、どうか、交流を止めようだなんてことだけは、言わないで やってください！」
　――あれ、泣いちゃってる。
　隣りの佐賀さんがコートのポケットから、桃色のハンカチを取り出した。下から手渡しした。握り締めた健吾くんは鼻と目を交互に拭いた。
　すすり上げる鼻声に、おとひっちゃんは口を一文字にし、大きく頷いた。
「わかった。交流活動はこのままでやる。だから、話を頼む」
　青大附中評議委員会に関する内部事情は、僕にとって頭の痛くなることばかりだった。もちろん僕とは関係なく、おとひっちゃんの方にとばっちりがくる内容 のものだけれども、たぶん処理をするのは僕と総田の方だろう。総田も計画していることがあるだろうし、またふらふらされるのはたまったもんじゃないだろ う。
　――困ったよな。おとひっちゃん。
　足下の葉牡丹はストーブの隣りに転がしておいた。

　青大附中生徒会がもともと、力のない組織だということはおとひっちゃんから聞いていた。去年の十月、そして今年の一月に生徒会としておとひっちゃんたちが訪問した時に評議委員会へ話を押し付けられたのにはそこに原因があるらしい。
「俺もその辺はよくわからねえけど、青大附中の場合生徒会活動や部活動よりも、委員会最優先主義ってのが貫かれちまって、実力のある奴ほど委員会に吸い取 られちまうって仕組みになってるんです。うちのバスケ部をはじめとして、他の部活動がいつもぼろ負けしてるのは、運動部で

活躍できる奴らがぜんぜんこっち にこねえで、委員会に燃えちまうおとなんです」
　――おとひっちゃんだって陸上部と生徒会、一緒にできなかったもんなあ。
　僕は身を乗り出し、おとひっちゃんは黙って見つめるかっこうで。
「けど、そんなのはやっぱおかしいってことで、去年の代から少しずつ、部活動に力を入れるようにしようってことで、先生たちが動き出したってわけっす。例 えば、各学年の委員は半年ごとに改選されますけど、青大附中の場合、一年の一学期に決まった委員がずうっと、スライドして三年まで進む方式をとっていたん です。いや、誰が決めたわけでもねえけど、暗黙の了解って奴で」
　――俺も学習委員やってるから似たようなもんかなあ。
「けど、そんなのはやっぱおかしい。委員はその都度選挙できっちり選ばれるべきだと思うし、合わねえ奴はどんどん外すべきだと思う。で、俺たちの代からはこれから委員をどんどん変えていこうってことになったわけです」
「委員、って、当然評議委員もだな」
「そうです。たぶん二年はこのままでいくと思うけど、俺のクラス……Ｂ組なんですけど……女子は別の奴になります。担任がそう言い切ってます」
「Ｂ組の女子？」
　おとひっちゃんが言葉にした後、全身硬直させた。
「まさか、あの、さっきの」
「そうです。あの女は絶対に降ろされます」
　肩がだんだんゆっくりとなだらかになっていくおとひっちゃん。分かりやすい奴だ。
「けど、担任が言い切ってるってどういうことだ」
「あの女は、ここにいる佐賀のことを七年間いじめつくすだけいじめてきてたんです。小学校の頃から俺と佐賀と、あの女とは同じクラスでした。めちゃくちゃ な腐れ縁でしたが、今まではなかなか佐賀のことを守ることができなかった。けど、今の担任はすげえ男で、親とあの女をあっさり成敗して、二年以降の評議委 員から降ろし保健委員にしたいとまで言ってます」
「保健委員？」
　青大附中の委員会組織ってよくわからない。なんで保健委員なのか？
「あ、うちの委員会はこの前も話したように、くせがあるんです。評議委員会が交流関係と隠れ演劇好き集団で、規律委員会は洋服関連のファッション雑誌作り 倶楽部、保健委員会は主に、将来医者や看護婦になりたい奴が勉強するための集まりって感じなんですよ。ま、そればっかじゃねえけど三年間おんなじでないと 話にならないってのはそういうことです。一種の部活と一緒ってことで」「でもそうなると、委員会活動としてはかなり問題なくないか？」
「あります。委員会内でごたごたしても、部活みたいにやめることが一切できません。今回のように担任が辞めさせるなり降ろすなりしない限りは無理です」
――たまったもんじゃないなあ。
　僕は自分なりの整理整頓をしながら話を聞いていた。
「とにかく、さっきの葉牡丹くれた子は、二年以降交流会に来ないってことなんだ」

「そうです。それは安心してください」
　力強く断言する健吾くん。おとひっちゃんは口にしないけれど、だんだん目がやわらかくなってきたってことは、相当安心したってことだろう。
「ただ、問題は、あと一ヶ月ってことです。ま、評議委員会も影でいろいろありますから俺も大きいことは言えねえけど、二年の女子とかあと、一部の男子とか がもしかしたら、関崎さんにあの女を押し付けようとするかもしれません。まともな男だったらあの女なんてけっとつばかけたい気持ちもわかりますけど、やは りなんとかしてうまくごまかしたいていうのもあるみたいですし」
　一呼吸、ふっと吐き、おとひっちゃんが尋ねた。
「立村は、どっち側なんだ」
　じじっと、電気ストーブの焦げ臭い匂い。どうやら葉牡丹の入っているビニールがストーブの赤い部分に触れて焦げてるみたいだ。慌てて引き離した。
「立村……さんは、わかんないっす」
　言葉を濁した。でも話したさそうだ。僕は方向を変えて聞いてみた。
「もしよかったら、なんで委員長とごたついたのか、聞いていいかなあ」
　――蝋人形をぶっこわしたくなるのはわかるような気、するしなあ。
　健吾くんは目を潤ませたまま、大きくくしゃみをした。
　身体が冷えてきて寒い。僕はおとひっちゃんの方にくっついた。
「まあ、俺もガキだった。早い話、俺と立村さんとは、四月以降の評議委員長を奪い合ってたってことなんです。やっぱしこれも、青大附中特有のもんですけ ど、委員長ってのは上の先輩が八月に指名して、それから半年間じっくりしごいていくってやり方を取ってるんです。これも、来年確実に委員として選ばれるっ てことが前提になってるけど」
　――思い出すなあ、去年の学校祭の騒ぎ。
　思い出してないんだろう。おとひっちゃんはじっと話を聞いているだけだ。
「で、一応三年の先輩委員長は、立村さんを指名したってわけです。けど、俺にはどう見たって頭の回転がとろい、ぼけた奴にしか見えなかったんです。二年連中からはすげえ評価されてるけれど、なんてっかこう、馬力ないっていうか」
　――いいたいことわかるよ。健吾くん。
「何よりも、立村さん、あの女のことをその頃からめちゃくちゃ可愛がってたんです。女の趣味が変わってるのは別にいいとしても、自分にはすげえ出来た彼女 がいるってのにあの女をひいきして、へたしたら自分の次に評議委員長にしようとたくらんでいたきらいが、なきにしもあらずって感じで」
　――やっぱりそうか。体育館でも自然な感じで話し掛けてたもんなあ。ああいうことしてた男子って、立村だけだったな。
「先輩委員長もその辺は心配してたらしくって、俺と立村さんを今年の三月まで並び立てる格好にして見比べて、どっちがふさわしいかを指名しようってやり方に変えました。だから、一応今の段階では立村さんが委員長だけど、四月以降は俺になる可能性もありありっす」

――俺、って、健吾くん、一年なのにか？
　僕が口走る前におとひっちゃんが立ち上がった。
「立村が委員長から外れるのか！」
「いや、そういうことはないっすよ。安心してください。関崎さん」
　落ち着いている様子はまさに、委員長になってもＯＫって感じの態度だった。立村には悪いけれども、それが実はふさわしいんではないだろうかと僕は思ったりもした。
「俺がもし指名されたら、立村さんに譲ります。その点では去年、思いっきりぶつかり合いましたし、立村さんも俺にかなり譲歩してくれたし、なによりもまんざらあの人、ばかじゃないってことがわかったんで、やっていけると思ったからです」
　口を少しあけたまま、おとひっちゃんはまたつぶやいた。
「まんざらばかじゃないって」
「杉本を下ろすことを桧山先生に提案したのは、どうやらあの人らしいです。で、来年以降の評議委員長は俺にしたいってことも言ってました。つまり、評議委 員からあの女を降ろして、評議委員会をまっとうな形に戻したいとうことで活動してたみたいですし。ただ俺もそれなりに譲歩しなくちゃいけねえこともあった けどな」
「それはなになに？」
　これは僕の質問だ。健吾くんは両腕を組み、ぶるっと身体を振るわせた。
「あの女を、決していじめの標的にしないようにすること。たとえ杉本が佐賀を始め迷惑をかけて俺たちをぶち切れさせようとしても、俺たち一年Ｂ組は、あの女とおなじようないじめを一切しない。これは卒業するまで、正々堂々と勝負する、最後の手段だということです」
　――正々堂々とか。
　おとひっちゃんは黙っていた。鼻をなんどかすすり上げ、もう一度尋ねた。
「その、杉本さん……は、そんなひどいいじめをしていたんですか」
　健吾くんではなく、佐賀さんに向かって。
「私、梨南ちゃんがいじめをしていた意識はないと思ってます。たぶん、私のことを守ろうとしてくれてたんだと思います。ただ」　言葉を切る。僕に向かいちらっと視線を向け、耳元の髪に触れた。
「梨南ちゃんと縁を切った時から、私のしたいことがいっぱいできるようになったのも、確かなんです。本当に自由になったんだなって、今は思ってるんです」
　――りなちゃん？
　どうでもいいけど、健吾くんの口が妙に緩んでいるのが気になる。目もなんとなくいとおしげ。すっかり、ほれ込んでるって感じだ。中学一年。総田もこんな風に川上さんと接すればいいのになあ。今度からかってやろうと決めた。
「要は女子たちのよくやる無視です。俺と佐賀が付き合いだしたのが気に食わなかったらしくて、入学そうそう仲の良かった佐賀を無視し始め、同じクラスの女 子連中にもそうさせるようにしたってことだけです。たいしたことじゃないかも知れねえ。どうせ俺はあの女から佐賀が離れればそれにこしたことはねえと思っ てた。けど、佐賀がひとりぼっちでさんざん悪口言われてい

ることだけは許せねかった」
　――素直に「付き合いだした」なんて言うなんて、すごいよなあ。
　もう僕たちの方なんて見ていない。健吾くんは手元のハンカチを握り締めこぶしを見つめた。
「ま、そういうことで俺と立村さんとはいろいろあったにせよ、今は良好な関係が保たれてるってわけっす。ただ、二年連中はやっぱり俺のことを毛嫌いしてるみたいです。それはしゃあねえし。問題は、あの女を可愛がる女子連中のことです」
　話があっちいったりこっちいったりと混乱していた。僕は頭の中で全部片付けを行っているからいいけれど、おとひっちゃんは大変だろう。ただもくもくと聞いているだけだ。
「立村さんはあの女を降ろす代わりに、他の仲良し女子連中のところに預けて、俺たちの迷惑にならないよう気を遣ってくれてるようです。それは正しいと思い ます。俺も、あの女の顔さえ見なければそれに越したことはないですし、自分の手を汚したくないですしね。ただ、その方法のひとつとして、関崎さん、あんた とくっつけようとする動きがあるのも確かなんです。信じられねえけど、本当のことです」
　――おい、おとひっちゃんとくっつけるって！
　感嘆句「うそ！」しか出てこない。健吾くんの顔を見ればうそじゃないってことは見え見えだ。おとひっちゃんの目も見ひらき、宙を舞っている。狂喜乱舞ではない。絶体絶命、オーマイゴット、そのもんだ。
「この前の一月に青大附中にいらしてくれた時、すげえひでえ目にあったと思うんですけど覚えてますか。ほら、お茶を異常なほど注ぎ足された時のこと」「ああ」　かわいそうなおとひっちゃんも感嘆句しか出せない。
「俺たちも、他の男子連中もあれ見ててぞっとしました。あれって嫌がらせとしか思えねえって感じです。けど、女子連中によれば、あれは杉本の愛情表現であ り、関崎さんのことを気に入っているからということでした。けど、冗談じゃねえ。関崎さん、ああいう時はためらうことなく熱湯を顔にぶっかけてやって正解 だった」
　――それはやりすぎだと思うよ。
「その後すぐに、俺は立村さんのところに行って、言うこと全部言っておきました。たぶん立村さんは、杉本のことを気持ちとしてはひいきしてますから、もし かしたら関崎さんにくっつけるように手はず整えるんでねえかと思ったから。けど、俺からしたら関崎さんの顔には、露骨にいやだってサインが出てました。で すよね。そうですよね」
　――強引だなあ。
　おとひっちゃんは答えなかった。さすがにそれは失礼だと思ったんだろう。でも、僕はひそかに賛成していた。今、となりにいるおとひっちゃんの様子を見ても、明白だからだ。健吾くんもそういうとこは鋭い。
「別に俺は、あの女が誰にほれ込もうが知ったことじゃねえ。もし、関崎さんでなくて別の奴だったらふーんってことで無視をしてた。他の学校のところにあの 女が関心を向けてくれて、Ｂ組や評議委員会に迷惑をかけないようになればこちらだって、よけいなこと考えなくたっていいことだし。けどなあ」

こぶしを振り上げ、ダンボールを思いっきりぶったたいた。へこんでいる。
「せっかく評議委員会と水鳥中学との間で、すげえいい関係が作れそうな時に、あの女が関崎さんに嫌がらせかなにかしてぶっつぶしたら、たまったもんじゃね え！　関崎さんが望むならそれはしかたねえと思うけど、こんないじめをしでかして、さんざん問題を起こし、相手の嫌がることばかりやらかすあの女が、また 他の学校の人たちにまで被害を及ぼすなんて、俺は許せねえ！」
――で、何したの？
心で思っているだけじゃなくて、僕は口で尋ねた。
「今日は関崎さんが来るって聞いていたんで、まず体育館で集合して、それから教室へ行こうと決めてました。二年連中も俺のことはともかく、杉本が害獣だっ てのは理解していたみたいなんで立村さんにも話をしてくれたみたいです。ただ、二年女子たちからは大顰蹙かったらしくて大変だったって聞いてますが。とに かく立村さんは、関崎さんと杉本が顔を合わせないように、二年女子たちと一緒に職員室か別の教室かで準備をなにかさせたらしいです。二年女子が結局さっき の集まりにふたりしかいなかったってのはそういう理由です。杉本の見張り役に残されてたらしいです」
――すごい。完璧だ。
僕は素直に驚いた。
「会が終り、立村さんが先生と閉じ込められている教室との両方に連絡をして、関崎さんたちがいなくなるのを待ってから解放しようということになっていまし た。けど、あの女が制服じゃなくてあんなとんでもない格好をして、気持ち悪い毒花を手渡すってことは、何か手違いがあったんではないかという気がします。 俺ももっと早く、何も考えずに外に出せばよかったって思うけど、その辺は本当にすんません。とにかく、俺なりに精一杯迷惑をかけない方法は探ったつもりで すが、見事失敗で情けないです。本当に関崎さん、すみませんでした」
――君は、すべきことをみんなしてくれたよ。健吾くん。　佐賀さんと僕が同じような感じで健吾くんを見つめていると、また涙ぐんでいるらしく目を数回こすった。
「わかった。運動部の交流についてはこれから、すぐになんとかするから」
おとひっちゃんがぶっきらぼうに、これだけつぶやいた。電気ストーブだけでは耐えがたい冷たさで、僕は足を踏み鳴らした。それが合図で、僕たちは立ち上がった。　おとひっちゃんとふたり、今度こそは誰もいないグラウンドで、健吾くんたちと別れた。
「じゃあ、今度は三月に。こんなひでえミス、もうしませんから」
そのことに関する返事はしなかった。おとひっちゃんは深く頷いてみせた。佐賀さんが見えないので挨拶したくて立ち止まったら、駆け足の音が聞こえた。
「ごめんなさい、これ」
――わざと忘れてったってのになあ。
わざわざ葉牡丹を持ってきてくれた。よけいなお世話と言いたかったけれど、持って来てくれたのが佐賀さんである以上受け取らなくちゃいけない。おとひっちゃんと目で合図し、僕が受け取った。

「そんなの捨てちまえよ」
「だめよ、健吾」
　――また、名前で呼ぶ。
　自信ありげな顔で佐賀さんは答えた。
「きっと梨南ちゃんは、関崎さんにこの花が元気かどうか聞くと思います。もちろん新井林くんが押えるでしょうけど、梨南ちゃんは何をするかわかんない子です。もしかしたら立村先輩から住所を聞き出して、家までおじゃましようとするかもしれません」
　背筋が凍るってこのことだ。がたがたっと肩が震えた。
「その時に花がなかったり、捨てたなんて言ったら、梨南ちゃん何をするかわかりません。私も梨南ちゃんと七年間一緒だったからよくわかります」
「そんな怖い女子なの？」
　僕がかろうじて言葉を搾り出す。おとひっちゃんは言うまでもなく硬直状態。
「梨南ちゃんは、好きになればなるほど、意地悪をする子なんです。そして」
　佐賀さんの目はさらに真剣だった。
「裏切られたと思ったら最後、とことんうらんでしまうんです。どんなにこっちが友だちでいたいと思っても」
　――ってことは、もしかして俺。
　痛恨のミスを犯したってことだろうか。おとひっちゃんはきづいていないかもしれないけれど。僕は真剣に震えるのを止められなかった。
「だから、本当に気を付けてください」
　――逆恨みされるってことかよ！

　たぶんおとひっちゃんは、僕が震え上がった理由なんて想像していないだろう。しかたなく葉牡丹をぶら下げてバス停に向かい、時刻を確かめた。
「まだ時間あるね」
「雅弘、さっきのことだけどな」
　誰もいないベンチに腰掛け、おとひっちゃんはじろっとにらんだ。
「なんだよ」
「なんで、水野さんのこと言った」
　――おとひっちゃん、気付いてるじゃないか。
　さっきの痛恨のミス、そのものである。
「いや、だってさ、僕がもし花とか上手に育てられるんだったら、さっきたんが一番かなって思っただけなんだ。ほら、さっきたん、小学校の頃から教室にお花 もってきて飾ったりしてただろ？　だからこういう花も、きっと大切に育ててくれると思うんだ。おとひっちゃんのとこ、あまり花とか飾るのって苦手だろう し、俺もあんまり好きじゃないし」
　もしかしたらおとひっちゃんは、葉牡丹を持ち帰りたいなんていうんじゃないだろうか。別に本人の勝手だから僕が口出しするつもりはないけれど、ただ、ど うしても僕はそうさせたくなか

った。第一、おとひっちゃんみたいな大雑把な奴が、キャベツみたいな毒花とはいえ上手に育てられるわけがない。万が一、杉本 さんに「あの花元気ですか」と聞かれたら、言い訳できない。おとひっちゃんは物言いかけたけれども、飲み込んだ。
「だからさ、さっきたんにあげちゃおうよ。きっと喜ぶよ。おとひっちゃんからだって言うともっと喜ぶよ」
「いい、勝手にしろ」
「じゃあ、ちょっと電話かけてくるよ」
「どこにだ」
　迷ったけれど、言っておいた。
「さっきたんにさ。これから寄っていこうよ。きっと喜ぶよ」
　すぐにゆでタコ状態で赤くなるのはおとひっちゃん、全く精神状態変わってないってことだ。僕はバス停端の電話ボックスまで走っていった。見上げると青潟大学の校舎が夕暮れの色をちかちかさせているのがはっきりと見えた。

「もしもし、水野さんですか？」
　僕は女子に電話かけるのって結構慣れている方だ。おとひっちゃんの代わりに苦手な女子へ連絡網を回してやったことだってある。今日はお母さんが先に出て、すぐにさっきたんへ代わってくれた。
「佐川くん、どうしたの」
　――やっぱりさっきたんは優しい声だなあ。ちゃんとしゃべりに波があるよ。
　どうしてだろうか。つい比べてしまった。
「うん、実は、今日、おとひっちゃんとふたりで青大附中に行ったんだ。で、今帰りのバス待ってるとこなんだけど」
「そうなの」
　あまり関心のなさそうなさっきたんだ。一応、おとひっちゃんがさっきたんのことを想っていることは承知だろうけれど、それから半年間、特段変わった動き はなし。おとひっちゃんも動かないし、さっきたんも「あら、そんなことあったの」って顔で普段どおり流しているからだ。僕もクラスの連中と一緒にばば抜き やったりして遊んでいるけれども、さっきたんがたまに僕の隣りにくるのは偶然だ。一緒にいるところを見ておとひっちゃんがまた真っ赤になるのも、またいつ ものことだ。
「それで思い出したんだけど、さっきたんってお花、好きだよね」
「ええ大好きよ」
「青大附中の人たちから、花をもらったんだ。葉牡丹って知ってる？」
　あの毒花と、口には出さないでおいたけれどさっきたんの声は明るかった。
「うん知ってる。葉っぱが花びらになっていて、お正月によく飾るのよ。華やかなのよ」
　――違うよそんなきれいな花じゃないよ。
「俺もおとひっちゃんも、そういう花もらっても困るだけだから、よかったらさっきたんにあげ

ようか、って話してたとこなんだ。これからさっきたんの家に行って持っていくけど、いいかなあ」
　かなり事実関係を曖昧にして説明した。いやな感情、さっきたんに伝わっていないといいな。よかった。さっきたんは素直に喜んでいる。
「嬉しい！　ありがとう佐川くん」
　――受け取ったのはおとひっちゃんなんだけどな。
　銀色のバスがロータリーに入ってくるのが見えた。大至急電話を切り、僕はおとひっちゃんの後に続いて乗り込んだ。
　すっかり疲れ果てていねむりこいているおとひっちゃんの隣り、一番奥の席。
　僕は膝に葉牡丹の鉢植えを抱えたまま考えていた。
　葉牡丹の花びら……葉が花びらになっているとさっきたんが言っていたっけ……を何度見ても、「華やか」「お正月に飾る」というプラスのイメージが湧かない。　――さっきたん、花に詳しいからそう言ったのかなあ。
　僕の目から何度見ても、毒々しいキャベツの出来そこない、という感じしかない。
　もちろん、花にはいろいろあって、好みもあるし、僕好みでないだけなのかもしれない。こんないやな気持ちで花を見たのは初めてだった。
　――おとひっちゃんもきっと、いやだったんだろうなあ。
　僕はかなり正確に、おとひっちゃんの考えていることを見抜くことができる。十四年間の集大成といえばそれまでだけど、本当に丸分かりなんだものしかたない。
　あの、葉牡丹の女子……杉本さんと言っていたっけ……の顔を見た時、おとひっちゃんがすっかり度を失って身を引いていたのを、僕はちゃんと見ていた。露 骨に受け取り拒否をしたくてなんない顔をしていたのも覚えている。おとひっちゃんを知らない友だちだったら、ただ告白されて照れてるだけと思うかもしれな いけれど、どうみたって「側に寄るな！」の合図だった。杉本さんはそういうのわからなかったから、あんな風に分けのわからない言葉で話し掛けたのかもしれ ないけれども。
　――そうだ、あの人、しゃべり方もなんか、変だった。
　思い返すたび、今までにあんなおかしなしゃべり方をする人がいなかったと再確認してしまう。もちろんいろいろ変わった人とも話したことあるけれど、なん で「ローエングリン」だとか「私だと思って」とか、常識では考えられない言葉を口にしたんだろう。学校の演劇で、「なんだよくさすぎる」と馬鹿にされそう な言い方を、なんでしたんだろう。
　――もしかして、杉本さんのしゃべり方って、ああいう感じが多いんだろうか？
　僕はあらためて、健吾くんの聞かせてくれた話を整理して組み立てた。

　健吾くんが言うことを鵜呑みにする気はない。僕の直感と事実関係だけだ。だって健吾くんも佐賀さんも、杉本さんのことが大嫌いだからこう悪口言っているわけであって、たぶん七割くらいは嘘っぽいとこもあると思うから。
　信じていいと思えるのは、「青大附中の評議委員から杉本さんが外される」ということ。

「健吾くんと立村評議委員長はけんかしていたが今は仲直りしている」ということ。
「佐賀さんが杉本さんにいじめられていた」ということ。
佐賀さん……あの中国風の髪型をしていた女の子……は、「いじめていた気は本人ないんじゃないか」みたいなことを言っていた。その辺は想像だからわかん ないけれども、杉本さんとはなれてから幸せになったってことだけは確かじゃないかと思う。健吾くんと付き合うことができるようになったんだから。
もうひとつ気になったのは、杉本さんの格好とお化粧だ。
あんな裾の長いスカートで学校の中を歩くなんて、それこそ変だ。
僕が最初に体育館で見た時は、普通の制服だったはずだから、どこかで着がえたに違いない。本人は「男子たちに閉じ込められていた」と言っていた。健吾くんや立村評議委員長がどこかの教室に閉じ込めていた、と考えれば納得がいく。
じゃあ次だ。
どうして杉本さんはおとひっちゃんを見つけることができたんだろう？
健吾くんは僕たちをロビーで待つように指示した。もし杉本さんの顔を見ないようにして連れて行きたかったのだったら、どうしてそんなことしたんだろうか？　佐賀さんを迎えに行きたかったからだろうか。
その辺も曖昧だ。あそこにいないでさっさと学校を出てしまったら、すべて丸く収まったんだから。まさかぐるになっているなんてことは？　ちょっと考えすぎだろうか。
そしてなによりも。
――俺、性格悪い奴かもしれないよ。
がおっと響く足の下。だんだん人が乗り込んできている。
今までそんなこと一度も考えたことなかった。
さっきの健吾くんの話を冷静に思い返してみると、どう考えてもひとりの女子を集団でいじめているようにしか見えない。どんなに杉本さんが問題のある人だ としても、会いたい人に会わせないとか、別の部屋に閉じ込めてしまうとか、普通あっちゃいけないはずだ。それはわかっている。

――けど、実際は違うんだ。
ダンボールを挟んで四人で話をしていた時、なんとなくだけどほのぼのとした雰囲気が漂っていた。みんながみんな、「その通り！」と喝采を叫びたいという 感じだった。おとひっちゃんも言葉にはしなかったけれど、杉本さんに押し付けられた花を可愛いとは思ってなかったみたいだし、僕も。
僕も同じことを思っていた。
いじめはよくない。絶対によくない。健吾くんがすることは絶対にいけないことなんだ。けど。やっぱりざまあみろって思っている。本当に気持ち悪かった。 側に寄ってこられるのだっていやだった。健吾くんたちにお礼言いたかった。そう、杉本さんが評議委員から外れるって聞いた時、ものすごく、ものすごく嬉し かった。あの顔を見ないですむってのがほんとにうれしか

った。

　今までこんないやなこと考えたことなんてない。女子に対してもそうだ。好き嫌いはあるけど、僕の周りにいる奴はみないい人ばっかりだ。よっぽど意地悪されたか嫌がらせされたか、そうでなければ嫌いになんてならなかった。
　でも、あの杉本さんという人だけは違った。
　前に立ちはだかった瞬間、もわっと気持ち悪いオーラが流れてきた。
　なんでかわからないんだけど、本当にぞっとした。
　だから思わず口走ってしまったんだ。
　――この花、さっきたんに上げようよって。

　たぶんおとひっちゃんには通じないだろう。　想像すらしてないだろう。もう、明日以降どうやって総田を使って、バスケ部同士の交流会に持っていくかのことで夢見ているだろう。僕がこんなにおびえているなんて知らないんだ。
　――杉本さんって女子に、おとひっちゃん、逆恨みされたらどうしよう？
　もちろん佐賀さんの言うことをすべて信じようとは思わない。
　女子が自分に都合のいいことを言うくせがあるってのは、わからなくもない。
　総田と川上さんを見ていればなんとなく。
　佐賀さんと健吾くんが付き合い始めたのがきっかけで、杉本さんのいじめが始まったとするならば。親友だった友だちをいじめるってのは相当、心がすさんでないとできないんじゃないだろうか。
　となると、もしもおとひっちゃんのことを本気で杉本さんが好きだったとして。
　僕の「さっきたん」という言葉をどう受け取ったかによって。
　――杉本さん、振られてもきっと追いかけてくるタイプの女子だよな。
　――そんなことになったらおとひっちゃん。
　初めて感じた気持ち悪い感覚に戸惑って、へまな言葉を発した僕の責任だ。
　――なんとかしなくっちゃ。
　僕は葉牡丹を膝に抱いたまま、腹に力をこめた。

「ね、さっきたんのところ、おとひっちゃんも行くだろ？」
「いや、俺これから用事あるから」
　――せっかくおとひっちゃんのためにチャンス作ってやったのにな。
　無理じいはできず、僕はさっきたんの家の前で手を振った。そんな慌てて走っていかなくたっていいのに。全くいいか悪いかわかんない元陸上部だ。
　さっきたんの家のよびりんを鳴らしたついでにもう一度曲がり角に振り向くと、ジャンバー姿のおとひっちゃんが見え隠れしていた。いつものことだ。知らんふりを決め込んだ。

「きれいな花！」
　桃色のセーター姿で迎えてくれたさっきたんが僕の顔と、花を交互に見つめた。手提げの中を覗き込み、ふわあっとした笑顔で迎えてくれた。
「佐川くん、ありがとう。私、大切にするわ」
　――お礼を言うのはおとひっちゃんへ、なんだけどな。
　さっきたんの手の中だと、葉牡丹はちっとも「毒花」っぽく見えなかった 。

　予想がつかなかったわけじゃなかったけれど、学期末試験前日におとひっちゃんが学校を休むとは思わなかった。葉牡丹プレゼントショック、ただでさえ寒い ところに長時間いて、さらに帰り際、さっきたんの家の前まで行って、おとひっちゃんが冷静なままでいられるとは僕も思っていない。けど、学年トップを入学 以来保っている以上、意地でも学校には来るだろうと思っていた。
「で、どうだい、関崎副会長のお迎えセレモニーは」
　昼休み、給食もそこそこに僕は生徒会室へ向かった。試験前で話がゆっくりできる場所ったら、生徒会室しかなかった。総田が相変わらず石炭ストーブに火箸を突っ込んでがしゃがしゃやっていた。めずらしい、今日は川上さんがいない。
「今日は誰も来てないね」
「来させねかった。まあ、座れや」
　ストーブの側だけ過剰に暑い。僕は学生服の襟ホックを外した。
「見たよ、あの女子」
「そうか」
　万感の思いを込めてつぶやいた。
「すごい女子だね」
「だろう？　またやられたか。わんこそば攻撃を」
　困った。言うべきか言わざるべきか。僕としては総田にすべて丸ごと報告するのが筋だと思っている。
　お茶わんこ側攻撃は幸い、青大附中の連中が食い止めてくれた。が、しかし。と。
　しかたないので僕は、曖昧に答えた。
「青大附中の人たちがその女子を別の教室に閉じ込めてくれたみたいなんだ」
「閉じ込めた？　ってことはなにか、牢屋みたいなとこにか」
「わかんないけど、おとひっちゃんと顔は合わせないようにしてくれたみたいなんだ」
　総田の頬が、針金いれているみたいにぐぐっと曲がった。横顔だ。
「それは正しい。まんざらアホじゃねえな、あいつらも。関崎のことだ。また相手側に乗せられてへらへらしてたんでねえだろうなあ？」
「仕事は増えたよ。総田」
　この辺は話しても大丈夫だ。僕は数箇所だけはしょって、だいたいの状況を説明した。もちろん教室内での出来事のみだ。ロビーおよび体育用具準備室での内密な話題はカットした。

「ははん、そっか。むこうさんはとにかく俺たちと交流がしたくてなんねえと。すげえ必死こいてるって感じだなあ」
　一通り聞き終えて、総田は学生服の裾をぱたぱた仰ぎ始めた。裏にはちゃんと、竜の裏地がちらついている。生徒会副会長にあるまじき制服だ。

「青大附中の委員長、おとひっちゃんを持ち上げたり誉めたりいろいろして、結局バスケ部同士の交流会を開くって約束させちゃったよ」
「あのうすらぼけ野郎がか。単に女たらしってだけじゃねえんだなあ」
　――いや、女たらしかどうかわかんないよ。
　立村評議委員長の蝋人形顔を思い浮かべた。
「うちのバスケ部ってことだったら問題ねえか。なんてったって全国大会出場してるからな。青大附中のバスケ部なんて、ろくに中体連で勝負できたことねえんだろ。そりゃああがめたくもなるわな。ああ、あの、運動馬鹿って感じの奴だろ。バスケ部のキャプテンってのは」
　――健吾くんが、運動馬鹿か。
　妙に笑えて僕は頷いた。
「とにかく、おとひっちゃんはこれから何しなくちゃいけないかっていうとさ」
　総田副会長へのお仕事依頼だ。
「とにかく、期末試験後にバスケ部との練習試合と交流会を用意してもらわなくちゃってことなんだ。けど、おとひっちゃんそういうのって、どうかなあ。おと ひっちゃんは一応元陸上部だけど、言い方間違ったら先生たちからかなり顰蹙かっちゃうよなあ。三年になったら受験勉強に専念しなくちゃいけないのに、お前 何考えてるんだって」
　匂わせるだけで総田には通じる。きいろとだいだいの絡み合った炎が総田の頬をおもいっきり照らす。
「なにか？　俺が間に入れってのか」
「一応、約束してきちゃったからね」
　前髪をぐいとオールバックにして頭をかかえる総田の図。笑える。
「正式にはおとひっちゃんが学校に復活してから、うまくやっていくつもりなんだろ」
「だからやだったんだ。あいつを渉外なんかにしちまうのは！」
「だったら総田、今からやったらどうだろ。俺も思ったんだけどさ」
　ここだ。僕は両足を椅子の上にのっけて、膝をかかえるような格好で座った。椅子の上で安座、って感じだ。指を絡めてみた。顎をのせて、ちょこっと総田をにらみつけるようにしてみた。
「あのままだとおとひっちゃん、向こうの委員長の言いなりって感じだよ。俺もちょっとまずいなあって思った。うちの学校は公立だから公立高校の入試があっ て、六月以降の行事はたぶんできないって、おとひっちゃんは言ったけど。でも、向こうの委員長はとにかくやりたいってことばかり言うんだ。青大附中の行事 とかも調節するからって。生徒が行事の調節なんてそう簡単にはできないよね。要するに向こうは、なんとかこっちと仲良しになりたいってことで必死なんだ。 どうしてそこまでしたがるのか俺もわかんないけど。おとひっちゃんはその評議委員長のこと気にいってるみたいで、ため口叩いてるけどさ。でもこの調子だと おとひっちゃん、どんどん引きずり込まれていって、引退までずうっとその活動に熱中しちゃうよ」
　――総田、来たかな。
　僕はもう一度、じっと目に力をこめた。

「六月でいったん終り、ってことにした方が楽だよね」
　これ以上は何も言わなかった。だって、総田があとは決断するだけなんだから。
「佐川。そうしたい気持ちは山々だってのは、わかってくれるよなあ」
「だって、ちょっとこのままだと、向こうに引っ張られるよ。俺、そんな気がする」
「佐川の言うとおりだ。相変わらず、切れるな」
　総田が言葉を濁す。こういう時が、大切だ。
「だが、これはあの単細胞野郎に全部丸投げさせたいってのも、わかってくれるよな、佐川」
　――あらら、だめかよ。
　かなりがっかりした。口を尖らせた。唇の皮があぶくみたいにふくらんできた。しばらく総田は僕を申しわけなさげに眺めていた。また火箸で火口を激しくかき回した後、がしゃんと床に置いた。曲がった火箸の先が甘い飴色に染まっていた。

「なあ佐川、お前があの単細胞と一緒に青大附中に行っている間、俺は何してたと思う」
「どうせ、試験勉強だろ？　最後の最後でトップを奪うぞって」
　白々しいことを僕は言ってのけた。当然、総田は吹き出した。
「んなことすると思うかよ、俺がそんなあいつみたいに必死こいてやんねばなんないほど、ガリ勉かと」
「だってそうでなかったら次に総田のすることは一つだろ？」
　意味ありげに覗き込んでやった。唇をひんまげて、僕の顔を覗き込む。
「川上さんとも連絡取らなくちゃいけないしね」
　思いっきりはたかれた。よかった、火箸じゃなくて。
「お前何俺のこと誤解してるんだ？　だからあの女とは関係ねえだろ」
「いや、俺も今、もしそういうこと知ってなかったら、これからのこと相談できないなあと思ってて。ごめんごめん」
　引っ掛けすぎた。やっぱり痛いのはごめんだ。僕は頭をさすりながらくしゃみをした。
「おとひっちゃん、実はさ、あの子にすごいこと言われちゃったんだ」
　――一か八か、勝負だな。
「あの子？」
「うん、あの、子」
　変なところで切って、もう一度僕は総田の側に近づいた。おとひっちゃんはいなくても、どこでばれるかわからない。水鳥中学は青大附属と違って木造だから、結構音がもれやすいんだ。
「まさか、あの女子か。何言われた」
　――答えた方いいかなあ。
　かなりこれは迷う。僕はとぼけることにした。
「言われたっていうか、プレゼントもらっちゃったんだ」
「今度は食い物か。まんじゅう怖いか」
「ううんと、花だよ。鉢植えの花。持ってきて渡してくれたんだ」

　総田は唇で「花だと」とつぶやいた。
「なんでだよ」
「知らないよ。とにかく、帰り際にいきなりおとひっちゃんへ花をプレゼントしてくれたんだ。今回お茶汲みわんこそばできなかったみたいだから、そのお返し なのかなあ。俺、そういうのってよくわかんないからさ、総田に相談したかったんだ。できれば川上さんとの実体験から教えてもらえたら、きっと今後の活動に 役立つかなあって思ってさ」
　話がだいぶ強引だけど、総田はこういう形で持っていくとすぐに頷いてくれる。ちゃんと分け前を渡す代わりに、僕の役にも立ってくれるってわけだ。
「そうか、花な。愛の告白で薔薇でも持ってきたか」
「ううん、葉牡丹」
「はぼたん？」
　総田は花の種類に疎いらしい。
「キャベツの親戚みたいな花だったよ。きっとお土産に食べてくださいってことなんだろうな。だから俺もおとひっちゃんの代わりに言ってあげたんだ。花を育てるのが得意な子がいるから、預けるよって」
「佐川、おい」
　僕はさっそくとどめをさした。ちょっとばかり早いけど仕方あるまい。
「だって、おとひっちゃん露骨におびえてたよ。お茶わんこそばもすごかったけれど、きっとキャベツもらってどう返せばいいか、わからなかったんだと思うん だ。必死にこらえてた。必死にありがとうってお礼、言ってた。たぶんあの子、おとひっちゃんがよろこんでくれたんだって誤解していたかもしれないけれど、 おとひっちゃんはとんでもない、だれか助けてって顔、してたよ。もしこれ以上近づいてこられたら、青大附中との交流会止めたいって顔、してたよ」
　――ここだな、問題は。
「そうか、あいつも相当、あの女子を」
　火箸を数回、ストーブの火の中でかき回し、また赤くした。
「総田はあんまり乗り気じゃないって言ってたけど、でもせっかく盛り上がってるんだったらやらない手、ないと思うんだ。内川だって大変だしさ、総田だって今更おとひっちゃんがこっちに戻ってきたら困ると思うんだ」
　――そうだろ、総田。
　ひっかかった。火箸の曲がった先がゆっくりと黒くなった。
　持ち上げて僕の方を指すのは熱いからやめてほしい。
「相変わらずだな、佐川」
　今度は頭をぐりぐりなでた。おとひっちゃんがやるみたいにだった。
「天才参謀佐川雅弘、健在なりってことか」

　僕が天才なのかどうかはわかんない。総田が言うには、たぶんおとひっちゃんよりは上だってことなんだろう。気分はいい。でも調子に乗ったら口をつぐまれる。僕はわけわかんない顔を

して、半ば口をあけた。
「今、俺が内川と何やってるか、知ってるか」
「三月の、卒業生を送る会の準備だろ」
　ちょうど公立高校入試一週間前だった。終わってからすぐにやらなくちゃとは聞いていた。ただし、おとひっちゃんが交流会関連中心で立ち回っている関係で、ほとんどタッチできない状態だとも聞いていた。
「関崎抜きでずっと話を煮詰めてきたってわけだ。内川もぼんぼんの顔していて結構おりこうさんだ。関崎の前ではばか顔をしまくってるが、ほんとのところはどうだかなってとこらしい。本人も自覚してねえけどな」
　僕も内川会長は、ただのおとひっちゃん大好き少年としか思っていなかった。
「関崎はまだまだあれやこれや手を出したいみたいだが、俺としては今のうちから、内川ひとりでどんどん企画をまとめたり話をしていったりする方がいいと思 うんだな。俺たちも三年になったら少しはマジにならねばなんねえし。けど関崎がいれば内川はほよおんとしたままだ。ただ甘ったれてしまうだけだ。で、今か ら俺は少しずつ活を入れてるってわけだ」
「活って、例えばどんな？」
　ストーブを火箸の先でこつんと叩いた。石炭入れ口の隙間をふさいだ。
「関崎がいる時だったら書類関係はみいんな、あいつが片付けるよな。うちの会計の分まであっというまに完成させちまう。楽では有る。しっかし、今は関崎が いない状態だ。誰がやる？　俺がやるってのか？　冗談じゃねえ、お前やれ、ってことで、内川は毎日書類にひいひい言ってる」
「こき使い過ぎたんだよ。内川くん、だから一月に倒れたんだよ」
　彼もインフルエンザに倒れたひとりだった。
「でもな、よく考えてみろよ。あのまんま過保護に関崎が面倒見つづけてみろ。後で泣きを見るのは内川だぞ。覚えてるか。俺たちがいきなり副会長につけられ て、さんざんバトル繰り返して、必死に覚えてきたことってなんだよ。こんなのを一年のうちに覚えられれば、もっと要領よくできたぜ。あの関崎ですらも、勘 違いしたこと口走らないですんだだろうしな」
　――言えてるよ。本当にそうだ。
　僕が頷くと、総田は後ろに回って肩をもむようなしぐさをした。本気でマッサージし始めた。
「だろうだろう。愛の鞭って奴だ。会計、書記、今の一年みな似たようにしつけてるとこだ。けど関崎が戻ってきてみろ、またみーんな、あいつがひとりで片付けて、一年坊主はやることなし、改選の段階で何やればいいんだかわからねえ、情けねえの三拍子。冗談じゃねえよなあ」
　総田の本音に僕は強く共感した。伝わったのか、肩がほぐれた。
「思いっきりもんでいいよ」
「よしきた！」
　休み時間終わるぎりぎりまで、僕は総田に肩をもませたまま炎を見つめていた。

　おとひっちゃんがものすごく後輩に対して面倒みがいいことは有名だ。僕をかばっていた時と

同じことを、内川会長をはじめみんなにしているわけだ。実際、 総田もおとひっちゃんがいる時はある程度気をつかって、あまり内川くんに口出しをしないようにはしているようだ。よけいなけんかはしないようにしているみ たいだ。
　でも、おとひっちゃんが渉外の仕事に専念し出してからは、ありとあらゆることを内川くんに仕込んでいる。はっきり言って、それは正解だと思う。おとひっ ちゃんのぶきっちょなところを真似たって、内川くんが損するだけだ。むしろ、総田のように女子受けもよく、ちょっとのほほんとしたとこなどを生かして、 「愛される生徒会長」を目指せばうまくいきそうな気がした。少なくともおとひっちゃんのように「陰で物笑いされるかわいそうな生徒会副会長」にはならないですむ。精神的にもほんと、楽だ。
　総田は言った。
「あとで泣きを見るのは内川だぞ」
　ほんと、その通りだ。おとひっちゃんくらい仕事の頭がよければどんどん片付けられるのかもしれないけれど、誰もがそんなことできるわけない。僕だって、おとひっちゃんのやり方を真似ろなんていわれたらたまったもんじゃない。
　だから総田としては必死に、内川くんへ自分の経験とか方法を教え込んでいるんだろう。よけいな奴がいない間に、総田幸信流のやりかたを。正しい判断だ。
　けど、まだ内川くんは生徒会に入って半年も経っていない。何がなんだか本人だってまだわかんないだろう。一応は生徒会長といわれているけれども、実質処 理しているのはおとひっちゃんと総田なんだから。今のうちに時間稼ぎして、総田のやりかたを覚えてもらい、今年の十月改選以降……よっぽどのことがない限 り、あっさり信任投票で決まる……内川くんのやりかたで勝負すればいいと思う。
　よけいなことを言うおとひっちゃんがいない方がいい。それはよくわかる。
　――邪魔だよな。そりゃそうだよなあ。

　僕があえてそれ以上何も言わなかったのにはもうひとつ、理由がある。
　総田の本心だ。
　おとひっちゃんがあの杉本さんという葉牡丹の少女に付きまとわれて、げんなりしていることを知って、もし総田だったらどうしているだろうか。僕だった ら、まずためらうことなくおとひっちゃんを杉本さんと仲良くさせるべく努力するだろう。いいところを無理にでも見つけて……ものすごく難しいとは思うけ ど……付き合ってもらうところまで持っていく。杉本さんの性格が悪いところとか、そういうのは関係ない。とにかく、内川くんへの帝王学教育が終わるまでは なんとかしたいだろうし。おとひっちゃんだって、自分を好いてくれる人をまんざら無視もできないだろう。とにかく、青大附中評議委員会との交流を最優先す る形にして、その間はひたすらこらえる。耐える。いや、がまんしてもらう。
　むかつく女子であろうがなんであろうが、総田にとっては、厄介なおとひっちゃんの視線を逸らしてくれる相手だ。感謝以外の何ものでもない。僕が総田だったら、必死に杉本さんのいいとこ情報をたくさん手に入れて、おとひっちゃんをその気にさせてしまうだろう。

僕に出来ないことじゃない。もちろんだ。しかし。

しかしなのだ。 僕にはどうしても、そうしたくない理由がある。
総田の言った「天才参謀」という肩書きはありがたく受け取るけれど、もうひとつ僕には「関崎乙彦とは大親友」という言葉が重くのしかかっている。
おとひっちゃんとは小さい頃から一緒に遊んでいた。当時僕の身体もちっちゃくて、幼稚園から小学校一年くらいまではよく他の男子から泣かされていた。男 子の世界は腕力だから。けど、そういう時に飛んできてくれて、あっさり連中をのしてくれるのがおとひっちゃんだった。僕相手だけじゃなかったけれど、気が 付いたら僕に手を出す奴は一切許さない、とばかりににらみをきかせるようになった。僕はだいぶ、楽になった。いつのまにかおとひっちゃんの側から離れなく なった。おとひっちゃんも喜んだ。それだけといえば、それだけのことだ。
成績も学年トップだし、黙っていればかっこいいタイプに入るし、僕にとっては自慢の親友だった。「だっておとひっちゃんがそう言ってたよ」と一言口にす れば、あっさり大抵のことはＯＫが出た。「おとひっちゃんと一緒にハイキングに行くんだ」と言えば、うちの父さん母さんもみな納得でお小遣いをくれた。
今だって僕は、おとひっちゃんのことが大好きなはずだ。
おとひっちゃんが僕を大切な友だちだと思ってくれることがわかるから。
要領の悪い奴だとあきれていても、やっぱり僕はおとひっちゃんのことが大好きなのだ。

そんなおとひっちゃんに本人がやりたくないことを求めるなんてことできるだろうか。
僕が感じた限り、杉本さんへの感情はもろ、マイナスだ。
おとひっちゃんにとって、好きな女の子、といえるのはひとりだけだ。
もし、葉牡丹を差し出された時、狂喜乱舞しそうな相手はひとりだけだろう。
もちろん「たいして好きじゃない子」程度だったら、もちろん素直にごめんとか言えるだろう。おとひっちゃんもその辺は男だ、はっきりしている。
問題は「嫌い」なタイプの場合だ。
僕はまだ、おとひっちゃんにそのことを確認していない。できればしたくない。けど、杉本さんが葉牡丹の鉢植えを差し出した時、おとひっちゃんときたら完 全におぞけをふるっていた。できればこれ以上一歩も近づいてほしくなかったんだろう。おとひっちゃんが女子の前で露骨にびびっていたのは初めて見た。
その後で健吾くんから「杉本さんの過去」について聞かされた。聞いたことを丸呑みするおとひっちゃんのことだ。おとひっちゃんは、「嫌いな女子に追いか けられる」というのががまんできないに違いない。ずっとお茶わんこそばをされたり、変な花を押し付けられたりして、それを耐えながら青大附中に通わなくて はならないこと。どんなにしんどいか、想像はつく。
総田はおとひっちゃんにそのまま渉外係専念お願いしたいとこだろう。
けど、僕はおとひっちゃんの為に、なんとか杉本さんから縁を切らせてやりたい。
――冗談じゃないよ。僕だって、あんな子とおとひっちゃんが一緒にいるとこ、見たくないよ

。
　実はそれが一番の本音かもしれない。

　教室でさっきたんと少しだけ話をした。
　とりわけて僕とべったりしているってわけじゃない。僕は別にもっとしゃべっていいと思うんだけど、さっきたんがちょうどいい距離でいてくれる。すっごく楽だ。
　妙にくっついてくるってわけじゃない。たまたますれ違ったから挨拶する、ちょうど帰るところだったから途中まで歩く。偶然ばっかりだ。僕もさっきたんの ことをうっとおしいとか思わないですむ。僕があげた葉牡丹の鉢植えについて、わざとらしく話題にしてくることもない。本当に、いい人だ。だから僕の方から 話題を振ってみる。
「さっきたん、昨日の花、どうしてる？」
　ふわあっと笑った。やっぱり、喜んでくれたんだ。
「今日は玄関に出したままなの。玄関口は冷たいからちょうどいいかなあって思って」
「あれ、寒いところでもいいのかなあ」
　さっきたんはさすがに花に詳しい。
「そうよ。葉牡丹はね、冬、外に出したままでも大丈夫だって、本に書いてたわ。それでね」
　周りを気にするようにして、さっきたんは僕の隣りで小首をかしげた。
「今度のお休み、お天気よかったら、うちの庭に植え替えようかってお母さんと話してるの。大切に育てなくちゃって」
　どうせ捨てるつもりでいたんだから、そんな大切にしなくたってかまわないんだけど。
「あ、でも変な花でごめん」
「ううん、佐川くんが持ってきてくれたんだもの、ちゃんと育てるわ」
　――だからあれはおとひっちゃんがもらったもんなんだって！
　すっかりさっきたんは、葉牡丹を僕がわざわざ持ってきてあげたって思い込んでいる。
　たぶん、そう思いたいんだろう。
　一応、僕なりに説明はしたけれども、信じたりなんてしないんだろう。
　女子って、どこか自分の都合のいいことばかり信じてしまうくせがあるみたいだ。

　おとひっちゃんのうちに寄って、給食のパンと牛乳だけ届け、僕はさっさと家に帰った。
　まだ二年だから受験も先だし、ということで、店の手伝いをさせられる。僕のうちは青潟駅前で小さな本屋さんをしている。雑誌とかコミックとかもあるけ ど、結構学校の参考書や教科書なんかも扱っているので、お客さんは入ってる方だと思う。今の時期だと、青大附中受験用の参考書とかが売れるって、うちの父 さんが話していた。あんまり近くには、学校の教科書を扱う本屋が少ないんだそうだ。よくわかんないけど、教科書なくしてもこまらないなって思う。
　部屋でシャツとセーターを重ね着して、あったかくした後店に下りていった。父さんたちが返品作業中だった。床に積み上げた本をダンボールにより分けてい る。今の時間は学生が多いので合間に打つレジもせわしない。しかたない。僕もレジ脇でカバーをかける手伝いをすることに

した。受け取って「カバーつけます か？」とお客さんに尋ねて、ＯＫだったらいそいそと紙のカバーを表紙の上から挟み込む。たまにはビニールの袋に入れてあげる。一時間くらいばたばたしてい た。だいぶ人がはけてきた時だった。

「あのう」
　女の子の声が、僕の真ん前でした。ピーク時間最後のお客さんかと思って、目を向けずに返事した。
「はい、少々お待ちください」
「佐川さん、ですよね」
　やっぱりかすかな声。僕は顔を上げた。カバーをかけ終わった本をその前にいたお客さんに渡し、あらためてその子の顔を眺めた。見覚え、あるある。
　耳の上にまあるく編みこみした髪の毛をまとめている。カンフー映画に出てくる女の人みたいな髪型の子。忘れるわけない。紺のコートで隠されているけれ ど、きっと青大附中のブレザー制服を着ている。ほわほわっと首のあたりがあったかくなった。言葉がうまく出てこない。まずは挨拶を。
「ええっと、この前はどうも」
　女の子の名前が出てこない。確か僕の苗字に似ていた記憶はあるんだけど。一緒にいた男子は「健吾くん」だって覚えているのにだ。肝心要の記憶力が弱すぎる。
　隣りで父さんがにやっと僕の顔を見やった。なんか誤解してるのかもしれない。ここできちんと説明しとかなくちゃなんない。
「この前、おとひっちゃんと青大附中で会った人だよね」
「覚えていてくれたんですか！」
　声が弾んでいた。僕の方がびっくりするくらいだった。誤解が一層広がりそう。
　父さん、見えないところで僕をひじで小突くのはやめてほしい。なんかうずうずする。
　――この人助けてくれたんだよな。まずはお礼だな。
　言葉を慌ててつなげた。
「あの時はほんとに助かった。ありがとう」
　一年だったはずだ。昨日、体育器具室でダンボールを挟んでにこにこしあったあの子だとはわかるのだけど、肝心要の名前が思い出せない。
「あの、今少し、いいですか」
　迷っている間に女の子は僕を真っ正面からすうっと見た。じいっと、って感じじゃなかった。葉牡丹の彼女のように、にらみつけるのではない。僕の方がもっと見ていたいっていう角度に、さらさらと。
　父さんは完璧に昨日の出来事を誤解したらしい。結構、家の父さん、女子とのこととかに目ざとくて、しょっちゅうからかわれている。「雅弘、おとひっちゃ んとお前、どっちがもてるんだ？」といきなりちょっかい出すのはやめてほしいと常々思っている。たぶん今、僕の方がもてもてだと勘違いしまくっているはず だ。勝手にしろだ。

「じゃあ、雅弘、だいぶ空いて来たから、もう戻っていいぞ」
　――なにがもう戻っていいぞ、なんだよ！
　頼むから、下手なウインクするのは止めてほしい。女の子の前、そんなことは言えない。もう勝手に返品作業でこてこてに疲れてろってんだ。僕は頷くだけ頷 いて、さっさとレジコーナーから出て行った。あぶなく返品用のダンボールに躓くとこだった。あの子の前でこけないでよかった。
「いいけど、なあに」
　女の子は児童書コーナーの本棚前へ歩いていった。コミックコーナーだと僕と同じくらいの奴がたくさんいて落ち着かないし、雑誌コーナーも同じだし、って とこだろう。児童書だったら、うろついているのはお母さんと子どもくらいだし、ちょこまかして子どもの騒ぎ声はＢＧＭ代わりにもなる。僕がもし、店の中で 内緒話したいとしたらたぶん連れてくるのはそこだ。

「ごめん、あそこでにやにやしてたのうちの父さんなんだ。」
「佐川さんのお家なんですか」
　一目でわかる「佐川書店」。なんのひねりもない。
「うん。うち本屋だって、昨日しゃべったかなあ」
「今日はたまたま参考書を買いに寄ったんです。まさか、佐川さんに会えるなんて思わなかったんで、驚きました。いきなり声をかけてしまいごめんなさい。アルバイト中だったんですか」
　アルバイト、ときたか。単なるうちの手伝いなんだけどな。
　女の子はずっと僕に敬語を使う。一年上だからなおさらなんだろう。僕なんて背も低いしがきっぽい顔してるし、一年の中に混じっても変じゃないと言われている。先輩扱いなんて、めったにされたことがない。あらためて気付いた。この子、背がちょっと高い。
「ううん、うちの手伝いだよ。だから、大丈夫なんだ」
　何が大丈夫なんだか、自分でもわからないことを口走っている。どうしてかわかんないけど、髪巻き上げの女の子を見ていると僕ひとり、ひとりでぺらぺら しゃべってしまう。ラジカセの早回しボタンと再生ボタンを一緒に押したみたいだった。女の子はまた耳に手を当て、髪の毛に触った。
「で、俺に話ってなあに。昨日のことかなあ」
　偶然、というのを僕は信じていなかった。
　昨日の今日、たまたま僕がレジにいたからといって、いきなり声をかけるなんて大胆なこと、できる子ではないと思うのだ。おとなしそうで、どこかさっきたんっぽいとこのあるはにかみぶりを見てもそうだ。健吾くんの指示だろうか。
　――騙された振りしてやってもいいけど、嘘つくのはよくないよなあ。
　絵本と児童書の境目が四角くコーナー取りされていた。立ち読みしている格好で僕は女の子の隣りに立った。小さな声でささやいた。
「もしおとひっちゃんにばれたらまずいってことだったら言わないよ」
「あの、私」

　女の子が目をまんまるくして僕を見つめている。いっつもそうだ。何気なく、「こうじゃないかな」と思ったことを女子に言うと、大抵おんなじ反応をする。別にやなことを話したつもりじゃないんだけど。
「わざわざ来てくれたってことは、本当に知られたらまずいってことだよね。ほんとだったら生徒会と関係のない俺よりも、副会長やってるおとひっちゃんの方が話通じるはずだもん」
　ちょっと意地悪なことを言ってしまった。
「俺、勘違いしたこと言ったかなあ」
　まずい。嫌味いっぱいだと思われてしまったかもしれない。そう思われたくない。
　手持ちぶたさの片手を、本の背に滑らせた。
「佐川さん、私」
　床に座り込んではしゃいでいるちっちゃな男の子が絵本を広げている。騒ぎ声に混じって女の子の言葉は聞き取りづらかった。
「新井林くんには内緒なんです」
　――新井林？　ああ、健吾くんのことか。
　でも、お付きあいしている奴に内緒ってことは。やはり今の再会は計算ずくなんだ。
「おとひっちゃんのことを聞き出すために、わざわざここに来たの？」
　やはりだ。予想はついていたけれども、ぐっさりきた。女の子はうつむいた。ほんとに泣いちゃいそうだった。学生かばんを両手で抱え、ゆっくりと僕を見上げた。本当に泣いているみたいだった。
「今日のこと、誰にも言わないでください。でないと私」
「別にいいけど、けどどうして」
　言いかけて、その前に聞かなくちゃいけないことを先にした。
「ごめん、俺、言いすぎた。名前、もっかい教えてほしいんだけど、いいかなあ。俺は佐川雅弘。あ、もう知ってるよね」
　泣き笑いめいた表情で佐賀さんは僕を見つめた。ほわほわともやのかかった、やわらかい湯気がかかっているみたいだった。白くて豆のような小さい花。たくさん集めてぽんと渡されたような感じだった。

「佐賀、はるみ、です」
　「女の子」じゃなくて、「佐賀さん」と心で呼ぶようになった瞬間だった。
　僕は黙って佐賀さんを、自動ドアの出入り口に連れて行った。
　一緒に外へ出ることにした。

　外に出ようと思ったのは、やはり店の中で親から向けられる視線がうざったかったことと、佐賀さんの立場を考えたからだった。
　他の男子と一緒にいるところを見られたらかなり誤解されるだろう。
　別に僕はそれでもいいんだけど。悪いことなんもしてないし。
　隣で佐賀さんがくしゃみの声を押し殺していた。どこか中に入った方がよさそうだ。
「ちょっと歩くけど、郷土資料館に行こうと思うんだ。いいかな」
　小首を傾げて僕を見た。
「店でお客さんに渡している無料招待券があるんだ。けど、あんまり行く人いないみたい。人気ないんだよ」
「私はかまいません」
「あそこ、中に入ると、展示室のどまんなかに大きないすがあるんだ。閉館時間まで座っていられるんだよ」
　総田と落ち合う時によく使っている場所だった。店のレジで配っている無料招待券をくすねてきてこっそり連絡を取り合う。大人が数人うろついている以外は見事に静か。館員の女の人が座っているくらいだろうか。安心して機密情報を交換できる場所だった。
　佐賀さんは唇のはしにえくぼを作った。
「ありがとうございます」
「いいよ。けど、青大附中からだったら遠かったよね。自転車、今の時期は使えないし」
「バスで来たんです」
　――じゃあやっぱり、狙ってきたんだな。
　佐賀さんとしては、「偶然本屋に立ち寄ったら僕がいた」という設定を守りたかったみたいだけど、不自然なことをしたってろくなことはないと思う。
　偶然出会った人をいきなり、そんなふたりっきりになれそうな場所へ引きずり込むなんてこと、できない。
　目的があるからこそ、できることってあるはずなのだ。
「バスの時刻は調べた方がいいよね」
「大丈夫です。最終、見てます」
　――完璧だよ。

　水鳥中学の知り合いには会わずにすむよう、近道を使った。五分くらい歩いたところに、「青潟市郷土資料館」と木目の看板が出ている建物がある。見た目は 目立つけれども、中に入ると受け付けのおじさんが黙って招待券をもいでくれた。コンクリートの壁ばかり目立つ、かすかにピアノの曲が流れているところだっ た。主に青潟市のなりたちとか歴史とか、水害地震など天変地異の話とかのパネルが張り巡らされていた。時代劇に出てくるような紐綴じの本とか、形をなして いない木造の板とか、見ても面白くない。僕たちはわき目も振らずに茶色のソファーに向か

った。青潟市全域の立体地図を背に座った。髪の毛の白い男の人が、 ゆっくり歩いている以外は誰もいなかった。
「ここ、五時半までいても平気だよ」
「はい」
　僕もジャンバーを着ないまま来てしまったので、かなり寒さが答えた。中は暖かいけれど、暑いほどではない。佐賀さんもコートを羽織ったままだった。手袋だけ脱いで、両手で握り締めていた。
　――目的って、なんなのかなあ。佐賀さん。
　僕にだけ用があるのは確かだ。
　おとひっちゃんのいないところで、もっというなら恋人の健吾くんすらはさまないところで話さなくてはならないこと。
　昨日教えてもらった話は全部焼き付けてあるけれども、今日につながることなのかどうかがはっきり結論付けられなかった。
　まあいいや。わかんなかったら、聞けばいい。
　単純なことだ。
「佐賀さん、俺、少しずつ質問していくけどいいかな」
「聞いていくって」
　片手をまた耳元に当てて、佐賀さんは首をかしげた。わざとらしくない。髪の毛の角度が三角定規の先っぽ程度に傾いたくらいだった。
「俺、謎解きが好きなんだ。推理小説とか、ドラマとか見て犯人当てるのがすっごく好きなんだ。だから、佐賀さんの話、ちょっとだけ当ててみたいんだ」
　わざとらしい言い訳だけど佐賀さんはうつむいて、小さくうなづいた。
「外れてたら言ってくれればいいよ。おとひっちゃんと、葉牡丹くれた人のことかな」
「葉牡丹、梨南ちゃんの」
　すぐに反応が返ってきた。僕は畳み掛けた。
「帰り、俺たちを送ってくれた時、言ってたよね。葉牡丹くれた人が逆恨みすると大変だから葉牡丹を持っていってほしいって」
　かすかに唇を開き、佐賀さんはふたたびはあっと息を吐いた。
　でも言葉には出さない。僕は気づかない振りしてさらに続けた。
「俺とおとひっちゃん、ちゃんと持って帰ったよ。けど、男子は基本的に花育てるの苦手だろ？
　枯らしたらあとで大変だって聞いたから、別の知り合いに預かってもらったんだ」
「その人、男子ですか、女子ですか」
　答えた方がいい。即断した。
「女子だよ。同級生で、やさしくていい人なんだ。おとひっちゃんも、その人にだったら預けたいって言ったんだ」
　少しゆっくりめに力をこめて言った。
　特に「やさしくていい人」「その人にだったらいい」というところはアクセント記号を思いっ

きりつけて。
「やさしくていい人、なんですか」
　かすかな声で、目を伏せたまま佐賀さんが問い返した。
「うん、関係ないけど、おとひっちゃんの好みって、やさしくておとなしくっていい人が好きなんだ」
　くどいようだけど、アクセント記号をつけさせていただいた。
「やさしくって、おとなしくって」
　また佐賀さんが繰り返した。勘違いしてるんじゃないかって気がしたので、慌てて僕は軌道修正した。
「うん、けど俺はおとひっちゃんと好み違うかもしれないなあ」
　無意識に口走った振りをした。
「佐川さんがですか」
「うん、俺ってあまり女子に興味がないんだ。いい人だったらみんな男子女子関係なく、いい人だから好きっていう。それだけなんだ」
　なんでそんなこと言い訳したのかわかんないけど、口が勝手に動くのだからしかたない。
「そうなんですか」
「もうひとつ、おとひっちゃんって、すっごい度真面目野郎で、曲がったことが大嫌いなんだ。いじめをする奴は男子女子関係なく、絶対許さないな。たとえ自 分が好きだった子だったとしても、そういうことをしているんだったら、縁を切るか、もしくは殴るかしちゃうなあ。俺、おとひっちゃんと幼稚園の頃からの親 友だけど、そういうところはぜんぜん変わってないんだよ」
　匂わせてみた。昨日の話を丸ごと信じると、葉牡丹の君こと杉本さんは、僕の隣にいる佐賀さんを思いっきりいじめていたらしい。佐賀さんの反応もあいまい だけど、事実関係を認めているって感じだった。現場を見ているわけではないので判断できないけれども、やりそうな人だなあという気はたしかにした。気に入 らないことだったら文句をつけて押し通しそうなタイプ。違っているかもしれないけれど。僕なら、たぶん違うんじゃないかと疑問符はつけるつもりでいる。け ど、おとひっちゃんがあの話を聞いて、それでも杉本さんのことをかばうとは思えなかった。いじめをして堂々としていることや、担任にも嫌われて次期評議委 員会から降ろされているということもマイナスの点数を増やしているんじゃないだろうか。
「俺、思うんだけど、健吾くんは杉本さんのことが大嫌いなんだよね。だから、かなり悪口に上乗せしているとこあるんじゃないかなって思ったんだ。だから話を少し低く見積もって聞いてたんだ」
　僕は続けた。よく総田に話し掛けるような感覚で。
「俺がはっきりと本当だって思ったのは、健吾くんと佐賀さんが、杉本さんのことを大嫌いだってことなんだ。違ってるかなあ」
「違ってます。私、梨南ちゃんのことを嫌ってなんかいません」
　慌てて早口に否定する佐賀さん。頬が真っ赤だった。首を激しく振った。
「梨南ちゃん……杉本さんのことなんですけど、あの子は私と小学校一年の時から一緒だったん

です。本とか百科事典とかそういうのをたくさん読んでいて、成 績もよくって、それに可愛くって。小学校の時は目立ってたんです。新井林くんも言ってましたけど、確かに私は梨南ちゃんにひっぱられてたところってあった と思うんです。梨南ちゃん男子が大嫌いでののしりあいのけんかばっかりしてたから。私に話し掛ける男子を見ると、すごい勢いで文句まくし立てて追っ払って ました。馬鹿と話すと馬鹿になるからって」
　――やっぱり杉本さん、佐賀さんをいじめてたんじゃないか。
　確信、さらに深まる。
「でも、梨南ちゃんはそれを私のために、っていつも言ってました。だから私も、そうなんだなあって思ってずっと言う通りにしてました。けど、新井林くんからそれは違う、悪意なんだって言われてから、だんだん考え方が変わってきたんです」
　――俺から見てもそれって嫌がらせだよ。健吾くんのしたことは当然だよ。
　おとひっちゃんも杉本さんをぶっとばしていただろう。
「けどけど、私、考え方が梨南ちゃんとは違ってるんだってことを伝えただけなのに、ものすごく怒られてしまったんです。小学校の卒業式前に、私、靴の中に 蛆虫を入れられたことがあったんです。梨南ちゃんじゃありません。他の男子が梨南ちゃんの靴だと思って間違ってしまったんです」
　男子だっていやだ、女子だったらもっとすごい騒ぎだっただろう。
「泣いちゃった？」
　僕の顔を横目でにらむようにして、佐賀さんは頬を押さえた。
「だって、足の上からいっぱい小さな虫が上がってきて、私、何がなんだかわかんなくって」
「男子だってパニックになると思うよ」
「その時、梨南ちゃんは私の靴を脱がせようとしてくれたんです。梨南ちゃんは善意だったと思ってます。けど、その時に新井林くんが来て、梨南ちゃんを突き飛ばして、私をおぶって教室につれていってくれたんです。そして」
　頬を今度は両手で押さえた。
　聞きたくないけど聞いてみた。
「なんか言われたのかなあ」
「私とお付き合い、したいって」
　それだけ言うと佐賀さんはうつむき震えた。
　――そうなんだ。やっぱり、付き合ってるんだ。

　なんで佐賀さんが、健吾くんとのきっかけを、会って二回目の僕に打ち明け始めたのかわからなかった。関係はあるんだろう。たぶん杉本さんとのことで何かあるんじゃないかとは思う。けど、僕としてはどうでもよかった。関係なかった。
「で、杉本さんとはそれからけんかになったんだ」
「はい。あれ以来梨南ちゃんは私と口利いてくれなくなりました。けど、それはしかたないんです。新井林くんと付き合ってしまった私が悪いんです。私、関係なく友だちでいられると思っ

たけど、梨南ちゃんは絶対に許せなかったみたいなんです」
　――先に彼氏を作ってしまったから悔しかったのかな。
　佐賀さんが杉本さんよりも早くそういうお付き合いしたというのだったら、納得だ。
　もしどっちを選べとか言われたら、僕も、たぶんおとひっちゃんも同じ選択をするだろうから。
「どうして許せなかったのかなあ。理由、あるのかなあ」
　ぼけぼけした調子で僕はさらに尋ねた。
「たぶん、なんですけど」
　ほつれた耳もとの髪の毛を、人差し指で押さえるようにして、僕の顔をじっと見つめた。
　目が合った。そらせなかった。
「梨南ちゃんは新井林くんのことを七年間、好きで好きでならなかったんです」
　――そういうことか。
　思わず、ひざを打った。
　キーワードが見つかると僕の頭の中ではものすごい勢いで答えがまとまっていく。これって無意識なんだけど。
「だから健吾くんは、杉本さんのことを嫌ってたんだ」
「小さい頃からそうでした。新井林くんは梨南ちゃんのことが大嫌いだったんです。でも梨南ちゃんはずっと新井林くんのことばかり考えてて、一生懸命関心ひ こうとして、赤ちゃんみたいなことしてたんです。なんとなく、四年生くらいからそうかなって思ってたんですけど、梨南ちゃんと友だちでいたかったから言わ ないであげたんです。なにか機会があったら、新井林くんと仲良くするきっかけあるかなとも思って」
「けど、そういうのはなかったんだ」「蛆虫の事件だって、もし私が新井林くんと付き合わなければよかったのかな、って思いました。でも、その時私、梨南 ちゃんよりも新井林くんの方が本当のこと言ってるんじゃないか、って感じたんです。でも、梨南ちゃんとも友だちでいたかったし、それで、私」
　言葉の切り方が僕には、テレビドラマの人みたいに聞こえた。
「佐賀さん、俺、思うんだけど」
　途中でさえぎりたくなった。
「別に俺、杉本さんのことを佐賀さんが嫌いになってもおかしくないと思うんだけどなあ」
　あくまでも、気抜けした風に。目の前をゆっくり通り過ぎていくおじさんを目で追いながら。
「無理に好きにならなくたっていいなって思うけど、そうはいかないの」
「だって私、梨南ちゃんがずっと小学校の時から、私をかばってくれてたんだと思ってたし」
　勘違いだ。僕はその点で、完璧健吾くんと同じことを考えていたんじゃないかって思った。
　なんか言わなくちゃ。佐賀さんの言葉とずれているものが、乾いた空気の中にふわふわ漂っているような気がした。彼女本人はぜんぜん気がついていないみた いだった。女子って意識しないで平気で、怖いことを言う。男子だと「これってまずいかもなあ」と思うことを、さらっと言う。

「俺、あまり杉本さんって人のことよくわかんないけど、健吾くんがしたことは当然だって思うよ。佐賀さん、杉本さんのことを友だちだと思ってるだろうけれど、男子からしたらとんでもないなあって感じるしさ。どういうことしてたのかなあ」
　佐賀さんの手は、ずっと手袋をひねりつづけていた。
「男子たちと話をしていると、『他の女子たちに嫌われるからやめなさい』って言ってくれたりとか。あと、品のない可愛いノートを使うと頭が悪くなるからやめなさいとか、漫画よりもちゃんとした辞書を読みなさいとか。それからそれから」
　――とんでもない人だな。
　ほとんど杉本さんと話をしていない僕が言うのもなんだけど、これだけ聞けば十分だ。
　もちろん、佐賀さんがうそをついている可能性だってないわけではない。
　ただ僕の見る限り、佐賀さんの方に分があるように思えてならなかった。
「なんで男子と話をしてたの。別に杉本さんの悪口とか言ってたわけじゃないだろ」
「前の日のテレビの話してただけだったと思います。梨南ちゃんのうち、テレビないからそういう話できないし」
　――完璧、変だよ。
　前の日のテレビドラマとかアニメとか、そういう話で盛り上がるってみんなやってることだ。たぶん佐賀さんは他のことといわゆる「ふつう」の話をしてたん だろう。でも、杉本さんはそういう話題に入れないから無理やり佐賀さんを引き離して、自分のところにひっぱりいれようとしてたってわけだろう。
「可愛いノートって、女子が使っているピンクとか花とかの奴？　男子で使ってたらばかにするかもしれないけど、なんで女子同士で頭が悪いとかいうのかな」
「梨南ちゃんはいつも、真っ白い柄のないノートを使っていたから」
「杉本さんの趣味がそういうだけであって、佐賀さんの好みに文句いう権利ないよ。はっきり言って杉本さんがおかしいよ」
　僕の顔を驚きまなこでまっすぐ見つめる佐賀さん。髪型も、ひとみもみんなまんまるい。
「読む本だってそうだよ。漫画読むことってそんなに悪いことかなあ。うちの親も、もっと真面目な本読めとか言うけど、それって好みだよなあ。佐賀さん、杉本さんの言う通り漫画読まないできたの」
「いいえ、他の友だちとか、先生とかが貸してくれたんです」
　――先生って、ほんとかよ。
　佐賀さんの周りの人って変わっている。杉本さんのように、「漫画の代わりに辞書を読め」と意味不明なことを口走る女子がいると思ったら、「漫画を貸して くれる」先生がいたりする。
僕も、辞書と漫画が並んでいたら、まず漫画を手に取るだろう。辞書を愛読書にする人もいたっていいけどすべての人の趣味だと決 め付けられるのはよくない。
「読んでいるんだったら、あとはふうんって無視しちゃえばいいのにな。杉本さんには勝手に辞書を愛読してもらって、佐賀さんは自分の読みたいものを読めばいいんだ」
　首をかしげずに、僕の隣で佐賀さんが何かを言おうとした。

唇がかすかに動いた。こういう時、女子はよくわけのわからないことをいっぱい並べ立てる。すうっと聞き流して、必要なとこだけ繰り返せばいいと僕は思っ ている。真正面からすべてを聞き取って、すべてに答えるなんて、男としては大変だ。さっさと結論だけ言っちゃった方が佐賀さんにとっても、僕にとってもい いかな、と思った。
「佐賀さん、嫌ったって誰も責めないよ。なんで杉本さんをまだかばいたくなるのかわかんないけど、今の話みんな聞いてみて、杉本さんのように押し付けがま しいことをする奴は、あっさり縁を切って正解だって思うよ。もちろん生で見ているわけじゃないし、俺も一回しか会った事のない人の悪口言いたくないけど ね。もし佐賀さんが杉本さんを嫌いだったとしても、軽蔑する気なんてないよ」
もちろん、他の中学の連中についてだらだら悪口を言うつもりなんてないし、佐賀さんの言い分がすべて正しいと決め付けることもできない。なによりも今 日、佐賀さんがなんで僕を訪ねてきたのか、その理由がまだ判然としない。自分と健吾くんとのことで、杉本さんがとばっちりを受けていることとか、おとひっ ちゃんが杉本さんのことを好きなのかどうかとか。いろいろあるだろう。けど、僕からしたら佐賀さんは言い訳をしているような気がしてならない。本音は杉本さんのことを大嫌いなのに、どうしても認めたくないあまりかばおうとしているというんだろうか。
そう、びんびんと感じてしまう。
小学校の頃から、嫌がらせされてきて、それでもがまんしなくちゃいけなかったことなんかを。
佐賀さんのために、とわざとらしい言い訳をして、杉本さんは自分の好みばかりごり押ししつづけてきたってわけだ。僕からしたらばかばかしい以外のなにも のでもない。健吾くんが爆発して佐賀さんを守ろうとしたのは、当然のことだと思う。佐賀さんだっていっしょに、爆発しちゃえばいい。言いたいことはっきり 言って友だち関係を切るのが一番いいはずだ。
――なんで女子って、腐れ縁をまだまだ守ろうとするんだろうなあ。
「私、梨南ちゃんのことを嫌いだなんて」
「嫌いなんだよ。俺にはわかる」
なぜか、強く言い切りたかった。
「佐賀さんは女子の好きそうなノートを使いたくて、漫画とかも読みたかったんだろ。いろんな好みってあるとは思うけど、杉本さんが佐賀さんに命令する権利 なんてあるのかな。佐賀さん、どうして文句言わなかったんだろうって思ったんだけど、きっと杉本さんが佐賀さんのためにって言ったからそう思い込もうとし たんだろうなあ。けど、そんなの佐賀さんには関係ないじゃないか。俺もよくおとひっちゃんにああしろこうしろって言われることあるけど、ふふんって無視す ること多いよ。だって、俺とおとひっちゃん、違う人間なんだもん」
思わず飛び出した。
意識なくてぽんと出てしまった言葉こそ本物かもしれない。
――そうだよ、おとひっちゃんと俺は、違うんだ。

「私、今日、聞きたかったんです。梨南ちゃんのことで」
　言葉が震えていた。寒いんだろうか。目の前の温度計をちらっと見た。
「関崎副会長さんは、梨南ちゃんのことをどう思っているのか、知りたかったんです」
　――じゃあ、俺じゃなくておとひっちゃんのとこに行けばいいじゃないか。
「私、関崎副会長さんがもし本気で梨南ちゃんのこと、いいと思っているのだったら、協力したいと思ってました。これがきっかけで、また梨南ちゃんと友だちになれるかもしれないと思ったからなんです。でも」
　――それだけでは終わらないよな。
　様子を伺った。目立たない程度にうなづいてみた。
「そうでなかったら、梨南ちゃんのために、別のことをしようと思ってたんです」
「別のことってなに？」
　言いよどんでいた佐賀さんはひざをじいっと見下ろし、コートの上から手袋を強く絞りかげんにした。力をいれているみたいだった。
「本当に梨南ちゃんが好きな人と、仲良くなってほしいから、そのために」
「ふうん、いるんだ、おとひっちゃん以外に、健吾くんのことじゃなくってか」
「はい、梨南ちゃん、自分でもわかってないんです。本当に好きな人がそばにいるのに認めたくないんです」

　――どう出ようかな。
　迷った。佐賀さんが派手な前置きをした後、どう考えても杉本さんのことを嫌いなゆえの行動を取ろうとしていることに、戸惑っていた。女子ってわからな い。はっきりと「杉本さんと関崎さんをくっつけたくないので協力してもらえませんか」と言ってくれたら話は別だ。ちゃんと健吾くんあたりも交えて相談した いなって思う。
　でも、佐賀さんはまだ、杉本さんと「友だちに戻りたい」などと信じがたいことを言い張っている。
　結論にさっさと進みたかった。
「ごめん、俺なりの結論言っていいかなあ」
　さえぎり、また大きな目で見つめる佐賀さんに答えた。
「悪いけどおとひっちゃんは杉本さんのこと、あまりよく思ってないと思うんだ。苦手なタイプじゃないかなあ。おとひっちゃんの好みって、おとなしくてやさ しくて、いつもにこにこしている感じなんだ。人前で他の男子たちの悪口を平気で言う人とか、あといじめを学校でするような人は、絶対に許せないタイプなん だ。だからたぶん」
　仮に相手が佐賀さんだったら、話は別だったかもしれないが。その辺は想像なのでノーコメント。
「そうですか。そうなんですか」
　唇の端が小さく上を向いたように見えた。
「けど、帰りに佐賀さん言ってただろ。杉本さんは逆恨みするタイプの人だって」

　両手で葉牡丹の入った手提げを差し出してくれた佐賀さんの顔を思い出した。
「だから、おとひっちゃん、断る方法がわからなくて迷ってると思うんだ。もし杉本さんがおとひっちゃんのことをうらんで、青大附中評議委員会との交流関係 をぶち壊す可能性だってないわけじゃないし。おとひっちゃんにとって、交流会はなんとしても成功させたいことだから、自分が我慢すればそれでいいって思っ ている。けど、そのために杉本さんみたいな人と付き会うなんて耐えられないなあどうしよって、たぶん悩んでいると思うんだ」
　僕はぼそっとつぶやいた。あまり強い調子で言いたくはなかったけれど、事実そうなのだからしかたない。
「もし杉本さんに別の好きな男子がいて、心変わりしてくれるんだったら、一番丸く収まると思うんだけどなあ。そうすればおとひっちゃんは安心して青大附中の交流行事に参加できるしね。杉本さんも逆恨みしないで幸せになれる。これが俺の思う最高の終わり方」
　声を立てずに佐賀さんが慌てて目頭を押さえた。

　女子がいきなり泣いてしまうなんて、困った。ポケットを探ったけれども、ハンカチとかティッシュとかそんなものない。
「あ、俺、変なこと言ったかなあ。ごめん」
「いいえ、いいんです。私」
　静かに涙だけがころっころ転がるのを、僕はただ覗き込むだけだった。
　女子が泣くところって、あまり近寄りたくない。何を言っても通用しそうにないんだから。
「佐川さん、教えてください」
　涙が大粒で零れ落ちる中、声だけがさらさらとしていた。つまっていなかった。
「私、そんなに梨南ちゃんを嫌っているように見えますか」
「うん。とことん嫌っているなあって思ったよ」
「復讐したがっているように、見えましたか」
「うん、もしおとひっちゃんと杉本さんが付き合いたいって感じだったら、ぶっつぶしたいって思ってるんじゃないかなって」
「私、いったいなんで」
「簡単だよ。佐賀さんはずっと前から怒って当然のことを怒らなかったんだ。杉本さんに文句を言いたかったのに言えなかったんだ。今、怒って当然だよ」
　もう一度佐賀さんの目が大きく潤み、ぽつんと片目から涙を落とした。
「私、そんな悪い人になんてなりたくなんて」
「佐賀さんは杉本さんをいじめ返したりなんてしてないんだろ？　まだ友だちでいたいって思って俺のとこに来たんだろ？」
　僕はとどめを刺した。
「そんな無理しなくていいよ。佐賀さんのような人だったら他にいくらでもいい友だちできるよ。杉本さんなんかを見捨てたって誰も責めやしないよ。第一、杉 本さんなんかに時間をかけているひまあったら、もっといい友だちと出会ったほうがずっといいよ。俺でよかったら相談に乗

るからさ」
　最後の言葉は、余計だったかもしれない。
　ずっと黙っている佐賀さんの顔を覗き込むと、涙が大分乾いてきた風に見えた。
「ほんとに、私のこと、軽蔑したりしないですか」
「あたりまえだよ」
　べそかいて、ちょっとだけ鼻のあたりがぐちゃぐちゃしている。犬の狆に似ていた。なでてやりたかった。

「じゃあ、言います。佐川さん」
　狆くしゃ、とした顔が一瞬にしてぴんと引き締まった。
「私、梨南ちゃんのことが、嫌いでした。小学校の頃からちょっかい出してくる梨南ちゃんが、大嫌いでした。今までずうっと感じない振りしてたけど、本当は ずうと前から、離れたくてならなかったんだって。佐川さんが言ってくれるまで、私、そんなこと思っちゃいけないんだってずっと思ってました。たった今ま で。だから友だちなんだって顔して、うまく取り持ってあげようなんて。でも、私、関崎さんが本気で思ってないってこと聞いた時、なんだかうれしかったんです。私、最低な人間だって思っちゃったけど、本当にそうだったんです」
「いいよ、当然だよ」
　だんだん佐賀さんの口調が、ぴんと張り詰めてきた。ただおとなしいだけのしゃべり方じゃなかった。本気だった。ガラスの中に展示されている流木や化石などがぐいと僕たちを見つめているようだった。
「ほんとのこと言うと、梨南ちゃんが私のことを憎んでいた理由はずっと前から気づいていました。新井林くんのことを、梨南ちゃんはずっと好きだったんで す。でも新井林くんは梨南ちゃんのことがもともと大嫌いでした。だから梨南ちゃんは一生懸命ちょっかい出してたんです。私とくっついて、新井林くんに関心 持ってもらおうってしてたんです。でも、結局それは失敗に終わったんです。私が本当にしたいこと、したから」
　――それが、健吾くんと付き合うってことか。
　一歩引きたくなる片足。僕は足を組みなおし、展示されている地図を眺めた。
「そのことは後悔してません。梨南ちゃんから縁を切られて、ほんの少し、ほっとしてたりもするんです」
「遅すぎるくらいだったんじゃないかなあ」
「そう思う自分が悪い人間に思えてならなくて、自分でもどうしたらいいかわかんなくて」
　もう涙を流していなかった。もう一度僕は佐賀さんと目を合わせた。そらさずにいた。
「嫌いな奴を嫌いと思ってどこがいけないんだって思うけどなあ。口で言ったりいじめたりするのは悪いと思うけど」
「ううん、私絶対そんなことしません。したくないです。けど、どうしても私、梨南ちゃんにされてきたことが、友情からだなんてもう思えないんです」
　かちんと、頭の中でプラグが刺さった。

――佐賀さんって、もしかしたら。
それ以上の言葉は形にならなかった。ごほんとひとつ咳をして、気持ちを整えた。

白い壁にたくさん張り巡らされた青潟市の歴史跡は、青潟市民だったら常識として頭に入れているものばかりだった。
事実関係ばっかりで、どういう風なやり取りがあったのかは想像つかない。知りたいとも思わない。
結果だけわかればそれでいいと、僕は思っている。詳しく知りたいんだったら、そういう人が自分で調べればいい。
僕がほしい結果っていうのは、杉本さんがおとひっちゃんじゃない人を好きになってくれることであり、おとひっちゃんが余計なこと考えないでくれること。 ついでにいうなら、おとひっちゃんが青大附中の評議委員会交流会に専念してくれることだ。総田をはじめ水鳥中学生徒会もそうすれば平和になる。佐賀さん も、杉本さんからこれ以上僻みのエネルギーを向けられて傷つかなくてすむ。全員、幸せになる結末だ。
そのためにどうすればいいのか。
僕は佐賀さんにめいっぱい、復讐してほしかった。
さんざん自分の幸せを邪魔した杉本さんに、とどめを刺してやってほしかった。
杉本さんを嫌いでもかまわないのだと、わかってほしかった。

「佐賀さん、ひとつ俺からの提案があるんだけど、いいかなあ」
裏を見せないように、小学生に似た口調で僕は切り出した。
「え？」
「杉本さん、別に好きな人がいるって言っていたよね。おとひっちゃんじゃなくて、別の奴がいるって。その人とくっつけることって、できるかなあ」
もう展示室は人がいなかった。館員さんが顔をのぞかせて様子をうかがう程度だ。
「というか、佐賀さんは杉本さんをその人とくっつけたいと思うかなあ」
「どういうことでしょうか、佐川さん」
不安そうに、それでも落ち着いた声だった。たった一時間足らずで、凛としてしまった佐賀さんが、かっこよかった。「さっき言っただろう。誰もが安心する 結末に持っていく方法を考えてたとこなんだ。もし水鳥中学の人だったらいくらでも俺、手を回す自信あるけど、青大附中は無理だよ。だから、佐賀さんと協力 して、青大附中評議委員会も、水鳥中学生徒会もまあるく納まる方法をこれから考えてみたいんだ。協力してくれればの、話だけど」
驚いたのは一瞬だけだったらしい。手袋をひざの上に置き、佐賀さんは両手をそろえた。こっくりうなづいた。
「梨南ちゃんが本当に好きなのは、立村評議委員長だけです。立村先輩も本当は梨南ちゃんのことが誰よりも大切なはずです。今お付き合いされている女子の先輩よりも」
確信に満ちた言い方だった。

――あの蝋人形評議委員長かあ。
ものすごくびっくりしたわけではなかった。予想はしていた。
「そうかあ、立村かあ……わかるような気、するな」
「立村先輩は同じ評議委員の先輩と半年以上お付き合いされてます。見た感じ仲良しです。けど、本当は梨南ちゃんのことを可愛くてならないはずです。それに 今お付き合いされている女子の先輩には、別にぴったり合う男子の先輩がいるんです。立村先輩とはどうみても、不釣合いなんです」
「杉本さんを評議委員から降ろすことにしたというのは、立村の指示なんだろう？　健吾くんがそんなこと言ってたよね」
覚えていないようで意外と記憶に残っているものだ。
「はい。新井林くんが万が一評議委員長となった場合に、梨南ちゃんを傷つけないようにするためにです。新井林くんは気づいてませんけれど、立村先輩は影で いろいろと、梨南ちゃんを守ろうとしています。おおっぴらにできないのは、ただ今のお付き合いしている先輩に気遣いしているからです」
青大附中の評議委員会恋愛事情は派手だと聞いていたが、ややこやしい。
「とにかく、立村は杉本さんを気に入ってるんだ。けど、彼女持ちだったらよっぽどのことがないとくっつけられないよ」「いいえ、いいんです。くっつかなくてもいいんです。梨南ちゃんが関崎さんでなくて、立村先輩のことが本当は好きなんだって自覚できれば」
――そうか、なるほどな。やはり佐賀さんってすごいよ。
「そうすれば、今度は梨南ちゃん、立村先輩にしつこく付きまとうようになるはずです。他の男子先輩だったらわかりませんけれど、立村先輩は梨南ちゃんに対 してだけやさしいです。お付き合いまでいかなくても、関崎さんのことを忘れてくれれば、あとは知らないことにしてもいいんじゃないでしょうか」
――完璧だ、佐賀さん、おみそれしました！
この辺はすべて、佐賀さんの口からしゃべらせたかった。

僕と佐賀さんが郷土資料館を出たのは閉館ぎりぎりだった。
雪が降り始め、せっかく融けかけていた道も音するくらいぬかるみ始めた。
「ありがとうございます。あの、佐川さん」
「佐川さん」と呼ばれ気持ちのなかも、しゃかっと鳴った。
僕はポケットの中に押し込んでいた、うちの店のレシートを見つけた。
店のお客さんが捨てていったレシートかすだった。
上に紫のスタンプが押されている。下に濃く、店の住所と電話番号が印字されていた。直接店の電話につながってしまう。
「俺に連絡したい時は、ここの電話番号、下一桁にプラス一、してかけてほしいんだ。プラス一だよ」

「いいんですか」
「誰にも知られたくない計画だろ。俺も同じだし」
　佐川書店の前で僕は手を振った。
　たぶん、これから誰にもわからないような場所で会わなくちゃいけないと覚悟していたからかもしれない。
　おおっぴらに偶然、出会って語ったなんて言い訳、もうできないだろうから。
　耳元で大きく編み上げた女の子髪が消えるまで、見送っていた。

おとひっちゃんは見事、期末試験をトップで乗り切った。
葉牡丹事件という衝撃的な出来事を乗り越えて見事、というのは、いかにおとひっちゃんの精神力がすごいものかってことをあらわしている。頭いいんだ。そういうとこだ けは。
結局万年二番手の総田とため息を吐く。どうせ僕なんて、上位に食い込むことなんてない。こんな奴が「天才参謀」と呼ばれているんだから学校の定期試験っ てあてにならないものだと思う。青大附中の期末試験ってどんな感じなのだろう。うちの電話が鳴るたびにどきっとしている。
時期的に重なっているからだろうけれど、佐賀さんからの連絡はまだなかった。

「じゃあそろそろ、準備に取り掛からないとだなあ」
独り言を言うおとひっちゃんに、僕は知らん顔で尋ねた。
「なんの？」
「決まってるだろ。青大附中との交流会だ」
――おとひっちゃん、やる気あったんだ。
やはり「葉牡丹事件」を別のものとして割り切り進める決意をしているらしい。あとで総田にそこんところ、確認しておかなくては。くちばしをはさむと、おとひっちゃん、すぐすねてしまう。黙って話を促すことにした。
「期末が終わってからにしようと話はしてたんだ。青大附中の期末試験は来週いっぱいで終わりだということだしな。雅弘、お前も手伝ってくれるよな」
いかにも当然、と言った顔している。まったくおとひっちゃんには迷いがない。
「けど交流会の主催って、生徒会でやるんだろ？　俺、関係ないのにかまわないのかなあ」
「そうだなあ」
――気づいてないのかよ。
僕はため息をつきたいのをこらえた。こういうところが抜けている。世話がない。
第一僕は水鳥中学二年三組の学習委員。「長」もなにもついていない。ただおとひっちゃんの友だちってだけだ。それだけの理由で参加できるわけがない。
「じゃあしょうがないな。総田たちと組むしかないか」
おとひっちゃんは肩を落としてうなだれた。
「それがいいよ。俺、あまりその辺わかんないし。けど、青大附中についていくとかだったらいくらでも付き合うよ」
下心ありすぎるほどある。
「やっぱりお前、いい奴だよ。俺の親友だ」
――素直に喜びを表すとこが、おとひっちゃんだよな。
話をそらすために試験結果を持ってかえるのが苦痛だってことを、ひたすらぐちった。本音でもある。この調子だと公立高校入試に必要な内申点がかなり低く なってしまう。おとひっちゃんは思ってもみないだろうけれど僕はずっと下のランクの学校を狙う定めなんだから、大変なのだ

。
「雅弘、お前どこ受験するつもりなんだよ」
「一応、青潟工業か商業」
　最初から職業科を考えているってのは本当だ。おとひっちゃんが公立で本命にしている青潟東よりは内申ランク低い。専門がはっきりしている学校に行きた かった。手先もどちらかいうと器用なほうだと思う。自分なりに適正チェックは怠ってないつもりだ。　おとひっちゃんはよくわけのわかんない顔をして僕を見た。
「普通科にしないのかよ」
「将来就職する時、すぐに手に職がついたほうがいいだろ。俺、おとひっちゃんみたいに頭はよくないけど、できるだけ早く独立して仕事したいんだ。だから」
「あ、お前、大学行かないのか？」
　ほらきた。高校進学したらみんながみんな大学に通おうなんて決め付けているとこ。おとひっちゃんの単細胞。
「高校卒業してすぐに就職しないかもしれないけど、その時は専門学校行くつもりなんだ。できるだけ就職に役立つ能力身に付けたいからさ」
　言葉を発せずとまどっているおとひっちゃん。
　たぶんおとひっちゃんにとって、「青潟大学附属高校〜大学進学〜一流企業就職」というのは万人向けの道だと思っているのだろう。特別に目的がなかった ら、僕だって普通科を目標にしていたかもしれない。僕としてはできるだけ早く就職して、お金を稼ぎ、独り立ちしたいと思っていた。家から早く出て一人暮ら ししたいそんな気持ちでいっぱいだった。もっというなら、自分の頭と腕で働くことのできる仕事をしたいと思っていた。
「雅弘、工業だったら、青潟工専もあるんだからな」
　――そんなレベルの高い学校行けるわけないだろ。
　工業専門高等学校、通称、工専。　自分の学力はとっくにつかんでいるつもりだ。
「今からそんなレベルの低いところ狙うなんてもったいねえよ」
　――そう簡単に決め付けるおとひっちゃんの方がもったいないと思うけどな。
　それ以上文句を言うと、向きになったおとひっちゃんに噛み付かれるのが目に見えている。僕はすぐに、別の話を用意した。

「おとひっちゃん、交流会やるのはいいんだけど、青大附中から誰が来るんか」
　まさか、あの葉牡丹の彼女がやってくるなんてことはないだろうか。
　体育器具室で健吾くんは四月以降、杉本さんが評議委員から降ろされると断言していた。信じるならば、四月以降に開いたほうがいいんじゃないだろうか。
「たぶん二年が中心だと、立村……ほら、委員長、あいつが言ってた」
　――へえ、あいつと連絡取ってるんだ。
　もちろん副会長なんだから、代表として連絡を取るのは普通だろ うけれど、かなり意外だった
。

「俺たちは三年の前半までだけど、青大附中は三年まるまる活動できるからだって言ってたぞ」
　となると、立村評議委員長が指揮をとることになるのだろうか。
「主だったメンバーは現二年と、一部の一年とになりそうだということだ」
　――一部の一年に杉本さんが入っていたらどうするんだよ。
「だから俺たちも、内川を中心として、一年連中を集めておけばいいと思うんだ、雅弘。俺と総田は手伝いのつもりでいればいいだろう。その辺も立村と話してある」
　――なるほどな。青大附中は二年中心、水鳥中学は一年中心。これだったら見事にず れるな。
　おとひっちゃんもそれなりに、考えることはあるんだ。僕は素直にえらいと思った。
「じゃあおとひっちゃん、交流会には出るの？」
　返事は意外だった。
「いや、俺はたぶん裏に回る。総田が関心持ち出して、やたらと参加したがってるんだ。あいつもやはり、外部との交流に命かけたい気、してきたんだろうな あ。いい意味で内川が刺激になったみたいだ。内川の奴も言ってたんだ。『関崎先輩みたいに僕もぜひ、交流関係やってみたいなって思っていたんです。総田先 輩もどうですか』ってな」
　――なあんだ、そういうことか。
　要は総田教授の計画がはまったというそれだけのことだ。おとひっちゃんひとりでそんなこと思いつくわけがない。

　総田には後でこっそり電話連絡することにした。急いで帰り、たまたま家の中にいた母さんに、
「今日、電話かかってこなかった？」
　と確認した。もちろん店にではなく、僕あてにだ。
「そんな昼間にかかってくるわけないじゃない。雅弘、あんた何電話に最近ご執心なの？」
　母さんはまだ、佐賀さんという女子が僕に会いにきたということを知らない。
　父さんもその辺、わかってくれているらしい。後で恩を売りつけないでほしい。
「なんでもない。勉強する」
「雅弘、期末試験の成績、あとでちゃんと見せなさいよ」
　決していいとはいえない結果だったから、できるだけ引き伸ばしたかったのだが。厳しい現実だ。さて今夜は思いっきり説教されるぞ。

　部屋に駆け上がり、天井の木目をにらんで、僕はカモフラージュ用の教科書を広げた。苦手な英語の教科書。思いっきりカタカナで発音を書き込んである奴だった。
　――電話番号、忘れたのかなあ。
　下に聞こえるように、英語の教科書を音読したが、頭には入らない。
　電話の音も聞こえない。ここんところ、やたらと家の電話が気に掛かる。
　――レシートの電話番号、下一桁、プラス一ってあれだけ教えたのになあ。
　やはり、紙に直接書いた方がよかったのかもしれない。手帳を佐賀さんから貸してもらって、

空いているところに僕が書いておいた方が。あの時は頭が回らなかった。後悔したってしょうがない。そういうことだったんだ。
　耳の上に黒い手まりのような編み上げ髪を、たまに部屋で思い出す。
　毎日、あの髪型を作るのは大変だろう。
　くせなんだろうか、耳もとに手を当てて小首をかしげるしぐさとかも。
　見ているだけで話がするっとできた女の子だった。
　――まさか、俺と会ったことがばれたのかなあ。
　いろいろ考えていたけれども、やはり原因は一つ。「レシート紛失」しか考えられない。
　――また相談しに来たいって言ってくれたけど、電話来なくちゃ、どうしようもないよなあ。でも、佐賀さん、番号分からなくなっちゃったんだったらしょうがないか。駅前の佐川書店って、電話帳で調べれば一発なんだけど。小さいけどうち、広告だしてるからすぐわかるよ。
　カタカナ読みで、文字面には一切目もくれずに、僕は「タイタニック号の最後」を読み終えた。少しは頭に単語、こびりついただろうか。おとひっちゃんみたいな頭になれるだろうか。

　なんで僕が佐賀さんのことばかり考えているかっていうと、いい案を思いついたから以外のなにものでもなかった。おとひっちゃんや総田のように女子のこと で頭が一杯、顔を見るとゆでダコ状態だからでは決してない。うっかり誰かに言うと、「お前色気づきやがって！」と言い振らされるのが関の山なので内緒にし ているだけのことだ。面倒なことには巻き込まれたくない。
　佐賀さんに話した「杉本さんと立村評議委員長をくっつけてみんなハッピーエンドにする」という案なのだけど、僕ひとりではどうしようもない。むしろ佐賀 さんが青大附属の人たちに協力してもらうしかない。けど、佐賀さんの立場は難しいような気が、僕はする。杉本さんを頭に、他の女子たちが佐賀さんを無視し ている状況なんだからなおさらだろう。
　女子ってなんで、自分よりもいいと思った子に意地悪するんだろうか。変な集団だ。もし男子だったらすぐ友だちになりたいって思うだろう。
　僕が今できることは、水鳥中学生徒会の中を少し、風通しよくすることだろう。総田だって、おとひっちゃんを厄介払いするために、何気なく協力してくれて いるんだろう。おとひっちゃんも杉本さんさえいなければ、大喜びで調子に乗るだろう。ふたりで協力してもらい、学校側を口説き落としてほしい。
　まずは、バスケットボール部の顧問を先にだろう。僕もその辺は応援してやりたかった。健吾くんって、わかりやすくって、おなかのなかはなんもなくて、いい奴だ。　僕だったら立村よりも健吾くんの方を友だちにすると思う。
　おとひっちゃんももっと、健吾くんと友だちになればいいのに。
　案。あるのだ。とにかく成功させたい、案が。
　けど、青大附属側の状況がわからないと進められない。
　――佐賀さん、レシートきっとなくしちゃったんだな。じゃあしょうがないか。
　しょうがないか、では済ませないのが僕の流儀だ。
　当たり前、電話がないならば、直接会いに行く。口で言う。これが一番簡単だ。

店に下りて行った。よっぽど用でもないか、父さん母さんに呼び出されて店の手伝いをさせられるか、そのどちらかでなければ顔を出さないんだけどしょうが ない。夕方のピーク時間帯にかかっていて、かなりお客さんが入っていた。買って行く人はひとりかふたりだった。あとはみな、書棚と雑誌棚の前でかばんを本 の上にのっけて、立ち読みする連中ばかりだった。外は雪で、かばんが濡れているのに平気で置いてしまうお客さんに、うちの母さんはいつも怒っていた。紺の 縦襟型コートを着ている女子高校生と、雑誌棚の間に無理やり割り込んでいき、「ちょっとごめんくださいよ」と言いながら下の引き出しを引っ張り出した。立 ち読み客に対する嫌がらせだ。根性あるのはその女子高校生、一切無視して分厚い女性漫画雑誌を読みふけっていた。母さんがわざわざかばんを、本の上からど けて床に置いたっていうのに、何も感じていないようだ。この勝負、悪いけど母さんの負けだ。本屋は読んでもらわないと商売にならない。

父さんがレジで本の間に挟むスリップ……しおりのような形をしている細長い紙のことだ。真ん中で折り返してあり、本の間に挟みこまれているものだ。これ を半分に千切って、片方を店に保存し、もう片方を出版社へ送り返すことによってお金がもらえるんだと言っている……を二枚にちぎって分けている。僕はこっ そりもぐりこんだ。

「雅弘、手伝うか？」

「うん」

すでに父さんには、佐賀さんとの繋がりを知られている。まだ二回しか会ったことがないのに、

「雅弘、お前もやるなあ」

と頭を小突くのは勘違いもいいとこだ。面倒だったので言い訳はしてない。ありがたいことに父さんは、母さんに告げ口してないようだ。かえって好都合かもしれない。なんとなくそう思った。

僕は父さんが色ごとに分け終わったスリップを、輪ゴムで止めて、五十枚ずつさらに束ね直した。

「明日、うちの配達するものってないのかなあ」

目を合わせずに、お仕事に専念している顔をしたまま尋ねた。

「配達か？　ああ、あるぞ」

レジ後ろの棚にあるバインダーノートを取り出して、父さんはチェックを開始した。毎月、毎週到着する雑誌の定期購読予約というのがうちの店では結構あ る。テレビやラジオの語学講座テキストとか、喫茶店や美容院に届けるファッション雑誌とか、飲食店などで使うらしい料理関連の雑誌などが中心だ。購読予約 しない限り絶対に入荷してこない雑誌などもたくさんあるらしい。父さん母さんは、ノートに全部メモしておき、入荷するとすぐお客さんに電話して知らせている。学校が休みで僕が家にいる平日には、よくその手伝いもさせられる。お客さんの都合で来れない時は、配達することもある。自転車で小回りの利く僕がよく こき使われる。当然、お駄賃を弾んでもらう。これは別か。

きっと父さんは、小遣いほしさに言い出したんだと思ってるんじゃないだろうか。

「あのさあ、俺、よかったら、明日配達手伝おうか？　どうせ明日、五時間目で終わるからさ」
「どうしたんだ雅弘、手伝い自分から言い出すなんてなあ。さてはお前」
　ここだけなぜ小声で言うんだろう。
「デート代稼ぎたいのか」
　――結局これかよ。
　誤解されてもしかたない。目的があるんだからしかたない。僕は黙って五十枚ずつスリップを数え続けた。コミックのスリップ枚数が半端じゃない。思いっきり誤解したままの父さんはにやにやしながらバインダーを閉じた。
「汗を流して賄おうっていうのはいい根性だ。よし、じゃあ明日、雅弘やれ。かなりあるからなあ、覚悟しろよ」
「大丈夫、自転車で行くから」
　さっきの雪でまた明日はぬかるみそうだけど、大丈夫だろう。大丈夫、絶対大丈夫。
　レジが込んできたので、「カバーいりますか？」とお客さんに尋ねながらカバーかけの手伝いに専念した。今日はお小遣いまだもらえない。別に小遣い稼ぎを したかったわけじゃないのでその辺はどうでもよかった。部屋に戻ったとたん母さんに捕まえられて、期末試験の結果で思いっきり怒られたのも、これまたどう だっていいことだ。

　次の日、学校の終わるのが待ち遠しかった。
　こんなに手伝いしたくてなんないなんて日は、そうない。
「佐川くん、今日はお掃除当番よ」
　さっきたんに言われるまで忘れてしまったくらいだった。
「ごめん、さぼるつもりはなかったんだ。今日は俺水拭きだよね」
　机の前にぶら下げたぞうきんを引っ張り出した。なんだかまだしめっていて気持ち悪い。三月に入ったけれど、春なんてまだまだ先だ。寒い日に限って水拭き掃除の日だなんてついていない。さっきたんも今日は週番じゃなかったのだろう。僕の顔を黙って眺めていた。
「急いで帰らないといけないの？」
「ほんとはそうなんだけど、でもさぼるつもりじゃあなくって」
　さっきたんに気付いてもらえてよかった。掃除さぼりは違反カード一枚に加算されるんだから。またはつかねずみのようなきょとっとした顔で、さっきたんは首を振った。
「でも、急いでいるんだったら、佐川くん、窓枠だけ拭いて、それで終りにすればいいわ。そこだったらすぐに終わるし、ぞうきんをバケツで洗うだけでいいし」
　もちろん誰にも聞こえないような声でだった。僕にひたっとくっつく格好になる。後ろで誰かがひゅうひゅう言っている。僕は平気だけどさっきたんはいやじゃないんだろうか。
「さっきたん、いいよ、俺ちゃんとやっていくよ」
「困った時はおたがいさまだと思うの」
　少しうつむいた感じで、さっきたんはこくりと頷いた。
「あの、実は、これからうちの配達、手伝わなくちゃいけないんだ。だからなんだ」

　制服にさっきたんのお下げの先っぽがくっつくくらいでささやかれたら、言うしかない。僕はぞうきんをひねりながら、教壇上のバケツに向かった。机と椅子をすべて下げているので、前はすかすかだった。さっきたんも一緒に雑巾をつまんでいる。
「お家の手伝いしているのね、大変だわ」
「自転車で青大附属の方まで回らなくちゃいけないんだ。」
　ここまでは本当のことを言っているんだからやましいことではない。急いでバケツのとこにしゃがみこみ、水にぞうきんを浸した。一緒にさっきたんも同じことをした。ふたりでバケツを間にして向かい合った。
「そうなの、だったら急がなくちゃいけないのね」
「うん、でも当番は当番だから、きっちりやるよ」
　掃除の手を抜くのなんて簡単だ。僕は悔しいけど背が低い。だから高いところの拭き掃除なんて、台を使わないとできない。いつも机をさあっとなでるように こすって、それで終りだ。雑巾もさっきたんの言った通り、一度ぐにゅぐにゅと絞れば終りだ。さっきたんが心配しなくても大丈夫だってわかっている。
「それなら佐川くん」
　また僕の隣りに回りこむようにしてしゃがみこむ。
「今日は私が机を全部拭くわ。そうすれば佐川くんは窓枠だけですむでしょ」
　指先がちくっと痛い。きっと昨日、本のスリップを数えているうちに指をすったからだ。冷たくて指がおかしくなりそうだ。
「あ、ありがとう。さっきたん、助かるよ」
　僕は素直にお礼を言った。さっきたんって、こういう時ものすごく気が利く人だと思った。早く帰りたくてなんない顔、していたんだろうな。
「ううん、いいの。あのね、佐川くん」
　かっちりと絞り、立ち上がる寸前にさっきたんはささやいた。
「佐川くんからもらった葉牡丹、ちゃんと肥料あげてるのよ。可愛いお花でよかったねって、お父さんもお母さんも喜んでいるの。ありがとう」
　――葉牡丹、そんな大切にしなくったっていいのに。
　とりあえずさっきたんの心遣いはありがたく頂戴した。僕は絞りきっていない雑巾でべたべたに窓枠をぬらしておいた。葉牡丹もさっきたんには普通の花に見えるらしい。

「行ってきまーす！」
　店に声かけて出発するなんて、小学校以来だ。父さんは事情を知っているからいいけれど……厳密には知らないに等しいのだけど……母さんは返本用の雑誌をまとめながらびっくりした顔で見送ってくれた。あとでつっこまれるだろう。きっと。

　通りすがりの家はほとんど顔見知りだったから問題なかった。一冊単価もそれほどものすごい

額じゃないので、強盗に襲われるんじゃないかとひやひやしないですんだ。使い込みなんてするわけない。ばれたら張り飛ばされる。
　売上金専用の財布に全部入れて、つり銭用のきんちゃく袋をしっかりジャンバーの下に首からぶら下げた。こうするとお金が見えないし落としてもすぐにわかる。
　最後の一軒は、青潟大学の近くだった。月刊の小説雑誌を三冊届けるだけだ。おばあちゃんでもう外に出られないので、めったにうちの店には来ない。電話で 注文して届けてもらう、ことに決まっている。そこのうちには冬休みに何度か配達に行っているので、道はあらかたわかっている。
　時計を見ると、あと十分くらいで四時だ。間に合うだろうか。　雪が降りそうで降らない空に感謝しながら、僕は最後の一軒に向かった。
　だいたい十分くらいこげばたどり着く。青大附属中学の校門から、ほぼ近い家だった。

　配達そのものはいつも通り終わった。売上金を大切に首からかけなおし、気合を入れて僕は自転車の方向をかえた。自転車ですれ違う人の多くが、青大附属ら しいブレザ–制服を着ていた。中学生かもしれないし、高校生かもしれない。大学生だったらわからない。制服着ていないと聞いている。ところどころに「下 宿・青潟大学生男子募集」とか「家庭教師します・当方青大三年・青大附中・附高入試ならおまかせください」といった張り紙がやたら目立つ。マスクをしてい る人も多かった。くねくねした道を抜け出し、ようやく青大附属中学の校門にたどり着いた。青潟大学に直接向かうならすぐなのだけど、附中の玄関はかなり構 内の中にある。中学生はぺえぺえだって証明みたいなものだった。
　うちの中学と違って、庭あたりの雪かきも完璧だ。
　まだまだ生徒がいっぱいうろついている。中には奥の方で雪球をこしらえている奴もいる。おとひっちゃんと同じ感性の持ち主だろうか。やたらと雪合戦をや りたがるというような。また後ろの方では、明らかに青大附属の制服ではないとわかるような格好の男子中学生が、派手な自転車にまたがって空をにらみつけて いる。目を合わせないようにしていた。金と銀のまだらな自転車って、恥ずかしいんじゃないだろうか。一緒には歩きたくないセンスだ。
　僕はしばらく校門でうろついていることにした。
　金と銀のまだら自転車中学生は、これまた栄養まんてん、といった感じの女子と片手を打ち合わせて、仲良く帰っていった。僕の方をちらりと見たけれど、ちっともいやな感じがしなかった。目が合ってお互いにっこりしてしまった。

　用事がないのに青大附中前でうろついていたらあやしまれるだろう。
　でも今日は、「うちの店手伝い」「配達でたまたまこっちにきた」「せっかく来たなら寄っていこうかな」「ということで待ってたんだ」と言い訳ができる。
　「小説雑誌三冊」のおばあちゃんの家が青大の近くだったことは前から知っていた。
　小説雑誌は毎月発売日が決まっている。
　ちゃんと理由がたくさんあるわけだから、僕が堂々と佐賀さんを待ち伏せしていたっておかし

くはない。ただ、一年だと早く帰ってしまうなんてことないだろ うか。健吾くんの付き合い相手だから、バスケ部の練習が終わるまで待っているなんてことないだろうか。いや、もしそうなら健吾くんを捕まえて、何か言いつ くろって伝えてもらうこともできるだろう。健吾くんにはばれないように、と言っていたけれど、僕ならいくらでもごまかす自信がある。
　――でも、帰ってたらしょうがないなあ。まあいいや。四時十五分くらいまで待ってようっと。
　無駄に時間を費やしはしない。僕はその点、シビアなのだ。
　意外と生徒たちが切れ目なく、少しずつ、校門から出てきている。自転車通学がかなり多いらしい。もしバス通学しているってことだったら反対方向のバス乗 り場で待っていた方がよかったかもしれない。でも、この前帰りのバスの番号を聞いたら、青大附属近くへ行く路線のものだった。方向は間違っていないと思 う。　思いつく限り、佐賀さんと健吾くんが話していた内容を繋ぎ合わせてみた。
　もし健吾くんと一緒に出てきたら、僕は知らん顔して健吾くんにだけ話かけることにしよう。おとひっちゃんには内緒で、バスケ部交流会の協力を申し出に来 たとでもすればいい。佐賀さんとは会うのが二回目という顔をするのも簡単だ。そのくらいのこと、佐賀さんは得意だろう。僕ときっと、おんなじだ。

　自転車が二台連なって校門から流れ出た。と同時に小さい方の自転車がすぐに停まった。　うすい桃色の自転車がくきっとハンドルを曲げた。
　――佐賀さんだ。
　僕はほっぺたのあたりで片手を振って合図した。
「佐川さん！」
　くるりんと巻き上げた髪の束。全く変わっていなかった。
　続いて先に進んだ自転車がゆっくりＵターンして正面を向けた。
「なんだよ佐賀、どうしたんだ……？」
　立ち漕ぎして戻ってきたのは、スポーツ刈りがだいぶ伸びてきた健吾くんだった。佐賀さんに話し掛ける口調とはまるっきり違っていた。
「あ、あの、ええと、水鳥の」
「おひさしぶりです」
　相手は一年生だけど、やはり僕としてはきちんと挨拶しておいた方がいいかなと思っただけだ。下級生だし、すぐにため口を叩くことにした。
「今日、たまたま用事があって来たんで、ちょうど通りかかったとこなんだ」
「あ、すげえ偶然ですね。関崎さんおげんきっすか」
　健吾くんもおとひっちゃんのことが好きらしい。いいことだ。
「元気だよ。どうなの。交流会の方は盛り上がっているのかなあ」
　隣りで物言いたげな顔で僕を見つめている佐賀さん。でも健吾くんの前だとだんまりだった。ほんとは佐賀さんと話をしたいのだけど、お付きあいの二人にいきなり話すなんてことはでき

ない。
　ポケットの中には店で配るプレミアムのバッチが入っている。あまり物だ。ずっと前に父さんがくれたものだった。描かれているのは有名なアメリカのバスケ 選手らしいけど僕は知らない。持っていけば話のネタになるかな、と思って持ってきた。　きりのいいところで取り出して健吾くんにあげるつもりだった。

　佐賀さんがちょっと唇をつぼめ、僕を上目遣いで見やった。
「あの、佐川さん、この前はどうもありがとうございました」
「なんだよ佐賀、邪魔すんな。男同士の話なんだ」
　まだ当り障りのない話だったので、割り込まれても困らない。
　僕はちょっととぼけてみることにした。
「え、いつの？」
　忘れていたふりをしておけば怪しまれないだろう。目ではわかるように合図したつもりだけど、伝わっただろうか。佐賀さんはひいたりしなかった。またかすかに口元をほころばせた。片手を耳に当てた。
「この前、佐川さんのおうちだなんて気付かなくて、お店に入ったの」
「店ってなんだよ店って」
　かなり機嫌悪そうな健吾くん。妬いているんじゃないだろうか。ふたりっきりの時がばれたら大変だ。佐賀さんのことだから考えがあるはずだ。僕は合わせることに決めた。
「俺のうち、駅前の本屋なんだ。電話帳にも載っているよ。『佐川書店』って」
「ああ、俺小学校の時、あそこで青大附中用の問題集買わされたことあるなあ」
　確かにうちの店は参考書・問題集関連が多い。
「でね、健吾」
　「健吾」と呼び捨てにするのはなぜだろう。ぼんやり考えていた。
「私、この前のエレクトーンのお稽古の時に、健吾が探していた外国のバスケットボールの人の本、探してみようと思って本屋さんに寄ったの。そうしたら、佐川さんがたまたまレジにいたの。びっくりしちゃったの。あの時は本当にありがとうございました」
　僕と健吾くんの顔を両方覗きこみながら、佐賀さんはお礼を言ってくれた。嘘ついていない。やましくない気持ちで僕は笑った。
「え、お前、そんなこと一度も言わなかったじゃないか！」
　険悪になりそうな空気だが、佐賀さんは全く沈着冷静だ。僕は様子をうかがいつつ、佐賀さんの本心を大急ぎで探った。エレクトーンのお稽古の帰りかどうか わからないけど、佐賀さんが僕とレジで顔を合わせたのは本当のことだ。健吾くんにばれても問題ないってことだろう。そう解釈しよう。
「うん、佐川さんにも内緒にしてもらったの。だって、健吾がほしがっているものを買ったんだって気付かれたら、いやだったの」
　――なんでそこでそうのろけるんだよ！

急におへそのあたりが痒くなった。
一切本を買わずに店を出たなんて、ばらさない方がいいのだろう。
「だから、本を買えなくって、挨拶だけして出ちゃったの。でも他の本屋さんに行った時にはもう雑誌なくて、あの時買っておけばよかったって、今後悔していたの。佐川さんの顔見ていて、つい思い出してしまったんです。ごめんなさい。ごめんなさい、健吾」
最初の「ごめんなさい」は僕あてだった。
「ったく、隠し事するなよな。佐川さん、すんません。こいつが邪魔したようで」
最後の「ごめんなさい」で機嫌を少し直したのかもしれない。健吾くんは生真面目に頭を下げた。
――健吾くん、なんで、「こいつ」って呼び捨てするんだろう。
急に一発、勝負したくなってきた。
ポケットを探り、外国のバスケットボール選手写真がくっついているバッチを取り出した。備えあれば憂いなし、ことわざは真面目に覚えておこう。

「これ、うちの店で配っていたものなんだ。佐賀さんが、一生懸命アメリカのバスケットボール関係の雑誌を探していたから、好きなのかなあって思ってたんだ。そうか、健吾くんにあげたかったんだね。ならこれ、あげるよ」
佐賀さんに向かってはっきりと、わかりやすく伝えた。　しっかと見返してきた目は郷土資料館の時とと同じだった。
「私は梨南ちゃんのことが、大嫌いだったんです」とはっきりと断言した時と同じりりしい表情だった。女子でそんなきりっとした目を見たのは初めてだった。今も、どきどきしている。
「え、佐川さん、いいんですか」
「いいよ。ごめん。俺が声かけたから佐賀さん買うことできなかったんだから」
白々しい言い訳だけど、健吾くんに信じこませることはできそうだった。
証拠に健吾くんは、僕が佐賀さんに渡したおまけのバッチを、ぐぐっと覗き込んでいる。早く渡せ、と言いたげだ。
「ありがとうございます。それなら健吾」
照れもしない。少なくとも僕にはそう見えた。佐賀さんは両手で貝殻のように丸く受け取り、じいっと見つめながら健吾くんにバッチを差し出した。胸元から花が開くような柔らかい手つきだった。健吾くんも目をそのままずうっと合わせたままで、
「佐賀、お前」
これだけつぶやき、指先でバッチを受け取った。お礼を言わなかった。
僕の方に向かい、「どうも、すげえうれしいです」　興奮を押し殺したような声で一礼した。本当は佐賀さんに言うのが筋だと思う。

「だから、健吾、もし青大附属と水鳥関係のことで、いろいろ問題あるようだったら、私、替わりにこっそり佐川さんにお手紙届けてあげるわ。私、毎週金曜がお稽古なの。駅前のバスに乗

るの」
　僕はすっかり取り残されたまま、ふたりが自転車を押しながら前で語り合うのを聞いていた。佐賀さんの目的は想像つかないわけじゃないけれど。もちろんこれで堂々と会う口実ができたわけだけど。しかも健吾くんには言い訳できるないようだけど。
　でも。
　――別に、お付きあいしててもいいけど。
　目の前で髪型をくるくる巻きにしている佐賀さんと、健吾くんの間に思いっきり自転車を突っ込んでやりたかった。
「ああ、そうだな。佐川さん。さっきの話なんだけど、あったかいとこでもう少し話、進めたいんですけど、『リーズン』の休憩所で少し、いいっすか」
　佐賀さんが振り向き、小首をかしげたところで、僕も頷いた。

　大型スーパー「リーズン」の中は僕たちと同い年くらいの中学生がたくさんたむろっていた。学生服にセーラー服といった、水鳥中学とほとんどデザインが変 わらない格好の連中が多い。もちろん青大附中の人たちもたくさんいた。みな昇りのエスカレーターに乗っていってしまう。大抵は男子だけ、女子だけの塊だっ た。男女二人組みの中学生というと、青大附中のブレザー制服姿の人ばっかりだった。
　僕がいなければ、今日も佐賀さんは健吾くんとふたりだったというわけだ。
「今日は、部活の練習とか、ないの」
「はい、練習したくても、部員が少ねえから」
　健吾くんは日焼けの消えない指先で、拳骨を作った。こぶしというのではなく、五人、と数えてそれっきり、という意味らしい。
「五人しかいないんだ。部員」
「パスとかシュートとか、あとは基本運動くらいしかできないっすよ。やっぱし、新入部員と、二年の追加入部者を集めねえと、きついです」
　そうだろう。二年生の先輩たちは何やってるんだろう。
「二年はみな、今の時期卒業式関連の手伝いとか、委員会活動に引っ張り出されてます。うちの学校の連中は卒業式そのものよりも、『卒業生を送る会』の方にばっかり力を入れるから、全く練習する時間がねえんです」
　――水鳥は反対なんだけどなあ。
　おとひっちゃんが頭を抱えて文句を言っていたっけ。卒業式の合奏や予行練習でしょっちゅう、運動部関連の連中が公式の休みを取って出て行くって。
「だから、今日は俺の判断で休みにしました。あんまり少なくて愚痴りあいになるのも、部の空気をにごらせるだけだし、第一、裏で悪口ばっか言っているのって最低野郎のすることだと俺は思います。正々堂々とののしっちまえばいいのに」
　――それができる環境ならね。
　　言い切ってしまえる健吾くんに僕は、気持ちいいものを感じていた。

　階段踊り場の椅子がまるまる空いていた。健吾くんは一度端に立ち、僕に真ん中の席を勧めてくれた。すごい。まだ一年なのに、大人みたいだ。
「ありがとう。健吾くんさすが、礼儀作法厳しいね」
　僕をちゃんと先輩扱いしてくれるなんて、すごい、本当にすごい。
「うちの学校そういう礼儀だけはすっげえうるせえから」
「私は？」
　あどけなく佐賀さんが僕の後ろで声をかけてきた。きつくにらみ返した健吾くんは、
「お前は、俺の側でしゃがんでろ」
「私もおすわりしたいわ」

「しょうがねえなあ」
　さっさと僕の隣りに腰を下ろした。頬に手を当て、
「寒かったわ」
とつぶやいた。

　いすの後ろ側に男性用トイレが位置している。いかにも従業員、といった風の人たちが入れ代わり立ち代り現れる以外は静かだった。
「ここだったらよその連中にばれねえで話ができるんです。先輩に教えてもらいました」
「先輩って、立村に？」
「じゃなくて、その上の委員長です」
　あっさり答えたところに、健吾くんと立村くんとの溝を感じた。一応、「立村さん」と呼んでいるし、なんだかんだいって勝負はついたらしいとは聞いている。でも、心底尊敬しているわけではないだろう。「先輩」と「さん」の間にはかなり大きな違いがありそうだ。
「卒業する三年の先輩なんですけど、とにかくすごい人なんです。成績もいいし、運動も抜群だし、男気があって完璧な委員長、って人でした。俺はああいう委 員長になりたいと思いますよ。たぶん、本条先輩……その人の名前なんですけど……こういう時一刀両断で片をつけてくれたんじゃねえかなあ」
　僕を通り過ぎるような視線で、佐賀さんに相槌を求める健吾くん。
　このふたり、いつものことらしい。佐賀さんも落ち着いて、うんと頷いていた。
「確かに、今は大変そうだね、健吾くんもバスケ部とかけもってたら大変だよね」
「あと、学内のスポーツ壁新聞もやってるから」
　初耳だ。佐賀さんが補足説明してくれた。
「毎週、運動部の試合関係の情報を、新井林くんと私とで集めて、写真を取って壁に貼るようにしているんです。去年の十一月から、新井林くんがひとりでやり始めて、いつのまにか学校の先生たちも応援してくれるようになったんです」
「四月からは、他の委員会や文化部の連中にも手伝ってもらう予定なんだ」
　少し反り返った。自慢したいんだろう、わかる、わかる。こういう時の相槌は決まっている。
「すごいなあ、健吾くん。うちの学校でそこまで情熱かけてやる奴、なかなかいないよ。ううんと、おとひっちゃんも頑張るほうだけど、大抵顰蹙かってやめちゃってる」
　しまった、口を滑らした。佐賀さんがまた小首をかしげたけれど、健吾くんは意に介さないように話を続けた。
「今の二年の裏事情はいろいろありますが、ちょっとなあって、一年の立場からしてむかむかしてくるってのが、あります」
「それまたどうして」
　合いの手がうまく入った。健吾くんはさらに背筋をピンと伸ばした。もともと背が僕の頭幅くらい高いんだから、少し猫背になってくれてもいいんだけど。
「直接関崎さんに連絡するべきかどうか判断がつかなかったんですけど」

派手にくしゃみをして、唾を撒き散らした後、健吾くんは鼻をすすった。
佐賀さんは僕の方に身を寄せる格好で、健吾くんを見つめていた。
「この前、俺たちんところに佐川さんたちが来てくれた時、俺、言ったと思うんですね。杉本が四月以降、評議委員から降ろされるから、これからは問題がないという話。覚えてますか」
もちろん忘れるものか。行きの自転車漕いでいる間、全部さらっておいた。
「俺もてっきりそれで決まりだと思ってました。ところが、三日前だったか、こいつが」
――だから、こいつって呼ぶのはやめろって。
佐賀さんがまた頷いた。
「上の先輩を通して、交流関係についての怖い情報を仕入れてきたんですよ。まさか、裏でこういう手を使うなんて思ってもみねかったから」
「あの、誰が？」
「うちの委員長です」
健吾くんは拳固を片手でくるむようにして、一回「あ」と天井につぶやいた。その後顔の筋肉を引き締めて、
「立村さんは評議委員会に害虫がいるのはまずいってことで外した。それは確かです。けど、交流関係に関しての別グループを四月以降こしらえようということで、生徒会や先生たちに話を持ちかけて、三月末をめどに発足させようとしてます」
「ほっそく？」
ごめん。僕は本屋の息子でありながら、漢字があんまり読めるほうでない。
「評議以外の連中を集めて、水鳥中学さんと交流会を始めようって腹です。委員会中心主義を壊す代わりに、委員会とは関係のないグループを結成して、活動しようってことです」
――つまりなにか。杉本さんはまさか。
評議から降ろされた場合の逃げ場所ってことだろうか。僕は用心深く尋ねた。
「杉本さんが、その中に入りそうな気配なのかなあ」
「ご名答です。佐川さん」
健吾くんは一度手を打って僕を人差し指で指し、また大きなため息を付いた。
「杉本を降ろすと決めたと、立村さんが話した時に、それっぽいことは言われていた可能性あります。でも俺、そんなこまいこと覚えてりゃしねえし。評議から 追い出したからといって、立村さんが杉本のことを目かけないことはねえだろうし、ひとつの手としてはその通りかもしれない、っていう気はしました。無理や り押し込むことにはなるでしょうが、評議としては安泰です。けど、ただ」
毒々しい葉牡丹の葉に顔をもみくちゃにされる。
僕の想像が間違ってなければ、恐ろしい結論になりそうだ。
「たぶん、立村さんは杉本を四月以降も、水鳥中学関係の交流メンバーに置く可能性、大です。評議委員会としての活動ももちろんやるだろうし、他の委員会や 部活も相当力入れてくるとは思うけど、でも、要に杉本を置こうということは、計算済みなんじゃねえでしょうか。今、佐賀と話してて、俺、そう思いました」

　僕が口にしたのは、思いっきり本音だった。
「それって、まずいよ」
「そうっすね、絶対これは、まずいです」
　健吾くんと佐賀さんがまた目と目を合わせて、お互い頷き合っていた。

　佐賀さんが聞きつけてきたらしい。だったらもっと佐賀さんに話を振ればいいのに。なんか健吾くんは、自分ひとりで話すことにこだわっている。佐賀さんにいいとこ見せたいんだろう。気持ちはよくわかるけど、ものたりない。
「今、あんまり詳しいことは話せませんけど、二年の男子女子の間で、わけのわかんねえことが起こっているみたいなんですよ。三年間持ち上がりだった評議委員をひとり入れ替えるとか入れ替えないとかで、騒いでいるっていうか」
「杉本さんの時みたく？」
「あれは立村さんとうちの担任が決めたことなんで別です。けど、今回は人間関係のごたごたがからんで、二年女子のひとりが評議を降りたがっているみたいなんで、な、佐賀、そうだろ？」
　やっと佐賀さんが話してくれる、と思いきや健吾くんはすぐに言いなおした。
「いや、俺がしゃべる、お前は黙ってろ。で、たまたま新しく入る予定の女子評議の先輩からその辺の事情を聞きだしたってことです」
「新しく入るって、まだ三月だよ。まだ選ばれてないのにさ」
「前もって誰を選ぶか決めておかないとまずいらしいです。うちのクラスはとにかく杉本でなければ誰でもいいと思ってますが」
　ちらっと佐賀さんを僕は覗き込んでみた。
　その辺、反応をしりたかった。何も身動きせず、おだやかに首をかしげて聞いていた。
「じゃあ、新しい評議委員が入ってくるから、みんな怒っているんだね」
　うちの委員会だったらそんなこともないだろうけれど、青大附中の場合は簡単にいかないらしい。評議委員会は一種の部活なんだろう。三年になって新しい部 員が、人間関係のごたごたをひっくるめて入ってくるとなったら、そりゃあ動揺するだろう。また立村も、「評議委員長」というより、評議委員会部の部長と いった方が近い。大変だ。
「それで今、立村さんが案を出していて、降りた評議委員女子を例の、交流会専門の部活動かサークルか、何かに入ってもらうことを進めているらしいです。水面下って言ってましたけどばればれっすよ。な、佐賀」
　こっくり頷くだけなのがもったいない。佐賀さん、もっとしゃべろうよ。
「ははあ、そうか。交流会専用のグループなんだ。その中に、評議委員経験者が入ったら、動きいいもんね。それに三年だからサークル長か部長か、そういうところにも置いておけるもんね」
　おとひっちゃんの前ではそこまでしゃべらないだろう。つい健吾君の前では気が緩んでしまった。驚いている。うっかり健吾くんから水鳥中学生徒会にばれたらまずい。口にチャックをかけなおそう。
「すげえっすね。どうしてそこまでわかるんですか。佐川さん」

「ううん、なんとなくさ」
　ごまかして、しばらく健吾くんに演説させるつもりだった。おとひっちゃんにだったらそれで通じる。けど健吾くんにはだめだった。もっと聞きたそうな顔をしていた。肩越しに佐賀さんも僕の目をじっと見詰め、にこっと笑っている。しゃべるしかないじゃないか。
「俺、ガキのころからそうなんだけど、何となくこの人はこう思ってるんじゃないかとか、あいつは何かたくらんでるんじゃないかとか、そういうことがわかる んだ。たぶん気のせいだよなって大抵は流すんだけど、あとで確認するとほとんど当たってるんだ。具体的にどういうのって言えないけど、予知能力がすっごく あるっていうのかなあ。今も、健吾くんから杉本さんについての話を聞かせてもらったけど、やっぱりいつものように、こうなるんじゃないか、ああなるんじゃ ないかってことが浮かぶんだ。今までの例からして、たぶん当たるんじゃないかなあと思うんだ。でも、そういうのって怪しいから俺は言わないけどね」
「なんとなく、わかるって」
　隣りで佐賀さんが小さくつぶやいた。健吾くんは聞きとがめずに真剣なまなざしで見入っていた。
「うん、空気が読めちゃうっていうのかな。この調子でいくと、たぶん杉本さんはずかずかうちの中学に乗り込んでくるだろうし、大騒ぎになるんじゃないかっ て気がする。俺の勘だけどね。おとひっちゃんのことを気に入っているのはわかるし、この前佐賀さんが言ってたように、逆恨みされてる可能性もあるよね。で も、どれもこれもおとひっちゃんには関係ないよ。水鳥中学にも関係ないし。迷惑かける人には来てほしくないってのが、おとひっちゃんの本音だと思うんだ」
「やはりですか」
　すっかり健吾くんは、僕の言葉を鵜呑みにしている。想像しただけだってのに。意外と単純だ。おとひっちゃんレベルなわけないよな、と改めて思った。
「関崎さんは、あの女を寄せ付けたくないってわけですね」
「当たり前だよ。その証拠にさ、あの葉牡丹、すぐに別の女子にあげちゃったよ！」
　厳密に言えば、僕が、だが。
「絶対内緒にしてほしいんだけど、おとひっちゃん、あの毒々しい花見るのも触るのもいやそうだったんだ。真面目な奴だから、たぶん俺がいなければ持って 帰ったと思うよ。でも、次の日、期末試験前だったのに熱出してあいつ寝込みやがったんだ。ほんっと、無理してたんだよ、きっと、杉本さんのことを思い出し て具合悪くなったんだなって俺は思ったよ」
「そりゃそうだ。よくわかる」
　健吾くんは頷いた。さすがに佐賀さんは身動きしない。そりゃそうだ。
「たぶん、青大附中と交流会をするつもりはあるだろうし、健吾くんの率いるバスケ部との練習試合関係は進めてくれると思うんだ。ただ、その後、立村委員長 が理想とするようなこと、できるかどうかは難しいな。せっかく準備を整えても、きっと、あの人がつぶしそうな気、するから」
　あの人、とは立村委員長のことではない。

「そうっすね。だからなんとかしたいんですよ。俺としても」
　続けて、咳払いひとつ。
「で、もし佐川さんがうちの立村さんと同じ立場だったとしたら、どう処理しますか」
　――委員長だったらってことかな。
　難しい要求だ。でも、答えたい。答えなくちゃ、チャンスがなくなる。
　なんのチャンスだかわかんないけど、背をつつかれる気持ちで僕は答えた。
「ほんっとこれは仮だよ。仮に、俺が評議委員長だったとしたら」
　細かい突っ込みはなしに願いたい。直感に任せて僕は声を潜めた。
「まず、学校内で杉本さんに何か恥をかかせる事件を起こす。いや、いじめとかいやがらせとか、そういうことをしてはいけないよね。健吾くんや佐賀さんの話 だと、ネタは一杯あるみたいだから、そのことを、杉本さんが一番好きな人の前で話すんだ。この前健吾くんがしてくれたような感じのことをさ。けど、あれだ とまだ陰口にしかなんないよ」
　気まずそうに口をゆがめ、ちっと舌打ちする健吾くん。こういうとこ見ると、僕は先輩だっていばりたくなる。調子に乗るってこのことだ。
「だから、誰かと組んで、おとひっちゃんの前で、今まで杉本さんがどういうことをしてきたのか、佐賀さんをいじめて苦しめてきたのかってことを、全部話し てしまえばいいんだよ。佐賀さん、ほんとひどい目にあったんだよなあ。この前健吾くんが話してくれたことが全て事実だとすれば」
「事実です、あったりまえだっての」
　最後の一言は投げやりだけど、まあいいか。
「それだったらなおさらだよ。おとひっちゃんも単純だから、否定できない証拠とか、出来事とか、あと本人が図星さされてどきまきしたところなんか見たら、 信じるよ。おとひっちゃんはいじめをする奴最低だって思っているからなおさらね。そんな子、誰が好きになるかって思うよ。どんなに葉牡丹押し付けられたっ てね」
「けどそれは、汚ねえ気が」
　言いかけたのを、僕は遮った。
「嘘を並べるんじゃないよ。杉本さんを吊るし上げるってわけじゃないよ。うーん、うまく言えないんだけどさ。例えばよく学校のいじめ問題を討論したりする 時に、どこかの学校で起こった例をあげたりするだろ？　ついうっかり先輩に礼するのを忘れたら、体育館の裏に引っ張り込まれて蹴りいれられて、学校行くの よすようになって、登校拒否になってって話」
　この前道徳の授業でやっていたことを、適当に言った。よく覚えていたもんだ。
「いかにも偶然、って顔で話すんだ。『どっかの学校であったらしいけど、友だちを家来にしてずうっとひっぱりまわしてきた女子が、惚れてた男子を取られた ことを逆恨みして、クラス一丸無視させたって。でも、やっぱり正義は勝つんだね。その女子反対に無視されちゃって、学校追い出されるんだってさ』とか。さ りげなくやるのがコツだよ。たぶんおとひっちゃん相槌打つよ。『それは当然だな、やられて当然だ』って。杉本さんだっていたたまれないよな。本当のことを 自分の好きな男子の前でえんえん並べられているんだから。そんなところ、普通だったらい

たくないよな。すぐに逃げるよ、逃げてそれっきりになるよ。だって 本当のことなんだから逆恨みするしかできないし、したってみんな無視するだろ？」
「そんなことで動揺するような女か、あれが」
　また吐き出すように言う健吾くん。
「わかんないよ。そこまで根性座っている女子だったら俺は別のこと考えるけど、うちの学校の女子を見る限り、これでめげなかった人いないな。あ、この方法 ね、小学校五年の時にクラスのいじめが起こった時、打った手なんだ。おとひっちゃん、正義でもって女子たちを怒鳴って、『卑怯なことするなんて、最低 だ！』ってわめいたんだけど、全然効果なくて、かえっていやみ言われただけだったんだ。おとひっちゃんかわいそうだったから、俺、こっそり、やったんよ。 女子たちが集まっているとこで、なーんも知らない振りして、今言ったようなことを。夏休みの学校合宿の時にね」
　僕からしたら、誰が誰のことを好きだとか、そんなのは丸見えだった。
　いじめのボスらしい女子が、別の男子のことを好きだという噂を聞いて、僕は手を打った。その子の目の前でその男子とトランプやりながら、奴が軽蔑するタ イプの人間について語ってもらった。どんなことだったかは覚えていない。相手のことなんて無視してとことんしゃべっただけだ。その女子みたいなことをする 奴は大嫌い、という言葉を引っ張り出したとたん、くだんの女子は泣きべそかいて部屋を出ていってしまった。
　もちろんその後、いじめられていた子への八つ当たりもあったらしいけれど、その点はすでに男子たちがおとひっちゃんを守り立てるべく一丸となっていたの で、あっさりつぶれた。男子だっていざとなったら結束固いのだ。女子が男子に守ってほしいんだったら、さっきたんみたく思いやりある態度をしないと駄目だ と思う。杉本さんがもし同じクラスにいたら、男子一同、冷たく無視していただろうし、佐賀さんを全力で守ってあげただろう。
　健吾くんが佐賀さんを守りたいのだって同じだ。
「佐川さん、それってできることなんですか。俺にはちょっとすごすぎてできねえな」
「でも、いざとなったらひとつの方法として覚えておくというかもしれないよ」
　僕は、佐賀さんを除き見た。僕の顔をじっと見つめているけれど、目をそらさない。あまり見つめていると健吾くんに「変」と思われるんじゃないかな。うっかり、疑われたりなんかしたら大変だ。うちの本屋に来てもらえなくなる。
「ひとつの方法ですか。うちの立村さんにも、そのくらいの頭があればなあ」
　――頭というよりも、好みが変なんだよ。
　たぶん、葉牡丹を愛する性格なんだろう。

　しばらく僕は健吾くんを相手に、水鳥中学の事情について説明していた。
　相変わらず、
「関崎さん、すごいっすよ」
　の連呼。体育館三十周持久走でおとひっちゃんに負けたことが、相当効いたらしい。
「本当にあいついい奴だよ。」

　僕も繰り返した。たぶん健吾くんは、運動能力の長けている奴には無条件で尊敬の念を抱いてしまう性格らしい。けど、僕はどうみたって運動神経いい方じゃない。さらにいうなら、
「佐川さん、青大附高受ける気ないんですか」
と真剣な目で尋ねられた時も、どう答えてよいかわからなかった。
　だって、僕の第一志望は、青潟工業か商業なんだから。
　職業科を選ぶと決めたのは早い。おとひっちゃんにも言ったけど、僕はその点、自分の成績をよく理解しているつもりだ。ちゃんと就職できる学校に行きたい。早く一人暮らし、したい。
　でも、健吾くんや佐賀さんは、エリート中学青大附属の生徒だ。
　当然、エスカレーター式に高校へ進学するだろうし、たぶん大学にも行っちゃうだろう。
　――頭のレベル低いなんて、言われないだろな。
　そんな気持ちが掠めて、つい、青潟工専を目指していると、大嘘言いたくなってしまったことを告白しちゃおう。
「ないよ。俺、成績は悪いんだ。ちゃんと就職できる商業高校か工業高校に進んで、早く一人暮らしするんだ。親から離れて、自分で稼ぎたいんだ」
　軽蔑するならしろっていうんだ。と開き直った気持ちがないともいえない。次の瞬間、佐賀さんがはあ、とあきらめのため息を吐くんじゃないか、それだけが心配だった。
「自分で、働きたいんですか」
　身をかがめるようにして、かすかに聞こえた。健吾くんも同じくらい身をかがめた。ふたりにはさまれて、真剣に聞き入られている。
「うん、いつまでも親の金で学校に行くのはいやなんだ。だからだよ」
　ほおっとため息が洩れた。緊張してたのかもしれない。次にまた、はあっと息が。健吾くんだった。
「独立、かあ」
　目の前の階段を昇り目線で追いながら、健吾くんは脱力した。
「俺も、早く家を出てえよなあ。わかります、その気持ち」
　健吾くんはともかく、佐賀さんだ、問題は。

　ずうっと佐賀さんの気配をうかがっていたけど、特に何か、あったわけではなかった。
　今日、もう少し話ができると思ったのに、結局は健吾くんとだけだった。
　もっとも、実にはなった。配達しまくったかいはあった。
　いくら立村委員長が杉本さんのことをめんこがっているからといって、まさか四月以降も交流関係に参加させるなんて想像もしていなかった。
　もしそうなったらおとひっちゃん、立ち直れなくなるに決まっている。やっと逃れられる、そう思っているだろうに。まさかのまさかだ。
　健吾くんと佐賀さんが、雪のぐちゃぐちゃした道を自転車押しながら帰っていくのを見送り、僕はあらためてお金の袋をジャンバー中に納めた。落としてな い。大丈夫だ。これからもう一走りしなくちゃいけない。大至急。母さんがうるさいこと聞いてこないうちに、総田に電話しない

とだめだ。
　おとひっちゃんじゃあ、だめだ。

　ズボンの裾に雪で溶かした泥の跳ね返りがいっぱいだった。あとで母さんに、洗濯に手間がかかるって怒られるだろう。さっさと着替えてあったかくした。まだ夕ごはんの準備はできていないようだった。僕は素早く電話前に陣取り、暗誦している電話番号を打ち込んだ。
　いったん総田のお母さんが出て、すぐに本人に代わってもらった。
「おう、なんだ。また耳より情報か」
「耳よりどころじゃないって。もう、大事件大事件」
　手短に僕は、「杉本さん四月以降も交流会に出没か？」の顛末を説明した。

　電話の向こうは僕の話を黙って聞いていた。相槌ひとつ打たないってことは、寝ているか真面目に聞いているか、それとも何か食っているかのどっちかだろう。
「な、総田、耳よりだろ？」
「お前、それどこで聞いた」
「たまたまね」
　言葉を濁した。健吾くんの立場が青大附中の評議委員会で悪くなるのは避けたかった。
「まったくどこで情報仕入れてくるんだか、すげえ奴だ。で、耳より情報を関崎は知っているのか？　知ってるわけねえよなあ。でなければあんなに情熱的に、交流会関係に打ち込むわけねえよなあ」
　この辺は答えに困った。断言できない。青大附中の立村評議委員長とは、かなりいい付き合いをしているようだし、多少は裏組織の話をしていないとも限らな い。でも、四月以降また、「葉牡丹の彼女」に追いかけられるとは思っていないんじゃないだろうか。おとひっちゃんがそれを望んでいない限り。
「あのさ、総田。おとひっちゃん、そんなに交流会に関してあいつ、燃えてるの」
「ああ、すげえぞ。ちくしょう、どうせ俺は万年二番さ。おおいばりであいつ、春休み中の交流会準備に燃えてるぜ」
　知らなかった。おとひっちゃんは僕に一言も話してくれなかった。
　お互い様だ。総田に聞く。
「なんだよ、春休みの交流会準備って」
「お前あいつから聞いてねえのかよ、めっずらしいなあ」
　むかっとくるけど本当のことだ。しかたなく頷く。健吾くんとおんなじで、話相手がもの知らないとなると、ふんぞり返ってしゃべりだすのが総田のくせだ。
「しかたねえなあ。つまりだ。四月になっちまったらとにかく忙しいだろ。入学関連の行事もてんこもりだし。俺もそろそろ手抜きたい時期だし。だったらまず 三月末に、うちの学校で『この前お招きいただきありがとうございました』風の会を開こうってことになったんだ。すでに萩野先生の許可ももらってる。俺が交 渉した。萩野先生が立ち会うってことで、問題なくＯＫだ。

ただ、附中と違うのは、あまり軽いのりではできないってことだな。関崎が仕切るんだから当然か」
「軽いのり、でもなかったけどなあ」
　おとひっちゃんが立村の手玉に取られたあの場面、軽くはない。
「俺が今、萩野先生と案の交渉に入っているとこなんだけどな。関崎の奴、また難しいテーマでもって討論したがってるんだ。座談会の二の舞さ。『校則につい て』とか『いじめについて』とか、『制服の自由化』とか、そのあたりだろうなあ。青大附中にそのあたり、テーマになるものの資料を送りつけて、あらためて 意見をまとめてもらって議論しようと、そんなところだ」
　――おとひっちゃん、こりてないのかよ。
　テストでは同じ間違いを決してしないおとひっちゃんなのに、こういうことについては、学習能力ない。
「なんでおとひっちゃんって、学校関係のネタが好きなのかなあ。道徳の教科書からきっと抜き出してきたんだね」
　ふとこぼれた言葉に真実があるって本当だ。総田にせよ、佐賀さんにせよ、どうしてこんなに僕の本音を引っ張り出すことができるんだろう。

　さっき、佐賀さんにも健吾くんにも話した案。まだあの時は具体的になにすればよいかが思いつかなかった。生煮えのことしか話せなかった。
　――杉本さんに、おとひっちゃんの前で思いっきり事実でもって恥をかかせて、もう二度と水鳥中学の交流会関連には参加させられないようにすること。
　――否定できない事実はちゃんとあるんだ。
　――佐賀さんを無視していじめているってこと。男子たちも、担任の先生も認めている。
　――そのことをおとひっちゃんは知っていると思うけど、たぶんここまですごい奴だとは思っていないはずだよね。
　おとひっちゃんは健吾くんの言葉を鵜呑みにしてはいないだろう。葉牡丹を押し付けられたとはいえ、女子に好きになってもらえたなんて、めったにないことだ。そのことは素直に嬉しいだろう。できればさっきたんだったらなあ、と夢見ているだろうけれども。
　でも、同情と、本音とは違う。
　早く縁を切りたいと思っても、あの杉本さんという子、ピラニアみたいに離れないだろう。佐賀さんのことをいじめつづけていることからしてもそうだ。七年 間、健吾くんをはじめ男子連中に迷惑をかけてきたことだってそうだ。とにかく、しつこすぎる。逆恨みするかもしれない。おとひっちゃんがどうしてもお付き あいできない、と言おうものなら、水鳥中学生徒会に対して思いっきり復讐するかもしれない。
　佐賀さんはその被害者だ。誰もが話を聞いたらそう思うだろう。
　でも、男子の悲しさで、女子を振るということになったら、どうしても悪役にならざるをえない。ちっともおとひっちゃんは悪くなくて、杉本さんの強引なや りかたに問題があったにも関わらず、悪口言われるのはおとひっちゃんになってしまう。「あの堅物関崎副会長が、せっかく

告白してくれた女子を振るなんて、 思い上がりもいいとこだわ」とささやかれるだろう。言い訳をしないおとひっちゃんにとって、そういう悪口がどれだけ打撃か、想像はつく。
　ならば、杉本さんがどういう人であるかを、全部おとひっちゃんおよび周りの人たちに知ってもらって、納得させた方がいいんじゃないだろうか。
　あらためて判断してもらった方がいいんじゃないだろうか。
　本当はいじめばかりして、人を傷つけて、迷惑ばかりかけてきた最低の女子であることを、たっぷり見せてもらったほうがいいんじゃないだろうか。
　おとひっちゃんが振るにふさわしい理由を、水鳥中学生徒会の連中にも証明してやれば、みな賛成するだろうし、杉本さんを一切近づけないですむ。

　さっきたんと語り合いたくてならなかったおとひっちゃんに、僕は自分の意志で、できることをしたつもりだった。ほんと、おとひっちゃんのために、だった。　けど、さっきたんは相変わらず僕と仲良しでいたいみたいだった。
　おとひっちゃんとはちょこっとだけ丁寧に話をするようになったけれども、僕ほどに接近はしない。ぞうきんを同じバケツに入れても、きっと指は触れさせないだろう。
　それが現実なんだと思う。どんなにおとひっちゃんが好きでも、さっきたんの気持ちは変わらないんだ。
　もし、おとひっちゃんが杉本さんのことを本気で好きになったんだったら、あきらめて僕も応援するだろう。いやいやながら、葉牡丹の生育記録を連絡してあげてもいい。おとひっちゃんをなだめすかせて交流会に参加させたっていい。いくらだってできる。
　でも、おとひっちゃんはすでに、はっきりと「杉本さんは嫌い」と意思表示している。
　それが現実なんだ。
　僕はおとひっちゃんを、「振られたかわいそうな男子」にはしたくない。
　また、「嫌われて当然の女子に付きまとわれる哀れな奴」にもしたくない。
　そんな「情けない奴の親友」でもありたくない。

　おとひっちゃんが姑息な女子を徹底して嫌っていると、本人および他の連中の前ではっきり口にすれば完璧だ。
　杉本さんは相当根性腐っているように思うけれども、やっぱり女子だ。それなりに傷ついて、もう評議委員はおろか、交流会関連にも参加する気をなくすだろう。
　――いじめを平気でやらかし、一般人に危害を加える女子を、水鳥中学生徒会一同は拒絶する。今後、一切、来てほしくない。
　暗にひそませたメッセージを、総田を通じて伝えることができればよい。総田も杉本さんに対してだけは、当然だと感じるだろう。

　交流を進めたがっている青大附中評議委員長たる立村も考えるだろう。お気に入りの女子か、

それとも評議委員会か。ちゃんとした男子だったら、ためらうこ となく委員会最優先を選ぶだろうし、水鳥中学生徒会が嫌がっていることを無理やりすすめようとは思わないだろう。おとひっちゃんが苦しんでいることがわか れば、泣く泣く杉本さんをひっこめるだろう。

おとひっちゃんにも嫌われたかわいそうな杉本さんを、もしかしたら慰めるかもしれない。佐賀さんの話によると、杉本さんは相変わらず立村に対しても性格 の悪い行動を見せ付けているらしい。それでも可愛がっているっていうんだから、きっとお気に入り度は本物だ。そっちで面倒を見るなりすればいい。知ったこ とじゃない。水鳥中学に関係ないところでなら、何したってかまわない。

――佐賀さんを無視するなんて、最低だ。

もうひとつ、店から外国のバスケ関係付録をくすねておこうと決めた。

今度佐賀さんが来た時に渡そう。

――佐賀さんの電話番号って何番だっけ！

肝心要なことを忘れていた。

ほんとは、一番最初に確認したかったことなのに。

待ちぼうけはまだまだ続くってことだ。

―― こんな奴、どこが「天才参謀」だって！

　僕がもっと頭よくて、青大附属に通えるような奴だったら。
　今回に限っては僕の成績が悪いことを、いやって程思い知らされた。
　健吾くんや佐賀さんが僕を軽蔑したようなまなざしを投げつけたわけじゃない。かえって尊敬してくれたようなこと、言ってくれた。
　でも、佐賀さんはどう思ったんだろう。なんとなく、嫌いになられたわけではなさそうだけれど。
　青大附属高校にあのふたりはストレートで進むんだろうし、もしかしたらおとひっちゃんも一緒に行くかもしれない。でも、僕はやっぱり、無理だ。ものすごく勉強して、青潟工専に受かったとしても、どうしようもない。
　――どうしようもないのかなあ。
　水鳥中学生徒会で行われる予定の交流会……厳密には「交流準備会」……は、非公式ながらも先生たちの許可を得て、来週の土曜日午後に開催決定した。おとひっちゃんと総田ががんばって先生たちをまるめこんだ、もとい説得した努力と根性の結果だ。
「今回はあくまでも、『準備』なんだってことを強調しといたぜ」
　総田はにんまり笑いつつ、僕に予定の書かれたプリントを渡してくれた。
「正式に交流会が動き出すのは四月以降ってこと。関崎の奴、一刻も早く開きたがっていたけどな、そうそう簡単に、忙しい時にできるかって。卒業式とかいろ いろあるんだぜ。まあ、来週の土曜だったら、教室もきれいだし、そんなに大騒ぎしなくても青大附中のみなみなさまをお招きできるんでないかと、思ったわけ だ」
「ずいぶんあっさり決まったよね」
　早い展開にびっくりした。いろいろ裏に手を回さないと交流会なんて出来ないと思っていたからだった。行事なれしている青大附中だったらともかく、公立の水鳥中学でそんなこと、時間かかっていつのまにか卒業なんてことにならないだろうか。心配していたのだ。
「だからだ、俺が『交流準備』ってことにこだわったのはな、教師連中にあまり重たいこと考えさせたくなかったってわけさ。だろ？　最初は軽い気持ちで教室を貸してもらって、先生にくっついてもらって学級会みたいなことをやろう、ってことを強調したわけだ」
「ああ、そっか。小学校の時やった『おたのしみ会』みたいになんだ」
　夏休み、冬休み、春休み、それぞれ直前に、教室を使って「お楽しみ会」を各クラスで行うのが常だった。転校することに決まった奴がいたら、土曜の放課後を利用してよく、「お別れ会」とかを行ったりした。延長上と考えれば、納得だろう。
「けど、先生たちはなんも言わなかったのか？」
「だから、一応、議論するテーマは決めているぜ。学校祭以来、『校則』『いじめ』あたりの問題を熱く語ってもらえればいいだろ？　関崎が向こうの委員長に連絡して、簡単に意見を集めてもらうようにしているらしいけど、そんなのどうだっていいだろ」

――おとひっちゃんのことだ、本気で議論戦わせようと思っているよな。
何度やっても無駄だってわかっているのに、やめることできないおとひっちゃんの性格。
こっそりあきれるほかない。
「で、水鳥の生徒会連中はみんな参加するんだろう？」
「そりゃあなあ。関崎言うには、二年の代表が六人くらい来るって言ってたぞ」
――二年だけかあ。
何期待していたんだか。話を聞き流しながら、僕はこの前佐賀さんと会ってから、何日たったかを数えていた。もう、一週間近く経った。うちの店を他人の振 りして覗き込んだり、郷土資料館のあたりを遠回りしてみたり、この近辺のエレクトーン教室ってどこだろうと電話帳で調べてみたりとか、僕の思い当たること はすべてしたのに、全く収穫なし。一番いいのは総田かおとひっちゃんに頼んで、健吾くんの電話番号を聞きだしてもらうことだろう。
健吾くんには内緒で来てくれたんだから、僕はできれば佐賀さんとふたりっきりで話をすべきだと思っていた。
「その六人って、面子どうなってるのかなあ」
「知らねえ。その辺はみな関崎が把握してるぜ。俺は内川会長と一緒に、当日どんなテーマを振るかを考えてるとこ。ほら、青大附中の評議委員会ってかなり芸 人が多いとこでな、毎年冬になると、ビデオでドラマ仕立ての演劇を撮って自己満足するんだと。ほら、『奇岩城』だったか。怪盗ルパンの話なんかも、無声映 画っていうのかな、ああいう感じでこしらえてたぜ」
「無声映画？」
古すぎる。イメージ沸かない。総田は何気なく博学だ。
「もちろん台詞はちゃんとしゃべっているんだけどな、途中経過とか、あらすじとかを、話の途中に文字で流すんだ。紙に書いてあったものを、カメラで少しずつずらしていくってやりかたでさあ。いわゆる紙芝居感覚。器用なことするよな」
やっぱりよくわからない。青大附中の評議委員って、遊び人が多いんだろう。
――「彦一とんち話」を押し付けるうちの学校とは違うよなあ。
中一の時、学校祭三日目に無理やり見せられたつまらない演劇を思い出した。臨時演劇部といった形で先生たちがキャストを集め、上演したという代物だった。
「おもしろかったの、それ」
「おもしろいというか、出来は悪くない。が、しかし、爆笑した」
どこで爆笑したのかは、謎のまま総田は話を逸らした。
「でな、顧問の萩野先生に話したんだ。青大附中って変人が多いんですねってな。そうしたら、水鳥中学でも同じことをやったらどうかとか言われてなあ。冗談 じゃねえよ、どうせうちの学校だったら演劇やるったって、教師連中が喜びそうで生徒がふて寝ってやつばっかりだろ。萩野先生も同じ。『学校のいじめ問題を テーマにした演劇脚本』とかを見繕ってやるよって。全く勘違いもいいとこだぜ」
――学校のいじめ問題、演劇、か。
網にかかった。言葉の魚はちゃんと捕獲して、水槽に泳がせとこう。

　交流準備会について、僕はおとひっちゃんから詳しいことをほとんど聞いていなかった。
　あまりにもだんまりだったので何気なく、
「この前総田がしゃべってたんだけどさ」
　と持ち出してみた。白状した。
「雅弘、ごめん。俺も隠す気はなかったんだけどな。とにかく先生と話をつけるのが大変だったんだ。悪かった」
　平謝りされても困るんだけど、まあいいや。僕は知らない振りして、とっくの昔に総田から得た情報をふんふんと聞いていた。
「そうなんだ。もし、俺、おとひっちゃんの役に立つようだったら手伝うよ」
　終りまで聞いた後、切り出した。もちろん満面の笑顔を忘れないでだ。
「雅弘、けど、お前最近、店の仕事忙しいんだろ？　水野さんが言ってたけど」
　――あれ、おとひっちゃんさっきたんと話なんかしてるんだ。
　これまた意外だ。隠していたくせに、何気なくぼろがでる。かわいそうだからその辺も知らん振りをしておいた。店の配達をこまめに手伝っていて忙しいのも ほんとのことだし、大抵は青大附中近辺までぐるっと一回りしてくるから時間がかかるのも否定できないことなんだから。父さんは「デート代稼ぎ」と信じ込ん でいるけれど。
「うん、でも、この一週間ずっとだったから、一日くらいは大丈夫だよ」
「ほんとか？　じゃあ、俺が萩野先生に頼んで、お前も参加できるように話してみる」
　みるみるうちにおとひっちゃんははりきりだした。声が花開くように華やいでいる。なんだ、おとひっちゃん僕にいてほしかったんじゃないか。
「けどさ、おとひっちゃん。誰が青大附中から来るか、もう名簿、出来てるんか」
「ああ、立村に連絡して名簿をもらったんだ。一応な」
　やはり、おとひっちゃんは立村とウマが合うらしい。総田の言う「うすらぼけ評議委員長」。やはり同類、感じるものがあるのだろう。
「二年が中心なんだろ」
　おとひっちゃんは黙った。
「一年も来るの」
　今度は僕の声が花開いた。まずい。笑いながらごまかした。
「ああ、来る」
　わかりやすい。しぼんでいる。肩がいっきにがくんと落ちたのがおかしい。一呼吸置いた後、僕は尋ねた。もしかしてと思ってたけど、やっぱりもしかしてだ。
「何人？」
「ふたり」
「まさか、来るのか、あの人」
　返事はないけど、言葉を飲み込んでいる様子ですべてが読み取れた。
　――そういうことか、おとひっちゃん相当まいってるな。

杉本さんとうとう、水鳥中学へ上陸するってことだ。
葉牡丹の生育状況および、おとひっちゃんの本心を確認しにだろうか。
「おとひっちゃん、具合悪くなってないか」
「悪くなってねえよ。そんな失礼なことするか」
――無理してるな。
つっこんでもしょうがないので僕は黙っていた。どんなに努力してもおとひっちゃんは杉本さんを好きになんてなれないだろう。それはすでにわかりきってる ことなのにだ。おとひっちゃんはいい奴だから、懸命にまだ考えているのだから。どうやったら杉本さんを傷つけないように断れるだろうって。
もし、相手がさっきたんだったら、とも思っているだろう。
「おとひっちゃん、大変だね」
アドバイスなんてしたらむくれられるのが目に見えているので、僕は同情だけにとどめておいた。

――葉牡丹を毟り取ってもう二度と水鳥中学の敷居をまたげないようにするにはどうすればいいか？
佐賀さんと健吾くんと話をした時も思ったことなんだけど、どうして僕は杉本さんにだけこうも露骨に、「嫌い」って感じるんだろうか。
もちろん好き嫌いというのは誰にでもあることだろう。いじめられたり、悪口言われたりとか、ちゃんと理由があって嫌うんだったら僕もこんなに悩まない。理由がないから変な気持ちになってしまう。
初めて目と目が合った時、佐賀さんにはいやな気持ちを感じなかった。
なのに、杉本さんに対しては、背筋がぞっとした。
もちろんおとひっちゃんに葉牡丹を渡していたのを見た時は、胃の中の珈琲を吐き出すんじゃないかと思うくらいだった。多少、僕に失礼なことを言っていた けれど……ふつう「葉牡丹」なんて名前、知らないと思うよ……、そのくらいのことは、他の女子だったら許していただろう。女子をこんなに嫌うなんて、初め てだった。
でも、杉本さんは少なくとも僕になにも、悪いことをしていない。
葉牡丹を奪い取ったことへの逆恨みがいつ来るかと心配していたけれど今のところは大丈夫そうだ。
僕の方が、杉本さんの見かけと雰囲気だけで思いっきり嫌っちゃっている、それだけだ。
しかも、それだけの理由で「杉本さんに徹底的恥をおとひっちゃんの前でかかせて交流会関連に一切タッチさせないようにする」なんて計画を立てているのだ。やめようとも思わずに。
――どうしてだろう。
僕もわからない。佐賀さんが僕と同じことを考えるのだったらまだわかる。健吾くんが復讐したくなるのだったら全く納得だ。けど、なんで一度しか会ったことのない女子に対してこんなことを思うのだろう。

　自分を弁護するわけじゃない。でも言わせてもらう。他の男子たちも、なんで杉本さんに対しては、ぞっとした顔を見せるのだろう。総田も、おとひっちゃん も。まあおとひっちゃんは葉牡丹を押し付けられた不幸な奴だからしかたないにしても、総田がなんで一目見るなり「とんでもない女」と言い切ってしまうのだ ろうか。　健吾くんや佐賀さんの話によれば、青大附中の他男子たちも同じらしい。
　共通する「むかつく」感情。どうしてだかわかんない。

　いらいらしてきて僕は、部屋にくすねてきた鈴蘭優のポスターを机から引っ張り出した。
　別に僕は鈴蘭優のファンなわけではない。
　ただ、髪型が佐賀さんに似ていた。それだけだ。本当に、それだけだ。
　顔は全く違うのに、髪型が同じなだけで、可愛いと思う自分がいる。
　――杉本さんと同じ髪型にしていたら、そう感じるのかなあ。
　想像しかけておえっときた。やっぱりこの髪型は、佐賀さんでないと似合わない。鈴蘭優よりもはるかに上手だと僕は思う。

　階段を昇る足音が聞こえた。みしみしするのは母さんの体重か。すぐに机へ鈴蘭優をしまいこんだ。
「雅弘、電話だよ、女の子から」
　返事せずに、僕は階段を駆け下りた。母さんが部屋にまだいるのが気になるが、気にしている暇なんてない。
「もしもし、佐賀さん？」
　受話器を握り締め、第一声。当たっていてよかった。外れてたら恥さらしだった。
「はい、あの、私です」
　かすかにささやく声に、僕は耳の形がつぶれるくらい受話器を押し付けた。
「私、今日、お店に寄ったんですけど、傘を忘れてきてしまったみたいなんです。今、駅前なんですけれど、傘、届いてませんか」
　――傘忘れたって？
　粉雪交じりの雨が降っていた。雪だけだったら、青潟の人たちは傘なんて使わない。僕もフードかぶって凌いだのに。
「店に寄ったっていつくらい？」
「はい、今日、学校休んで、エレクトーンのグレード試験受けに行ったんです。午前中に寄って、今、試験が終わって、今帰ろうとしたら傘忘れてきてたことに気が付いたんです」
「ちょっと待って」
　受話器をおっぽり出したまま、僕は店の中をぐるっと一回りして、レジの父さんにも一声かけて確認した。忘れ物の傘なんて届いてない、とのことだった。
「ごめん、ないよ。うちにはないみたいだ」
「そうですか……」

　沈んだ。雨に打たれて泣いちゃいそうな声だった。
「もしかして、佐賀さん、傘がないから困ってる？」
「はい、今、ものすごい雨で、雷も鳴ってて、どうしようと思って」
「この電話、どこからかけてるの？　ああ、駅か」
　佐賀さんは一拍置いて、
「駅の職業別電話帳をめくって、佐川書店を探して、見つけたんです」
　――やっぱり、僕の電話番号、覚えてなかったんだ。
　力が抜けそうだった。同時に空をぶっこわすような雷鳴が聞こえた。木造の僕のうちは雷なんて落ちたら完全に燃え尽きてしまいそうだった。電話の向こうで、きゃっと小さな悲鳴が聞こえた。佐賀さんが体を小さくしておびえている姿が目に浮かぶようだった。
「わかった、駅なんだよね、今から俺、傘持っていくから、待ってて」
　僕はコートのフードを被り、父さんのこうもり傘を一本持って玄関を飛び出した。三月なんて春じゃない。まだ冬だ。雨と雷と闇がセットで、もう夜だ。ほん とはまだ四時半くらいなのに。傘がなくて困っている友だちから連絡が入ったら、すぐに駆けつけるのが当然だ。変なこと、全然考えていやしない。

　思いっきり走ってきたのに、やっぱり濡れてしまった。分厚いコートなのに脳天へ染み込む冷たさ。髪の毛だけはおかしくなってないだろう。フードを外し、 改札口と公衆電話コーナーを交互に見た。なかなか見つからずなんどもぐるぐる見渡しているうちに、お辞儀をする人を発見。平安朝の人みたいな、長い髪をの ばしたまんまの佐賀さんだった。
　薄桃色の横に長い手提げを胸に抱きかかえ、走ってきた。
「ごめんなさい、私、そんなことお願いしたくて言ったんじゃ」
「いいよ、俺のうち近くだし、いいよ」
　長い髪以外はすべてピンク、ピンク、ピンク。リボンを襟とポケットにつけたコート。
　ちらっと覗いたスカートも、もう少し濃いピンクだった。
　傘なしで走りたくない格好だった。やっぱり雨の中、走ってきてよかった。
　佐賀さんをぬらしたくない、本気でそう思った。

　ピアノのおけいこというのはよく聞く。エレクトーンというのは意外だった。
「エレクトーンってどのくらい習ってるの」
「小学校に入ってからすぐなんです。本当は、ピアノを習うつもりでしたけど」
　一週間仕事をしたおかげで「デート代」の小遣いはたんまり稼いでいる。懐は暖かかった。思い切って近くの珈琲喫茶店に入ることにした。あまり中学生が来 るところじゃないという先入観があるせいか、学校の友だちと顔を合わせることがない。しかも出てくる飲み物が思ったより安い。１５０円で珈琲紅茶どれでも 大丈夫。駅前に住んでいる利点だ。
「じゃあ、毎週駅前に来てるんだ」
「はい。いつもは学校終わってからなので」

寄る暇がなかったってことだろう。わかる。わかる。
淡いランプがところどころにぶら下がっている店内で、僕は一番奥へ席を取った。セーター姿でめがねかけた大人がひとりで煙草をふかしている。窓とカーテンは閉まっていた。どかんとどこかで、大きな雷の落ちた音が響いた。佐賀さんが肩をすくめて僕をきゅっと見つめた。
「大丈夫、あとで俺がバス停まで送ってく」
ほっとした顔で佐賀さんはうなづこうとし、慌てて頬を押えた。また首をかしげた。
見れば見るほど、なんでもしてあげたくなってしまう。変だ。僕の方がおかしくなっている。ふつうに見えるように、僕は佐賀さんを壁際に押し付けるようにして座った。真向かいに腰を下ろして、あらためて佐賀さんの瞳を見つめた。
――意識してくれてるのかな。
――いつも、健吾くんとはこういう感じでいるのかな。
ぴりりと電流が走る。ふつうに見られないと変な奴だと思われてしまう。急いでメニューを広げた。どうせ珈琲しか頼まない。
「なんでもいいよ。俺、うちの手伝いしてるから大丈夫なんだ」
「いいえ私が払います」
「今日は俺が、佐賀さんにおごりたいんだ。そうさせてくれないかな」
僕はかたくなに首をふる佐賀さんを無視して、珈琲と紅茶を注文した。ウエートレスさんが愛想良くすぐに運んできてくれた。
「佐川さん、おうちのお手伝いしながら学校に行ってるんですか」
いつもじゃない、いやいやだけど本当のことなので、僕は嘘なく頷いた。
「うん、うちそんな大きな店じゃないから、俺も手伝わないとだめなんだ」
「すごいですね。だからなんですか」
ためらいながら、僕に尋ねてくるのは言いづらいことなんだろうか。
「だからってなにが」
「はやく自立したいってこと、この前、佐川さん言ってましたよね。私、そんなこと一度も考えたことなかったし、学校でそういうこと、話す人もいなかったし、びっくりしました」
ああ、やっぱりしっかり聞いてたんだ。それなら僕が職業科の高校を選ぶってことも覚えてるんだろう。
「俺、この前も言った通り、成績よくないんだ。だからいい学校に行けないと思う。だけど俺のやりたいことはものすごくレベルの高い学校に行かなくてもできることだから、そうするつもりなだけなんだ」
決して嫌味を言ったつもりはない。なのに佐賀さんはすっかりうなだれてしまった。あわてた。
「佐賀さん、違うよ、俺、佐賀さんのように青大附中に合格できる頭あれば、行ってたかもしれないし、同じ職業科でも青潟工専を受けられたかもしれないよ。 俺は佐賀さんも健吾くんも、レベルの高い学校で一生懸命やっているのみて、すごいなあっていつも思うよ。ただ俺は、早く家を出たいというのが目的だから、 成績それなりでも別のやりかたができるんじゃないかなって思

ったんだ」
　また首を振る佐賀さん。目がうるんできた。ちょっぴり泣き虫なのかもしれない。
「いいえ、佐川さん」
　目尻を指先でこすり、じっと見つめてきた。
「私、佐川さんみたいになりたい。佐川さんみたいに強くなりたい」
　佐賀さんは僕を相手にとつとつと話し始めた。
　時間はかかりそうだけど、かかればかかるほど一緒にいられる。
「私、ほんとはピアノを習いたかったんです。でも、先に習いに行っていた梨南ちゃんがピアノの先生と喧嘩してやめてしまったって聞いて、悪いなって思って エレクトーンにしたんです。今でも梨南ちゃんは誰かにピアノの話をされると怒ります。エレクトーンはピアノにくらべてレベルが低いと思い込んでいるみたい で、何にも言わなかったんだけど」
　――とんでもない人だなあ。
　もう何度も思ったことなので、慣れちゃっている。
「けど、エレクトーンって難しいし、面白いんです。だから、梨南ちゃんには言わないでグレード試験受けたりしてました。エレクトーン弾く人なんて馬鹿みたい、と梨南ちゃんは言っていたけど、そんなことないって、最近やっと思えるようになったんです」
「そうだよ、それって当然だよ」　佐賀さんは指先を、鍵盤弾くような格好に丸めて、とんとんと叩いた。
「でも、ずっと怖かったんです。今でも、まだ怖いんです。今日の試験でも順番待っている間に、梨南ちゃんの声が聞こえてくるみたいで、自分が変になっちゃいそうだったんです」
　よくわかんないけど、今日のグレード試験がうまく行かなかったってことなんだろう。試験に失敗した直後だったら、そりゃあ、泣きたいだろう。
「大変だったね」
　それしか言えなかった。
「私、ずっと自分に言い聞かせて、エレクトーンはピアノと同じくらい素敵な楽器なんだって思うようにしてきたんです。弾いている時、楽しくて、誰に認めて もらえなくてもかまわないって。けど、梨南ちゃんがいつも『エレクトーンなんてピアノの延長上にある低レベルな楽器よ』とか言っていたのが耳にこびりつい て、怖くなっちゃったんです」
　――最低な女子だな。もう確定。
　僕は珈琲をごくんと飲んだ。熱すぎてやけどしそうだった。
「どうせ今、杉本さんはピアノが弾けないんだろ？　今の話からすると、それっきりピアノなんて習ってないんだろ？　エレクトーンもオルガンもシンセサイザーも」
「はい、たぶん」
　僕には分かる。最低な女子だと再認識した。
「それはさ、佐賀さんが自分のできないことを軽々やっているから、やっかんでいるだけだよ。詳しいことはわかんないけど、ピアノの先生とけんかしてやめ たってことは、がまんするだけの根性がなかったってことだよね。俺、そっちの方が情けないなあって思うよ。もし佐賀さんがピ

アノを習っていたら、杉本さん 自分のことを追い抜かれるんじゃないかって思って、焦ってたんだよね。当たり前だよ。それだけの力を佐賀さん持っているんだし。エレクトーンをばかにしてるってことは、杉本さんが鍵盤ものを一切いじれないことをごまかすための言い訳だよ。情けないよな。自分で努力するか、いやな先生に頭を下げてもう一回習 い直せばいくらでも追いつけるのに。努力しないで、できる人をやっかむなんて、俺からしたら最低だよ」
「けど、私」
　うざったい、いらいらして僕は言い切った。
「僕は佐賀さんの方が何倍も、何十倍も実力があると思うよ。習い事って大変だろうなあって、思う。がまんしなくちゃいけないことだって多いだろうし。で も、それを投げ出さないでがんばってやりぬいたことって、俺はほんとすごいことだと思うよ。今日の試験、きっと辛かったんだろうなって思うけど、でも、佐 賀さんはそんなことでめげる人じゃないって、俺、一発でわかるんだ。ほんとだよ」
　女子と話すと時々、短気の虫が騒ぎ出してしまう。目の前にちゃんと、こうすればいいってことが並んでいるのに、気付かない振りをしているんだから世話が ない。佐賀さんだって本当は、したいこと、わかっているはずだ。成績はもしかしたら杉本さんの方がいいのかもしれないけれど、何倍も、いや何億倍も、佐賀 さんの方が頭いいことがわかっている。男子をいやな気持ちにさせないとか、嫌いな女子でも思いやりを持つように心がけているところとか。馬鹿だったら、絶 対に、できない。
　――許さない。
　テーブルをこぶしで押し付けるように叩いた。
「来週の土曜日のこと、健吾くんから聞いている？」
「え、あ、あの」
　どもったけど、ちゃんと頷いてくれた。知っているんだ。
「一年では健吾くんと、あの人が、来るって聞いたんだけど、ほんと」
　たぶん立村の次に評議委員長となるのは健吾くんのはずだ。人数聞いた段階で、健吾くんは外れないだろうと思っていた。そして杉本さん。ふたり。
「梨南ちゃんですか。はい、たぶん今から楽しみにしているはずです」
　はにかみながら、佐賀さんは紅茶カップを丁寧に持ち上げ、一口飲んだ。
「だって、毎日関崎さんがメモで置いていった紙を見つめて、ほうけてます」
　――おとひっちゃんそんなもの置いていったっけ。
　覚えがない。首をひねった。佐賀さんはかすかに笑った。
「ノートをやぶいて何か書いて、立村先輩に渡していたみたいなんです。それを立村先輩に頼み込んで、もらったみたいです。暇があればそればかり眺めてま す。周りでさんざん馬鹿にされても全然気が付かない風です。口癖に『青大附中の馬鹿男子なんかに、あの方の価値なんてわからない』のだそうです。お友だち と話してました」
　――あの方の価値、ね、確かになあ。
　おとひっちゃんはいい奴だけど、価値、とまで言ってしまえるんだろうか。僕は笑いをこらえ

きれなくて、つい大声で笑いこけてしまった。佐賀さんも僕に付き合って、顔をほころばせてくれた。やっぱり、こういう時の顔が一番いい。
「ごめん、笑いが止まらなくってさ。じゃあ今からもう、おとひっちゃんのことばかり考えて夢うつつなんだね」
「はい、梨南ちゃんは好きな人のことしか考えられない人です。好きになればなるほど、いじめるのがくせでした。でも、きっと、関崎さんは梨南ちゃんに一度も悪口を言わなかったから、いじめなくても好きになってくれると思ったんじゃないでしょうか」
　勘違いもいいとこだ。葉牡丹をさっさと手放したおとひっちゃんの本心、知るがいい。
「いじめなかったんじゃないよ。おとひっちゃん、いやでいやでならなかったから、離れるために機嫌とっただけだよ。そんなことも気付かないで、学年トップなわけなんだ」
　悪いけど、一瞬のうちに「職業科進学コンプレックス」が消えた。
　成績のよしあしと、ほんとの意味での「頭のよさ」は違うんだ。

　僕は苦い珈琲を半分飲んだ。缶コーヒーと違って、砂糖が入っていない。
　胃がちょっとちくちくしてきた。夕飯前っていうのが効いたらしい。
　顔をしかめると、佐賀さんが静かに見上げてくるので作り笑いを浮かべた。
　今日は佐賀さんの電話番号を聞かないと帰れない。

　雷はまだ時折鳴っているけれども、さっきほどうるさくはなかった。
「佐賀さん、これから言うことは、悪いんだけど健吾くんには内緒にしてほしいんだ」
　僕は切り出した。やっと、練りに練っていた案を話せるのが嬉しかった。両手を膝の上に置いて、お上品な格好で佐賀さんがこっくり頷いた。
「いや、健吾くんを無視するんじゃないんだ。この前会った時も思ったんだけど、健吾くんって正々堂々としたやりかたでないと、納得できない性格なんだな あ。あんなに杉本さんが嫌がらせしているのに、クラスでいじめをしないようみんなに言い聞かせるなんて、普通の人じゃできないよ。俺だったら、かかわり持 たないよ」
「健吾……新井林くんは、裏表のあるやりかたが本当は嫌いなんです」
　――でも、相手は裏表のある奴なんだからしょうがないじゃないか。
　ちくっと来た。 ひとりで突っ込み僕は続けた。
「僕としては、悪いけど杉本さんに金輪際、水鳥中学生徒会に関わりあってほしくないんだ。青大附中の評議委員会がどういうことしているか知らないけれど、 人に迷惑をかけてくる人には、寄ってきてほしくない。これ、おとひっちゃん以外の生徒会役員にも聞いてみたんだけど、みな杉本さんのことを嫌っているのは 確かなんだ。おとひっちゃんだけは悪口言わないけれど、本当のこというと、別に好きな子いるし、杉本さんと付き合うなんて具合悪くなる以外の何者でもない、と思うんだ」
　おとひっちゃんにはばらせない計画だ。強調した。
「でも、健吾くんと同じく、おとひっちゃんも正々堂々としたことが好きなんだ。きっと、杉本

さんに押し捲られたら、礼儀としてお付きあいしなくちゃいけな いんだって勘違いするかもしれないんだ。自分が本当はどうしたいか、あきらめて。けど、おとひっちゃんはこんなこと、絶対にしたくないはずなんだ」
「わかります。私も、この前、そう思いました」
　おとひっちゃんの様子を一応はチェックしてくれたのだろう、納得だった。
「だから、俺としてはこの前話した案を、実行したい。杉本さんに来週の土曜日、水鳥中学で自分の本性を暴露しようと思っている。すっごく汚いことだと自分 でも思うよ。ふつうの人にだったら、俺もこんなひどいことしたくないよ。でも、佐賀さん、今でも杉本さんに言われたことが気になってしまうんだろ？　エレ クトーンなんてピアノよりレベル低いとか、さんざん嫌味言われたことが気になっちゃうんだろ？　俺だったら『どうせ鍵盤も弾けないくせに馬鹿女』って言い 返すけどさ。それができないくらい、辛かったんだよね」
　うつむいた。前髪に光が当たって、白い横筋がしゅうっと走った。天使の輪、って奴だろう。
「馬鹿なのはどっちさ、ってことを思い知らせてやりたいよ。俺はおとひっちゃんの親友だから、嫌いな女子なんかと一緒にいてほしくないんだ。言い方変だけど、あの人、いわゆる『みそっかす』だと思うんだ」
「『みそっかす』？」
　小学校一年の四月に、僕があてがわれていた居場所だった。
「そうだよ、ほら、ドッチボールとか鬼ごっことかする時、誰かの弟とか妹とかが混じったら、手加減しようってことで『こいつはみそっかすにしようぜ』って 言うだろ？　俺小学校一年の時、そうだったんだ。体もちっちゃかったし、頭もよくないし。弱虫だったし。いつも他の奴から『雅弘はみそっかすな』って決め 付けられてて、悔しかったんだ」
　真剣な目で僕を刺す。机の中の「鈴蘭優」のポスターよりも、ずっと真摯だった。どんどん突き刺せとささやいてくる。
「俺、ほんっと悔しくってさ。毎日必死にかけっこの練習したりしてた。誰にも言えないよなあ。年上の奴らと遊ぶならともかく、同じ学年で『みそっかす』だよ。恥ずかしいよ。けどね」
　しゃべりだしたら止まらなくなる。店の中が幻映画館になったみたいだった。佐賀さんの背中に幻影が映っているようだった。
「おとひっちゃんだけは、俺のことを『みそっかす』扱いしなかったんだ。あいつ、俺を幼稚園の頃からかばってくれてて、『雅弘泣かしたら他の奴も泣かして やっからな！』って体張ってくれたんだ。けど、おとひっちゃん、あの時は他の奴らが俺を『みそっかす』扱いしているのに、平気でボールを俺に当ててくる し、鬼ごっこの時も容赦なく、タッチしてくるんだ。みんなから文句ぶうぶう出たよ。けど、おとひっちゃんはっきり言ってくれたんだ。『雅弘はみそっかすなんかじゃねえよ。差別すんな』って」
「『みそっかす』ですか」
　そうだろうそうだろう。納得している顔。やっぱり僕がガキっぽいんだ。
「俺も努力したつもりだよ。早く『みそっかす』から脱出しようと思ってたからさあ。一年の六月くらいにやっと抜け出すことできたんだ。すっごく嬉しかったよ。女子にはわかんないかもし

れないけど」
　あの時、
「おとひっちゃん、俺、みそっかすじゃなくなったよ！」
とおとひっちゃんに報告したんだったっけ。
「あったりまえだろ、お前のろまじゃねえもん」
って言ってくれたことが今でも忘れられない。思い出なんてとっくの昔に消えていることが多いけど、おとひっちゃんがなんでもない顔して、実はすっごく嬉しそうに言ってくれた時の顔が、後ろの壁に浮かび上がってきたようだった。
「あの時、俺は『みそっかす』から脱出するために、ものすごい努力したつもりなんだ。繰り返すけど、毎日学校から家まで二回往復して走ったりとか、ほんと 苦しかったよ。でも努力すれば報われるんだって、その時初めてわかった。おとひっちゃんが一緒にみそっかす扱いしなかったのも、俺ががんばって走りつづけ たのを応援してくれてたからなんだなって、後になってわかったんだ。みそっかすから抜け出すには、他の奴らの迷惑にならないくらい動かなくちゃいけないし、とろとろしてちゃいけないんだってことも、あの時よっくわかったんだ。ちゃんと、ルール、あるんだよ」
　ここから本題だ。珈琲を飲み干した。と思ったらウエートレスさんが黙って珈琲と紅茶を注ぎ直してくれた。どうしよう。おかわり代を請求されたら。
「佐賀さん、俺思うんだけど、杉本さんは『みそっかす』から抜け出すための努力、しているのかなあ。もし、佐賀さんや健吾くんを傷つけないように努力する とか、紙鍵盤用意してピアノの練習するとか、そういうことをしてたら、僕たちも『みそっかす』から外してやると思う。けど、そんなとこ全然見せないらしい よね。結局佐賀さんがエレクトーン上手になればなるほど、やっかむわけだし、健吾くんのことを嫌がらせして迷惑かけるし、おとひっちゃんが嫌がっているの みえみえなのに、さらに追いかけてきたりするんだ。どうしても仲良くしてほしいんだったら、ルールを守ってくれってことを、俺は言うよ。あの人普通じゃな いから、普通に話してもたぶんわからないよね。だったら、堂々と今まで杉本さんが佐賀さんに何をしてきたか、どんな迷惑をかけてきたか、そういうことを水 や青大附中の人たちの前で証明して、みんなに判断してもらった方がいいよ」
　遊んでいる時にうろちょろして迷惑かける『みそっかす』。　『みそっかす』扱いされたくないのだったら、早く走るよう努力することが必要なんだ。

「水鳥中学交流準備会に佐賀さん、健吾くんの付き添いってことで一緒に来ることできないかなあ」
　計画の芯。僕はやっと切り出すことができた。
「え、私がですか」
「そう。すでにおとひっちゃんと立村との間で話し合いが進んでいるらしいよね。テーマは『いじめ』なんだ。うちの学校、青大附中みたいに学校で演劇をやろ うかって話が出ているんだ。『奇岩城』みたいにドラマチックじゃないけど、『学校内のいじめ問題』をテーマにした話をや

ろうって考えているみたいなんだ。 どういう内容なのかはもう少しおとひっちゃんをつっついてみるけれども、杉本さんがいままで佐賀さんにしてきたことを、そのまんま演劇の内容にしてしまっ たらどうだろうかな、って思ったんだ。佐賀さんは辛いかもしれないけれど」
「え、でも、私」
　戸惑う佐賀さんにまた僕は短気になった。
「でも私、なんか言うことないよ。会の担当になる水鳥の生徒会役員に俺、いろいろ頼んで佐賀さんのされてきたことを演劇のネタにできないかどうか聞いてみ る。実際に起こったことの方が説得力あると思うし、僕も交流準備会に参加する予定だからちゃんと手を挙げて発言するよ。もちろん、佐賀さんや健吾くんから 聞いたなんてことは、内緒にしてさ。目の前に杉本さんがいる前で、被害者の佐賀さんがいる前で。杉本さん、自分のことをネタにされているって気が付いたら どんな顔、するだろうなあ。本人はどう思っているか知らないけど、みんな、佐賀さんがかわいそうな思いしているってことみんな知っていることだろ？　おと ひっちゃんの前で、杉本さんは自分のしてきたことが、正真正銘の『いじめ』であって、最低な人間のすることなんだって証明されちゃうんだよ。ふつうの神経 持っている人だったら、泣いちゃうよな」
「私なら、泣きます」
　――佐賀さんは、当然だよな。
　今は笑っている佐賀さんに、ほっとした。
「結論として、『いじめをする人はどんな理由があるにせよ許せない。加害者。青大附中と水鳥中学はいじめ人間を一切受け入れない』って結論に持っていくことできたら、最高だよな」
「でも、梨南ちゃんにそんなことしたら、きっと傷ついてしまうと思います」
　言いかけた佐賀さんを押しとどめた。
「俺、杉本さんがどう思おうが関係ないよ。要は、おとひっちゃんの前で、杉本さんがいじめをする最低の人間だってことを証明するだけのことなんだからさ」
　どうしようもなく許せなかった。
　うちにいた時、ちょこっとだけ
「俺になんも悪いことしてないのになんであんな嫌いになるんだろう」
って罪悪感を持っていた。でも、これですっきりした。理由判明。
　――佐賀さんがまだ、苦しんでいるのに、平気でいるあの性格がいやなんだ。
　もちろん僕が一方的に佐賀さんびいきなだけなのかもしれない。佐賀さんと健吾くんとの話し合いを鵜呑みにしているだけなのかもしれない。でも、杉本さんのしてきたことはどんな人も許せないことだろう。
　いじめられる方に罪がある、とは絶対に言ってはいけないことなんだという。
　でも、佐賀さんが受けた傷のことを考えれば、杉本さんに罪がないとはどんなことあっても言えないと思う。

　それに、杉本さんにはいざとなったら逃げ場所がある。
「立村は相変わらず、杉本さんのことをひいきしているよね」

「梨南ちゃんには無視されてますけどしょっちゅう、声かけたり、呼び寄せたりしてます」
　蝋人形のような顔。すぐに火で解けてしまいそうな頼りない態度。
「じゃあ大丈夫だよ。おとひっちゃんに振られたって、本当に好きな人が待っているんだから」
　佐賀さんはもう一度、大きく頷いた。
「梨南ちゃんが本当に好きなのは、立村先輩です。立村先輩と一緒にいてくれれば、きっと」
「社会の迷惑がひとつ減るよ」

今日こそ忘れてはならない。おかわりでもらった珈琲を舌、やけどしそうになりながら頭と胃をちくちくさせた。
「でも、水鳥生徒会も今、ごたごたしているから何か変わった事があったら、連絡したいんだ。いままでいじめ問題の演劇をやろうとしていたくせに、次の瞬間『彦一とんちばなし』になっちゃう可能性もあるし。佐賀さん、電話番号、もらっていいかな」
　ピンクのかばんから、やはりピンクの女子らしいノートを取り出した。五線譜ノートだった。綴じ目からはがして、電話番号だけ書いて渡してくれた。
　絶対落とさないようにしなくちゃいけない。財布の中に押し込んだ。あとで別の紙にメモしておこう。鈴蘭優のポスターに原本ははさみこんでおこう。

　雨はまだ激しく降っている。すっかり夜。もう六時近い。バス停まで、こうもり傘でふたりで入っていこうと決めた。
　佐賀さんがお手洗いに行っている間に、会計をしてもらおうとした時、ぽこんと僕の肩を叩く人がいた。
　――まずい、誰かいるのかな。
　恐る恐る振り向いた。
「今日は、サービスだぞ」
　父さんだった。いつも来る取次の営業さんとふたりで打ち合わせしていたらしい。ふたりでにやにやしながら、手を振って出て行った。
　もちろん、ふたりぶんの支払いは終わっていた。

総田には、「中学演劇脚本集」を一通り読んでおくと連絡した。
　青大附中評議委員会ご一同様がいらした時に、テーマを「いじめ問題を扱った演劇の上演について」にしておくのだから、詳しく調べておくのは義務だろう。うちの店にそんなマイナーな本があるわけもなく、仕方なく図書館で調べた。
　文字を読むのは慣れている。どれもこれも、くさすぎる。
　先生と生徒が喧嘩したり、いじめたり、体罰あったり。いろんな出来事が学校内で起こるのだけど、どの話もハッピーエンドの大団円。こんな話、僕だったらすぐに寝ちゃうだろうにな。学校内の九割はおとひっちゃんと違う感性の持ち主である以上、他の奴もそうに違いない。
　僕は途中、飛ばし飛ばしし読み終えた。
　さっきたんが図書館の入り口でこっくりと僕に頷いている。
　――なんか用かなあ。
　文字読み過ぎて、うんざりしていた僕は、さっきたんに手を振って呼び寄せた。きっと来てくれるんだ。いつも僕の呼びかけを無視することないんだから。
「佐川くん、どうしたの、その本」
「ほら、来週青大附中の評議委員会の人たちがうちの学校に来るから、そのテーマに使う資料を読んどかなくちゃって。こんなかび生えた話、やだよなあ」
　一行、学園ものの台詞を読み上げてみた。さっきたんはお下げ髪の先をなでて聞いていた。
「『いいか、お前ら、弱いものいじめしたくなるっていうのはな、自分の中に同じ弱さを見てしまうから、ついいらいらして腹が立ってしまうんだ』」
「なあにそれ」
　咽がいがらっぽくてうまく声が出ない。おすもうさんみたいに、つぶした声で続けてみた。
「『お前らがいじめているのはな、お前ら自身だ。一番弱虫で惨めな自分をこれ以上傷つけてどうするんだ。いいか、お前自身を守りたいんだったら、今からいじめるのをやめるんだ。自分の醜いところをしっかと見つめるんだ』」
　もちろん、一本調子の棒読みだ。さっきたん、しばらく唇をかみ締めていた。ご機嫌悪くなったのかな、と様子を見ると、全然違った。笑うのをこらえていただけだった。
「いいよ、さっきたん、笑ったって」
「ごめんね、佐川くん、俳優さんみたい」
　咽の奥でくっくと音をさせて、さっきたんは僕の隣りに座った。
「どういう台本なの」
「どっかの中学演劇部で使った台本なんだって。うちの学校、演劇部ないだろ。いつも学校祭の間際に先生たちがめぼしい奴に声をかけて、集めるって感じだろ。俺、今これ読んでて思ったよ。去年の学校祭でやった『彦一とんち話』の方がずっとましだって」
「でも、佐川くんが出るんだったら面白いのかもしれないわ」
　あいかわらずさっきたんはおとなしめのすうっとした笑顔を浮かべていた。

　何度見ても、いやな気持ちになんてならない顔だ。
「さっきたん、時代が古すぎる学園演劇なんて、出る気になれるかなあ。俺はやだなあ」
「でも、先生たちは演劇をまたするつもりなんでしょ？」
　さっきたんには詳しい事情が伝わっていないようだった。四月以降に先生たちがどんどん話をまとめて、現在の一年生たちを中心にしてやるつもりなんだろう。現三年は今のところ受験一色になるだろうから、ただ眺めているだけでいい。
「うん、青大附中の評議委員会って、冬休みに毎年、怪盗ルパンや名探偵ホームズのような話を劇にして、ビデオに撮っておくんだって。それを学校内で流したりするんだって。それも見る分には面白そうだけど、同じことをうちの学校でするなんて、できないよ」
「ホームズとかルパンとか？」
　さっきたんは戸口付近の本棚を指差した。江戸川乱歩全集がずらっと並んでいる。
「そうだよ。次は『怪人二十面相』あたりやるんじゃないかな」
　周りに気遣いながら、さっきたんはまたまた、咽を鳴らしてうつむいた。

　昼休みも終った。公立高校入試が終わってすっかり気抜けした顔の三年生たちとすれ違った。一応、すれ違ったら礼をするのが決まりだ。忘れないようにしておけば大丈夫、リンチなんてされないですむ。
　僕はエンピツの先を無意識につぶしながら、情報の整理を行うことにした。
　ある程度おとひっちゃんや総田から話を聞かせてもらったら、ふうんと頷いた後で、自分の中から湧き上がってくる答えを待つ。なんも考えない。ただ、勝手 に噴出す油田みたいなものを待つだけなんだ。地理で習った、中国の油田みたいな感じにだった。ちなみに苦手の英語だ。さっき、総田からノート貸してもらっ たから、当てられても訳を読み上げればそれでいい。
　――あんな恥ずかしい劇をやらされるなんて俺はいやだけど、でもこれで通した方がいいなあ。
　絶対に僕の出番がないこと分かっているからなおさらだ。目的が決まっているから大丈夫だ。自分に関係なければ問題はない。
　――先生たちとおとひっちゃんに受ければ、あとはみんな勝手に寝ててもらったっていいんだし。思いっきり匂うような青春ドラマをやろうってことにしたらどうかなあ。
　総田はまず
「冗談じゃねえよ、こんなくせえ話に誰が乗るかって」と言うだろう。当然だ。
　おとひっちゃんは
「真面目な話の方がいい。いじめは決してよくないことなんだってことを真っ正面から突きつけるっていいことだと思うんだ。けど、一年時の『彦一とんち話』みたいなものにはしたくないから、みんなでもっと話し合ったほうがいいと思うんだ」
って言うだろう。これもまたひとつの考え。
　僕としてはどうでもいい。
　これから先、生徒会が青大附中の評議委員会から参考意見をもらって、どんな風に演劇を盛り

たてていけばいいかを話し合って、その合間に杉本さんをぐっさり刺せばいい。できれば足もとを。もう二度と、水鳥中学なんて来たくない、やめてやる、と思うくらいに突き刺せばいい。
――佐賀さん、ちゃんと健吾くんに話したのかな。
本人が目の前にいて、もう逃げも隠れもできない状況下の中、僕は
「あくまでも俺が考えた案なんだけど」
と前置きして、杉本さんのしたことを全部しゃべってやるだろう。もちろん青大附中の連中には……健吾くんには話さないとまずいこともあるけど……内緒にし ておこう。僕が佐賀さんから聞き出したことなんだ、ってばれたら、杉本さんの逆恨みに火がついて犠牲になっちゃうかもしれない。
偶然、僕が思いついたことであって、佐賀さんとは一切関係ない。思い当たる節があるんだったらそれは偶然だ。
僕に責任なんて全然ないし、もちろん佐賀さんらしきいじめられっ子の話が出てきても、それは偶然でしかない。そう言い張ればいい。
悪いけど杉本さんって、おとひっちゃんが嫌っていることに気付かないほど鈍感な女子なのだから……なにせ、顔見れば一発で感情がもろ見えのおとひっちゃ んなのだ……こっちが強気でつっぱねればあきらめるだろう。それどころか、「私が悪い」と思ってくれるかもしれない。反省して、もう二度と佐賀さんをいじ めないようにしてくれれば最高だ。蝋人形委員長がきっと慰めてくれるだろう。
――立村か。あいつも頭悪そうだもんなあ。
成績はどうだかわからない。でも、佐賀さんと珈琲紅茶のお付きあいをしてから、僕の「成績」に関する考えはまるっきり変わった。順位がどうのこうのじゃ ない。杉本さんが学年トップを保っていようが、おとひっちゃんが今回もトップであろうが、所詮それと本当の頭のよさとは違うんだってこと、証明されてし まった。
どんなにいじめられて、エレクトーンの試験で失敗してしまうくらい傷ついても、杉本さんのことを思い遣ろうとする佐賀さん。
周りのことをみな見極めて、なんとか必死に対等になろうと努力する佐賀さん。
――ほんとに頭のいい人、ってこういう人なんだ。
――俺、そういう風に、してるよな。
職業科志望、それがどうした！

――もし、杉本さんがいい性格だったら、きっとおとひっちゃんのお間抜けぶりをさらけ出して、幻滅してもらうって方法も取れたのにな。
杉本さん以外の女子にだったらそうしてただろう。他中学の女子で、しかも好意を持ってくれている子相手だ。好き好んで傷つけたいとは思わない。おとひっ ちゃんはきっと、そう思っている。大っ嫌いなタイプだとしても、決してつっぱねたりできないに違いない。おとひっちゃん

は紳士だ。
　けど、相手は「ふつう」の子じゃないのだから仕方ない。
　――逆恨みする執念深い、人を平気でいじめる最低女。
　僕が佐賀さんの情報を丸呑みして言っているといわれればそれまでだろう。
　お前がしていることもいじめじゃないか、と突っ込まれれば言い訳できない。
　たぶん他の奴が同じことしていたら、僕も止めるだろう。
　でも、杉本さんに対してだけはどうしてもふわふわりんとした気持ちになれなかった。

　総田と例の郷土資料館で待ち合わせすることにした。天気は良かった。大雨の後はだいぶ春めいてきているようすだった。雪と泥が完全に一体化していて、靴がどろどろ。あとで洗濯する母さんに怒鳴られそうだ。制服のままで行くことにした。
「おっす」
　総田がもう来ていた。交流会準備でくそ忙しいであろう生徒会室、どうやって抜け出してきたんだろう。
　いつもの真ん中席に座った。また人がいない。経営成り立ってるのかな、いつもこんながらがらだと、とうちの父さん母さんも話していたっけ。僕もそう思う。総田とふたり並んで座り、膝を開いて両手を置いた。ふっと一息ついた。
「おとひっちゃんはどうしてるの」
「あいつひとりでなんか書類作ってるぞ。例の『いじめ問題』用に使うコピーの下書きをさ。けどなあ、どうせやるなら俺たちが適当に、演劇の台本出して、『これどおっすか？』と声かけりゃ、それでいいような気がするけどなあ、んで」
「別にいいよ。おとひっちゃんにはやりたいようにやらせておけばいいよ」
　僕は、借りてきた「中学演劇脚本集３」なる、教科書の親戚みたいな本を一冊取り出した。
　緑色の表紙で、なんかつまんない。
「俺も演劇やれってか。やーだね」
「出る奴はみな一年か二年に押し付ければいいよ。内川会長だっている、それより、なにより、これどうかな」
　一通り目を通してみて、使えそうな脚本を用意しておいた。さっきたんに読んできかせた奴ではないけれど、内容は五十歩百歩だ。
「先生連中に受けがよさそうな、関崎好みのやつかよ」
「とにかく、あらすじだけ読んでみてくれないかな。総田教授」
　読む気配なしなので、僕は自分の口で言うしかなかった。ひじでつっついた。

「この話、ふたりの女子が出てくるんだけど、ひとりがどこかのお金持ちのお嬢さまで、同級生の女の子を取り巻き使っていじめてるんだ。こんな話、今時ドラマでもやんないけど、結構いじめたりする場面がすごいんだ。リンチっぽい場面もあるんだよ」

「うわあ、さむいぼ出そうだぜ」
「でさでさ、いじめている女子はいばっているけど、実は大の弱点があって人前で歌うことができないんだ。自分が音痴だから。そこで、いじめている女子にわざと人前で歌う役を押し付けようとするんだ」
「それってなにか。ギャグでやってんのか」
「ギャグじゃないから怖いんだよ。あらすじだけ言っちゃうよ。そのいじめられっ子はご都合主義なんだけど歌がうまくて、周りから拍手喝采を浴びちゃうん だ。それを見ていたいじめっ子はなんとしても自分が勝たなくちゃと焦り始める。うーんと、途中いろいろあるけど、いじめっ子は悩みに悩んで、自分も人前で 歌う練習をして、いじめっ子を負かそうとする。けど簡単にはいかないよね。結局音痴をさらけ出してみんなから大笑いされるんだけど」
「聞きたかねえよ。そんな劇やるんだったら俺、すぐに帰るぜ」
「とにかく聞けよ。いじめっ子の女子がすっくと立ち上がって『私も一緒に歌うわ、みんなで歌いましょう』と、生徒全員に壇上で呼びかけて、手を取り合って歌うんだ。そして最後に抱き合うんだ。幕って感じ」
「おえーっ、絶対やだやだやだ。俺は反対」
　総田、首と腰をくねくねさせてのた打ち回っている。僕も本音はその通り。こんな劇、本気で上演している学校あるんだろうか。末尾の発行日を見たら、僕の父さんが生まれる前後の脚本だ。冗談じゃない。時代を考えろっていうんだ 。
「でもさ、こういうことが、本当にあったとしたら、どうする？」
「本当ってなにをだ」
「つまり、杉本さんって女子がいじめっ子のようなことを、本当にやっていたとしたら」
　総田の眼と口が、一緒につりあがった。ぴんときたな。
「あの女子、か」
「そう、裏付けはもう取ってるよ。おとひっちゃんに言わないなら、教えてやるよ」
　僕は簡単に、佐賀さんと健吾くんから聞いた杉本さんの行為について説明した。
「外側だけじゃなくて中身も腐ってるのかよ。俺だったらぼこぼこにリンチしてやりてえな」
「だろ、僕も同じだよ。そういう子に好かれたらおとひっちゃん、耐えられないよ。しかも水鳥に乗り込んでこられたら、たぶん死んじゃうよ」
大げさだけど、大の本音だ。杉本さんの性格はあまりにもひどすぎる。おとひっちゃんが青大高校受験にもし失敗したら、たぶん杉本さんのせいだ。
「別に俺としては、魔性の女に食われてもらった方が相手も関崎も本望ではないかと思うんだが」
「だめだよ。おとひっちゃん食われるだけならいいけど、水鳥中学にも足をつっこんでくるんだよ。内川だって巻き込まれて大変なことになるよ。とにかく集めた情報からするとすごいんだ。先生たちですら、追い出そうとしてるんだって」
　僕が強く説明すればするほど、総田の顔は引きつっていく。
「だから追い出すしかないんだよ！　俺、水鳥中学生徒会のためにもそうだし、おとひっちゃん

のためにも、それからもちろん、総田、お前がやりたいことを成功させるためにもそう言ってるんだよ。ね、協力してほしいんだ」
　佐賀さんと一緒に眺めた青潟市の古い地図。あの地図はかなり古い時代に作られたものらしいけれども、ほとんど縮尺とか当たっていると習った。本当のことって、結構長持ちするもんなんだ。直感って、だから大切だ。総田も僕の方をちらっと見て、腕を組み、十秒沈黙した。
「わかった。佐川の案に乗ってみるか」
　僕はさっそく、案を一気にしゃべりまくった。メモには残さない。総田の頭だから、すぐにすうっと叩き込めるに違いない。証拠が残っていたら、おとひっちゃんに半殺しにされるだろう。

「つまりさ、この台本を少し水鳥中学生徒会でいじってみたってことにするんだ。僕が聞いた杉本さんのすごい過去の話、ほとんど引用できると思うよ。ほら、 いじめっ子が音痴だって話あっただろ。そこを、ピアノにしちゃうんだ。杉本さん、ピアノの先生とけんかしてやめちゃって、上手になった友だちをずっといじ めてたっていう話を信頼できる情報筋から手に入れたんだ」
　佐賀さんだとは気付かないだろうな。たぶん大丈夫だろう。
「ピアノが弾けないくせに、ピアノの演奏ができると自慢しちゃって、自爆するんだ。けど、あわやってとこをいじめられっ子の彼女に助けられるんだ。そし て、両手をついてごめんなさいって謝るんだ。ところが周りの男子たちは彼女のことを絶対に許さないってぼこぼこにしようとする。ところがいじめられっ子の 彼女は立ち上がって、『いじめを繰り返すのはここでやめましょう。私はあなたも、そして私をいじめた全ての人を許したいの』とか、白々しい台詞を言う。あ とさ」
　調子に乗ると僕は怖いぞ。総田もふむふむとうなづいている。ちゃんと、聞いていてほしい。
「この台本にもあるんだけど、いじめっ子が横恋慕している男子がいるってとこ。そのまんま使っちゃうんだ。それ本当のことだからさ」
「へえ、そうなのか」
　あまりしゃべってしまうのは何かとは思ったのでぼかす。イメージはもちろん、バスケ部の主将様である。
「それで、その男子はいじめられっ子のことが好きなんだ。何かがあるとすぐ、いじめられっ子を守ろうとするんだ。いじめっ子は男子によってしょっちゅうぼこぼこにされる。でもめげずに男子を追ういじめっ子。この辺、ギャグっぽくすると受けるなあ」
「佐川、お前バラエティーのシナリオ書きになれよ。才能あるぜ」
「ないよそんなの。で、もう一つ、仕上げなんだけどさ」
　大切なのはここだ。僕にははっきり言って、脚本書きの才能なんてないけれど。
「唐突に、ここで『芦毛の王子さま』を出すんだ。ひょこっと、知らない男子がやってきて、いじめっ子を救おうとするんだ。みんなにぼこぼこにされているい じめっ子を、いじめられっ子は守ろうとするんだけど、女子だからそれができない。そこで、馬に乗った別の男子がやってきて、そのいじめっ子を諭す、てか、 叱る、ってか、抱きしめる。彼女は救われる。で、最後は大

合唱。どうかなこれ。ほとんどギャグだけどさ」
　僕はラスト部分をかなり、意味ありげに説明したつもりだった。
「『芦毛の王子様』か。お前、競馬好きだろ」
「父さんから教えてもらってるんだ。結構僕が予想すると、当たるんだよ」
「なまっちょろい、うすらぼけの、王子さまか」
「本気で演じるんだったら、内川にやってもらってもいいけどさ」
「いや、青大附中からヘルプでもらおう！」
　さすが総田。その辺呼吸を飲み込んでくれている。おとひっちゃんに説明するとしたら、一日あっても大変だろうけど、一発で納得ＯＫだ。
　『芦毛の王子様』立村評議委員長の顔が思い浮かんだはずだ。

　早い話、青大附属中学発の情報をそのまま、既成の中学演劇脚本に盛り込んでいけばいい。僕も面倒なことはしたくないし、交流準備会用こっきりの話で終わ らせたい。どうせ、公立は受験の関係であまり面倒なことはできないと、顧問の先生も言うだろうし。ただ、青大附属がもともと演劇ネタ好きなところだと聞い ているから、
「こんなのはどうですか？　脚本としては使えますか」
と聞いてみるだけのことだ。
　「準備会」だからこそ使える手だ。本式の交流会になったら、僕がいきなり持ってきた脚本なんかを利用することなんてできやしない。おとひっちゃんが知ら ないうちに計画するなんて無理だろう。おとひっちゃんが気付かないうちに、杉本さんを落ち込ませてこれっきり水鳥中学の敷居をまたがせないようにすること が、第一の目的。おとひっちゃんが杉本さんタイプの女子を嫌っているというのを証明するのがその二。
　――仕上げは、これだ。
　僕は総田に、あとでもう一度電話することを伝えた。学年万年二番の頭脳で、さらさらっと計画書こしらえてくれるだろう。
「それと、もうひとつお願いあるんだけど、聞いてくれるかな」
　実はこっちの方が僕にとっては重要だった。
「いつも、総田が使っている図書準備室の鍵を、当日だけ、貸してほしいんだ」
「へえっ？」
　そりゃ驚くだろう。僕は前から総田が、こっそり鍵を作って川上女史と密会していることを知っている。去年の秋、総田が生徒会室に二本の鍵をキーホルダーにぶら下げていたのを見て、冗談半分で、
「これ、生徒会関係の鍵か？」
　と聞いてみた。そしたら曖昧な言い方をしていたので、すきを見て学校内、すべての南京錠に鍵をあわせてみた。見事発見、ただそれだけのことだ。
「おい、何言ってるんだ、佐川」
「いつも持っている、車のついたキーホルダー。あの中の一本がそうだろ？　もう一本は生徒会

室用でさ。確か学校の鍵はスペア禁止だって聞いてたけど、総田は賢いからすぐに作ったんだね」
　校則違反もいいとこだ。見つかったらまず違反カード五枚くらい切られてついでに停学だ。
「佐川、何を言いたい」
「だから、一日だけでいいんだ。あの部屋の鍵がほしいんだ。あそこで俺が待機していたほうよかったらそこにいるしさ」
　何度か僕も下見で覗き込んでおいた部屋だ。かなり埃が舞っているけど、奥のごみ箱にはジュースの空き缶とかポテトチップスの空き袋とか、たくさん入っていた。つまり、あそこで食事も可ってことだ。駄目でも食べる。持ち込んで。
「要するに、お前専用の待合室がほしいってことか」
「そういうこと。一日だけでいいんだ。あそこをまるまる、貸してほしいんだ」
　これ以上脅迫する必要なんてない。生徒会副会長が露骨な校則違反をしていることを、ばらすかどうかなんて低レベルなことを言わなくたっていい。総田にはその辺の呼吸も飲み込んでくれている。僕も、困った顔で頭を下げる。
「ごめん、ほんっとうに今回だけ。ちゃんと部屋掃除しとくから！　川上さんも居心地いいようにさ！」
　――さあ、刺さったか！

　思ったとおり、総田教授の顔は黒く染まった。
「佐川！」
「頼む、ほしいな」
　片手を出して、今度はにっこりと笑いかけた。
「ちくしょう、お前、能力を間違ったとこに使いすぎてるぜ」
　サーキット用の車がキーホルダーになっている鍵。手の中に落としてくれた。
「どうせ、しばらくは使う気もねえよ。先公どもの見てない隙を狙って、好きなようにしろ！　どうせあの部屋、あかずの間なんだからな。単なるごみ捨て場ともいう」
　――ラッキー！　これで準備十分間に合うよ。
　総田の思わぬサービスに、思わず顔がほころんだ。
　どうせあの二人のことだ、別の密会場所を開拓したんだろう。

　もし、健吾くんと佐賀さんが僕とこっそり相談する必要があるならば、そこに連れてくればいいし、もし佐賀さんを「委員会外の人だから入ってきてほしくない」という扱いにするんだったら、それでもいい。僕は裏の手を使って佐賀さんだけをここにひっぱってこれるってわけだ。
　完璧だ。青大附中の体育準備室と同じような場所。
　問題は土曜日ということで、先生や用務員のおじさんが覗き込まないかってことくらいだけど、総田もうまくやっているんだ、たぶんなんとかなるだろう。その辺も総田に釘をさしておこう

。
　明日、昼休みを使ってもう一度チェックしておこう。もちろんおとひっちゃんには内緒だ。
　あ、忘れてた。まだやることがたくさんある。

　家で父さんの
「デート帰りなのか？　のぼせてるんだろ？」
とつつく声を無視して電話をかけた。
　もちろん電話番号は、毎日眺めているので暗記している。
　女子のうちに電話をかけることには慣れている。けど、佐賀さんは青大附中の人だから、ものすごいお嬢さまかもしれない。電話をかけるとまず家政婦さんが 出て、それからご両親が出て、最後にやっと繋がるなんてことないだろうか。アホな想像を繰り返した後、気合を入れてダイヤルを回した。最初はさすがに家政 婦さんじゃなく、たぶんお母さんらしい人。思わず
「あの、水鳥中学生徒会の佐川と申します」
と大嘘ついて名乗ってしまった。全くのでたらめってわけじゃない。生徒会には関わっているけど役職があるわけではないんだから。
「お待たせしました」
　そんなに経ってないのに、声が電話だとくるくるっと丸まって聞こえる。佐賀さんの髪の毛みたいだ。ほわほわっとさわりたい。
「あの、俺、佐川です。土曜のことについて、健吾くんに伝言頼みたいなって思ったんだ」
　佐賀さんは僕のどもりどもり説明した言葉を一通り聞いてくれた。
「新井林くんは、土曜日、来ない予定なんです」
　きっぱり答えた。
「え？　健吾くん、だって評議委員だろ？」
「ええ、でも新井林くんは、バスケ部員でもあるんです」
　知ってる。でも、まだバスケ部同士の交流会は始まっていないはずだ。
　疑問をぶつけると、佐賀さんはためらいがちに答えてくれた。
「私、新井林くんに言ったんです」
　小さなくしゃみが合いの手に入った。
「二年になったら、うちのクラスの評議委員になりたいから、今のうちに参加させてほしいって。そうしたら新井林くんも賛成してくれたんです。もう梨南ちゃ んが評議委員になれないのだったら、新井林くんと話の合う人がなった方、いいかなと思って。それで、新井林くんも、私が参加するんだったら安心だからっ て、自分の優先したいほうを取ってくれたんです」
　――次期評議委員？
　佐賀さんのクラスは確か、健吾くんと杉本さんが評議委員のはずだ。前の話で、杉本さんが担任の権限で落とされるというのは決まっているらしい。空いたポストに、佐賀さんがもぐりこむということか。
　――さすがだ。やるなあ。

　その通りの言葉を伝えた。佐賀さんはまた、かすかに笑い声を立てた。咽のところでくぐもる、小さな声だ。
「新井林くんのおまけでは、参加したくないし、それに、佐川さんにも失礼だと思ったんです」
「俺に？」
　佐賀さんの声が凛と響いた。
「私のために、そこまでしてくださる佐川さんの姿見て、私、思いっきり反省しました」
　――俺の姿？
　身体が震えてくるのが分かる。変なところが興奮している。やばい、初めてだ。
「私も、私のやりかたで、自分の考えていたことを梨南ちゃんにはっきり言わなくちゃって、思ったんです。けど、梨南ちゃんは私をまるっきり無視してます。話し掛けても、逃げます」
　――逃げるかよ。
　本人は無視しているつもりなんだろうが、佐賀さんには「逃げる」としか見えないのだろう。おとひっちゃんがさっきたんの家を前にして「用事がある」とか言って逃げたのと同じように。僕の目と佐賀さんの瞳、ぴったり重なっている。
「だから、逃げ場所のないところで、一度話し合うつもりなんです。お願いがあるんですけど、聞いていただけますか」
　まだ身体と頭が熱くなった状態で、僕は頷いた。
「いいよ、できることだったら」
「今のことを、当日まで誰にも言わないでいただけますか。このこと、梨南ちゃんにも、立村評議委員長にも内緒にしておきたいんです。私がもし来ると知った ら、梨南ちゃん何をするかわかりません。また、言い訳くっつけて逃げます。梨南ちゃんは自分しか通用しない言い訳が天才的にうまいんです」
　――すごいことを言ってるよ。
「だから、私、梨南ちゃんと一対一できちんと話をしたいんです。私がちゃんとひっぱって、きちんと決着をつけたいんです。そして、きっちりと、評議委員になりたいんです」
　申しわけないけど、僕は完全に全身、ゆでダコ状態だったと思う。
　風呂上りなのか、と突っ込まれても言い訳できないくらい。
「いいよ。わかった。俺もそれは内緒にしとくよ。けど、どこで話し合いするのかなあ」
「大丈夫です。途中で私、梨南ちゃんが言い訳できない理由を言って、連れ出します」
　――言い訳できない理由？
　佐賀さんはそれを詳しく教えてくれなかった。たぶん佐賀さんのことだ。杉本さんの弱みを知っているんだろう。僕がおとひっちゃんの弁慶の泣き所を知っているように。
「わかったよ、でも無理しない方がいい。俺もちゃんと、佐賀さんが過ごしやすくするようにするからさ」
　すっかり汗が流れてしまった僕だが、電話の声は自分でもえらく冷静だった。
　だって、「佐川さんの姿を見て」とか言われたら、変に興奮しているとこなんて見せられないじゃないか。

興奮の残りは後で、鈴蘭優のポスターを貼って考えよう。ずっと部屋に貼るかそれとも机の中だけにしておくか、迷っていたけど、もう限界だ。毎日眺めよ う。寝る時、見上げても大丈夫な場所に。もう父さん母さんに何言われたってかまわない。声の記憶だけじゃ、もう眠れない。

図書準備室は総田の言うとおり、ほとんど廃墟だった。なんでこういう部屋が残っているのか不思議だ。一応、掃除当番は割り振られているらしいけれども、 見えるところだけ適当にほうきではく程度らしい。テーブルの上に本棚が積み重なっている。身体をかがめれば十分姿を隠すことができる。もちろん食べ物も持 ち込んで平気だ。唯一心配なのは、間違って南京錠を下ろされてしまうことくらいだけど、万が一のために総田にも帰りに一声かけてもらうよう頼んである。ま あ、そんな心配はないと思う。佐賀さんと話をした後はすぐに学校から出て、また郷土資料館あたりに行けばいい。

――汚いよなあ。こんなとこ。　まあ僕も、こんなことやっていること、ばれたら違反カード切られるだろう。

今まで一枚しか出されてないんだから、ちょっとくらい多くなったって平気だ。

佐賀さんが来るんだからリスクは覚悟の上だ。

掃除をして、パイプ椅子を二脚用意し、本を全部重ね合わせた。もう誰も読まないような本ばっかりだった。さっさと片付けた後はすぐに玄関で、青大附中評 議委員ご一同様をお迎えしなくてはならない。顧問の萩野先生には、僕が自主的に参加したいと申し出たということで、おとひっちゃんが話を通してくれた。去 年の国語担当だったこともあって、すぐに萩野先生はＯＫを出してくれたらしい。その代わり、プリントを全部手書きでこしらえるという面倒な仕事を押し付け られた。なんでも、先生たちの都合でコピー機が使えないらしい。しかたないからガリ版を使うことになった。こういうことこそ、会計の川上さんとかを使えば いいのに、おとひっちゃんは僕にしっかり原稿を押し付けた。

「悪いな、雅弘。俺も一応は目を通しておいたんだけどな、総田の原稿だ」

――総田の奴、全部俺の内容を丸写ししたんだな。

「すっげえ真面目な台本見つけたみたいでなあ、あいつも珍しいよなあ。俺、驚いたよ。古い時代の学園ドラマみたいなんだけど、総田と川上がふたりでいろい ろ考えたらしく、現代っぽくアレンジしたんだとな。萩野先生にはまだ見せていないんだが、たぶんあれだったら大丈夫だ。青大附中の連中もきっと驚くぜ」

おとひっちゃんが何も考えていないのは明白だ。あらすじもキャストも、ラストに「いじめっ子を救いにくる王子さま」が出てくるとこも、みんな僕の指定通 り。もう少し、総田も考えたっていいのになって僕は思った。でもまあ、本気で演じるつもりのない台本だから、これでいいだろう。

総田にはあと、内川たちへ、若干の情報提供をしておくよう頼んでおいた。

この中のネタが、青潟市内の中学で実際起きた……青大附中とは言わないが……出来事であること。こういう人間をどう思うかを、道徳の授業みたいに真剣に考えるふりをすることとかを。

要は、杉本さんの前で、杉本さんらしいキャラクターのことを、おとひっちゃんおよび水鳥中学生徒会の人間は大嫌いなんだってことを、断言しちゃえばいい のだ。おとひっちゃんの正義感

はたぶん、台本中のいじめっ子に当てられるだろう。かわいそうなのはいじめられっ子だと言うだろう。何も考えていない可能性 はあるけれども、杉本さんだってそのくらいあてつけられたことは気付くはずだ。
　問題は、逆恨みの恐ろしさってところだ。けど、大人じゃあるまいし、殺し屋を頼んだりするようなことはないだろう。
　杉本さんがこれっきり、水鳥中学に顔を出さない、かかわりをもたないようになってくれれば、あとは八つ当たりだろうが逆恨みだろうが勝手にしてもらってかまわない。僕たちは全く手を汚していない。ただ単に、「演じるための台本をこしらえてみた」だけのことだ。
　あとは総田と内川会長が頭を並べて、くさすぎる台本を一切合切やらないことに決めるかだ。総田のことだ、
「冗談じゃねーよ、さむいぼ立つぜ」
とばかりに、あっさり却下してくれるだろう。まあ悪いけど、一年の時に演じた「彦一とんち話」をそのまんまやってもらったってかまわない。どうせ僕たち、次期三年には関わりないことだ。

　――佐賀さんが来る。佐賀さんが来る。生の佐賀さんに会えるんだ。
　毎朝拝む真上のポスター。寝ぼけ眼だと、鈴蘭優の顔がぼんやり映って、佐賀さんのふわふわした感じに見える。
　見つめていると、また変な気持ちになる。
　貼ってからずっと、変な気持ちになるのを夜までがまんしてばかりいる。クラスの野郎連中がみんな、していることをしたくなるってこう言う時なんだろう。 こっそり、雑誌を引っ張り出してきて社会勉強をしてみたり、試してみたりする。おとひっちゃんにはあまり話したことのない感覚だった。
　――おとひっちゃんも、さっきたんのこと考えてこういうことしてるのかな。
　なんか想像つかないけど、ありえないことじゃないような気もする。総田も川上さんのことを考えて、きっとこういう気持ちになったりしているんだろうし。口に出すことじゃないけれども、みんなが女子のことでひそひそ話している理由がわかるようになってきた。
　――だって気持ちいいんだ。しょうがないよ。
　もう一度拝み直した後大急ぎで服を着換えた。今日は授業が二時間あって、あとは二時間学校内のワックスかけだけだ 。
　学生服もだいぶてかてかになってしまった。くさかったらいやだ。何度か外で両肩の縫い目のところを持って振った。
　めったにいじらない頭も、少しだけ前髪をあげてみた。顔がべとべとしているのが気になる。
　別におしゃれしているわけじゃない。やはり、今日は礼儀かな。健吾くんと話をするなら何にも気遣いしなくたっていいけど、やっぱり佐賀さんが来るんだから、しかたない。
　――けど、ほんとに今日佐賀さんが来ること、内緒にしてていいのかなあ。
　もちろん杉本さんを逃がさずに話し合いをすることが必要なら、それがベストだろう。でも、

佐賀さんと杉本さんは同じクラスだ。健吾くんだってそうだ。うまく隠し切ることができるんだろうか。青大附中の事情はよくわからない。
　僕はしばらくあれこれ想像してみた。天井の鈴蘭優ポスターを見上げて、うんと頷いた。
　――佐賀さんだから、たぶん大丈夫だろうな。

　おとひっちゃんとは声だけかけて教室に入った。二時間だけにせよ、授業があるのはかったるかった。三時間目からいよいよワックスかけに入った。いわゆる「うんち」と呼ばれる黄土色の練りワックスを、先生たちがぽつん、ぽつんと落としていった。それこそ、馬とか牛のふんみたいにだった。雑巾を片手に、少し ずつなじませて拭いていく。のどにつんとくる匂い。おなかの中に何にも入っていないせいか、むかむかした。口を覆っても、わっくすの匂いでまた吐きそうに なった。どうしたんだろう。いつもだったら平気なんだけどな。
「佐川くん、どうしたの。具合悪いの？」
　さっきたんが近づいてきてくれた。
「ちょっとおえっときただけだよ」
「無理しないで保健室に行った方がいいんじゃないかしら。保健委員がいないなら、私がついていってもいいのに」
　――そんな大げさじゃないよ。
　いつもだったら、さっきたんってやさしいなって思えるんだけど、今の僕は意地でも倒れるわけいかない。邪魔だった。
「いいよ、なんでもないよ」
　ワックスが膝について、たぶん匂ってしまうだろう。それもむかっときた原因のひとつだ。
　よりによってなんでこんな、ワックス大掃除の日に、交流準備会なんてやるんだろう。だんだん考えてきていやになった。
　――要するに、さっきたんとおとひっちゃんがくっついてしまえば一番いいんだよな。そうすれば、俺がこんなよけいなこと、考えなくたっていいのにな。全く、なんで俺にばっかりくっついてくるんだろ。さっきたんはおとひっちゃんで十分じゃないかよ。
　なんでかわからない。ずっといい人だって思っていたさっきたんのことがうざったくなった。
　あっちに行ってほしくなった。
「悪いけど、俺、ほんと具合悪いから放っておいてもらえないかなあ。ほんとに吐いちゃうかもしれないからさ」
「佐川くん、ごめんなさい、けど私」
　まだしつこく寄って来るつもりなんだろうか。いいかげん僕も頭に来た。
「俺以外にもおとひっちゃんがいるだろ。おとひっちゃんだったらさっきたんにいろいろ相談したいことあるみたいだよ」
　――まずい、言い過ぎた。
　自分でも何を言い出したかわからなかった。僕はただ、さっきたんにあっち行ってほしかっただけだった嫌いになったわけじゃなくて。、ただ今は話をしたくなかったってだけだった。なん

でおとひっちゃんのことなんか口走ってしまったんだろう。むしょうにいらいらしていた。
「今日もほら、おとひっちゃん困っててさ、しつこい青大附中の女子が来るからさ、逃げたくってなんないみたいなんだよ。もしさっきたんが一緒にいてくれた らさ、きっとおとひっちゃん助かると思うんだけどさ。俺、悪いんだけどそのことで今、頭一杯なんだ。具合悪いとかなんとか言ってる暇ないんだ。じゃあ」
　――俺、やなこと言ってるよな。
　おなかの中に寄生虫の大きいのが一匹いるみたいだ。言っても言っても言い足りない。
「佐川くん、ごめんなさい」
　さっきたんは、とろりとしたワックスを雑巾の隅ですくった。背中を向けた。
　――だから、おとひっちゃんとさっきたんはくっついてしまえばいいんだよ！
　まだ吐き気はおさまらなくって、僕はずっとしゃがんだまま廊下の板目をこすっていた。だんだんつるつるてかてか光ってくる。今日具合悪くなるなんて絶対にいやだ。

　机をもとの形にもどして、四時間目授業が終わってから僕はすぐに教室を出た。総田とおとひっちゃんに頼まれていた脚本を持って行った。生徒会室には総田を始めほとんど生徒会役員全員が揃っていた。おとひっちゃんだけいなかった。
「あれ、おとひっちゃんは？」
　いつもだったら時間厳守でやってくるはずなのに。珍しい。
「ま、少しくらい大目に見てやれよってことだぜ」
　直前までむすっとした表情だったのに、いきなり総田が川上さんと顔を見合わせてにやついた。内川会長も相変わらずのほほんとした顔でもって、
「やっぱり関崎先輩は、人気あるんですねえ」
　――おとひっちゃん、何があったんだ？
　これからおとひっちゃんの晴れ舞台「水鳥中学生徒会主催・青潟大学評議委員会との交流準備会」が行われるっていうのに。学校祭の時だって、おとひっちゃ んはやらなくてもいいことを自分からばりばりやっていた。ライバル総田の仕事まで、鼻歌歌いながら片付けていたって話だ。おとひっちゃんは、燃える奴なの だ。
「いったい、何か変わったことがあったのかなあ」
「佐川、お前、知らねえのかよ」
　意外そうに言うのはやめてほしい。なんでもかでも、裏工作するのが僕だなんて決め付けないでほしい。
　総田は満足げににんまり、鼻毛を抜いた。
「お前でも知らないことがあるとはな。いやなあ、さっき、三組の生活委員さんが来てな」
　――さっきたんが？　男子にも生活委員がいるのに、瞬時にさっきたんを連想してしまう僕も僕だ。
「関崎を呼び出して、連れていっちゃったんだぜ。いやあ、舞い上がっちまったなあ。あいつも、いったい何を考えているんだかなあ、おい、ほんとにお前、知らないのかよ」

しつこく、僕の入れ知恵だと思っているみたいだ。そう思わせておいたほうがいい、と判断し、僕は脚本の原稿を一式、置いた。
「じゃああとは、俺がガリ版印刷してくればいいのな」
――さっきたんがなんでおとひっちゃんを呼び出した？
佐賀さんのことばかり考えていて、頭の中がぼおっとしていた。さっきたんにひどいこと言ったなって気持ちになってきた 。
――おとひっちゃんのことを言うのはまずかったよなあ。
――あれを気にしたのかなあ。
さっきたんも鋭い人だ。はつかねずみみたいな表情がやさしくて、今までだったらほおっと落ち着く感じだった。でもある日から他の女子と全然変わんなくみ えた。優しいし、親切だし、いい人だ。そこんところは変わってないけれど、いてもいなくてもいいって感じに最近はなってきていた。さっきたん見るくらいな ら、鈴蘭優のポスターを見ている方がいい。
けど、おとひっちゃんとのつながりになにか関係があるとしたら黙って見過ごすわけにはいかない。
「じゃあ総田、悪いけど、俺、別のとこで印刷を片付けておくね」
「ああ、わかった。例のとこな」
総田にしか通じない言葉でもって、僕は合図をした。
掃除と隠し場所を用意した、あの部屋へ向かう。

図書準備室に入った。通りがかりの先生に
「今日、交流準備会の準備でこの部屋借りてます。すみません」
と謝っておいた。
僕は一応、成績悪くても先生うけがいいのであっさりと通った。真面目にしておいて正解だった。
インクで手がべっとりしてしまった。まだつめの中にワックスが入り込んでいたみたいで、紙の上に少し油が浮いてしまった。
ひとまずは青大附中評議委員連中プラス、水鳥中学生生徒会、あと僕の分をステイプラーで留めた。
僕の案通りにまとめられている「友情は音色とともに」という、読むだけでこっぱずかしい題名がどどんと目立つ。
元の題は「友情は歌とともに」だった。歌ではなく、ピアノにしたので、題名もそれにあわせて書き換えたのだろう。
思いついて、僕は「ピアノ」のところを思い切って「エレクトーン」に直した。
もう一度印刷し直してこようと決めた。
青大附中の人たちが来るのは昼ご飯が済んでからららしい。僕たちも生徒会室で最後の詰めを行いながら、やきそばパンを食べることになっている。顧問の萩野先生が飲み物だけ、差し入れしてくれるらしい。

　僕は「エレクトーン」を書き直した後、もう一度椅子を並べなおした。窓辺にはジュースを並べられる程度の場所が空いている。あとで佐賀さんをここに連れてこよう。ちゃんと総田にもその辺言い訳しておこう。おとひっちゃんにばれないようにしておこう。

　――おとひっちゃん、あれ、どうしたんだ？
　二十分くらい必死に作業した後、もう一度生徒会室に戻った。まだおとひっちゃんが来ていない。
「なんでまだおとひっちゃんが来てないんだ？」
「ほらほら、玄関で青大附中連中をお迎えするんだと。ひとりでいいんだと」
「ひとりでって」
　またまた総田が唇をぎゅっとゆがませて笑った。
「厳密に言うと、ふたりだな。なあ、内川」
「ふたり、です」
　――さっきたんか？
　お迎えは僕が担当してもいいなあと思っていた。いや、僕が行くつもりだった。
「え？　生徒会役員は全員席に付いていた方いいんじゃないかなあ。俺みたいな部外者の方が、案内係ってことになれば一番いいと思うけど。そういうの、決めてなかったのかなあ」
　さりげなくいやみったらしく言ってみた。総田にはお見通しだったらしい。まだまだ腹に一物ある感じで、
「計画変更だってあっていいじゃねえかよ。ま、佐川、お前も陰でこっそり観察しろよな」
　――計画変更ったって。
　みんな僕の計画どおりだと思っているからこそ、詳しいことを教えてくれない。悔しい。しかたないので僕の目で確認することにした。
「職員玄関からだよね。会場は生徒会室だよね」
　僕はあらためて確認しなおし、職員玄関まで走った。そろそろ、青大附中ご一同様到着時刻だ。一時三十分を予定している。
　一階の廊下窓から見えるのは、赤茶色のつぶつぶがくっついた木の枝ばかりだった。
　職員玄関の入り口は職員室の近くということで、かなり広々している。先生たちの何人かは今日早く帰るらしく、
「お、今日はお客様をお迎えか。佐川、がんばれよ」
　と声をかけてくれる人もいる。早いうちに内申点稼ぎするのも、いいことだ。
　週番の生活委員もいなくなった。土曜日の校舎は、運動部の連中が廊下をランニングしていたり、菓子パンを食ったりする程度で、先生たちもみな職員室でテレビを観たりしている程度。職員室の中って煙草臭いからあまり入りたくない。
　総田から聞いたところによると、場所は生徒会室内。面子は予定よりも大幅に減って、立村評議委員長以下三人だという。男子、女子合わせて二人ずつ。その中に佐賀さんが入っているかどうかは不明だけど、健吾くんがいないことだけははっきりしている。

　おとひっちゃんを探すと、職員玄関にたって、妙に硬直したまま突っ立っている。外はだいぶ明るくなっていた。雪が車の飛ばす泥はねで真っ黒に染まっている。土が出ているところは乾いていた。話相手は、さっきたんだろう。スカートが揺れているのが見える。
　――さっきたんと話してるんだ。
　ワックスかけの時の言葉を思い出した。僕としてはどうしようもなくいらいらしていて八つ当たりしちゃったけれども、きっとさっきたんは気にしていないだろうと思う。どうせあさってになったら忘れているだろう。
　声が聞こえないのが残念だが、まあいい。ふたりを邪魔しないでやろう。
　腕時計の文字が「１３：３０」と緑に光った。
　そんな決意は、次の瞬間あっさり翻った。

「だからなんであんたがくるわけなのよ、はるみは評議委員と関係ないじゃない」
　棒読みの女子声が聞こえてきた。仮にも職員玄関ですごむなんて自殺行為としか思えない。僕はあわてて玄関のサンダルをつっかけて、外に出た。
「申しわけありません。新井林くんの代わりで参りました」
　敬語で全く意に介さず返事をしている、ふたつに結わえた長い髪。いつもの髪型よりも幼く見えた。よくよく見ると、薄桃色のリボンを長めに蝶結びにしている。丸めて編み上げたいつものスタイルもいいけれど、今日は一段と、守りたくなる。行動したくなる。
「どうしたんだ」
　すでにおとひっちゃんがさっきたんを玄関の脇におっぽいたまま、割って入っている。
　さすが、水鳥中学生徒会副会長。生徒同士のいざこざにも介入する。側でさっきたんは呆然としたまま、四人のブレザー制服連中を見つめていた。そっと隣りに近づき、僕はささやいた。
「何があったんだろう」
「青大附中の人たちよね」
　僕の顔をそっと覗き込むようにして、遠慮がちにさっきたんが答えた。掃除時の八つ当たりがまだ、ひっかかっているらしい。ここであやまっておいた方がいいかな。でもタイミングがつかめなくて僕も黙っていた。
　おとひっちゃんにひっぱられてブレザー制服集団は玄関の松の根元にかたまった。ため口叩いている相手は立村だった。相変わらず蝋人形顔している。申しわ けなさそうにしながら、何度も頭を下げている。なにそうへこへこしているんだろう。挟むようにしてふたりの女子が寄り添っている。ひとりはおかっぱ髪、も うひとりは長くストレート。市松人形の不気味さが漂っている。立村に向かって、佐賀さんが視線をまっすぐ投げて、挑戦している風に見えた。
　おとひっちゃんが立村に何度も話し掛けている。立村もおとひっちゃんと佐賀さんに小さな声で何かを言い返している。時折杉本さんをたしなめるよう、真面目な顔を見せている。もうひとりのおかっぱ髪女子が、杉本さんの側で肩を抱いて話し掛けている。
　明らかに、揉め事だ。
　他中学の揉め事に巻き込まれて行事中止、なんてしゃれにならないことしてほしくない。僕

はさっきたんから離れてすぐに佐賀さんに近づいた。
「おとひっちゃん、どうしたんだよ」
　おとひっちゃんじゃない。聞きたいのは立村相手にだ。
「悪い、内輪もめを見せてしまったな」
　舌打ちし、立村はおとひっちゃんに答えた。決して、僕にではない。
「新井林からは聞いていなかったけれど、佐賀さんもいきなりで、とまどったりしないか？
いや、来てくれたんだったら、別に参加するのは問題ないと思うよ。ただ」
　言いかけたところ、即座に弾き返すような、棒読みの声に割って入られた。
「評議委員の集まりでありながら、なぜ関係のない人間が入るのですか。おかしいです」
「杉本、いいじゃないか。佐賀さんは新井林の代理なんだよ。四月からは他の委員会とか、有志とかも参加する可能性あるんだからさ」
「そうよ、ね、杉本さん、ちょっとびっくりしちゃったよね」
　おとひっちゃんは杉本さんの方を見て、すぐに逸らした。話し掛けることをできるだけ減らしたい、そういうのが見え見えだった。目つきが怖くて、佐賀さんの方へ近づいてきている。つまり僕の隣りに寄ってきている。気持ちはわかる。
「でも、今日は評議委員会を招いていただいたということですよね。それっておかしいです。あの馬鹿男子が何を考えていたのかわかりませんが、なぜ、委員会にも関わっていない人が参加するのでしょうか」
　全く動揺していない佐賀さんの表情、心地よい。
　かすかに薄笑いすら浮かべていた。よくよく見ると、唇も桃色だった。耳もとに手を軽くやった時、爪がぴかぴかに光っていた。大人の人がするマニキュアみたいだった。
「新井林くんの代行だったら別にかまわないから、中に入れよ」
　同じく、立村を促すおとひっちゃん。早くなんとかしてくれっていうのが見え見えだ。
「すまない、ほら、杉本いくぞ」
　杉本さんに、心持ち優しい視線を向け、立村は二人並んで職員玄関へ向かった。おとひっちゃんは僕の方をちらっと見て、付け加えるように、
「今日は佐川も参加するし、別に生徒会だけの集まりじゃないんだ。だから、かまわない。顧問も最初だけ挨拶してくれるけれども、あとは任せてくれるってことだ。生徒会室に行こう」
　あえて杉本さんには目を向けないようにしようとしている。話し掛けられるのが怖いんだろう。おとひっちゃんは何を思ったのか、おさげ髪のさっきたんのところへ近づいた。
「あの、もしよかったら、水野さんも、今日手伝ってくれると助かるんだけどいいか」
「え、私が？　だって私生活委員だし」
「今日は準備会だから、できれば他の委員会関係の人にも参加してほしいんだ」
　おとひっちゃん、言葉面だけはまっすぐだけど、思いっきりどもっていた。靴を脱いで来客用の靴箱に入れている青大附中連中にもはっきり聞こえただろう。
「雅弘も学習委員だけどいるしさ、いや、生徒会だけじゃだめなんだ。やはり他の委員会とも協力しあわないとだめだって思ってさ」

　すっかり困り顔のさっきたんだった。おとひっちゃんと玄関でどういう話をしていたのかわからないけれど、いきなり親密な言い方をされても困るだろう。 いったいなんでおとひっちゃん、こうも積極的なんだろう？　いつもとは違う。浮ついている。僕は助け舟を出した。仲直りのチャンスだ。
「さっきたん、他の委員が俺ひとりじゃ落ち着かないし、よかったら来いよ」
　ワックス時のいざこざが少しでも消えてくれればいいんだけど。さっきたんはそっと僕の方に近づき、なぜか佐賀さんの方を見た。両方見比べて、唇をきゅっと結んだ。
「分かりました。参加するわ。お願いします、関崎くん」
　――なんで見るんだろ。やっぱり女子から見ても、佐賀さんは目立つんだなあ。
　生徒会室までの道のり、おとひっちゃんは独り占めしたいだろう。気を遣って僕は、青大附中グループでひとり取り残されている佐賀さんに近づいた。おもてなしの心だ。気遣いだ。

「佐川さん、逢えてよかった」
　他の連中に聞き取れない声で、僕の耳もとにささやいた。拍子にふたつに結わえた髪の毛がほおにふれて、ちくちく痛かった。鈴蘭優のポスターでこの髪型の奴、見たことある。ほしいな、となんとなく思った。
「帰ったらどうしようと思っていたんだ」
「大丈夫です。立村委員長がまずＯＫするって思ってましたし」
「それにしてもさ、ずいぶん青大附中の人、少ないね」
　もう少したくさん来ると思っていた。
「あとでお話します。それもいろいろ問題があるんです。新井林くんが言うには」
　前で三人語らっている立村その他ふたりを唇で指し示し、
「梨南ちゃんを連れて行くために、立村先輩が土下座して頼み込んだらしいんです。周りの人たちが嫌がるのを覚悟の上で、『今回だけでいい、一度だけ杉本を参加させてやってくれ』って。ものすごい覚悟だって新井林くん、話してました」
「覚悟いるのかなあ。ただ自分の好みだけだろ」
「だって、ここでごり押しなんてしたら、大変なんです。立村先輩きっと、自分が評議委員長から来期下ろされること覚悟の上でしているはずですもの。もちろん、新井林くんは指名されても受ける気ないと話してましたけれど」
　聞こえないようにささやいていたつもりだが、いきなり立村が振り返り、僕の方を静かに見つめ、階段のところで尋ねた。
「これからどうやって行けばいいのかな」
　――気付いてないな。
　僕と佐賀さんは顔を合わせて目配せした。
「ああ、この階段を昇っていけばいいよ。青大附中みたいにきれいなとこじゃないけど、生徒会室って書いてあるからさ」

石炭ストーブを派手に焚いているせいか、生徒会室の温度は暑いくらいだった。わかっていたから僕は学生服のままだったけれども、コートを着込んでいた立 村以下青大附中のみなさまは戸惑ったらしい。すぐにコートを脱いで、書類をまとめておいてあるダンボールの上に載せた。そこに置くよう総田が勧めたから だった。女子ふたりは戸惑っているようすだった。佐賀さんは問題ない、テーブルの下に押し込んでもいいと教えておいたから。青大附中みたいに、コートかけ があるわけではないんだから。

「これから水鳥中学生徒会主催の、青大附中評議委員会との交流準備会を行います。本日はわざわざ、ご苦労さまです。青大附中のみなさんとはこれから、いい意味での交流を深めていきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします」

初対面の連中も多いと聞く。内川会長が緊張気味に、総田のこしらえた挨拶を読み上げた。しっかり、背中には後光が差している。おしゃかさまって感じだっ た。僕と佐賀さんは一番端の出入り口付近に座っていた。さらに隣りにはさっきたんも大人しく腰を下ろしていた。僕に話したそうな顔をしていたけれど、なん となくよけいなおしゃべりしちゃいけないような気がした。

もっと言うなら、佐賀さんの隣りには杉本さんが大人しく座り込んでいる。奥側におかっぱ髪の女子、次に立村と続いている。水鳥中学生徒会連中はみな、部 屋の奥を陣取っている。おとひっちゃんが向かって右側に、総田が反対側に、内川会長を守るような形で席に付いている。斜めから僕と佐賀さん……かどうかわ からないが……とさっきたんを眺めて、にらんでいる。別にさっきたんを取る気なんてないのに。

顧問の萩野先生が立ち上がり、簡単に挨拶をしてくれた。後、ジュースとクッキーが先生のポケットマネーで……ちゃんと説明あり……振舞われた。おなかが すいていたので、まずはぱくぱくと食べさせてもらった。菓子パンだけでは辛い。さっきたんも僕の方をちろちろ見ながら、おそるおそるクッキーに手を伸ばし た。 「おなか、すいてたの？」

真っ赤にならなくてもいいのに。さっきたんははにかみながら頷いた。

「佐賀さん、食べるか？」

「ううん、大丈夫です。私、学校でお昼をいただいてきました」

見ると、青大附中の連中はとりたててばくばく食いついているってわけでもないらしい。立村はおかっぱ髪の女子と二人、ひそひそと話をしている。杉本さんだけがうつむいたまま、佐賀さんを無視しているのが目立っていた。

顧問のいない中の交流準備会というのも珍しい。青大附中もそうだったのだけど、萩野先生も途中から席を立った。なんでも、三年で公立高校入試二次募集の準備があるのだそうだ。用事があれば呼び出すように、とおとひっちゃんに伝えて、生徒会室を出て行った。好都合だった。

先生がいる間はそれなりに、お互いの学校事情について説明したり……立村が全部その辺は説明していた。内容としては前回青大附中で話をしたことと変わら ないので飛ばすけど……、春休みにはぜひ、バスケ部の合同練習試合観戦を行おうとか、六月以降にはぜひ正式な交流会を行おうとか、わりと硬い内容が中心 だった。僕にとってはまだまだ関係のないことばかりだった。

例の中学演劇台本をそろそろ用意しよう。

図書準備室に全員分まとめてあるものを持ってきて、配ればいい。

おとひっちゃんにも、総田にもＯＫをもらっている。

――けど、何を考えているんだろうな、俺も。
隣りで黙ってメモを取っている佐賀さん。
健吾くんにどういう言い訳をしてきたんだろう。
あの「正々堂々大好き」少年の健吾くんが、もし僕の計画を知ったらきっと戸惑うか怒るかのどちらかに違いない。杉本さんのことを蛇蠍のごとく嫌っている のは共感するけれども、汚いことをするのはいやだって顔を、いつもしている。僕もそのくらいはわかっている。でも、そうしないと、水鳥中学の方に飛び火し てしまう。佐賀さんも傷ついてしまう。
――けど、これってどうかんがえてもリンチだよな。
突然、気弱な気持ちになってしまう。反対隣のさっきたんが、思ったよりもクッキーを食べているのが意外だった。そんなにおいしいのかな。僕の分もあげようかな、と思って皿を差し出したら、佐賀さんも気付いたらしくその中に、自分の分をちょこんと載せた。
「ほら、おなか空いているんだったら、あげるよ」
また真っ赤になってうつむいてしまった。なんか僕も悪いことしただろうか。さっきたん、よっぽどワックスがけの時のことが腹立ったんだろうけれど、こっちだって仲直りしようとしているのに。またいらいらっと来た。
「いいよ、いらないんなら置いとくよ」
――勝手にすればいいんだ。
僕は言い捨てて、佐賀さんに話し掛けようとした。けど、佐賀さんもなぜか、隣りの杉本さんの方をじいっと見つめ、首をかしげていた。ちっちゃい子を見守る、お母さんみたいな顔だった。
「梨南ちゃん、大丈夫？」
なぜか一方向だけじっと見据えている杉本さんに声をかけた。だいぶ生徒会連中との語り合いも収まってきた頃だった。はっきりと佐賀さんの言っていることが聞き取れた。近くの僕だけじゃない、たぶん、内川も、総田も、立村も、おそらくおとひっちゃんも。
ちらっとにらみすえるようにして、杉本さんはまた無視した。
――無視するんだから、やめればいいのに。僕とだって話すること、あるのにな。
脚本のことについて、ちょこっと報告したかったのにだ。
佐賀さんはさらにはっきりと尋ねた。
「梨南ちゃん、お手洗い、したいんでしょ？　私が付き合ってあげるから、行きましょう」
ぐいっと杉本さんの眼が血走った風になった。唇を結んだまま、憎しみいっぱいににらみ返した。
いつもの棒読み口調で言い返した。
「何馬鹿なこと言ってるのよ。静かにしたら」
「だって、梨南ちゃん、学校にいる時から、お手洗い行ってなかったでしょ。さっきから時計の針じっと見ていたし。きっとお手洗いのこと考えているんだなって思ってたの。今のうちに行か

せてもらった方が、あとで泣かないで済むわよ」
　佐賀さんは妙にくっきりした発音で、生徒会室内に響くように言い張った。
「私が付き合ってあげます。すみません、杉本さんがお手洗いに行きたいそうなので付き合ってよろしいですか」
　おとひっちゃんも総田も、別になんとも思っていない様子だった。そりゃそうだ。誰だってトイレに行きたくなることはある。抜けたって困らない。僕も後ろが通りやすくなるように、椅子の背を引っ込めた。川上さんが、
「トイレはね、二年四組の前にあるから、すぐわかると思うわよ」
　総田の隣りに席を取っているのは、言うまでもない。男子連中は全く無視して話を始めている。僕もいつもだったらそれっきりのはずだった。でも。
　――どうしても言い訳つかない理由で、杉本さんとふたりっきりになって、話をつけるって電話で話していたよな。佐賀さん。
　――杉本さんがどうしても、逃げられない理由でってことか。
　仕方なくしぶしぶ立ち上がり、うつむいた杉本さんを引き連れ、佐賀さんが出口へ出て行った。振り返り、佐賀さんは僕へ意味ありげな笑みを向けた。さっきたんも一緒に佐賀さんたちを見つめていた。

　もう二年の教室に人はほとんどいないはずだった。
　ふたりっきりで話をするにはもってこいの場所だ。
　――佐賀さんの勝利が確定してから、始めようか。
　僕はさっきたんが手をつけなかったクッキーをもう一枚、口の中で噛み砕いた。

　十五分くらい経ったけれどもふたりは戻ってこなかった。最初のうちは気にしていなかった。女子のトイレがいくら長いからといって、ちょっと引っ張り過ぎ るんじゃないかと感じてはいたけれども。もっともおとひっちゃんと総田は全く意識していないらしい。男子ってそんなもんだ。川上さんとか、さっきたんの方 が心配そうに戸口の方をちらちら眺めていた。僕の顔を見ては何か言いたそうにするのだけど、佐賀さんと杉本さんのいない席で話すのもいやみたいだった。
「今回、青大附中のみなさまがたに見ていただきたいんだけどな」
　すでに総田もため口叩いてやがる。最初から立村委員長を馬鹿にした態度を取っていた。抗議しない立村も立村だ。穏やかに相槌を打っている。
「うちの学校でも六月くらいに一度、おたくの学校みたいに劇をやりたいなあって話が出てるんだ。青大附中と違って、金もかけられないし、所詮臭い内容の学 園ドラマになっちまうけれどもな。一応、適当に台本を選んでおいたんだ。その辺でちょっと、ご意見をいただきたいなあと思ったとこでさあ」
　隣りのおかっぱ髪女子が、目立たぬように立村をつついている。僕には見える。
「ああ、大体の話を聞かせてもらえれば、参考になるかどうかはわからないけれど、意見は言えると思う。どういう内容なんだ？」
　総田には話しずらいのか、おとひっちゃんに声かけている。おとひっちゃんもまだ、僕の手直ししたすさまじい台本の内容を知らないはずだ。
「いじめ問題を通じて、友情の素晴らしさを描いた話なんだよな、雅弘」
　急に僕に振ってくるなって。無視を決め込もうとした。
「佐川くん、関崎くんが呼んでいるわよ」
　さっきたんが小さな声で割り込んできた。やけにうるさい。
「台本、今別の部屋にまとめて置いてあるんで、今から持ってくるけど、いい？　おとひっちゃん」
　やはりこういう場では、おとひっちゃんを立てておかねばならない。
　僕が立ち上がると同時に、いきなり立村が右腹を押えるようにしてテーブルの上にかがみ込むような姿勢を取った。額をつけるくらいに一度、うつむいた。
「ちょっとだけいいか」
　顔をわずかにしかめている。腹が痛いらしい。盲腸でもがき苦しむ、という痛みではなさそうだ。その辺の見分けは男子なら大抵つく。たぶん、あれだ。
「腹、壊してるんだろ」
　にやつきながら総田がつっつく。さすが男子連中はよおくわかっている。立村も少しはにかむようにして笑みを作っている。相当きわどいところじゃないだろ うか。男子の場合、大きい方と小さい方を判断して、どちらのトイレに入るかを決めなくてはならないというさだめがある。学校で大きい方をするってことは、 男子にとってかなり勇気のいることだ。個室を選ぶってことなんだからいきなり戸を開かれても文句が言えない。屈辱的なまたぎのポーズを笑われるはめに

なる ばかりか、「あいつ学校でくそしてたんだぞー！」という、これまた恥ずかしい事実を語り継がれるはめになる。それゆえ男子としては、できるだけトイレでは 小さい方のみ使用するようにしている。もっとも腹の調子の問題だから、必ずしもうまくはいかない。僕もその辺は経験者なのでよくわかる。男子で気持ちがわ からない奴いたら、それこそ「人の心がわからない奴」だ。

　昼、なんか悪いものでも食ったんだろうか。立村評議委員長。

「昼に牡蠣フライ定食なんて食べたのがまずかったのかな」

「あれ、立村くん牡蠣フライなんて」

　何か言いかけたおかっぱの女子に、何かをささやきかけた。その子はすぐに黙って、椅子をぐいと机に近づけ、人が通れるよう通路を作った。言う暇ない、一刻を許さない、早くトイレに行かせろってことだろう。情けないけれども男子としてはよくわかる。

「と、いうことで申しわけない」

　かなりせっぱつまった状態で立村委員長は戸口から出て行った。今度は男子連中……おとひっちゃん、総田、内川……あたりから、含み笑いが漂った。

　――わかるよなあ。よりによって腹下しときたもんだ。

　かわいそうだったのは、立村の隣りに座っていたおかっぱ髪の女子だった。ひとりでふうっとため息をつき、口を尖らせていた。初めての学校で、ひとり取り 残されているんだからそりゃあ淋しいだろう。少し長めで、どうかんがえても校則違反でチケット切られそうな髪形だった。青大附中の女子はあまり、細かい髪 型を規制されていないみたいだ。

「じゃあ、おたくの委員長が帰ってくるまで待つことにして、佐川、悪いが例のもの、持ってきてもらえねえかな」

　総田がせっかく和んだ場を壊さないように、いなかっぽい口調で僕に声をかけた。

　ちょうどいいとこだった。僕もそろそろ準備しなくちゃと思っていたところだ。

「いいよ、じゃあ急いで行ってくるよ」

　三階の図書館隣り図書準備室へ向かった。会、終了後のお楽しみが待っている場所だった。

　――ジュース、用意しておけばよかったな。あと、お菓子もくすねておけばな。

　僕が生徒会室を出てぐるっと見渡したのは、別に何も考えていたわけじゃない。何となく、右の耳たぶがひっぱられる感覚を覚えたからだった。一気に廊下で冷えた空気が耳の中に詰まった。

　誰かがかくれんぼしているみたいだった。

　男子と女子のトイレが向かい合った中間点で、茶と灰色が混じったブレザー姿の三人を認めた。

　僕が廊下に出たのを気付いたのか、また頭を寄せ合いしゃべっている。何かを言い合っているのだろうけど、具体的な言葉が聞き取れなかった。

　――あれ、さっき腹下してた奴もいるよ。

　立村評議委員長が、ふたりの女子に挟まれて佐賀さん相手に何かを説明していた。さっきまで

苦しそうに右腹押えていたのが嘘のように、冷静だった。大至急すませて割り込んだってことだろうか。
　僕は少し様子をうかがいながら、三階の図書準備室に戻った。誰も入ってきていないことと、南京錠がかけられていないことを確かめた後、脚本を参加者全員分重ね合わせた。
　一度一階まで駆け下りた。呼吸を整えて、降りてきた階段とは反対側の方から昇っていった。まだ立村たちがいるのだったら、後ろから近づいていく形になるだろう。別に襲うわけではない。
　男子トイレと女子トイレが向かい合わせにこしらえられている。挟まれるようにして三人はまだ話し合いの最中だった。僕が階段を上がったところから見通した時、佐賀さんがうつむいているのだけがはっきりと見えた。何か、様子が変だった。
　足音を忍ばせても、階段を昇る気配は感じるらしく、僕がせっかく盗み聞き覚悟で忍び寄ったにも関わらず三人は黙りこくってしまった。黙られたら困る。まずはさりげなく自然な一言を投げかけてみた。
「あれ、どうしたの」
　立村が無理して笑顔を作っているのがありありと分かった。ポーカーフェイスを保とうとして、うまく行かない、おとひっちゃんに似た顔だった。早く生徒会室に戻れって言いたいんだろう。
　杉本さんが立村の背後に立って、ぶっ壊れそうなまなざしで佐賀さんをにらみつけていた。どうでもいい。僕の関心は佐賀さんの顔しかない。うつむいて指先で眼をこすっているのは、泣いていたからかもしれない。
　佐賀さんをふたりで泣かしたってことだろうか。
　――何考えてるんだろ。
　盗み聞きの誘惑には勝てなかった。
　目の前には男子トイレと女子トイレが向かい合っている。木製の扉だ。校内には部活動関連の連中以外いないようだし、よっぽどのことがない限り昇ってくることはないだろう。せいぜい顧問の萩野先生が戻ってくる程度だろう。先生だったらいくらでも言い訳が利く。
「あのさ、悪いんだけど、俺もちょっとトイレ行きたいんだ。これ、持っててくれるかな。ちょっと時間かかるかも、なんで生徒会室へ持って行ってくれると助かるな」
　暗に言葉へ、「大」の意味をこめた。
　立村は十部弱の台本を両手で受け取ってくれた。
「ああ、わかった」
　また二人の女子を交互に見つめている。僕は左腹を押えるようにして、トイレに飛び込みわざと個室に飛び込み、思いっきり派手に音を立てて扉を閉めた。今日は誰も使った形跡がない。ことの匂いもない。ってことは、やっぱりあいつ仮病を使って教室抜け出したってことだ。
　今度は音を立てないようにそっと戸を開いた。木造校舎のよさは、露骨にばたばた音が立たないところだろう。足音も立てないようにトイレ入り口の扉に近づいた。壁にもたれ、耳を押し付けた。

杉本さんの金切り声が一挙に響いた。
――この調子だと生徒会室にも聞こえてるぞ。
「立村先輩、私が悪いというのですか」
「悪いもなにも、今ここでけんかしたってしょうがないだろ。佐賀さん、さっきも言った通り、申しわけないんだけど今日は先に帰ってもらえないかな」
――佐賀さんを帰すだと？
立村の声だけが落ち着いていた。杉本さんはさらに食って掛かっている。声に抑揚はないんだけど、興奮しているってのが見え見えだ。相当、やらかしたんだろう。
「先輩、話を逸らさないでください。私は佐賀さんに頭がおかしいとか、病院に行きなさいとか、先輩とおんなじ頭なんだからしかたないんだとか、ひどいこと を言われたんです。なんでそこまでののしられなくちゃいけないんですか、言い返すことが悪なのですか。正しいと言うことを言い返したらどうしていけないん ですか」
「杉本、あとで落ち着いて考えような。佐賀さん、いろいろ大変だろうけれど、新井林にはちゃんと話しておくし、連絡もしておく。本当に申しわけないんだけど、今日は杉本をひとりにしてやってほしいんだ」
――佐賀さん悪いことしてないのに、なんでだよ。
なだめるように言い聞かせているらしい。佐賀さんの言い分が聞き取れない。しゃべっていないで、ひとりでがまんしているのだろう。
「私、別にひとりじゃなくてもいいです。私、何も悪いことしていません」
「わがまま言うな。今日はお前ひとりじゃないんだから。せっかく来たんだから、することだってまだあるだろ」
――することってなんだよ。
佐賀さんの返事はやはりなかった。やましいことを言っていなくても、言い返せないんだろう。本当のことを言われると返って逆恨みされるって、この前も話 していたっけ。こういうことが何度も、本当に小学校時代から何度も繰り返されてきたんだろう。本当のことを伝えても通じない相手なんだって聞いた。自分が 間違っていることを認めようとしない最低な女子なんだって僕は思っている。そんな女子をかばいたてて、正しい佐賀さんを追い返そうとするなんて、立村の奴、男子の風上にも置けない奴だ。ドアを蹴り飛ばして立村の顔をあさがお便器にうずめてやりたくなった。
「私、頭おかしくないんです。なんでそんなこと言われなくちゃいけないんですか。私、先輩と同じような病気なんかじゃないって、あれだけ言ってるのに」
「ほら、佐賀さんはそんなつもりじゃなかったんだろ、な」
相槌を求めている。でも返事はない。突然立村の声が慌てた。
「杉本、おい、どうした」
ドアの向こうではじめて佐賀さんの動きあり。僕はさらに壁へ耳をつけた。
「梨南ちゃん、もしかして吐きそうなの？」

さすがに立ち聞きだけではまずいだろう。僕は仕方なくトイレから出た。

杉本さんが背を丸めて、手を口に当ててしゃがみこんでいた。佐賀さんもしゃがみこもうとしたのを、立村が片手で制している。片方の腕に僕の持ってもらった脚本を、もう片方の手で背中をさするようにして、
「大丈夫か、苦しいのか」
「……大丈夫です。ひとりで大丈夫」
しぼりだすようにつぶやき、杉本さんは真向かいの女子トイレへ駆け込んでいった。その場ではがまんできたみたいだった。すぐに水道の蛇口を思いっきりひ ねった水音が廊下まで響いた。うちのトイレは男女問わずくみとり式なので、だいたい誰が何をしているかはわかってしまう難点がある。たぶん、杉本さんは僕 の想像した通り、吐き気に苦しんでいたのだろう。かすかにうめく声が聞きたくないのに聞こえてしまう。
佐賀さんがあとを追おうとしたのを、立村はまた呼び止めた。
「佐賀さん、悪いんだけど、清坂さんを呼んでもらえないかな」
「あの、私が梨南ちゃんの面倒みます。私、梨南ちゃんのうちまで連れて帰りましょうか、すぐ近くですから」
「いや、いいよ。佐賀さん、本当に悪いけどごめん。あとでちゃんと新井林にもあやまるから、今日のところは申しわけないけどさ、先に帰ってやってほしいんだ」
いやに立村は、杉本さんから佐賀さんを引き離そうとしている。だんだん口調が命令形になっているのが気に食わなかった。
――追い返すのは具合悪くなった杉本さんの方じゃないか。迎える水鳥側だって大変なんだぞ。
僕がいることなんて忘れているんだろう。この腹下し委員長が。
背中越しに立村の横顔を覗いてみた。佐賀さんがうつむき加減で小さく首を一度振り、生徒会室に向かおうとしていた。立村の表情は全くもって冷静沈着。動かなかった。
――冗談じゃない。佐賀さんを追い返そうだなんてさ。

もちろん僕も、短い間だけど考えなかったわけじゃない。
佐賀さんと杉本さんがトイレ近辺で言い合いをしていたのは疑いもない事実だろう。
本当に腹を下したのかどうかは別として、立村もトイレ前廊下で激しく言い合っているふたりを見つけて、仲裁に入ったんだろう。佐賀さんの言う通り、立村 は杉本さんのことをえこひいきしているってことが、よおくわかった。いじめたのが佐賀さんだと勘違いして、杉本さんを追い返そうとしたのだろう。
――公平に見ろっていうんだ。
でも、ここでうっかり僕が口出ししようもんなら大変なことになるだろう。立村は僕と佐賀さんが隠れて会っていることを知るよしもない。今日会ったのが初めてだと思っているだろう。おおっぴらに佐賀さんをかばうことははばかられた。

「あの、杉本さん大丈夫かな」
　僕はおずおずと、声をかけた。やっと気が付いたのか、立村が同じ無表情のまま振り向いた。黙って脚本の束を差し出した。受け取って僕は続けた。
「具合悪いようだったら、保健室に連れて行こうか？」
　あくまでも、親切心でってところを崩さない。はっとした表情で立村は眼を見開いた。返事はなかった。
「吐いちゃうくらいだからそうとう苦しいと思うよ。ジュースくらいだったら持っていってやるしさ。おとひっちゃんだってそのくらいのことは大目に見てくれるよ」
　まじまじと見つめ返す立村の表情は猫のようだった。
「保健室、空いているのか」
「うん、具合悪くて本当にだめだったらすぐに帰ってもらったほうがいいけどさ」
　どう出るか。僕はわざと幼く見えるように、おずおずと申し出た。佐賀さんも振り返り、僕の言うことを聞いていた。生徒会室にはまだ入っていない。
「悪い、そうさせてもらっていいか」
　もう、喜んで。杉本さんの顔をもう見ないで済むんだったら。空気もきれいになる。

　佐賀さんの後をついて生徒会室に戻ると、おとひっちゃんがすっかりご機嫌斜めで口を尖らせていた。おとひっちゃんは人に待たされることを極端にに嫌う。 短気な奴なんだ。損気なんだけど。 廊下の修羅場に気付いていたのかどうかはわからなかった。総田たちが様子をうかがうように僕と佐賀さんに口をあけた。
　僕はテーブルの上に脚本を置いて、おとひっちゃんにだけごめんのポーズ、両手を合わせた。佐賀さんは、おかっぱ髪の女子に近づき、何かをささやきかけていた。びっくりしたのだろうか、声がとんがっていた。
「え、杉本さんが」
「本当は私が残りたかったんですけれど」
　泣きそうな顔をした。どうして立村の奴は、佐賀さんの善意を素直に受け取らなかったのだろう。腹が立ってくる。もっともあれ以上杉本さんに引っ張りまわされるのはたまったもんじゃないし、佐賀さんが戻ってきたこと自体は正しいと思った。
「わかった、行ってくるね」
　軽く一礼して、おかっぱ髪の女子は小走りに出て行った。
「どうしたんだよ」
「杉本さんがトイレの手洗い場で吐いちゃったらしくてさ」
　その通りのことを言った。
　思いっきり川上さんが顔をしかめた。
「デリカシー持ちなよ、かわいそうじゃん」
　――意外だなあ。あの川上さんから「デリカシー」なんて言葉、出てくるなんてさ。
　そこんところは無視しておいた。総田も特別コメントを入れずに、両手を組み合わせて伸びを

した。
　さっきたんが隣りで僕をじいっと見つめてきた。重たいまなざしで、居心地悪かった。
「佐川くん、さっきの人、大丈夫そうなの？」
　僕より先に佐賀さんが答えた。すうっと自然に割り込んでくれた。
「本当は私も心配なんですけど、立村先輩が清坂先輩に代わるようにって言われてて。きっと、今朝から体調が悪かったんだと思います。でも無理していたんだと思います」
　――無理してくることないのに。
　もともとの原因が佐賀さんだけではないということがわかって、僕も罪悪感がだいぶ薄くなった。
「じゃあ青大附中の彼はまだか」
「保健室に行ったみたいだよ。一石二鳥ってとこみたいだよ。腹下りの薬ももらってきたいんじゃないかな」
　噂の主、立村評議委員長が戻ってきた。うつむいて、すっかり疲れた顔をしている。青大附中限定の悪い病気でも流行っているんじゃないか。伝染病なんじゃないだろうか。いきなり拍手で迎えたのは総田だった。ふくみ笑いで場が和んだ。
「間に合ったか？」　からかうように総田が声をかけた。薄笑いを浮かべ、立村は周りがら空きの席に腰掛けた。
「おかげさまで、助かりました。恥かくかと思った」
　――嘘つけ！
　僕はゆっくりと立村の伏せた眼を覗き込んだ。隣りで佐賀さんも気がついたらしく、一緒に同じことをした。ふたりの視線でぴんときたんだろう。立村はゆっくりと僕たちを見返した。何も言わなかった。
　女子がいなくなっても話は通じる。おとひっちゃんと総田は簡単に、水鳥中学の生徒演劇上演計画を説明し始めた。「友情は音色とともに」あらすじをひとくさり。

「佐川さん、私、どうしたらよかったんでしょうか」
　僕にしか聞こえない声で、眼を伏せたまま佐賀さんがささやいた。　テーブルに張り付くようにして聞き返した。
「あの人と話、してきたんだよね」
「梨南ちゃん、わかってくれなかった」
　――話の通じる奴だったらとっくの昔に片付いていたよな。
　わかりきっていることはつっこまずに、相槌を打った。
「どういうこと話した？」
「私が梨南ちゃんを救いたいんだってこと、このままだったらみんなに嫌われてしまうから、私が梨南ちゃんを守ってあげたいんだってこと、話したつもりだったんです。だって、あのままだと先生にも嫌われて男子にも無視されて、それからクラスの女子にも」
　うるんだ瞳から涙がこぼれそうでこぼれない。もっと言いたいこと言って痛めつけたのかと思

ったけど、違ったみたいだ。
「きっと、みんなから無視されるというのが、私わかっているから。だからなんだって」
　――だからなにをさ。
　僕が尋ねる前に、佐賀さんは教えてくれた。
「私が、評議委員になるのよって。そうすれば、先生や男子たちを私が押えてあげられるし、梨南ちゃんもこれ以上嫌われないですむのよって。だから私、代わ りに評議委員になって、梨南ちゃんを救ってあげたいのって、そう言ったんです。本当は小学校の頃からそうするべきだったんだけど、梨南ちゃんが怒るからで きなかったんです。でも無理しても、私が梨南ちゃんをかばってあげて、言いたいことを言って守ってあげなくちゃいけなかったんだって」
　――女子ってやっぱり、わかんないな。
　冷たい奴なのかもしれないけど僕は全然杉本さんに同情することができなかった。
　ふたつおいた席で、立村だけが何度も僕と佐賀さんをちらちらと眺めていた。たまたま隣りだからしゃべってるだけなんだって顔をし続けた。別にやましいことしてないんだから。でもちょこっとやましくならないといけないことも、話さなくちゃいけない。
「佐賀さん、さっさと帰れって言われてるんだから、終わったらさっさと帰るふりしなよ」
「さっさと帰るって、でも私」
「帰ったっていいんだよ、俺も一緒に生徒会室出るからさ」
　立村評議委員長は必死に追い返そうとしていた。奴が杉本さんびいきなのは、さっきの廊下の一件でよくわかった。目障りな佐賀さんにはさっさとは退散してもらいたいんだろう。それから。
「詳しいこと、その時に聞かせてほしいんだ」
　僕と眼が合い、佐賀さんはこくんと頷いた。

　側でさっきたんがきょろきょろそわそわしていた。僕に何か話し掛けたさそうな顔をしていた。佐賀さんに軽くあやまってから僕はさっきたんの顔を見た。
「佐川くん、青大附中の人たち、保健室に行ったの？」
「たぶんそうじゃないかな。そうした方がいいよって言ったんだ」
　ちょっと誇らしげに答えてみた。佐賀さんも隣りで頷いてくれた。
「そうなの」
　さっきたんは少し首をかしげていた。僕と佐賀さんの顔を交互に見つめながら立ち上がった。
「私、様子見に行ってみるわ」
　いつものようにさらさらした声で、はつかねずみのすました表情でだった。
「私も行きましょうか」
「ひとりで大丈夫。ごめんなさいね」
　佐賀さんにも同じくきょとっとした顔で返事して、さっきたんは音を立てないよう教室を出て行った。おとひっちゃんだけがちらっと戸口を見た程度で、別に さっきたんがいてもいなくてもかまわない雰囲気だった。生活委員ひとり、生徒会室だとやっぱり居心地悪かったのだろうと

、ちょっとかわいそうな気がした。
　僕の隣りには佐賀さんだけになった。ほんの少し声を立てても大丈夫そうだ。

　すでに総田とおとひっちゃんは、僕のこしらえた脚本を広げて、簡単にあらすじの説明を行っている。真面目に読みつづけているおとひっちゃんもさることな がら、みな水鳥中学生徒会連中は真面目ぶりっこに専念している。あの総田すらも「さむいぼでるぜ」と言っていた脚本を真剣に語っているじゃないか。笑い出 しそうになる。
「青大附中のみなさんと違ってうちの学校は所詮公立。公立だとお涙頂戴かもしくは民話とか、そういう一同寝ろ！ってタイプの話しかできないすよ。どうせ枠 にはめられているんだったら、とことん枠の中でやっちまおうということで、今回は社会問題となっている『学校でのいじめ問題』を取り上げたってわけです。 先生たちがいないから言えることですが、まあ、原作は死ぬほど臭い。こんなことでみんな目覚めたら世の中ラッキーだぜって言いたいくらいです。けど、あま りにも白々しすぎるゆえにギャグになるということもあるし、ギャグの中にも真実があったりすると。今回俺たち水鳥中学生徒会としては、そういう意味でこの 薫り高すぎる作品を選んで、俺たちなりにアレンジしたってわけです。まあ今回台本をいじってくれたご担当の、佐川がそこにおりますんで、作品アレンジに当 たっての思うところなんぞをいくつか、おい、言えよ」
　――おいおいなんだよ、俺にいきなり振るなよな。
　総田の奴、にんまり笑いながら僕に話し掛けるのはやめてほしかった。鋭い奴のことだ。僕と佐賀さんが語り合っているのをうすうす勘付いていたんだろう。 おとひっちゃんがずうっと脚本に没頭しているのとは違う。隣りで川上さんも鼻膨らませて笑っている。ど真ん中の内川会長も鷹揚に頷いてやがる。
「すごいアレンジですよね。佐川先輩、お忙しいところ申しわけないんですがお願いします」
　――忙しいってどういうことだよ！
　肝心のおとひっちゃんの方を見ると、ようやく顔を上げて一言、失礼なことを言いやがった。
「あとで俺が誤字脱字訂正しておくからな。安心しろ」
　しかたない。僕は立ち上がりぐるっと生徒会室の面々を見下ろした。立村評議委員長だけがまだ脚本に目を通している最中だった。別にこいつに何思われようがかまわない。
「では一応、ストーリーなんですけど、総田副会長の言う通り、今の時代に合わない話だったら、みんな寝ちゃうのは当然のことだと思ったのと、たまたま友だ ちから似たようないじめの話を聞いて、これは使えるぞって思ったからなんだけど。つい最近、青潟市内の中学で起こったことらしいんだけど。やっぱり本当の ことを書いた方がうけがいいかなって思ったんだ。ピアノよりもエレクトーンの方がいかにも今時って感じだし。俺が聞いた話もやっぱり、エレクトーンが弾け る子をいじめたってネタだったんだ。けど、最後にはいじめられていた女子の方がみんなに認められて、いじめっ子よりも上の立場になったんだって。ざまあみ ろって思えるよなあ。先生たちにも受けて、俺たちもカタルシス、っていうのかな、そういうのを味わえれば最高だなって思ったんだ」
　　佐賀さんをちらっと見た。僕が「エレクトーン」という語句をゆっくり繰り返した時、わか

ってくれたみたいだった。何度見ても飽きない佐賀さんの髪型、 正反対だった。僕の隣りでまた、耳に手をあてて髪の毛を直している。ふたっつに束ねたちっちゃな犬の髪型みたいだった。するんとして手が滑りそうだった。 思わず触れてみたくなった。
「俺、この台本書いててほんっと思ったんだけど、自分ができないからって言って、できる人にやっかんじゃう性格の女子って、ほんっと最低だなあって思った よ。ほんとにこの脚本でやるかどうかわかんないけど、僕だったら終りの方でいじめっ子が救われるなんてこと、必要ないと思うんだ。それだけ悪いことしてい るんだから、当然叩かれて当たり前だよ。思いっきり不幸にして、それで終りにすれば本当は俺たちすっきりするんだけど。けど先生たちがうんと言わないよな あ。このいじめっ子にも事情があるんだ、かわいそうなんだって言い張るだろうから僕も入れたけど。でも、こういう奴、やられて当然だよな。とことんやり返 されて不幸になって、みんなに笑われて終り、ほんとはそういうラストが本当なんだって思うんだ。どう思う？　おとひっちゃん？」
　あえて振らせていただいた。おとひっちゃんに。杉本さんがいないのがたまらなく残念だ。
　予想通りおとひっちゃんはくそまじめな顔でしっかと頷いた。がしっとした瞳で持って答えた。
「そうだな雅弘。俺も今読み終わって思った。人間として、いじめなんてする奴は心の弱い、最低野郎だ。これは男子女子関係ねえよ。こういう奴がいたら」
「いたら？」
　エキサイトするおとひっちゃんに投げつけた、いつもの読みが当たった。
「俺なら、舞台の上でぶんなぐってやるな。最後の助ける奴もろとも怒鳴りつけてやるな。雅弘、お前、才能あるよなあ。すげえよ。見直した」
　総田と川上さん、内川会長が訳知り顔でにっこり笑っている。ちゃんと僕の指示が隅々まで浸透している証拠だ。惜しむらくは、ここにぶんなぐられるべき対象の女子がいないことだった。

「佐川さん」
　席について、ジュースを飲み干した。佐賀さんの前で思いっきりクッキーにかぶりついた。。
「あの話、私のために」
「今は内緒だよ」
　もごもごとごまかしながら、僕はそおっと佐賀さんの瞳の奥を探った。
　ちゃんとわかってくれている。やっぱり、本当に頭のいい人の顔していた。泣きそうだけど、泣かない。そんな瞳だった。
　今日の杉本さんの顔と唇が異様さでいっぱいだったことを思い出した。うちの母さんが参観日の時にしてくる顔とおんなじだ。きっと、校則違反の化粧してき たんだろう。おとひっちゃんに逢うためにだろう。他の連中、もしくはおとひっちゃんが気付いたかどうかはわからない。ただ、男子代表として言わせてもらえ れば「気持ち悪い顔」だった。自覚全然ないんだろう。
　僕は杉本さんのことを悪く思いすぎているのかもしれない。佐賀さんの言い分を鵜呑みにしているだけなのかもしれない。もしかしたらもっと純粋で性格のい い女子なのかもしれない。けど

、どうしても思わずにはいられない。避けずにはいられない。いるだけで目障りだと、思わずにはいられない。
　――おとひっちゃんだって、出迎えた時逃げようとしたじゃないか。
　――大好きなさっきたんの側に張り付こうとしたじゃないか。
　――そうだよ、みんなあの顔が気持ち悪いんだよ。

「いいかな、発言して」
　もうすっかり腹の調子も元に戻ったらしい……腹下し野郎と呼んでやろう……立村評議委員長が右手を挙げた。おずおずと、遠慮がちに。
「おう、意見聞かせてくれ」
　おとひっちゃんも、すっかり機嫌よさげだった。どうもおとひっちゃん、この立村って奴とは仲良くなっているらしい。言葉が軽かった。熱く語った後だけに、少し汗が噴き出しているのはご愛嬌だ。
「一通り聞かせてもらったんだけど、たぶんうちの学校のやり方とは正反対だから、あまり参考にはならないかもしれないなってことがひとつ。それともうひとつが」
　膝の上でぱちぱちと金具の外れるような音がした。うつむくようにして膝のあたりを覗き込み、
「もし、よかったら、二年前のビデオ演劇用カセットテープ、持ってきたんだ。ビデオの方は学校から持ち出し禁止だからだめだったんだけどさ。カセットテー プだったらかまわないってことでダビングしてきたんだ。台詞ばっかりの劇だったから、たぶん雰囲気はつかめると思うんだけどさ。よかったら聞いてもらえる かな」
　立村の表情は揺れてなかった。たぶん脚本の話を、思いっきり眠い気持ちで聞いていたんだろう。１２０分のカセットテープを机に載せ、すいっとおとひっ ちゃんの方へ滑らせた。ナイスキャッチ。片手で止めたおとひっちゃんは、立村に向かってからからっとテープを振ってみせた。
「演劇なのか」
「そう、『忠臣蔵』やったんだ」
　――『忠臣蔵』ったら、時代劇だよ。
　しゃれでも冗談でもないらしく、立村は大真面目おとひっちゃんと総田に頷いてみせた。僕には一切振り向かないのがしゃくだった。川上さんと内川がまたにこやかに棚のあたりを探り出してうるさい音を立てていた。
「関崎先輩、ラジカセありますよ。モノラルだけど、音量をめいっぱい大きくすれば十分ですよ」
　英語の授業でたまに先生が持ってくる、大きくてやたらとスピーカーが場所取っているという、古臭い奴だ。生徒会室には意外なものが転がっている。知らなかった。
「そうか、あったか。悪い、内川、コンセント入れてくれ。すぐにこれから聴こう。立村、実際何分くらいなんだ」

「裏表二時間入っているけど、全部聴かなくたっていいだろ。だいたい雰囲気分かればさ」
「いや、あとついでに聞きたいんだけどなあ」
　にやつく総田がテーブルに腹ばいとなり、頭だけを立村に向け尋ねた。
「あんた、『忠臣蔵』の何役やったわけ？」
「……浅野内匠頭」
　総田、ぶぶっと顔を伏せたまま受けるのは、一応交流会なんだしやめた方がいいと思う。
　僕の隣りで佐賀さんも、にっこりした。
　上品に笑ってくれるのはひとりだけ。芦毛の王子様立村評議委員長は、おとひっちゃんだけをにらみつけるようにして、しばらく唇を噛んでいた。笑われるような事実を言うから、受けただけのことだ。おとひっちゃんも遠慮なく爆笑していた。
「ってことは、『江戸城松の廊下の刃傷沙汰』も当然、入っているんだな」
「いいだろ、そんなの」
　さっきまで沈着冷静で佐賀さんを追い返そうとしたり、委員長の顔したりしていたくせに、結局は蝋人形のうすらぼけに戻ってしまう。やはりこの男は、変 だ。　おとひっちゃんがカセットテープをセットし、テーブルの真ん中に置いた。わざわざ立村にスピーカーを向けた。またむくれたようにうつむく立村。比較 対照して、笑いをこらえる総田たち。

　――此間の遺恨覚たるか！
　まだがりがり削られていない男子の声が、ラジカセのスピーカーから流れた。
　『江戸城松の廊下の刃傷沙汰』らしい。
　テーブルを叩いてもだえる総田・川上・内川たちと、同情を禁じえない顔で見つめているおとひっちゃん。そっぽ向いている立村評議委員長。さっきたんが一 度戻ってきて、青大附中ふたりの荷物をかかえて出て行った。行き際に立村へ何かをささやいていたけれど、僕にはそんなのどうでもよかった。生徒会連中が テープ鑑賞に熱中している間、僕は佐賀さんとふたり、おとなしくお菓子をつまんでいた。
　クッキーがおいしすぎて、困った。だって、食べれば食べるほど、甘くなるんだから。

　僕の言った通りに佐賀さんは、会が終了後、すぐ立村評議委員長に
「それでは梨南ちゃんをよろしくお願いします」
　と挨拶して教室を出た。僕もおとひっちゃんに、
「じゃあ、俺もちょっと借りた部屋、片付けてくるね」
　と一声かけておいた。総田には目配せしたけど、全くおとひっちゃんはおかしいと思っていないみたいだった。内川を始め、生徒会連中はみな図書準備室のこ とを理解してくれているみたいだ。ちゃんと、おとひっちゃんには内緒にしてくれているみたいだ。ありがたい。参謀たる僕への、ささやかなお礼ってとこなん だろうか。
　結局、杉本さんともうひとりの青大附中女子評議委員は帰ってこなかった。さっきたんが、あの妖しい「忠臣蔵」テープを聞いている間に荷物を持って行った ところみると、あの人たちも先に帰ったに違いない。気分悪そうだったし、やっぱり顔を出すのも恥ずかしかったんだろう。
立村評議委員長がおとひっちゃん に近づき、なにやら話している。生徒会室を出て行きがけに耳にしたのは、
「迷惑かけてすまなかった。あのさ、そっちの顧問の先生に挨拶してっていいか？」
　だった。

　佐賀さんは階段を一段降りたところで待っていてくれた。
「ごめん、じゃあ上に行こうか」
「本当にいいんですか。私、他の中学なのに」
「いいっていいって」
　――佐賀さんのためなんだからさ。
　生徒会連中が帰る前に一度、様子を見にきてほしいと頼んである。閉じ込められる心配はない。
「けど、大変だったね」
「はい、でも平気です」
　小さい声でしゃべっているつもりなのに、廊下にはびんびん響いた。外からは女子のジャージとおんなじ色の、茶色っぽい赤のつぼみが見え隠れしていた。何 となく咲きそうだった。生徒会室ががんがんと熱すぎたから、廊下の冷え具合がちょうどいい。図書準備室には小さい電気ストーブを用意してある。佐賀さんも 僕も風邪ひかないで済みそうだ。
　南京錠をポケットにつっこみ、まずは引き戸を開けた。誰もいない。あたりまえか。
「これでも片付けたんだ」
「ええと、私」
　すぐに窓辺の席へ連れていきたかった。窓を使わない本棚でかばうようにしてあるので、戸口からは見えない。ちょっとだけ部屋が狭かった。でも大丈夫。どうせ総田が迎えにくるまでは誰も来ないんだから。

「ほら、こっち」
　ジャンバーを着たまま僕は、テーブルの隙間を横になって通った。一緒に佐賀さんが、コートを羽織りながらついてきた。急いで椅子の足下にセットしておいた電気ストーブに電源を入れた。
「まだ寒いけど、がまんしてくれるよね」
「私、大丈夫です」
　窓辺には、夕暮れ色が漂っていた。三月に入ってからだいぶ日の降りるのも遅くなった。まだまだ夜になるには早かった。佐賀さんがどこに住んでいるのかはわからないけれど、青大附中の近くだったら十分だろう。今日、何で来たんだろうか。
「自転車です。梨南ちゃんは清坂先輩の自転車に乗せてもらってきたはずです」
「わあい、二人乗り、やっちゃいけないんだ。俺もやってるけど」
　からかい調子で答えてみると、
「だって、梨南ちゃん、お母さんから自転車に乗ってはいけないって言われてるんです。学校も歩いて通っているんです」
　――なんて家庭なんだ。
　もう過去の人、扱いにしたい。いいかげん軽蔑も面倒になった。
「もう二度と会うこともないだろうから、きっと杉本さんの話は今日で最後になるよ」
　僕は言い切り、佐賀さんから詳しい事情を聞き出すことに専念した。
　話の合間に何度か、耳に手を当てて、束ねた髪のほつれを直すしぐさに、何度か僕は目をそらした。変なこと考えたらまずい。今ここにいるのは、鈴蘭優のポスターじゃない、佐賀さんなんだ。
「私、最初に言ったんです。梨南ちゃんに」
　唇を一本に結び、窓辺の橙色を見つめるようにして佐賀さんは話し始めた。
「小学校の頃、本当は梨南ちゃん、みんなから馬鹿にされてたのよってことから。今まで私が気付いていたけど、話したら傷つくかもしれないと思って言わなかったことを全部言いました」
「たとえばどんな？」
「男子には、いえないことばかりです」
　言葉を濁した。男子と違って女子がエッチな話をするとも思えない。いろいろあるんだろう。
「あ、でもこの前お話ししたことがほとんどです。ほんとは、梨南ちゃんピアノ習いたかったんでしょとか、ほんとは新井林くんのことが好きだったんでしょとか、最近男子に無視されているのがつまらなくて、一生懸命ちょっかい出しているんでしょとか、あと」
　僕の方を見た。
「佐川さん、私のこと軽蔑しないでくれますか」
「約束するよ」
「本当は、私みたいになりたかったんでしょって」
　のどのところでうっと何度もこみ上げるのをこらえていた。相当、言うのが辛かったんだなって僕は思った。

　ずっと言いたくてもいえなかったことが多すぎたんだ。きっと佐賀さんは。
「私、梨南ちゃんみたいに成績よくないし、泣き虫だし、可愛くないけど、でも友だちはたくさんいたんです。男子も女子もたくさんいたんです。先生も私のこ とみんな好きだって言ってくれました。けど、梨南ちゃんはそうじゃなかったんです。一番物知りで、可愛くて、お姫様みたいだったけど、男子からも女子から も、先生たちからも笑われてたんです。うちの母が良く言ってました。梨南ちゃんはふつうの子じゃないから、親切にしてあげるのよって」
　――親切にしてあげる、か。
　言葉の奥に苦いものを感じてしまった。風邪をひいた時に飲ませられた、オブラートに来るんだ漢方薬みたいなものだった。
「だから、女子たちは梨南ちゃんに『親切』にしてあげただけなんだってこと、教えてあげたんです。私の思い込みじゃないと思います。だって、この前の同窓会の時も、クラスだった女子がみんな言ってたし。先生も言ってたし」
　大きく深呼吸して、今度はガラスを真っ正面から見据えて、
「私、いろいろ考えました。梨南ちゃんは私を無視しているけど、本当は私みたいに男子たちと仲良くしたかったこと、わかってました。六年間、梨南ちゃんの 周りには『親切』にしてあげたいという人ばっかりで、本当のことを言ってくれる人が、今でもいないんです。梨南ちゃんのことを大切にしてくれるのは立村先 輩しかいないのに無視しちゃって、関崎さんとか新井林くんとか、手の届かない人ばかり追いかけてるんです。小学校三年の時、クラスで特殊学級の教室を一緒 に掃除する決まりになっていたんですけど、梨南ちゃん、そこの子にはものすごく人気があったんです。ずっと壁に頭突きしていた子には、黙ってくっついてあ げたり、同じことばかり話してうっとおしい子にも付き合ってあげたり。いつも梨南ちゃん、そういう子たちには好かれてたんです」
　――いるんだ、ああいう人が好きな奴が。物好きだよなあ。
「だからみんな言ったんです。梨南ちゃん、本当はそのクラスにずっといたほうが楽しいんじゃないかって。うちのお母さんも言ってました」
　なんだか意外だった。実は杉本さん、人によってはいい人だと思われるのかもしれない。佐賀さんや健吾くんには迷惑なことでも、特殊な好みの奴にはには親切に感じられることもあるらしい。
「でも、梨南ちゃんそれ聞いてものすごく怒ってました。せっかくそういう子たちが懐いてくれているのに、逃げたりするんですから。逃げても逃げても、その子たち、梨南ちゃんのことが大好きだから離れなくって、結局、あきらめて一緒に遊んであげてたみたいです」
「まるで、立村みたいにか」
　大きく頷いた。
「梨南ちゃんにはあの子たちと同じような立村先輩の方が向いてるんです。どんなに逃げても嫌っても、立村先輩だけは必死に守ってくれてます。ほんとは梨南 ちゃん、そういう人たちと一緒にいる方が幸せになれるんだと思います。新井林くんや関崎さんのような人は、向いていないんだと思うんです」

――おとひっちゃんかあ。
学校祭三日目の座談会挨拶の、おとひっちゃん爆弾発言を思い出した。
自分の立場を犠牲にしても、すべてをかけて勝負するところ。僕ならもっと要領よくやるけどあえて玉砕勝負するおとひっちゃんが、僕は好きだった。
そんなおとひっちゃんと、バスケ部の花形・健吾くんと重ねてくれているのが、僕はたまらなく嬉しい。杉本さんにはもったいない相手だって、言ってくれている。
「おとひちゃん、ほんと、いい奴なんだ。ちょっとばかだけど、でも本当にいい奴だよ」
僕は繰り返した。言葉の裏には隠しておいた。
――杉本さんなんかには、やれないよ。あいつを。

「立村先輩がなんで梨南ちゃんのことをあそこまで好きなんだろうって不思議に思っていたんです。去年の十二月くらいにその理由がわかりました」
さらに佐賀さんは話してくれた。
「立村先輩はふつうの人よりも、数学の能力が劣っているんだそうです。健吾が言ってましたし、先生たちもみな知っているみたいなんです。うちのお母さんに聞いたら、生まれつきの障害ってのがあって、一生直らないそうなんです」
――そういえば、指使って計算していたって言ってたよな。
総田が確か、話していた。
「たぶんですけど、梨南ちゃんのことを本当に理解できるのは、そういう風に梨南ちゃんと同じ思いをした人でないとわからないのかもしれないって思いまし た。立村先輩、学校では女子に物笑いにされてる人だし、梨南ちゃんと同じようにいじめられていたらしいって聞いてます。だからなおさらなんじゃないかっ て、思うんです。だから梨南ちゃんを守ってあげたいって思うんじゃないでしょうか。さっきも私と梨南ちゃんが話をしていた時、立村先輩が割り込んできて私 に帰るように言ったんです。その時、梨南ちゃんは立村先輩に『同じ病気じゃない』って言ってました。私、それが梨南ちゃんの気付いていないとこなんだって 思ったから言ったんです。立村先輩しか、梨南ちゃんを本当にわかってくれる人はいないし、好きになってくれる人なんていないって。梨南ちゃんとおんなじ経 験して、同じこと考えている人はあの人しかいないのよって。関崎さんみたいな人は梨南ちゃんの手には届かないのよって。健吾……新井林くんと同じことになるわよって」
また、名前を呼び捨てにした。気を遣っているんだろうけれど、何かの拍子でぽろっとこぼれる。僕が顔をしかめたのを読み取られたのは情けない。
「ごめんなさい。けど私、関崎さんのように成績が良くて、運動神経抜群でって人、梨南ちゃんには向いていないと思うんです。梨南ちゃんが憧れている人は きっと健吾……新井林くんみたいな人かもしれません。でも、そういう人にはどんなに努力しても、嫌われることしかできないんです。私、それ、七年間見てい ていやってほどわかったから、だからはっきり」
「いいよ、もう、そんなこと忘れたほういいよ。佐賀さん」
女子トイレか、廊下か、その辺はわからない。佐賀さんの持っている力をすべて尽くして、杉

本さんに懸命に訴えたんだろう。
「評議委員を来年私がやるってことも話しました。担任の先生にはみんな話してあるし、了解ももらってるって。そうしたら梨南ちゃん言いました。『私の後ろずっとくっついてきたくせに、なにができるっていうの』って」
「それはひどいよな！」
「いいえ、私、言われてもしかたないんです。でも、梨南ちゃんがもし評議委員になっても、男子にまたいやなことされて、女子たちからは物笑いにされるのが 私にはわかるんです。そんな思いさせたくなかったんです。もし私が評議委員になったら、きっと男子たちはわかってくれて、梨南ちゃんをそっとしてくれると 思うんです。新井林くんも協力してくれると思うんです。先生もこれ以上、梨南ちゃんに厳しいこと言わないでくれると思うんです。そして私が梨南ちゃんに、 みんなが本当にどう思っているかをわかりやすく、わかるように説明してあげるようにすれば、もっと変わると思うんです。私、自信ないけど、でも」
「そんなに杉本さんにこだわるのってどうしてさ。俺、これ以上佐賀さんが傷つくのは損だと思うよ。無視すればいいんだよ」
　きっと言い返す表情に、僕は見とれてしまった。頬に橙色がふわあと差した。
「気に入らないからって無視することって、梨南ちゃんと同じことだと思うんです。私、おんなじこと、したくない」

　目の前にゆっくりと下りてきた、丸い太陽のかたまり。
　ガラスに跳ね返っている。佐賀さんは再びそれに目を映した。僕も追って見つめた。まぶしくなるのをこらえて見据えた。
「佐賀さん、俺のやったことって、それじゃ許せないかな」
「え？　佐川さんの？」
　おなかの中からどす黒い煙が立ち昇りそうで、ごろごろしてきた。
「あの、台本のこと。俺はもしかしたら、杉本さんと同じことしてたのかなってさ」
「でもそんな」
　うまく言えない。佐賀さんがどうして杉本さんをあそこまでかばおうとするのかわからなかった。せっかく習いたかったピアノを、嫉妬に巻き込まれたくない からという理由でエレクトーンにした惨めさ。自分が気に入っているピンクのノートを、いやみ言われてしまったから使えなかった寂しさ。いろんなことがいっ ぱいあったんだと思う。そんなことされても、きっと佐賀さんはがまんしてたんだろう。杉本さんはいい子なんだと言い聞かせてきたんだろう。でも、本当は大 嫌いだったって言っていたじゃないか。だから復讐させたかった。言いたいこと言って傷つけて、ざまあみろと笑ってほしかった。でも佐賀さんは結局、杉本さ んを「かわいそう」という理由でかろうじてとどめを差さずに帰ってきた。
　――気に入らないからって無視することって、梨南ちゃんと同じことだと思うんです。
　――私、おんなじこと、したくない。
　僕のしたことって、杉本さんと同じことだったんだろうか。

佐賀さんがしたくなかったことを、無理やりやってしまったんだろうか。
言わずにはいられなかった。
「あれは、杉本さんに読ませるつもりだったんだ。あそこまで自分のしたことをつぶさに書いてあれば、きっとあの人も反省して、佐賀さんに泣きながらあやま るんじゃないかって思ったんだ。けどさ、俺、そんなことする必要なかったんだね。佐賀さん、いつか俺みたいに強くなりたいって言ってくれたよね。そんなこ とないよ。佐賀さんの方が俺なんかより、ずっとずっと強いよ。あんな時代錯誤のお涙頂戴劇なんて読ませなくたって、佐賀さんは杉本さんをこてんぱんにやっ つけちゃったんだ。思いやり持って、吐いてしまうくらい具合悪くさせてしまってさ」
「いえ、たぶん梨南ちゃんもともと具合悪かったんじゃないかなあって」
「かもしれない。けど、佐賀さんがまっすぐ立っていて、正しいことをきちんと話していたから、あんなふうに杉本さん取り乱して泣きそうになったんだと思う んだ。どんなにヒステリーを起こしても、佐賀さんは全然動じなかったよね。俺、それがすごいと思うよ。あんな台本のいじめられっ子がわざとらしい感動的台 詞連ねているけど、そんなのとは全く関係ない。今ここにいる、佐賀さんの方が誰よりも強いんだ。だから俺」
咽から出てくる言葉は止められなかった。太陽に向けていた目がお互いぶつかり合い、痛くなった。
「佐賀さんにこれからも、交流会に関わってほしいんだ。杉本さんのことなんか抜きで、おとひっちゃんのことなんかどうでもいい。それだけの力、持ってるんだ。自信もって、評議委員になって、また水鳥中学に来いよ」
ぼろぼろに崩れた目のふちと口元で、また泣いてしまうんじゃないかって気付いた。こんなこともあろうかと、ちゃんとティッシュを渡した。手に取らないで顔を覆った。目だけ出していた。
「佐川さん、私もわかんない」
小さくささやいた。
「どうして私、佐川さんの前だとこんなになっちゃうんですか。私わかんない。どうしてそんなに私のこと、わかるんですか」
「どうしてって言われても」
「どうして佐川さん、青大附中に来てくれなかったんですか」
――成績追いつかないって言えないよ。
太陽の沈むのを眺めていた。烏の影が目の前の教室に映っていた。
泣き止むまで物思いにふけろうと思った、その時だった。

「頼む、会わせてくれ」
「立村、落ち着け、とにかく俺の話を聞いてくれ」
「直接話をしないといけないことだってあるはずだ。悪い、入らせてくれ」
問答しているのが聞こえる。ひとりはおとひっちゃんだってすぐわかる。あせっているから。言い方はきついのに冷静なしゃべりなのが立村だろう。

　部屋を借りたこと自体はおとひっちゃんも知っている。でも佐賀さんと一緒にいるところを見られたらしゃれになんない。
「立村先輩がいるんですか」
　ふうっと顔を上げ、両目をこする佐賀さん。あどけなかった。
「うん、おとひっちゃんと一緒みたいだ。俺に用があるみたいだ」
　さっさと僕が出て、立村の用事を聞いてやるのがいいのかもしれない。おとひっちゃんの慌てぶりが気に掛かる。そんなにやばいことを僕はしていないはず だ。それとも、杉本さんともうひとりの女子がいなくなったから探しているのだろうか。僕が悪いこと、何かしたっていうんだろうか。
「とにかく出てみる。大丈夫だよ。俺、佐賀さんがここにいること、言わないからさ」
　背筋がぴくぴくするのを隠して、僕はテーブルの横をまた、すり抜けた。
「どうしたの、おとひっちゃん。あ、さっきはどうも」
　中に入れるわけにはいかない。佐賀さんが物静かとはいえ、気付かれないとも限らない。立村の表情はそれほど荒れていなかったので僕も少し気を楽にした。おとひっちゃんだけがひとりで焦っている。
「雅弘、お前何かたくらんだのか！」
　立村よりもエキサイトしているおとひっちゃん。
　思いっきりとぼけることにした。
「何をって、何をさ」
「な、そうだろ、お前何もしてないよな。何も後ろめたいことしてないよな。そういう奴じゃないよな！」
　力をこめておとひっちゃんは僕に吸い付く。隣りの立村はやはり、蝋人形の静かな佇まいのままだった。
「当たり前だよ。あの、で、俺に何か用？　今、片付けていて忙しいんだよ。おとひっちゃん、あとで連絡するよ。総田たちも片付け大変なんだろ。早く戻りなよ」
　そらぞらしく続けた。背中のドアはしっかりと閉まっていた。
「ああ、な、わかっただろ、立村。お前の気のせいだと思う。だから」
　どもりつつおとひっちゃんは立村を階段の方へひっぱり出そうとしている。背丈からするとおとひっちゃんの方がずっと高いし、体格だってがっちりしてい る。腕をひっぱったら蝋人形、一発で折れるだろうに。折れなかった。動かなかった。ただ黙って僕を見つめていた。コートは着ていない。抱えている。
「中で話をしたいんだ。少しだけでいい。入っていいか」
「困るよ。ここは水鳥中学なんだよ。青大附中じゃないんだよ」
　よけいなことを言い出したおとひっちゃん。本当にたまったもんじゃない。
「雅弘、話だけ聞いてやれ。立村も一度聞けばわかるだろ」
　しかたない。手っ取り早く済ませるか。佐賀さんは窓辺だから、戸口付近だったら気付かれないだろう。

「いいよ、けど椅子ないから、入るだけだよ。水鳥中生しか見せちゃいけない本だってあるんだよ」
　立村は頷くと、黙って戸をひいた。よかった。薄暗いから佐賀さんの気配は感じられない。

　僕が背を向けたまま、立村に向き直った。おとひっちゃんが後ろでむっすりとにらみつけている。僕と、立村の背中と両方をだ。
　まず見抜かれているとは思わないけれども用心に越したことはない。ふんと鼻で笑うようにして見上げた。
「早くしてほしいんだ。暗くなっちゃうから」
　立村は黙って、かばんから何かを取り出した。一度おとひっちゃんの方を見て、戸が閉まっているかどうかを確かめるように手を伸ばした。ページを扇状にぱららと広げ閉じた。
「この台本に手を入れたのは、佐川くん、君だって聞いたんだけどさ、本当なのか」
　やはり腰砕けの蝋人形。言い方は静かだった。かんたんに言いくるめることができる。
「うん、今日も話に出てただろ？　青大附中のビデオ演劇みたいなことを、うちの学校でもできないかなっておとひっちゃんと総田が話し合ってて、俺も手伝え たらなってことで用意したんだ。けど、青大附中みたいに『奇岩城』とか『忠臣蔵』とかやったら大騒ぎになって、結局先生たちからやめろって言われるだろ。 だから、ちょっと臭いかなあと思ったんだけど、先生受けしやすくて、話もギャグにできるような内容にしたんだ。だよね、おとひっちゃん」
　おとひっちゃんの言うことは信じそうだ。この男。
「それはさっき聞いた」
　立村の表情は変わらない。静かにページをめくった。
「聞きたいのは、誰から元ネタを手に入れたのかってことなんだ」
「いや、噂だよ、噂。青潟でこういうことがあったんだよってこと、先生たちが話していたからね」
　徹底的にしらを切る。冗談じゃない。僕を信じてくれるおとひっちゃんには悪いけど、今はうそつきになるしかない。
　僕の背中にいる、あの子のために。
「似た話を別の奴から聞かせてもらったことがあるんだが、それは青大附中からの情報なんてことはないか」
　――なるほど、別の奴なあ。
　全く動じるようすもなく、淡々と尋ねつづけるのはどうしてだろう。焦るようすもなく、ただページをめくったまま立ち尽くし、僕を見つめるだけだ。見据えるのではなく、自然に、なんも考えてないって顔をした。
「さあ、そうかもしれないけど、俺も学校名まで聞いた記憶ないしさ」
　あらためて立村の顔を見上げた。僕よりは背が高いんだと初めて気付いた。きちんとネクタイ締めているし、崩した着こなしをしていない。きわめて優等生って顔をしている。手も顔も、おとひっちゃんと比較して露骨に白さが冴える。

「いや、間違いだったら申しわけない。この前うちの学校に来てくれた時、会えなかったから代わりに誰かへ伝言してくれたのかなと思ったんだ。俺の知っている話を、きっと青大附中の別の誰かから聴いたんだろうなと思っていたから」
「え？　俺行ってないよ」
　僕が立村と顔を合わせたのは、「交流準備会」一度だけだ。おとひっちゃんとセットになって並んでいた時だけだ。
　今日を含めて、二回目だ。そんなため口で質問されるような付き合いじゃないはずだ。
「ほら、校門で待っていてくれたことあっただろ？　うちの学校の友だちが気付いて教えてくれたからさ、すぐに行ったんだけど、一足早く、うちの新井林たちと出て行ったからさ。ちょうど後ろ姿だけ拝ませてもらったんだ」
　立村の唇がほころんだ。薄く、かすかに。おとひっちゃんには気付かれない程度に。続けた。
「あとで新井林呼び出していろいろ聞いたんだけどさ、あいつも口が堅くて、なかなか教えてくれないんだ。プライベートのことはあまり聞く気もなかったからまあいいかとは思ったんだけど、今日少しあいつに頼まれていたことがあったしついでにさ」
　――健吾くんに頼まれた？
　猛烈に速く頭の中が回転を始めた。ねじが巻かれていく。何か、見落としていたものがあったのだろうか。わかんない。僕は慌てておとひっちゃんに合図を 送った。早く、こいつを連れ出してほしい。けどおとひっちゃんはどまじめ顔で突っ立っているだけだ。立村だってきっと、わからないはずだ。まさか、あの日 のことか。三人で『リーズン』の階段椅子でひたすら語った時のことだろうか。思い当たる節がある。隠したい。言えない。だけど、目の前の蝋人形は手を緩めない。

「俺もあまり恋愛沙汰とかわかんないけどさ。新井林、かなり心配していたらしいんだ。いきなり同級生の女子を代行にするなんて勇気いることだしな。一応 さっき、報告するために電話かけてみたんだけど、やはり案の定なんだ。俺も誤解を招くようなことをあいつに伝えたくないから、きちんと確認だけ取っておこ うかなと思ってきてみたんだけどさ」
　言葉が乱れず、さやさやと。静かに続いた。
「もしかしたら、もしかするかもな、とは思っていたんだが、やっぱりそういうことなんだな」
　ここには佐賀さんの荷物なんて見えないはずだ。影も形もないはずだ。あの棚の影に黙って座っているはずなんだから。
　――振り向いちゃいけない。
　僕は気を張って首を振った。きわめて自然に振舞おうとした。蝋人形の目にどういう風に映ったかはわからないけれど、僕がおとひっちゃんや総田にしていることと一緒だった。
「なんだよ、もしかしたらもしかするかもって」
「エレクトーンの話、よくここまで本当のこと聞き出せたなって思ってさ」
　立村の目がゆっくりと僕の肩を透かしていった。棚から洩れる夕陽がかすかに洩れている。影なんて映っていないだろうか。でも佐賀さんはちゃんと帰った振りをしていたはずだった。

「エレクトーンのことってなんだよ。ピアノよりも今時っぽくしたかっただけなのに、なんでだよ」
　入れちゃいけない。どんなに攻められても僕が倒れるわけにはいかない。堤防にならなくちゃいけない。
「立村、どういうことだ？　エレクトーンって」
　相変わらず緊張感のない発言のおとひっちゃんがいる。この時だけは助けてほしかった。
「あのさ、もうこのくらいでいいかな、俺ほんとに急いで帰らないと家の配達があるからね」
　僕が一歩おとひっちゃんの方へ踏み出した瞬間。奴も僕に一歩近づいた。

　思わずえびぞった。左の頬がばしんと響いた。鼻がひんまがりそうになり、一度わおん、と鳴った。
　目の前には、すっかり雨漏りのにじみ出た天井。かろうじて背中のテーブルに腰を打ちつけて倒れずにすんだ。しっかと後ろのテーブル端を握り締め痛みをこ らえた。腰と頬と耳と目。腰がぬけたみたいだった。立っていられない。とうとう一発ストレートをかました蝋人形の前にへたり込んでしまった。二発目は来な かった。
「立村、やめろ、やめてくれ！」
　おとひっちゃんが渾身の力を振り絞り、立村の両手首を押えていた。
　何度か利き腕の方を動かし、振り放そうとしたけれど、おとひっちゃんに腕力はかなわなかったらしい。あきらめ、なるがままに振り上げた手を下ろした。後 ろのおとひっちゃんときたら血相変えてるじゃないか。ぺたんと座ったまま、僕は半ば冷静にふたりのもつれ合うのを眺めていた。耳鳴りと鼻血がうっとおしい と思いながら。佐賀さんのことはなぜか考えなかった。ただ、痛みに酔っていた。
　――あれ、おとひっちゃん、どうしたんだよ。なんで俺の前に立ってるんだよ。なにするんだよ。
　もう反抗するのをやめた立村がうつむき加減で僕の顔を射た。　さっき僕の頬を拳骨で殴り飛ばした時とおんなじこぶしが、ゆっくりと緩んでいった。殴った ばかりでまだ、あいつも余韻を覚えているんじゃないかって感じだった。手を離しておとひっちゃんはするっと僕の前に立った。学生服が擦れててかてかだっ た。立村の姿が隠れて見えない。こんな風にしておとひっちゃんは、小さい頃僕をかばってくれたっけ。だんだん緩やかにひいていく耳鳴り。耳の穴をかっぽじった。ゆっくりおとひっちゃんが腰を曲げ、僕の前に座り込んだ。正座した。
　――おとひっちゃん、何するんだよ。
　言葉になって出てこない。立村と正面向かい合い、お白州でご沙汰を待つ悪役たちみたいに両手をついた。
　――なんでだよ、おとひっちゃん、なんで土下座してるんだよ。
　左肩越しに僕は立村の視線先を追った。さっきまで静かだったのに、いきなり丸い目できょときょとしている。

「立村、勘弁してくれ。俺の一生の頼みだ。どうかこいつを許してやってくれ」
「別に関崎、お前を責めているわけじゃないよ。俺はただ」　口篭もり、それでも突っ立ったままの立村は、僕の方にまた冷たい視線を浴びせた。奥の窓辺をまたちらっと眺め、
「そんなにあの子が目障りか」
　凍りつきそうだった。今まで僕の前にいる立村は、蝋人形で火にあぶったらすぐに解けてしまいそうな男だった。ぽきんと折れてごみ箱に捨ててはいさような ら、そんなタイプだった。健吾くんのように強烈な力もなく、なんとなくぼんやりしている昼行灯にしか見えなかった。なのに、どうしてか今はあいつの視線で 動けなかった。言葉も出ない。耳鳴りが消えていったのに、
「あ」という言葉すら発することができなかった。
「雅弘は、決して悪い奴じゃない。なんか理由があったはずだ。俺はそう信じてる。けど、お前の後輩を傷つけてしまったことは否定しねえよ。本当に、悪かった。俺が悪かった」
「だから関崎、お前は悪くないと言っているだろう」
「なんでもする。こいつをこれ以上責めないでやってくれ。雅弘には後で俺がきちんと話をつける。俺も、できることはする。お前の言う通りにする。条件は飲む。だから、頼むこいつをこれ以上、たのむ」
　おとひっちゃんが土下座していた。両手を突いて、尻を高く突き出すようにして、立村の足下に這いつくばり、何度も同じ言葉を繰り返した。
「頼む、こいつを許してやってくれ。条件は飲む」
と、そればかり。呪文のように。
「おとひっちゃん、いいよ、俺が悪いんだ」
「黙ってろ！」
　振り向いたおとひっちゃんの目を見た瞬間、僕は悟った。
　――おとひっちゃん、本気だ。
　学校祭三日目座談会の演説でいきなり見せた、ぶっちぎりの表情。
　僕が、ことの及ぶまでの間、読み取ることのできなかった感情。　おとひっちゃんの怒りは、本物だった。
　――やばいよ、まずいよ、どうしよう。
　目の前で冷たく跳ね返す立村よりも、僕にはおとひっちゃんの瞳の方が怖かった。

　夕暮れ色が床に四角く刺さっていた。窓辺の影は本棚と散らばった本くらいか。 歯に麻酔かけられたみたいに頬を抑え、横目で床を見下ろした時だった。
　窓ガラスの薄い斜線と一緒に、かすかに映る人影らしきもの。覗き込んでいる。
　――まさか！
　立村のちらちら眺めている本棚の陰には、束ねた髪の毛の一番高く立ったところがちらついていた。

　とぼけたい、とぼけられない。僕の負けだ。

　本棚の陰から覗いていたのだろう。 光の加減でそのまま姿が影になって浮かんでしまうなんて、気付いてないのだろう。
　立村と、おとひっちゃんがそれを見つけてしまったってことだろうか。少なくとも立村の視線は、ふにゅふにゅっとしたふたつに束ねた髪の影を捉えていた。
　――ちくしょう！　なんでだよ。どうしてだよ！

「わかった、関崎。それなら条件をひとつ飲んでくれるか」
　立村はおとひっちゃんを見下ろし、それからしゃがんだ。僕の方を見はしなかった。
「今から、用務員室に連れて行ってほしいんだ。一緒に来てほしい」
　――用務員室？
「他にはないのか？」
　うつむいたまま、おとひっちゃんはくぐもった声で尋ねた。
「ないよ。何度も言っているだろ。関崎は悪くない。手を先に出した俺が悪いだけだ」
　そして僕の方に向き直り、立ち上がった。見下ろした。おとひっちゃんに話し掛けていた時とは声音も変わっていた。
「後ろにいる人に伝えてくれ。今度こそ、きちんと帰ってくれとな」
　唇をかみ締め、数秒置いて、言葉を選んでいた。
「手を先に出した俺が悪かった。申しわけない。あんたたちのことは、誰にも言うつもりはない。あの子のことで、水鳥中学には迷惑をかけないようにするからその点は安心してくれ。ただ、これだけは覚えていてくれ」
　おとひっちゃんに立村は手を伸ばした。手を取って立ち上がった。僕の方を振り向いたおとひっちゃんの顔はなんだか泣きそうだった。先に引き戸を開けて立村は、吐き捨てるようにつぶやいた。僕にもう一度、ストレートの言葉を投げつけた。
「目障りだってわかっているさ。けど消えるわけにいかないんだ」

　立村が先に出た後、おとひっちゃんも続こうとした。僕に振り返った。
「雅弘、俺が戻ってくるまで、ここにいろ。いいな」
　僕にはわかる。おとひっちゃんが口先で脅しているだけなのか、それともただ今頭の中が完全にはちきれているのか。親友として十年以上付き合ってきた仲な のだ。わからないほど、僕はばかじゃない。ここにもうひとり、誰かがいるから、あえて何も言わないだけなんだってことも。
　――ここで殴らないのがおとひっちゃんの情けなんだってことも。

　戸が閉まり、僕は立ち上がった。まだ左の頬がはれ上がったようでひりひりした。立村の奴、本気を出しやがった。手加減なしだった。それでもまだ動けるってことは、もともと腕力ない奴だったんだろう。おとひっちゃんだったら、今ごろ腰抜かしてへろへろな状態だろう。
　右側にふたつ結んだ髪型の影が映った。
「佐川さん、ごめんなさい、私」

「俺の方こそ、ごめん。俺、守り切れなかった」
　涙目で僕の前に立つ佐賀さん。唇を震わせている。きっと僕以上に怖かったんだろう。まさか、立村に存在を勘付かれているなんて、思わなかったんだろう。 ほんとだったら佐賀さんがもっと奥に隠れて物音ひとつたてさえしなければ、と思わなくもなかったけど、言ってはいけない。

　それよりなにより、しなくちゃいけないことを、やらなくちゃいけない。
　おとひっちゃんが戻ってくるまえに。へたしたら、立村もついてくるかもしれない。
　それまでに、佐賀さんを学校から出さなくちゃいけない。まだ僕は逃げ道を探さなくてはならなかった。佐賀さん本人を見られたわけじゃない。あれは目の錯覚なんだと言い逃れることだってできるはずだ。立村はともかく、おとひっちゃんにはごまかしがきくはずだ。
　僕は佐賀さんの手を取った。かばんごと廊下に引きずり出した。
「いいか、佐賀さん、今から俺の言う通りにするんだ。たぶん今、あいつらは用務員室に向かってる。なんでそんなところに行くのかわかんないけど、とにかく行ってるんだ」
　震えている。おびえている。おなかからむくむくと気合が立ち上ってきそうだった。
「俺が今から、職員玄関まで連れて行く。用務員室とは反対側だから、今ならまだ顔合わせないですむよ。そこでダッシュで靴を履き替えて、さっさと帰っちゃえ」
「でも、気付かれちゃったのに」
　またまた弱気になる佐賀さん。僕は声を張り上げた。打ち消したい。
「姿をそのまんま見られたわけじゃないだろ。立村が勝手に思い込んでいるだけかもしれないだろ。おとひっちゃんの方は俺がうまくやっておく。ここに佐賀さ んはいなくて、もうとっくの昔に帰ったことにしちゃうんだ。いいか、青大附中に戻ってからも、それを貫き通せよ。ほら、エレクトーンのお稽古があるから さっさと帰っちゃったってことにでもしとくんだ」
「でも見られたのに」
　僕の方がそれは重々承知している。でも、ひっくり返すことくらいお茶の子さいさいだ。水鳥中学生徒会・影の天才参謀と呼ばれる僕が、せめてもの意地でやり遂げたい、たったひとつのことだ。
「とにかく、俺の言う通りにしろよ。時間がないんだ」
　腕をコートの上からつかんだ。服の厚みよりも腕の細さが指先からびりりと響く。
　廊下には誰もいないことを確認して、僕は階段を駆け下りた。佐賀さんを引っ張りすぎて、転びそうになってしまった。何度も顔をゆがめていやいやをする佐賀さんに、僕はめっとにらみ付け、職員玄関まで走った。
　用務員室は一階の生徒玄関脇だ。反対側だ。何の用があるのかは僕の知ったことじゃない。杉本さんとおかっぱの女子はとっくに帰ったはずだ。立村の目の錯覚だと信じ込ませてなんとか乗り切りたかった。でないと、佐賀さんが追い詰められる。
　いない。一階職員室前には、もう人気がない。
「何も言うな、とにかく行け！」
　すのこの上で靴を履き替え、またなにかを訴えたそうにして見つめる佐賀さんに僕は小さく

怒鳴った。よけいなことしている暇あったら走ってほしい。わかっ ていたのかいないのか、佐賀さんはしっかり腰を折って礼をし、駆け出していった。自転車を引っ張り出しているところまでは見届けた。

――さて、どう言い訳するか。

同じくらいのスピードで三階へ駆け上がった。図書準備室にまだおとひっちゃんは戻ってきていなかった。電気ストーブの電源を切り、椅子を一脚片付けた。 僕ひとりがくつろいでいるだけ、といった風に演出した。もう窓辺には夕陽のかけらだけが差しているだけだった。カモフラージュ用の台本を置いて、空を眺め た。いつもここで、総田と川上さんはいちゃついていたんだろう。さっきまでいた佐賀さんと僕のように。いや、僕はいちゃついていたという認識ないけど、お とひっちゃんたちからしたらそう思われてもしょうがないだろう。

――ここに女子がいたってことがわかっただけだよな。けど佐賀さんだって保証はない。

――佐賀さんがここにいないんだってことを、なんとか証明しなくちゃ。

いくつか方法はある。佐賀さんにあとで連絡を入れ、口裏を合わせておく。エレクトーンのお稽古でとっくの昔に学校から出ていた。だからここにいた女子は佐賀さんではない。立村評議委員長の勘違い。それによって一発張り倒されるなんて、なんかおかしい。被害者は僕だ。

ということをおとひっちゃんに信じ込ませるのはどうだろう？

相手は本当だったら、さっきたんあたりが一番いいんだけど、おとひっちゃんが動揺する可能性大だから、別の相手を考えてもいい。いや、おとひっちゃんの 知らない女子、ってことにしたっていい。他のクラスの奴で、放課後、女子に呼び出されて告白されたってことを聞いたことがある。そのまんま、使わせてもら おう。　ふたつに束ねた髪型が佐賀さんのとだぶるかもしれない。そこをつっこまれるかもしれないけれど、ちょっと髪の長い女子だったら誰でもできる髪型 だって言い逃れよう。見たのはおとひっちゃんと立村、そして佐賀さんだけだ。しかも立村は、水鳥中学に来たのが正真正銘、初めてだ。単に僕が、知り合いの 女子とおしゃべりしていたところに因縁つけにきたという有様。加害者はあいつに入れ替わる。

けど、別に僕は事件を大事にしたいわけじゃない。と言ってやろう。

別に水鳥中学生徒会との交流を邪魔する気はないとも。

その代わり、ストレートパンチ一発かませたことをネタに、ちょこちょことつついてやるっていうのはどうだろう？

勘違いして、一年の女子の名誉を傷つけるなんて最低だとも。そうすれば佐賀さんも、青大附中で立村に言い返せるだろう。実質佐賀さんを守るため戦うのは健吾くんだろうけれども。この辺も後で詳しく、佐賀さんと打ち合わせすればいい。

とにかく今は、おとひっちゃんに説明して、飲み込ませることだ。いつものことだ。難はない。

背中で引き戸が静かに開いた。

覚悟した。

　おとひっちゃんだということは、ばたばたした足音ですぐに聞き分けられた。
「雅弘」
　低い声で、一言、呼ばれた。
　答えないで、おとひっちゃんの入る戸口まで出て行った。すっかり暗くて、立ちくらみした。ふらつきながら見上げた。
「あのさ、俺、さっきのことなんだけど、あれ誤解なんだ。立村の奴が間違えてるんだよ」
　おとひっちゃんは答えなかった。
「おとひっちゃんに言わなかったのはまずかったと思うよ。けど、名前は言えないけど、うちの中学の人で、ちょっと用事があって、ちょっとだけ、ほんとうにちょっとだけ話をしていただけなんだ」
　返事が返ってこない。勤めてあどけなく、左のほっぺたをさすりながら僕は、目の前の黒いシルエットに話し掛けた。顔形が読み取れない状態だ。
「というか、名前、覚えていないんだ。三日前に、いきなり電話が来て、ふたりっきりで話をしたいから、場所用意してくれとか言われて。今日土曜だから、交 流準備会のあとだったらいいかなって思って、ここに来てもらったんだ。やっぱり人前だとまずいってのがあったから。けど、あれは青大附中の評議委員長が言 うような、人なんかじゃないんだよ。全くの別人だよ」
　どうして言い返さないんだろう。嘘つくなとか、黙れとか、いいかげんにしろとか、怒鳴らないのだろうか。おとひっちゃんはまだ、立村の言い分を信じきっているはずだ。どんな話を聞かされたのだろうか。そこんところを確認しないと次の手が打てない。はらはらしてきた。
「なのに、なんで殴られちゃうんだろうな。あいつ、手加減しなかったんだよ。俺のほっぺたすごい勢いで殴りつけたんだよ。誤解もいいとこだよ。たまたま、 隣りに座ってた青大附中の人と話していたのが多かっただけでさ。ひどいよなあ。俺、本当だったらあの立村って奴にやり返したいよ。ひどいよ、きっと葉牡丹 の子のことを身びいきして、俺がなにか悪いことたくらんだって思い込んでいるんだよなあ。俺、ちゃんと保健室に行くようにって勧めたしさ。ほんとはああい う子、俺大嫌いだけど、それでもちゃんと親切にしてやったつもりだよ。なのになんでだよ」
　突然おとひっちゃんが戸を開け放った。廊下の温度差ある空気で顔が冷たくなった。肩を掴まれて強引に引っ張り出された。廊下の三年用水飲み場まで連れて行かれた。手が冷たい。おとひっちゃんは真ん中の水道蛇口をひねり、目一杯流した。水がもったいないってくらい流れた。
「来い」
　短く、一言だけ。断れない雰囲気だった。しかたないので跳ね返る蛇口の前に立った。水流の音だけが廊下に響き渡っていた。隣りのおとひっちゃんはもういちど、蛇口をひねり直し、横に流れるよう水の方向を変えた。ぞうが水を吹き上げているのを横からみるような形だった。
　――何するんだろう。
　疑問が途切れた。いきなり詰襟のあたりと脳天を両手で押さえつけられるようにして、蛇口に額をぴたりとくっつけられた。水が顔の中で空いているところ全 てに飛び込み、僕は何度も首を振ろうとした。おとひっちゃんの腕力にはかなわないと分かっていても。痛い。冷たい。苦しい

。
　息を止めるぎりぎりのところで、おとひっちゃんは襟を引き上げてくれた。口と耳に入った水を吐き出し、しばらく咳き込んだ。前髪横髪、見事にずぶぬれだ。制服の胸あたりも、おなからへんもすべて。
「何するんだよ！　ぶっ殺す気かよ！」
　めったに出ない罵り文句が飛び出した。おとひっちゃんに使ったこと、一度もない。
　おとひっちゃんは黙って水道の蛇口を締めた。濡れた手を数回振って、乾かすそぶりをした。
「雅弘、正気に戻れ。頭を冷やせ」
　それだけ言い残して、おとひっちゃんは背を向けた。

　――おとひっちゃん、俺の言うこと、全然信じなかった。
　――いつもだったら一発で騙されたくせにさ。
　僕は前髪だけもう一度雫を絞った。さっき立村に殴られた場所に冷たく染みた。
　腕で顔をこすりながら鏡を見た。青いあざが頬の上に少しだけ残っていた。

　おとひっちゃんの言う通り、頭が冷えると今まで見えなかったものが見えすぎるほど見えてくる。どうして気付かなかったのか不思議なくらいだった。いつもの自分だったらあっさり気付いたはずなのに。悔しかった。
　次の日は日曜で誰にも会わないですんだのでほっとした。
　部屋にこもって鈴蘭優のポスターを見上げていた。両親には風邪をひいたとごまかしておいたけれども。
　――佐賀さん、俺のことで立村に脅されてるんじゃないだろうか。
　電話をかけることはできなかった。
　――だって、健吾くんと一緒にいる可能性だってあるじゃないか。
　――俺とのことを誤解するかもしれないじゃないか。

　どうして気付かなかったのだろう。
　最初から、立村評議委員長が僕のことを胡散臭そうに見ていたことを、あえて知らないふりしていた。　いや、もっというなら、奴がさんざん意味不明の行動をしていたことを、どうして見逃していたんだろう。
　生徒会室を腹下りで抜け出そうとしたところだって、いつもの僕だったらあっさりと、
「佐賀さんから杉本さんを引き離そうとしているからだ」
と判断しすぐに別の手を打っただろう。
　僕が例のくさい脚本を読み上げた時だってそうだ。
　立村はいきなり、「忠臣蔵」なんていうあやしすぎるテープを提供し始めた。総田やおとひっちゃんは、単なる見せびらかし精神からだろうと思っているだろうけれど、今ならわかる。
　あいつ、話を逸らしたかったんだ。
　脚本を読んで、僕の狙ったことを一発で見破ったんだ。
　だから、自分のしょうもない「松の廊下刃傷沙汰」をおかずにして、僕の脚本の毒を抜こうとしたんだってことを。
　――いつもだったら、気付くよな。全く頭が悪すぎるよ俺って。
　いや、なによりも最初から計画がずさんすぎた。
　なんで、図書準備室に佐賀さんを引きずり込もうと思ったんだろう。危険じゃないかと終わった後に思う。
　いくら全てが終わった後とはいえ、他の連中にばれたらしゃれにならないことになるってわかっていたくせにだ。
　佐賀さんと話をするんだったら、駅前の喫茶店だって、いつもの郷土資料館だって、まだまだたくさんあったはずだ。
　なんで、そんな馬鹿なことやらかしちゃったんだろう。
　僕は寝転んで天井の鈴蘭優を見上げた。

――どうしてだよ。俺は。
「水鳥中学生徒会陰の天才参謀」の名前返上だ。

ふたっつにしばって側で揺れていた髪の毛、それに触れられなかった。
夕暮れの中、見詰め合ってしまった時。　ひとつひとつが橙色に染まっていく。僕はしばらく頭をかかえ、布団の中にもぐりこんだ。額を枕に押し付けてしばら く身体をくねらせていた。でないと額の冷たい感触と左頬のひりひりする痛みが蘇ってしまうから。こんな女々しいことしている自分が信じられない。もう、ど うすればいいかわからなかった。
もちろん、これから僕なりにどう対処していけばいいかは、土曜日の段階で考えていた。
佐賀さんに帰り際ちゃんと説明したように、
「あれは立村の思い込みに過ぎない。あそこに佐賀さんはいなかった」
と言い張り、むしろ立村の暴力事件の方を攻め立てることもできるだろう。 かなり汚い手だとは分かっている。
どんな理由があったにせよ、あいつが僕を力いっぱい殴りつけたことだけは否定できない事実。
まだ、うっすらと痛みすら残っている。病院で診断書取るという手だってある。
それに青大附中は私立だ。公立の中学と違って、退学処分されちゃうかもしれない。僕が青大附中の奴に殴られたと訴えたら、うちの父さん母さんに説明した ら、言い方にもよるけどきっと怒鳴りこみに行ってくれる。 僕が被害者として言い張って、あいつを窮地に落とすことだって可能なはずだ。
そうだ。佐賀さんがあの部屋にいない、ということだったらいくらでも。
立村の言ったことはすべてが本当のことだ。でもそんなことを認めるわけにはいかなかった。

僕が謝りたい相手はひとりだけ、おとひっちゃんだけだ。
信じてくれてたおとひっちゃんを、裏切ってしまったことだけだ。

もんもんと一日中ベットで転がり続けていた夕方、電話がうるさく響いた。日曜はいつも両親が店に出ているので、僕はしかたなく受話器を取った。
「雅弘か」
名乗ると、いきなりどすの利いた声が響いた。ひとりしかいない。おとひっちゃんだった。
「あ、ああ」
「明日、駅前まで来い。終業式が終わったらメシ食わないでまっすぐ来い」
「なんで？」
単純な言葉しか口に出てこなかった。
「お前に理由を聞く権利なんてないんだからな。それと」
口篭もる気配がある。僕は耳を済ませた。ごほんとひとつ咳をしていた。咳払いという感じではなかった。

「水野さんと一緒に来い」
　――さっきたんと？
　なんでさっきたんの名前が出てくるのかわからない。天井を見上げても答えが出てこない。
「あとは俺がみんな手を回しておく。いいか、雅弘。何も言うな、聞くな。わかったか」
　――言うな聞くなって言ったって。
　僕に理由を聞く権利はない。その通りだった。それだけのこと、している。
「うん、わかった。明日さっきたんと一緒にだね」
「水野さんには、もう話つけてあるからよけいなこと考えるな、あと」
　また口篭もるようにして、咳をしている。
「このことは、誰にも言うな。ふたりでとにかく一緒に来い」
　言いたいことだけぼつ、ぼつと並べて、おとひっちゃんの電話は切れた。強く叩きつけられた。
　――さっきたんと？
　おさげ髪の、はつかねずみのような表情を思い出した。ふたっつに束ねたあの髪型とは違う何かが思い浮かび、僕はまた、天井の木目をにらみつけた。こうすると知恵が出てくる。僕のいつもの習慣だった。
　――俺に理由聞く権利なんてない、ったって。
　けど、理由があるから、明日駅前に行かなくちゃいけないってことだろう。納得がいかなかった。でもおとひっちゃんの声は本気だった。僕の額を蛇口に押し付けた腕力と一緒に同じだった。
　――とにかく、わかるとこまで聞き出そう。
　さっきたんの電話番号をクラス連絡網で探した。何度もかけたことがあるから、抵抗ない。いつもおとひっちゃんの代わりに電話してやるんだから、平気のへいざだ。

「佐川くん？」
　お母さんを通じて、さっきたんが電話先に出た。
「あの、この前はごめん。俺も、気が立ってて、なんか八つ当たりしちゃってて」
　どうせ謝りたいと思っていた。佐賀さんにかまけてついついさっきたんを無視してしまっていたところがなきにしもあらずだった。土曜日の段階ではあたまが ぼおっとしていたけど、頭が冷えた結果、明日さっきたんにあやまらなくちゃって気持ちになってしまっていた。早いうちに謝った方がいい。
「ううん、いいの。どうしたの」
　よかった。さっきたんはやっぱり暖かかった。その声が鈴蘭優以上の効果をプレゼントしてくれたなんて、言えやしない。
　こっちがごめんって思っている時に、ちゃんと「いいよ、気にしてないよ」と言ってくれる女子って、少ない。
　その一言だけで、僕はさっきたんに何でもしてあげたくなる。きっとおとひっちゃんは僕の倍

、そう思っているに違いない。
――さっきたん、おとひっちゃんにも同じことしてやってるんだよな。
――ちょいまてよ、おとひっちゃん、昨日さっきたんに連絡したのかなあ？
小学校五年の頃から、さっきたんへの伝言係は僕だった。おとひっちゃんがどうしても女子に電話をかけたくない……言い換えると「赤くなるから絶対に女子と話をしたくない」……ということで、いっつも僕が電話していた。特にさっきたんにはそうだった。
でもなんでだろう？
昨日は日曜だ。前の日は土曜で、とっくの昔にさっきたんは家に帰っていたはずだ。
あの青大附中二人女子に荷物を持って行って、それっきり戻ってこなかった。
僕は一呼吸置いて、最初にするつもりだった質問を後回しにしようと決めた。
――おとひっちゃんから何頼まれたんだよ？
いきなり核心につっこんだらさっきたんも逃げ出してしまう。「話をつけておいた」ってことは、おとひっちゃんなりに内密なことに違いない。理由を聞く権利がない僕は、絡め手を使ってたどり着くしかないってわけだ。
「さっきたん、この前の土曜なんだけど、あのあとどうしたのかなあって思ってさ。ほら、青大附中の女子の荷物持って、あれで帰ったのかなあって思ってさ」
そうだ。なんとなく、気になって、聞いてみたのだってスタンスを崩さないでいこう。最初、やさしいんだけど堅い感じの話し方をしていたさっきたんが、ほわほわっとした口調で教えてくれた。がちがちしたおやつのチョコケーキをレンジでチンして柔らかくした感じだった。
「ううん、帰らなかったの。挨拶しなくてごめんなさい」
甘い。柔らかい。やっぱりこういうとこがさっきたんだ。
「いや、なんとなくさっきたん、あの場所いづらかったのかなあって思ったんだ。俺も青大附中の人たちのことでばたばたしてたし、おとひっちゃんの手伝いもしたりしなくちゃいけなかったりしてさ」
僕は受話器から繋がるぐるぐる巻きのコードをひっぱりまくった。指が落ち着かない。うまくさっきたんがひっかかってくれるとうれしいんだけどな。手ごたえがありそうでなさそうだ。
「あのね、佐川くん」　さっきたんはゆっくりと、僕の思ってもみなかったことを、ふんわり口調で言ってのけた。
「青大附中の人たち、保健室に行かなかったの。だって、保健室、土曜日、閉まっているんだもの」
――え！　保健室、閉まってたって、どういうことだよ！
思いっきり黒いぐるぐる巻きコードを伸ばし、ぱっと離した。左手から力が抜けていくのがわかる。いやな予感の時っていつもそうだ。
「佐川くん、保健室にあの人たちが行ったって聞いた時に、もしかしたら迷っているんじゃないかなって思ったの。よけいなおせっかいだったらごめんなさい。 でも、私もよく気分が悪くなって教室出て行くことが多いから、もしそういう時に、保健室が開いていなかったら困ると思ったの」

「保健室が閉まってるって、じゃあ、昨日もそうだったんだ？」
　保健室って年がら年中、保健の先生が座ってて、ベットも用意されているもんだとばっかり思っていた。だから立村にそう言ったのだ。
「そう。先生、いつも一時半くらいに帰ってしまうの。それで青大附中の人、やっぱり迷ってて」
　そうか、それは盲点だった。僕はあまり保健室にお世話になんてならないからあまり気にしなかったのに。
　いや、そんなことはどうでもいい。じゃああの二人はジプシー状態で水鳥中学校内をさまよっていたってことか。
「ひとりの人、本当に顔色真っ青だったから、私、用務員さんのお部屋に連れていったの。そこでしばらく寝せてもらって、それから帰ったらどうかしらって、勧めたの」
　――無意識の意識ってすげえよ。
　僕はいつのまにか、昨日見損ねた場面を覗くチャンスをつかんじゃったらしい。
　怖いくらいだ、驚いた。
　さっきたんは気付いていない。やっぱり自分が何を話しているのかよくわかんないみたいだ。そういうおばかっぽいところも、僕がさっきたんと話をしててほっとするところだ。ふうん、それでそれで、と促した。
「バスケ部の友だちとかも、土曜の練習中に足をひねったり怪我したりした時、保健室が開いてなくて困ったってこと、話してたから覚えてたの。そういう時、 いつも用務員のおじさんかおばさんがいるから、簡単な手当てしてもらうんだって。これ、内緒にしてねって言われてたけど、あのおじさんおばさん、いい人だ からこっそり休ませてくれるのよ」
　知らないわけじゃない。うちの学校の用務員さんは夫婦者で、花を植えたり掃除をしたりと、いつもにこにこ笑顔が印象に残っている。よく石炭を運ぶために石炭置き場にいくと、僕の背が低いのを気にしてか、
「これ、持てるかな？　少し減らそうか？」
　とよけいなお世話をしてくれる。僕だって力はあるんだといいたいけど、親切で言ってくれてるのと、楽しそうな顔しているので言い返さず、減らしてもらっていたっけ。ほんといい人だ。
　いや、そんなのもどうでもいい。用務員室。
　――おとひっちゃん、あの後用務員室へ、立村を連れていったはずだよな！
　だんだん繋がってくる。自分でも信じられない。自信なくしそうだった僕の頭が、だんだん「天才参謀」の誇りを取り戻しつつある。どうか、このまま自信よ復活しろ！
　頼むよさっきたん、教えてくれ、そう叫んでいた。
「じゃあ青大附中のふたりはずっと、用務員室にいたんだ」
「そうなの。一年生の女子が本当に具合悪そうで、おばさんも心配して、すぐにおふとんしいてくれたの」
「ふとんなんてあるんだ」
「そうなの、泊りこみのために用意しているんですって。一時間くらい、ずっと横になってい

たの。それで一緒にいた二年の子が、委員長さん戻ってくるまで待っているってことで、一緒に付き添ってあげてたの。おかっぱの、可愛い感じの人」
　――ああ、あのおかっぱの子か。
　となると、話は通じる。さっきたんが荷物を取りに生徒会室へ行ったのは、用務員室で休んでいる二人に持って行ってやるためだったのだろう。さっきたんにそう聞くと、当然の答えが返って来た。
「ふうん、さっきたん、頭いいよなあ」
　心臓の激しいとくとく音を聞かせないようにして、僕はのほほんと相槌を打った。
「ううん、私頭悪いわ。青潟商業第一志望だもの」
「それはそうと、さっきたん、その人たち、いつくらいまでいたんだっけ。一時間くらい、一年の女子がふとんで寝ていたんだよね」
　とうとうさっきたんは致命的な言葉を発した。本人がどう思っているかどうかわかんないけど、僕にとっては、逃げ道を塞がれたのとおんなじだ。
「うん、二年の女の子のお父さんに、車で迎えにきてもらうことになったので、二時間くらい一緒にいたわ。後で関崎くんと、青大附中の評議委員長さんが戻ってきて、それから帰ったの。私、昨日関崎くんと一緒に帰ったから、覚えているわ」
　――おとひっちゃんと帰ったってか！
　――二時間くらいって、俺と佐賀さんが学校にいた時か！
　――あの時まだ、学校の中にいたのかよ！

「さっきたん、おとひっちゃんはその時、何か言ってたか？」
　僕は震える声を聞かせないよう、一生懸命のばしのばしして尋ねた。
「うん、いろいろ」
　ごまかしたってことがありありと分かる。ここはまだ突っ込まないで置こう。
「青大附中の評議委員長と、その女子ふたりは一緒に帰ったのか？」
「うん、もうひとり、佐川くんと話していた人、あの人が自転車で帰っていったのを見てから帰ったわ」
　――俺と話していた人がって？
　指先に絡みつくのは黒いリング状のコード。汗ばんできた。
「関崎くんと委員長さんが、用務員室の窓から自転車を見ていて、『やっぱり帰ったな』ってぽつっと言ってたわ」
　心なしか、そこんとこだけさっきたん、ゆっくり目にしゃべっているような気がした。顔が見えないのがいらだたしい。もっとたくさん、読み取れただろうに。僕の中で走るものすごく速いコンピューターが、答えをたたき出すのに時間はかからなかった。
　――八方塞りってやつかよ！　ちくしょう！
　もうほとんどやけで、僕はさっきたんから根掘り葉掘り、用務員室での女子ふたりと男子ふたりの状況について聞き出すことにした。僕の直感はめちゃくちゃ 鋭い。もう、自分でもいやにな

っちゃうくらいぱっと分かる。さっきたんのあいまいな説明でも、あっという間に答えが出てきてしまう。答えが、僕の願ってい ないものばっかりだとしても、関係ないくらいに。
「他の学校に来て病気になって、心細いだろうなあって思って、私も一緒に用務員室にいたの。ちゃんと委員長さんには伝えておいたんだけど、関崎くんも一緒 にきてくれるとは思わなかったの。関崎くん、一年の女の子に一生懸命、なにか話をして、元気付けていたみたいなのよ。委員長さんが、『悪いけどふたりだけ にしてやってくれないか』って言ったから、私とおかっぱの女の子と、あと委員長さんが用務員室を出たの」
　――ふたりだけにしてやってくれないかって、じゃあ用務員のおばさんどうしたんだよ！
「うん、用務員のおばさんも、理由聞いて一緒に待ってくれてたの」
　ちょっと待った。理由を用務員のおばさんに話したのは誰だろう？
「おかっぱの女の子。青大附中って先輩の子が後輩の子を可愛がる習慣があるんだって教えてくれたわ。お母さんみたいに面倒みてあげてたのよ。私もああいう風に、後輩に好かれたいな」
　さっきたんはその点大丈夫だ。いつもだったら太鼓判押してあげるんだけどそれどころじゃない。
「関崎くんと話をした後、その子、一気に元気になったの。ずっとそれまでにこりともしなかったのに、いきなりおかっぱの女の子に、一生懸命何かを話してい たのよ。嬉しかったのね。おかっぱの女の子も一生懸命、一年の子の髪の毛撫でてたの。きれいな髪の毛で、うらやましかったな。後ろで委員長さんが、関崎く んに何かお礼みたいなこと言ってたのは覚えているけど、盗み聞きしちゃいけないと思ったから、私、聞かなかったの」
　その辺、曖昧な言い方だった。たぶん、さっきたんはすべて耳にするなり目にするなりしていただろう。それをあえて言わないのにはなにか訳があるらしい。
「そうなんだ、なるほどなあ。今回はさっきたん大手柄だなあ。すごいよ、さすがだよ」
　別の意味をこめて僕は、たっぷりさっきたんを誉めた。何度も歯を食いしばっていたなんて、僕は決して言えなかった。

　だいたい事情はつかめたところで、最後の本題に入った。聞き出しにくいことだけど避けられない質問だ。
「さっきたん、俺とおとひっちゃんとのこと、知ってる？　知ってるよね」
　ほわりほわりと語ってくれたさっきたんが、ふと黙った。せっかく膨らんだおいしい匂いが、抜けてしまった。
「理由ももしかしたら知っているかもしれないけど、俺とおとひっちゃん、今、険悪なんだ。知ってる？」
「あまり、詳しいこと、わからないから」
　途切れそうなかすかな声だった。
「けど、俺、おとひっちゃんと仲直りしたいって思ってるんだ。それはわかってくれるかなあ」
「うん」
　少し元気が出てきたみたいだ。よかった。

「それでなんだけど、さっきたん、今、おとひっちゃんから電話があってさ、明日一緒に駅前に来てほしいって頼まれたんだ。さっきたんと一緒にって言われたんだけど、それって何かあるのかな？　おとひっちゃん、さっきたんには話をつけてあるって言ってたけどさ」
「……ごめんなさい」
　ほんとに受話器の向こうから流れる雑音にかきけされそうな声だった。知っているはずだ。何かおとひっちゃんたくらんでいるんだろう。目の前にさっきたん がいるんだったら、あの手この手を使って聞き出すところだけど、自分の中のレーダーが、避けるようなサインを出している。
「理由、教えてもらえないかなあ」
　まずはストレートに。
「……ごめんなさい」
「じゃあ、いつ？　おとひっちゃんと話、した？　土曜日の帰り？」
「ううん、電話で、今さっきなの」
　――電話かよ！
　僕がどれだけ驚いたかって、わかってもらえないんじゃないかと思う。
　おとひっちゃんが、なんとさっきたんに電話をかけたんだ！
　一緒に帰っただけでも信じがたいことなのに、それに加えて、電話まで。たぶん小学校時代の学級文集末尾の卒業生住所一覧を漁ったに違いない。あのおとひっちゃんが、自分の持つ勇気を全部振り絞って、さっきたんの電話番号をダイヤルしちゃったってわけだ。
　――おとひっちゃん、本気だ。
　――逆らえないよ。
　さっきたんはどこまで知っているんだろう？
　これ以上質問を続ける気力、持っていなかった。一刻も早く、部屋の鈴蘭優のポスターと顔つき合わせて相談したかった。おとひっちゃんの考えていること、さっきたんの知っていることをみな整理したかった。
「きっと、仲直りしたいからだと思うの。それで、佐川くん、ひとつだけお願いしていいかしら」
　ささやくような声で遮られた。僕は頭の中の「鈴蘭優」ポスターを打ち消した。
「明日、私、佐川くんをびっくりさせるようなことしても、驚かないでほしいの」
「え？　俺を驚かせるようなこってなんだよ」
　また、黒い予感がざわざわとする。口篭もるさっきたん。咽のところで、言葉を押えているような、くうっという音が聞こえる。でもさっきたんの口調ははっきりしていた。
「終わったら、ちゃんと佐川くんとふたりになった時、話します。だから、それまでは何も言わないでほしいの」
　――なんだよ、その秘密めかした言い方って。
　おとひっちゃんも、さっきたんも、何かを仕組んでいる。おとひっちゃんが言うに、僕は理由を知る権利がないんだという。だいぶ想像がつくけれども、肝心要のところが読み取れない。さっきたんが言うに、僕を仰天させるようなことをするらしい。

――俺、おとひっちゃんに落とし前つけられるってことなのかよ。けど、あいつのためにやったことなんだよ。おとひっちゃんがあの杉本さんって子を嫌って いるのがわかるから、水鳥中学生徒会に近づけないようにしようとしただけなんだよ。おとひっちゃん、わかってもらえないってのはわかってるつもりだけど、 けどさ。俺はおとひっちゃんのことが大好きなんだよ。
「じゃあ、明日、よろしく」
本気でさっきたんを問い詰めたら、きっと白状しただろう。なんとなく黙っていた方がよさそうな気がした。こういう時の予感は当たる。とにかく流れに任せ て様子を見ても間に合うだろう。受話器を置いてしばらくさっきたんの言葉を思い起こし、ベットに横たわった。天井の鈴蘭優が目の前でぼやけるように視点を ずらし、頭の中を片付けることにした。

立村とおとひっちゃんがどうして用務員室に行ったのか、ひとつめの理由は判明した。
杉本さんともうひとりの女子が一緒にいて、立村を待っていたからだろう。おとひっちゃんじきじきの案内でだ。
けど、僕を殴りつけた後立村は、
「ひとつだけ条件を飲んでもらえないか」
と言わなかっただろうか。
おとひっちゃんも、
「お前の言う条件は飲む」
と、なんとかのひとつ覚えみたいな感じで繰り返していた。
立村の出した条件っていうのは、いったいどんな代物だったのだろう？
思い当たるのは、杉本さんがらみのことだろうか。さっきたんが言うには、おとひっちゃんと杉本さんをふたりっきりにして、何か話をしていたらしいということだ。大人である用務員のおばさんまで追い出して、ふたりっきりにする理由ってのはいったいなんだろう？
しかもその後、杉本さんは病人状態から一気に回復し、おかっぱの女子に楽しげに報告していたという。
おとひっちゃん、何か杉本さんを喜ばせるようなことを言えと強制されたのか？
――おとひっちゃん、あいつに脅されて、まさか杉本さんと付き合うなんてこと、考えているんじゃないだろうな！
背筋が寒くなるのを覚えた。風邪じゃない。

立村に殴られた頬をさすった。一緒に罵られた言葉をセットで思い出した。
――そんなにあの子が目障りか。
――目障りなのはわかっているさ。けど、消えるわけにはいかないんだ。
おとひっちゃんに杉本さんがベタぼれなのはよくわかった。非常識な化粧なんかして学校にくるくらいだ。相当なもんだろう。
けどおとひっちゃんの想い人は、誰が見ても明らかなさっきたんだ。
もっというなら、おとひっちゃんは杉本さんのことをめちゃくちゃ嫌っているはずだ。僕ほど

ではないにしても、近寄りたくない女子のひとりとして認識しているはずだ。僕にはお見通しだ。おとひっちゃんにとっても、杉本さんは目障りな女子のはずだ。
　つくづく思ったんだけど、立村の杉本さんに対する関心は、尋常じゃない。お気に入りの後輩って域をはるかに越えている。男子の恥になりそうな言い訳までして追いかけるなんて、僕には理解できない。佐賀さんが話していた通り、好みの差っていうのもあるだろう。僕からしたら
「そんなに杉本さんが好きだったら、迷惑かけないように保護してどっかに連れて行け」
と言いたい。佐賀さんだって、おとひっちゃんだってそうして欲しいに決まっている。
　それをだ。
　立村はおとひっちゃんに土下座させて、要求を飲ませようとしたんだろうか。
　杉本さんの望みをかなえてやってくれとでも言ったんだろうか。
　それってやり方が汚すぎる。僕のしたことなんかよりもずっと、人間として許せないことだ。

　大嫌いな相手を無理やり好きになってくれ、なんて、残酷だ。
　――どう思う？　佐賀さん。
　鈴蘭優のポスターもとい、顔だけは佐賀さんのイメージ。語りかけてみた。
「やっぱし、変だよな！」
　声を出してみた。天井に響いた。
　もちろん、これは僕の直感に過ぎない。外れている可能性だってある。けど、立村の言動を考えると、可能性としてはゼロじゃないような気がする。おとひっ ちゃんは僕のしでかしたポカをかばってくれた。責任を感じておとひっちゃんは、自分のしたくないことをしようと決意したんだろうか。立村に頭を下げて、僕 を守ろうとしてくれたんだろうか。
　――どうなんだよ、おとひっちゃん。
　あいつが僕と絶交するつもりなのか、それともまだ親友でいさせてくれるのか。わからない。
　けど、さっきの電話の内容だと、全く救いがないわけではなさそうだ。
　――俺が謝りたいのは、おとひっちゃんにだけなんだ。あんな奴らには意地でも頭なんて下げるもんか。
　――佐賀さんをいじめた奴らを、誰が。
　僕は目を閉じた。眠ればいい案が浮かぶ。僕の経験法則だ。

　次の日は終業式だった。ろくでもない通知表の結果に、少々やさぐれていた。
　だって、青潟商業・工業ともにボーダーラインときたもんだ。三年になってから取り返せばいい、って楽天思考で行きたいとこだけど、今夜はずっと説教を食らうはめになるのがうっとおしい。帰りたくない気分だった。
　いつもだったらおとひっちゃんと一緒に、どっかバッティングセンターあたりで気分爽快になってくるんだけど、そんな脳天気なことを考えていられる状況じゃないことは僕が一番わかっている。はい、もちろん行きますよ。駅前に、十一時半。気が重い。

終業式、先生のお言葉、および四月の組替えに関する情報などが教室の空気に入り交じった。四月には組替えがあるのでいきなり名残惜しそうに固まっている 女子もいた。今度はおとひっちゃんとおんなじクラスになれるんだろうか。いや、なったらかえってしんどいかもしれない。いろんなことを考えながら、僕は通 知表をしまい込んだ。向こう側の席にいる、さっきたんへ目で合図した。できるだけ他の連中に気付かれないよう、さりげなく、かばんを上に持ち上げ、首を曲 げた。さっきたんは鋭い。気付いてくれた。いつものおさげ髪のままで、廊下に向かった。終業式の日は週番のお仕事もないらしい。

別々に教室を出た。

当然、おとひっちゃんとはまだ話をしていない。二年四組の教室を覗いてみたけれども、すでにおとひっちゃんも姿を消していた。きっと生徒会室に寄っているに違いない。

さっきたんの家の前を、どうせ駅前に行く時には通る。それならめんどうじゃないしってことで待ち合わせ場所をさっきたん家前に決めてあった。

さっきたん家の前には、鉢植えの黄色い貧弱な花が首長く咲いていた。ぎざぎざした葉っぱが何重にも土にかぶさるくらい積み重なっていた、見覚えあるんだ けどなんだか記憶が曖昧だ。玄関で待っているとさっきたんがすぐに出てきた。すごい勢いで着換えたに違いない。水色のブレザーに紺色のスカート姿だった。 服だけだったらやっぱり、水鳥中学の典型的校則美人のさっきたんのままだった。

けど、ひとつだけ違っている。

うさぎの耳が折れているかと思った。

「ごめんなさい」

少しくるくるっとくせがついた髪の毛だった。広がっていて、歩くたびにぶるんと揺れた。

「さっきたん、その髪の毛」

――なんで、ふたっつに結んでる？

言葉がそれ以上でなかった。さっきたんは唇を結ぶと、また首を振った。

「今は聞かないでね。あとで、ちゃんと話します」

さっきたんの髪の毛は、お下げじゃなかった。小学生の子みたいに見えた。ふたっつにむすんで垂らした、犬みたいな髪型だった。

――土曜の、佐賀さんだ。

はつかねずみみたいなおちょぼ口に、その髪型は子どもっぽく似合っていた。

何かを話さないとまた変なこと思われてしまうかもしれない。僕は目についた、門の黄色い花を指差した。

「さっきたん、あの花、何？」

立ち止まり、じっとさっきたんは僕の視線を追いかがみこんだ。花を二本指でつまむようにして、そっと口付けるようなしぐさをした。

「佐川くんが持ってきてくれた、葉牡丹の花よ」
「葉牡丹？」
　二月に受け取った時にはずいぶん気持ち悪い花ですぐに手放したかったあの花だ。
　さっきたんに押し付けた、あの葉牡丹だ。
　いやあな気持ちになりそうだった。けど、僕が受け取った時とは違い、葉っぱもすっかり花じゃなくて、ちゃんとしたただの「葉」って感じになっていた。む しろ、茎が長くて別の意味で不気味だった。さっきたんは全く気にしていないようだった。首をかしげて、また髪をふるると振るった。
「本で調べたんだけど、うまく冬を越したら、黄色い花が咲くんだって。もう少しで満開になるんだってうちのお父さんが言ってたわ」「え、あれ、花ってあの毒花じゃないの？」
　ぎざぎざしていて、赤ともいえない気味悪げな花。持ってきた彼女に重なるような、具合悪くなりそうな花。さっきたんには似合わない花。
「ううん、あれは葉っぱよ。『棟がたつ』って言うでしょう。葉っぱの中から一本、するするっと茎が伸びてきて、菜の花みたいな花をたくさんつけるのよ。葉牡丹はその頃には、ふつうの葉っぱになるの」
　良く見ると、葉っぱは茎の周りに一枚ずつ、間隔を開けて重なっている。花だった頃の面影なんてなかった。
　天辺にくっついているのはなんだか小さくて、きれいなのかどうなのかわかんない、地味な花だった。黄色い、手のひらにちょこんと乗っかりそうな花びらだった。
「つまんない花だなあ」
　思わず口からもれた。
「そう？　でも、もっと温かくなったらたくさん花が咲くから、きれいよきっと」
　さっきたんは気にしない風に答え、また歩き出した。僕も追いかけた。　完全に僕の心臓は別の音を立ててがなりたてていたに違いない。

　どうして、さっきたんはあんな髪型してきたんだろう。小学校の頃から、さっきたんのお下げ髪はトレードマークだった。クラスの女子たちだって中学に入っ てからは、こんな派手な髪型なんてした奴、いなかった。どうして細かくパーマかけたように広がっているのかわからないけれど、僕の知らないさっきたんと歩 いているようにしか思えなかった。
　――さっきたん、なんかあったのかよ。
　思い出すものといえばひとつだけ。
　佐賀さんのことだけだ。
　僕と夕陽を見ながら、見つめ合ってしまった橙色の時。
　女々しくて情けないけど、あの時そのまんま、止まってほしかった。
　――立村にぶちこわされなければ！
　また腹が立ってきてしまう。よけいなことを思い出してしまう。けどどうしてだろう。
　うちの店の前を通った。もちろん、足早に通りぬけた。さっきたんと歩いているところ、父さ

んに見られたらきっと、僕のことを女たらしだと思い込むに違いない。
「佐川くん、あのね」
　ずっと通知表の結果と、志望校の話をしていた時、不意にさっきたんが切り出した。
「昨日話したことなんだけど、もう一度、約束してほしいの」
　何も、青潟駅前の横断歩道前で言うこともないだろう。せっかく信号が青なのに。仕方なく僕は立ち止まった。
「とんでもないことしても、おどろくなってことかなあ」
　さっきたんは黙った。少しうつむいた。ちょっと頬が赤くなっていた。耳みたいなふたっつの髪束が、僕の方を目、見たいな感じでにらんだようだった。
「俺と関係あることだよね」
　頷いた。 「どうしても、今、言ってもらうこと、できないのかなあ」
　やっぱり無言だ。ただだんだんうつむく角度が深くなっていって、耳のところがずんずん僕に近づいてくる。
「あとで、ちゃんと、話してくれるよね」
　顔を上げてくれた。びっくりした。僕の見た中で一番、さっきたんの瞳がぎらぎらしていたからだった。はつかねずみの瞳というよりも、兎の赤い血走った瞳、と言った方が近いんじゃないだろうか。言い返せなかった。
「約束します。だから、佐川くんも約束してください」
　僕は小指を出した。黙ってさっきたんは自分のをからげてきた。こうやって手を触れ合うのは小学校以来だった。
　あたたかくて、やわらかかった。ずっと触っていたかった。

　無事横断歩道を渡り、青潟駅入り口に立った時、頭の中から答えがぴょんと飛び出した。
　コート姿で制服は見えないけれど、今はふたつの中華娘髪をして待っているあの人がいた。一緒に立っているのは、背の高いジャンバー姿の男子。隣りには、 僕の顔を水道に押し当てた、あいつがいた。みなじっと、僕とさっきたんを六つの瞳で見据えていた。一歩ずつ歩いていくにしたがってじんわりと突き刺さっ た。
　――そういうことかよ。おとひっちゃん。
　蝋人形が一体、混じっていないのが意外だった。

「なあんだ、やっぱりそうだったっすかあ」
　最初はずいぶん眉間に皺を寄せていた健吾くんだったけど、僕の顔と、さっきたんの方を順繰りに見た後、めいっぱいの笑顔を繰り出してくれた。隣りで一歩 下がったところに、佐賀さんがこくりとお辞儀をした。さっきたんを挟んで、おとひっちゃんが腕組みをして僕をにらむ。にらまれるようなことを一応している ので、言い訳できなかった。
「そういうわけだ。新井林くん」
　おとひっちゃんは顎で僕をしゃくった。合間にきつく牽制するまなざしが飛んできた。さっきたんをわざと見ないようにしている様子だった。どことなく、一歩離れるよう意識しているようだった。
「やっぱなあ。佐川さん、本当に疑っちまってすみませんでした。俺もまっさかなあとは思っていたんだけど。やっぱ、馬鹿な先輩持っちまうと、誤解曲解雨あられってんですか」
　何をこんなに軽いこと言い合っているんだろうか。僕が口を開こうとするたびに、おとひっちゃんはぎろりとにらむ。ああそうだ。日曜に電話が来た時言ってたもんな。
「お前は何も言うな」
って。さっきたんとも指きりして約束しちゃったんだから仕方ない。僕は曖昧にへらへら笑いながら、佐賀さんと視線を合わせようとした。
　健吾くんの側に密着している、かみ終わったガムみたいだ。
「まあ、誤解されるのも無理ないよなあって思いますよ。おい、佐賀。お前なんで紛らわしい髪の毛で行きやがったんだ！　お前が悪いんだぞ！　佐川さんに対して失礼だぞ」
　僕にはずいぶん低姿勢な健吾くんだが、いつものことながら佐賀さんには失礼極まりない。おとひっちゃんとさっきたんさえいなければ、僕が割って入りたいところなんだけど、そうもいかない。とにかく状況を把握しようと努めた。

　駅の前でたむろうと、補導員に捕まる可能性もあるので、とりあえずはバス待合室に入り、席を分捕った。たぶん今年中に路線が廃止になるんじゃないかと言 われている市営バスの待合室には誰もいなかった。僕とさっきたん、あとおとひっちゃんと。健吾くんと佐賀さん。お互い向かい合い、ベンチに座った。ガラス 張りだった。あったかかった。なぜかおとひっちゃんは、間に挟まっているさっきたんから離れようとしているようだった。必然、僕とさっきたんがカッ
プルっ ぽく見える。
「雅弘も、今は混乱しちまって、うまく説明できねえみたいだから、俺が話すな」
　――分かりづらいなあ。
　僕に口を利くな、という牽制球、ふたたびだ。
「わかりました。けど、もう俺、いいっすよ」
「いいって、けじめをつけないでいいのか」
「ああ、かまわないっす。だって、要するにうちの立村さんが勘違いしやがっただけなんでしょ

うが。ばっかじゃねえのって思いますよ。あいつがなんで評議委 員長なんだかって思いますが、人間だし間違いもあるってことで。悪いけどほんっと、佐川さん、申しわけありませんでした。俺が青大附中評議委員会に成り代 わって謝ります」
「あの、さあ」
　口に出しかけたらまた、おとひっちゃんがにらみかけた。
「とにかくだ、雅弘が無実だってことは判明したわけだ。俺も、そういう関係のないこととは別に、青大附中評議委員会とは付き合いたいと思っているんだ。だから、これでみな、水に流そう。立村にもそう言っておいてくれ」
　――立村にもそう言っておいてくれって、おとひっちゃん！
　だんだん状況が飲み込めてきた。僕が本当だったら仕組みたかったアリバイ工作。佐賀さんのために、命がけでやろうと決めていた。お株を奪ったってわけだろうか。おとひっちゃん。
　さっきたんの髪の毛先がまた僕のほおに刺さる。はにかむような表情でうつむいている。誰も見ていない隙に、僕は佐賀さんがどこ見ているのかを確認しようとした。ずっと、健吾くんの肩に寄り添うようにして、時たまさっきたんの方を窺っているのがわかった。
　――ちゃんと言い張ったんだな。あの場所にはいなかったって。
　健吾くんは僕に笑顔で、前の日のバスケ部練習試合についてとくとく語りだした。ひっぱられるように僕も聞き入っていた。けど気になるのは佐賀さんの目 だった。あどけなく甘えているようだけど、さっきたんばっかり見つめているように見えるのは、気のせいだろうか。おとひっちゃんだけが腕を組んだまま、応 援団の人みたいに天井を見上げていた。
　おとひっちゃんは、立村と一緒に、佐賀さんが遅く帰ったことを確認したはずだと、さっきたんは言っていた。詳しいことを聞いてないのであとは憶測になる。
　――現場を押えてはいないって、言い訳をするつもりだったんだ。けどさ、どうしておとひっちゃん、手のひら返したように俺をかばうんだ？
　もちろん、このまま流れに乗っていけば、僕と佐賀さんの無実は証明される。
　けど、どうして健吾くんは僕の顔を見るなりいきなり納得してしまったんだろう。
　一言も話さないうちにだ。駅前でだ。

　さっきたんは急に僕の側に近づくように足を寄せた。ブレザーのカフスボタンと、僕の学生服の金ボタンが触れ合った。かちりとなった。そして佐賀さんの方を静かに見つめ返していた。柔らかい視線が絡み合っていた。
「どうしたの」
「ごめんなさい、佐川くん」
　すうっと僕の眼を見つめてきた。また、血走ったような兎のまなざしだった。
「だからどうしたんだよ」
　健吾くんの会話が途切れたところで、さっきたんは軽く小首を傾げ、健吾くんの方に合図を送った。珍しい。さっきたんから男子に合図を送るなんて、めったにないことだった。
「あのう」

　中途半端につぶやきうつむいた。
「あ、なんっすか」
　大股開いて両手を組み、前かがみのまま健吾くんはさっきたんに答えた。
「本当にごめんなさい。私が紛らわしいことしちゃったから、お隣りの人に迷惑をかけてしまったんですよね」
「いや、あの、その、こっちも人のこと言えないし」
　いきなりへどもどするのはどうしたことか。僕も、隣りのおとひっちゃんも、ぎゅうっと絞りこむように見下ろしている。けどさっきたんは全然気にしないようで、ただ健吾くんにだけ話し掛けていた。ちょっとむかっときた。
「あの、私、土曜日の午後に、佐川くんを呼び出そうと思って、図書準備室にいたんです」
　――ちょっと待てよ、さっきたん、何言ってるんだ？

　声が出そうになったのをこらえた。慣れているそのくらい。ごまかすのは平気だ。けど、さっきたんは、確かに前置きどおり、びっくり仰天することを言い出した。指きりしたから顔には出さないけど、もう心臓の音が響き渡り発狂寸前だ。
「いや、そのことはもういいっすよ」
「いいえ、私、やっぱりはっきりさせておかないとだめだと思うんです。でないと、お隣りの人にも失礼だから。ごめんなさい」
　誰にごめんなさいなのかよくわからない。佐賀さんは同じく、こっくり頷いた。健吾くんとぴったりくっついたままだった。
「だから佐賀、お前があんまり泣き叫ぶから俺だってこうしなくちゃいけなかったんだぜ。誤解されるお前にも責任あるんだぞ！」
　また怒る。僕は隣りのさっきたんと向かいの佐賀さん、両方を交互に観察していた。
「ごめんなさい」
　やっぱり謝る佐賀さんだった。けど、よけいなことは言わない。僕との約束通り、誰が作ったかわからない流れに沿って様子を見ようとしているらしい。
　さっきたんの言葉が、さやさやと続いた。揺れない芯のある言葉ばかりだった。
「私、途中で生徒会室を抜け出して、用務員室に杉本さんたちの荷物を持って行った後、佐川くんと待ち合わせていたんです」
「いやあ、それはよくあることじゃあねえかなあって」
　健吾くん、戸惑っている様子だ。さっきたんに飲まれている。
「いえ、本当はあの日、佐川くんに話すつもりだったんです。委員長さんが来なければ」
　また僕に視線を送った。目と目が合った。
「私、佐川くんと、お付きあいしたいんだって」

　――さっきたん、どうしたんだよ！　俺と、俺と付き合いたいって。

　もちろん知らないわけじゃない。前から僕のことを気に入ってくれていて、うれしいなとは思っていた。けど、まさかそんないきなり言われても、僕は困る。 第一、僕はさっきたんと待ち合わせてなんていなかった。さっきたんはとっくの昔に帰ったもんだと思っていたから。まさか、用務員室でおとひっちゃんたちと 顔を合わせていたなんて想像すらしていなかった。
　指と指が絡まりあった記憶が蘇り、鈴蘭優のポスターを眺めている時と同じ精神状態に引き戻されそうだ。
「けど、言おうと思った時、委員長さんが入ってきて、けんかになってしまったので、私、出られなかったんです。私、生活委員のくせに、校則破っているところ見られたくなかったし、それに、お隣りの人がしてきた髪型がとってもかわいくって、つい真似してしまったんです」
「こいつの、がか？」
　健吾くんのなんともいえないねめっちいまなざしが、佐賀さんに注がれた。見たことないんだろうか。そんなことはないだろうと思うけど、確かにふたっつに結い上げた髪型は似合っていた。
「だから、もしかしたら、佐川くん、わかってくれるかなって思ったんです。けど、人に迷惑かけることになるなんて、思っても見ませんでした。だから、出られなかったんです。関崎くんもいたし、変なこと誤解されたら恥ずかしくって、つい、窓辺に隠れてしまったんです」
　――さっきたん、俺の計画を先取りしてるのか？
　必死に表情を隠した。照れている振りしてうつむき、指の関節をぽきぽき折った。
「だから、お隣りの人はいなかったんです。あの場所にはいなかったんです。信じてあげてください。もちろんこんな髪型していたから、おとなりの人に間違わ れたのはしかたないかなって思うので、委員長さんは悪くないと思います。けど、でも、佐川くんは私と会っていたんであって、お隣りの人とではないんです」
　急に頬を両手で覆い、うつむいたさっきたん。ガラス張りに春っぽい陽射しがさしてきて、だんだん熱くなってきた。ビニールハウスの野菜みたいな感じだった。
「いいって。もういいっす。俺、こいつのことを疑ったこと自体、最低な奴だって反省してるんだからさあ。もうほんと、謝らなくたっていいんだって」
　丁寧語とため口と混ぜ合わせた妙なバランスでもって、健吾くんがさっきたんをなだめている。でも動かないのはさっきたんがずっと、顔をさすっているから。背中を丸める格好でいたさっきたん。ちょうど僕とおとひっちゃんと、真剣に目が合った。
「おとひっちゃん、俺」
「黙ってろ。水野さんに失礼だろ！」
　かなりきつい怒鳴り口調だった。
　――おとひっちゃんの前で、言っちゃったんだ、さっきたん。
　もともと分かっていることだった。けど、おとひっちゃんの前では決して口にしないでほしかった。いや、おとひっちゃんがそう言うよう言いくるめたんだろ うか。僕の中ではそういう答えがもう出ている。おとひっちゃんのたくらみだってことが、浮かび上がっている。どうすればいいんだろう。僕は健吾くんにこ くっと頷いてみせた。ついでに佐賀さんを眺めた。同じようにう

つむいている佐賀さん。女子がふたり動揺している様は、居心地悪かった。嘘がまんべんなく盛り込まれているからなおさらだった。
　――さっきたん、どうして、ありもしなかったこと、いきなり言うんだよ。

　気まずい雰囲気になったのを救ったのは、やっぱり健吾くんだった。咳払いをしたのち、おとひっちゃんと僕に親指を立ててぐいぐいと押した。
「もう、俺のことは気にしないで大丈夫っすよ。あとは青大附中で片付けることですから。ただ、これだけ人を傷つけてしまった以上、俺としては決着を立村さんとつけます。あ、大丈夫です、ちゃんと冷静な第三者の先輩に見てもらって、弾劾裁判してもらいますから」
「さ、裁判？」
　健吾くんは佐賀さんの腕をひっぱりあげるようにして、ポケットに手を突っ込んだ。僕よりはるかに背が高いのが目立つ。
「ただ俺と佐川さんが一緒にしゃべっているところ見かけたからっていって、こそこそ泥棒猫みたいなことしやがって、さらに佐賀が佐川さんとくっついている んでないかってありもしねえことを吹き込みやがって。しかも、あんな馬鹿女に現抜かして、自分より頭がいい佐川さんを殴りやがって。やっぱ、最低っすよ。 まあ、四月からはあの人の元でしっかり働かねばなんないってわかってますんで、これできっちりけりをつけて、水に流します。どうもすみませんでした！」
　最後に握手を求める手を出してくれた。先におとひっちゃん、次に僕に。こわごわ触ると、実に堅かった。皮が分厚かった。やっぱりバスケ部だから、手の皮が鍛えられているんだろうか。
「もう変な誤解がないんで、俺も安心して、困った時に佐賀を使って佐川さんへ連絡できますよ。立村さん通してだとやっぱりいろいろ、問題あることも多いと 思うんで、俺、何か変わったことがあったらすぐ、佐川さんちの本屋に佐賀を向かわせます。またあんにゃろうが誤解しやがったら、そんときは俺が黙っちゃあ いません。安心してください。ほんと、申しわけなかったっす」
　これからバスケ部の自主練習があるから、ってことで、佐賀さんとふたり、健吾くんは待合室から出て行った。佐賀さんももう一度こっくり、僕たちに頭を下げた。最後にさっきたんとまた、視線を絡めていった。

　とうとう僕とおとひっちゃん、そしてさっきたんと三人だけになった。何時くらいなんだろうか。腕時計を見た。同時におとひっちゃんが立ち上がった。
「雅弘、これでけりはついた。水に流したからな」
「え、おとひっちゃん、どういうことだよ。俺、理由聞いてないって」
「だから理由を追求する権利、お前にはない！」
　最後にさっきたんへおとひっちゃんはじいっと視線を送った。すぐにきびすを返して、出て行った。追おうとした。立ち上がりかけた。
「佐川くん、いいの、私、関崎くんが今どこに行こうとしてるかわかってるの」
「さっきたん、あの、約束通り、聞かせてくれるよね」

　言葉がかすかにどもってしまった。立ったまま見下ろすと、さっきたんは泣きそうな顔で僕を見上げた。
「いったいどうして、あんなこと、言ったんだよ。俺、約束したから何も言わなかったけど、さっきたん図書準備室なんかにいなかったじゃないか。どうしてだよ！」
　助けられたってことは分かっている。さっきたんとおとひっちゃんが口裏合わせてくれなかったら、たぶん今ごろ健吾くんに決闘を申し込まれていたに違いな い。今までの流れからして、ふたりが僕を助けようとして、話を合わせていたことくらい見当はついていた。さっきたんが、僕に告白しようとして、図書準備室 へ向かい、たまたま立村に勘違いされたってことを。しかも勘違いされた理由が、髪型だったからということ。
　無理のある説明だ。だってさっきたんはずっと、用務員室で待機していたのだ。
　さっきたんの言い分を信じればの話だがおとひっちゃんだって、杉本さんとおかっぱの女子だって、立村だってそれは知っているはずだ。
　けどおとひっちゃんはあえて、嘘をついてくれた。
　さっきたんと一緒に、嘘つきになってくれた。
　正々堂々とした性格の、嘘が大っ嫌いな、おとひっちゃんがだ。
「俺、嘘をついてまでかばわれたくないよ！　さっきたんもおとひっちゃんも何考えてんだよ。そうだよ、俺、ずっとあの佐賀さんって子と一緒にいたよ。俺が呼び出したんだ。そうだよ、健吾くんが騙されてるんだよ」
「知っているわ」
「知ってるならなんで、そんなわけのわかんないことするんだよ！　俺はこういう風に騙されるのが一番嫌いなんだよ！」
「ごめんなさい。でも、私も言いたかったの」
　さっきたんは僕のむちゃくちゃな怒鳴り声を黙って受け止めていた。善意でやってくれたことはわかってる。僕もこうしたかった。けど、ほんとは僕が全部けりをつけるつもりでいたことを、を勝手に演じられると腹が立ってしまう。理屈じゃない。わけがわからない。
「私、もし佐賀さんって人がいなかったら、同じことしていたと思うから」
　今度はうつむかなかった。唇をかみ締めた。目をそらさなかった。まっすぐすぎて、目が痛かった。蛇口をつけられたあたり、鼻筋一番上あたりがきんと冷えた。
「ごめん。俺、やっぱり変だよな」
「今からみんな話します。話したら、一緒に関崎くんのところに行くから。私」
　僕は全身脱力状態で思いっきり浅く座った。さっきたんの顔を見ないようにして、さっきの健吾くんと同じポーズを取った。少しは男っぽく見えるだろうか。
　さっきたんはしばらくためらっていた。片方の髪に手を置いて、しゅるっとゴムを外した。もう片方の束にも同じことをした。見ると、杉本さんと同じくらいの長さがある髪の毛がばさっと肩に落ちていた。耳の上だけゴムのあとで膨らんでいた。

「関崎くんが委員長さんと一緒に来た時、びっくりしたの。関崎くんはずっとうつむいていて、

委員長さんは今にも倒れそうな顔をしてたの。ずっと身体の震え が止まらなかったみたいで、用務員室に来た時、ふたりとも何も言わなかったの。そうしたら、窓からふたつ結びにした青大附中のあの人が、自転車漕いでいく のが見えて、みんな呆然って感じで眺めていたの」
　――わかってる。わかってるさ。俺が悪いんだ。
「関崎くんがそれ見て、最後にがっくり頭下げて、『すまなかった、俺が悪い』って言い出して、委員長さんもそんなことないって首振っていたわ。その時は何 が起こったかわからなくて、ただ私も眺めているだけだったけど。おかっぱの女の子、委員長さんと仲良しで、何度か腕さすってたわ。何か一生懸命話しかけて て、それでも何も言わなくて」
　――ああそうか。あいつにも彼女いるって言ってたよな。
　さっきたんの話によると、おとひっちゃんはもちろん、立村も相当、精神的打撃を受けたみたいだ。少しだけ、ざまみろと言いたくなった。人を殴ると大抵そうなるもんなんだ。
「しばらくそうしてたら、委員長さんがストーブの方に関崎くんを呼んで、話をしていたの。聞かないほうがいいかな、と思っていたんだけど、聞こえてしまったの」
「何、それは」
「それは……」
　さっきたんは口篭もった。大抵のことだけど、口篭もったことにたいていほんとのことが隠れてるんだ。話してくれるのを僕は待つしかない。ずっと黙っていたら、やっぱり痺れをきらしてさっきたんが動いた。かすかに、頷いた程度だった。
「一年のあの女の子に、ふつうの女子と同じ風にして、きちんと話をしてくれって」
「ふつうの女子？」
「あの子は今まで男子に人間らしく扱われたことがない子だから、他の女子たちを相手にする時と同じく、きちんとお断りしてあげてほしいって、一生懸命言ってたの」
　――まじかよ！
　ガラス張りの光が一瞬真っ白く染まった風に見え、僕は窓越しに空を見上げた。
「早い話、杉本さんって子を振ってくれってことなのかなあ」
　こっくり、さっきたんは頷いた。
「私、関崎くんたちがいない間、あの子たちと一緒にいたでしょう。ずっと一年の女の子、関崎くんのことばかり話してたの。どんなに私ともうひとりの子が別 の話をしようとしてもだめだったの。関崎さん関崎さんって、うわごとのように同じことばかり繰り返してたの。眠るまでそうだったの」
　相当、おとひっちゃんに思い入れていたのだろう。葉牡丹の彼女は。
「だからたぶん、関崎くんのこと好きなんだなって思ったわ。どうして好きになったのか聞いたら、『ちゃんと私の入れたお茶を、お礼言って全部飲んでくれた から』って。ありがとうって言ってくれたからって。そういう人、関崎くんのようなタイプの人にはいなかったから、きっと自分のことを好きになってくれたん だって、思い込んでいたみたいなの」
「ああ、お茶わんこそば事件だ」
　総田から聞かされた、五杯のお茶わんこそば。だからあっさり断っちまえって思ったんだ。ま

ったく、ああいうとおがおとひっちゃんの人のよいところで、罪作りなとこなんだ。
「話を聞いていて、ああ、きっと関崎くん、ふつうの女子にするような態度で話をしただけだったんだなあって、思ったわ。一年の子が寝てしまった後、一緒に いた子も言ったのよ。ずっと周りが盛り上げつづけてきたけれど、かわいそうなことしてしまったのかもしれないって。だから、委員長さんもこれ以上傷つけた くないからって言って、今日関崎くんに会わせて、きちんと結果を出してもらおうと話していたらしいの。最後にお互い納得づくで終りにしようねって。もちろ ん、その子には話さなかったらしいけれども、二年生ふたりがついてきたのは、そのことがあったみたいなの」
　もう、天才参謀だなんて言葉は返上しなければなんない。
　さっきたんの門前で咲いていたあの葉牡丹の花。僕は貧弱だ、みっともないと思っていた。葉っぱの毒々しさに負けて、なんてわびしい花なんだろうと思って いた。とんでもない。葉牡丹の花は僕だ。周りからさんざん「天才参謀」だと囃し立てられ、舞い上がって勝手に解釈して、結果、黙っていればうまくいくはず だったことを泥沼化してしまったってことだ。
「まじかよ」
「ほんとよ。けど、まさか佐賀さんという人がくるとは思わなかったらしくて、相当ショックを受けてしまったらしいの。それに加えて、辛いことがあったらし くて気分が悪くなってしまって、本当の赤ちゃんみたいにずっと同じことばかり繰り返してたわ。きっと傷ついたんだと思うの」
　――そのことは反省しないよ。佐賀さんはその倍傷ついている。
　僕はただ、自分の読みが甘かったことが許せなかった。黙っていれば佐賀さんの思うがままに進んだだろうに。健吾くんからもらった情報をきっちりと吟味し ないで、立村側の情報を集めようとしなかったことこそ手抜きの証拠だ。どうしておとひっちゃんにもっと近づかなかったんだろう。佐賀さんのことしか考えて いなかった僕のミスだ。
「それで、委員長さんはあの子を起こして、約束させたの」
「約束って、何をだよ」
「関崎くんに会わせる前に、ちゃんとこれだけ約束しろって。『関崎くんがどんな言葉を返そうとも、決して相手を恨んだらいけない。約束できるなら、これか らふたりで会わせるけどどうする？』って。委員長さん、一年のあの子のことが可愛くてしかたないみたいだったの。一生懸命、何度も話し掛けて、最後は指き りしたの。私に、佐川くんがしてくれたみたいに」
　小指の先が充血してるみたいだった。僕は小指の先を耳に突っ込んだ。
「その後は、私もわかんない。ただ、関崎くんは一生懸命話をしていたけど、あの女の子は妙にテンションが上がっていって、結局違う風に受け取ったみたいな の。いくら言い返しても話が通じなくて、とうとう関崎くんはあきらめてしまったの。戻ってきて、その子、二年の子に一生懸命話してたからわかったわ。関崎 くん、自分は公立高校に進学するつもりだからきっと合わないし、よくお互いを知らないから、お付き合いするのは難しいと思う、みたいなことを言ったみたい よ。でも、その子は『私は青大附属高校に進学させてもらえません。学校から追い出されることに決まっているから、かならず公立高校に追いかけていきま す』って、力強く言い張ったよ

うなの」
　――公立高校へ追い出される？　青大附中ってエスカレーター式じゃなかったっけ。
　――第一、おとひっちゃん、第一志望、青大附属高校だろ？
　あまり詳しいことを突っ込んでもしょうがないとはわかっていても僕は聞かずにいられなかった。
「それってどういうことだよ。だっておとひっちゃん公立すべりどめだろ！」
「だから、きっと、関崎くん、お付きあいを断る口実に、使っただけなのだと思うの。けど、その子はどうしてもその意味が理解できなかったみたいなの。どう しても、どうしても関崎くんを好きでいたいみたいだったの。そうしないと壊れてしまいそうだったの。その……杉本さんって人は」

　おとひっちゃんがなぜ、あきらめてしまったのか、だいたいおぼろげに見えてきた。
　ふつうに話せばきっとわかってもらえると、最初はおとひっちゃん、立村ふたりとも思っていたんだろう。きちんと話をつけて、失恋してもらえれば丸く収ま ると。けど、杉本さんはやはり尋常でない人だったんだろう。懸命に、どんなことがあっても、おとひっちゃんへ必死にしがみつきたかったんだろう。佐賀さん から聞いた理由を考えればそれも納得する。学校で無視され、嫌がらせを男子からされつづけ、先生からも嫌われる。自業自得なので僕は同情する気さらさらな いけれど、そんな生活の中でたったひとり見つけた「自分にお礼を言ってくれる」男子。それがたまたま、おとひっちゃんだったんだろう。
　さっきたんも気付いている通り、「してくれたことに対してお礼をいう」のはごく普通の礼儀だ。僕もお茶を入れてくれたくらいで相手へのめり込んだりはしない。単なる儀礼だと思うだろう。ふつうは。けど、杉本さんはそうじゃなかった。
　今まで、お茶を入れてあげて、お礼を言ってくれる男子がほとんどいなかったんだ。きっと。総田も内川も、最初に青大附中へ出かけた時、お茶をすぐに断っ たと話していた。おとひっちゃんだけは、そんなに嫌われている杉本さんのことを同情したのか、それとも何も感じなかったのかわからないけれど、きちんと礼 儀を守った。ただそれだけのことだ。そういう相手がもし、杉本さんの周りにいたとしたら、ここまでおとひっちゃんにのめりこんだりはしなかったんじゃない だろうか。そうだ、
　唯一守ってくれている、あの立村評議委員長相手だったら、葉牡丹を差し出しても両手で受け取ってくれただろうに。
　繰り返すけど、おとひっちゃんは決して、杉本さんみたいな子を好きにはなれないだろう。どんな理由があるにせよ、佐賀さんをいじめて、嫌がらせをしたこ とだけは否定できない事実なのだ。僕の脚本を始め、健吾くんの言葉、その他いろいろな噂などを複数合わせてみてもそう思う。
　けど、おとひっちゃんは、いい奴だった。
　運悪く、ものすごくいい奴だった。
　だから、杉本さんの想いをあっさりと切ってしまうことにより、すべての人から嫌われてしま

わないように、逃げ道を残してやったんだ。そういう奴だ。僕 だったらとことん立ち直れないくらい叩きのめして、ぷいっと捨ててやる。そうされて当然の女子にすら、情けをかけてやれるのが、関崎乙彦という男なのだ。
　僕の、一番の親友なんだ。

　さっきたんはちょっと黙り、こくんとつばを飲んだ。僕の表情を伺った。
「ふたりの女の子が車で帰って、私、関崎くんと、委員長さんと三人で話をしたの。関崎くんも困っていたし、委員長さんも何にも言わなかったわ。ずっと自転車を置いてあるところで、一生懸命話をしていたの。関崎くん、ひたすら同じこと言ってた」
　僕をまた、きつい視線で射た。受け止めた。
「『あのことだけは誰にも言わないでほしい』って」
「あのことって？」
「佐川くんがあの、佐賀さんと一緒にいたことを言わないでほしいって、何度も繰り返したの。委員長さんはずっと話を聞いて黙っていたけど、とうとう頷いた わ。さっき、話をしていた男子の人。あの人にずっと連絡をとって、佐川くんのことを報告していたらしいけれど、それをなかったことにするからって言ってく れたの」
「なかったことにするって？」
　立村が僕と佐賀さんについて、健吾くんへ連絡を入れ、不安をあおっていたらしいとは聞いていた。健吾くんが佐賀さんを伴って駅前に現れた理由はそれだ。僕の顔を見て、もし間違いなどあったら僕を殴り飛ばす覚悟で。見ただけで気合の入り方が違っていた。
「委員長さんの勘違いだったことにするって、言ってくれたの。関崎くんは、あの杉本さんって人に、一生懸命、礼儀正しくしてくれたんだから、それくらい自分がして当然だって。いい人だと思ったわ。関崎くんも、委員長さんも」
　――それでか。
　しばらく口篭もった後、僕は自分のたどり着いた答えをつぶやいた。
「だから、さっきたんは僕に付き合いをかけるため、嘘をついてくれたんだ」
「ごめんなさい。でも、関崎くんが電話で言ってたの。『きっと雅弘の奴は、嘘をついて助けようなんてしたら逃げる。決してその場でしゃべらせないようにしてやるしかない』って。私もそう思ったの。だから、言わなかったの。ごめんなさい」
「もういいよ。親切なつもりでやってくれたんだよね」
　本当は感謝の言葉を伝えたかったのに、出たのは冷たい言い草だった。
　おとひっちゃんも、僕の性格を理解しているんだ。あらためてそう思った。
　僕がひそかに佐賀さんを守るために計画していたことを、おとひっちゃんは無意識に奪い取って、さっきたんと協力してやってのけてしまった。いつだったか総田に、
「あいつ、人の言ったことをそのまんま鵜呑みにして、自分の手柄にしちまうんだぜ」
　とこぼされたことがある。まさに今回は僕がパクリをやられてしまったってわけだ。
　もちろん、おとひっちゃんとさっきたんが、僕のことを守りたくて、懸命にしてくれたことは

わかっているつもりだ。さっきたんが必死に嘘をついてまで、僕のことを助けようとしてくれたと、頭の中で感謝しなくちゃ、とは思っている。けど、本能の方が頷いてくれなかった。
　――なんで、よけいなこと、したんだよ！
　叫ぶ自分が残っていた。助けてもらいたいなんて、思わなかった。ただ、僕は佐賀さんを守りたかった。結果的におとひっちゃんのやり方で佐賀さんの立場もキープされたわけだけど、本当は、それを僕がやりたかった。僕ひとりのやり方で、佐賀さんを守りたかった。

「だから、佐川くん、私、もし必要なことがあったら、お付きあい相手のふりするから」
「いいよ、さっきたん、いやなこと無理にしなくたって。おとひっちゃんに頼まれた義理はもう果たしたんだろ」
　冷たい。いやな奴だ。けどそう返事するしかない。僕は目を向けず、態勢をそのままにしてつぶやいた。
「ううん、だからさっきも言ったわ。私、いつか、そう言いたいと思っていたから」
　――俺は、守られたくない、守りたいんだ！
　僕はさっきたんの顔を、前かがみのまま振り仰いだ。
　芯のしっかりした、やわらかい、まっすぐなまなざし。
　はつかねずみのようなあどけない口元。
　そんなさっきたんがいい人だなって思っている。今でも変わらない。
　けど、今の僕はさっきたんの言葉を受け取れなかった。
　――さっきたんは俺のことを守るつもりでいるんだろうけど、俺は、佐賀さんだけしか守りたくないんだ。
　気が付いた。やっぱり僕の前には、佐賀さんしか映っていなかったんだ。
「俺はさっきたんの気持ちには答えられない。ごめん」
　ゆっくり前かがみの姿勢をただし、背をしっかと伸ばし。 きっちりと答えた。杉本さん相手のおとひっちゃんの時みたいに、誤解されないように言った。
「俺は守ってくれる人よりも、守りたい人を好きになるタイプなんだ」

　泣かれるかと思った。罵倒されるかと思った。けど違った。やっぱり僕の隣りにいたのは、さっきたんだった。
「うん、わかった。佐川くん。けどこれだけは覚えていてね」
　すっかり真っ赤になった頬を、さっきたんは隠さなかった。
「私とつきあっているってことに、交流会の中だけでもしておけば、あの佐賀さんという人には会いやすくなると思うの。そういう時だけ、私を呼んでくれればそれでいいの」
　――さっきたん、それは、ひどいよ！ そんな俺がひどい奴だと思っているのか！
　声が出た。慌てた。
「俺、そんな汚いことしたくないよ！」
「ううん、いいの。そうすれば、あの人に堂々と会えるのでしょう」

――そりゃそうだけど……。
僕の心に残酷な計算が一瞬働いたのを、さっきたんに読み取られちゃったんだろうか。
確かにさっきたんの言う通りだ。ここでさっきたんと付き合ったことにしておけば、これから先、佐賀さんと会うのに好都合なのだから。健吾くんもすっかり 信じ込んだだろうし、さっきたんに本当の事を隠しておけば、お互い傷つかないで済む。総田と同じようなことを、僕ならもっと要領よくやる自信がある。
「そうすれば、私も、ほんの少しだけ佐川くんの役に立っているんだと思えて、嬉しくなるの。だから、必要な時は言ってください」
傷ついたんだろう。きっと、さっきたんは僕が想像している以上に傷ついたんだ。僕が付き合いをＯＫするんじゃないかと、希望をもっていたんじゃないかっ て気はしていた。たぶん、佐賀さんに出会っていなかったら、おとひっちゃんの顔色を伺いつつ、お付きあいまで持っていったかもしれない。嫌いじゃない、女 子の中では二番目にいいなって思っている子なんだから。けど、それはもうできなかった。
――俺は、佐賀さんを守らなくちゃいけない。
言葉に出さず、僕は立ち上がった。
「ごめん。あらためてきちんと話すけど、やっぱり僕は今、さっきたんとは友だちでしかいられない。悪いけど、おとひっちゃんのいるところに連れてっていってくれるかな」
さっきたんの縋る目を、振り払いたかった。
さっきたんはあきらめ加減に頷いて、ガラス戸を開けた。春だった。外の空気はもう、完全に和らいでいた。室内のこもった空気よりも、まだ冷たさの残る、鼻毛が震えそうな外気の方が、僕には気持ちよかった。

駅の裏は海だった。少し裏を回ったところに小さな公園があって、しょっちゅう大道芸人や動物披露ショーなどが行われていた。僕も小さい頃はよく観にいっ た。おとひっちゃんも一緒だった。ロバとか七面鳥とかが臨時の柵の中でちんまり座っていたりした。けど今はそんなところ、めったに行きやしない。夜中には 暴走族とか、ちょっと変わった感じの人たちが集まる集会とか、寄るとちょっと怖い場所に変わっている。当然のことだけど、子どもが遊ぶこともほとんどな い。
さっきたんが連れてきてくれたのは、ほとんど人のいない公園の中だった。
「ありがとう、ここだったんだ」
口を利かないで、たださっきたんと五分くらい歩いていた。潮の匂いが気持ちよかった。だんだん歩いているうちに寒くなって、何度かさっきたんはくしゃみしていた。
「佐川くん、また、四月に学校でね」
「うん、さっきたん、同じクラスになれたらいいな」
言ってしまってから後悔した。僕はたった今、さっきたんを振ったばっかりじゃないか。
精一杯の譲歩をしてくれたさっきたんに対して、
「俺は守られるんじゃなくて、守りたい人を好きになるタイプなんだ」

と、言い訳にならない理由でもって跳ねつけたばかりじゃないか。
――最低野郎だよな。俺は。
「うん、お祈りしていていい？」
少し、にじみ出るような笑みがこぼれていた。本当だったら僕は、めいっぱいの笑顔でもってさっきたんと帰りたかった。けど、もうできなかった。
「また、春休み中に会うかもしれないしさ、じゃあね」
僕は手を振った。公園の入り口でさっきたんは何度も僕を振り返りながら、もと来た道を戻っていった。

さて、どうするか。
おとひっちゃんがいるという公園。ろくに手入れされていない。雪がまだ隅っこの方に汚く残っている。足を踏み入れると靴がぐちょぐちょになった。せっかくいいスニーカー履いて来たのに。僕はベンチの方の人影を探した。
すっかりさび付いた遊具の数々。ブランコも壊れる寸前で、木の座るところが割れていた。シーソーも動かないまま。僕はずっとおとひっちゃんを探していた。
「おとひっちゃん」
小さい声で呼んでみた。
「おとひっちゃん、どこいるんだよ」
ちっちゃな頃と同じように、叫びたくなった。
「おとひっちゃーん」
返事はなかった。僕は適当にベンチのあたりを回ってみることにした。
靴を泥だらけにしながら……時たま、結果の悲惨な通知表をどう親に見せるか考え込みながら……一番端にいるふたりの影に近づいていった。途中のベンチからは後ろ側を歩くことにした。そちらの方が気付かれにくいかも、と思ったからだった。
さっきたんが話してくれたことは、僕の想像に近かったとも言えるし、かなりずれていたとも言えるだろう。立村がおとひっちゃんに要求したものが、思った よりも低いレベルのものだったことに、最初はほっとした。てっきり、「杉本さんと交際しろ」みたいなことを言われたのではないかとはらはらしていたから だった。「きちんと人間らしく振ってやってくれ」ということだったら、簡単だったはずだ。もっともそういう注文が必要な相手だったので、まだ問題は山積みのようだけども。立村もその条件と引き換えに、僕と佐賀さんは全く繋がりがないということを証明すると約束してくれたという。
僕からしたら水鳥中学丸儲けって気がする。
健吾くんも話していた。これから立村を弾劾裁判にかけるらしい。青大附中って不思議な空間だと思うんだけど、この時代においてまだ「弾劾裁判」なんても んがあるらしい。さんざん嘘を言って健吾くんを不安にさせた罪を、上の先輩によって裁いてもらうらしい。どんなことするんだろうか。「裁判」という以上は 有罪か無罪かを決めるんだろう。立村が宣言した通り沈黙する覚悟を決めたのだったら、当然有罪扱いされるだろう。

　また、僕にも殴った後約束した通り、杉本さんをこれ以上水鳥中学に迷惑かけないようにする、という約束の件。正直なところそれさえしてもらえれば後はど うでもいいってのが本音だ。もちろんおとひっちゃんを追って公立高校を受験するのは勝手だけど、それは別の話。交流準備会には一切参加させないようにして くれるはずだ。立村が一方的に非を請け負ってくれるならば、水鳥中学は万々歳だ。
　完全犯罪ってことで、片付けられていたら、僕ももっと気楽でいられただろう。
　いつもは僕も、上手に片をつけている。総田に頼み込んでうまく図書準備室を借りて、佐賀さんとふたりきりで相談し、杉本さんを再起不能なまでに叩き落し、おとひっちゃんからも引き離す。完璧な計画のはずだった。少なくとも、立てた段階ではそう思っていた。
　けど、僕は根本的に間違っていた。おとひっちゃんが僕の想像していたような、単細胞のいい奴なんじゃないってことと、蝋人形の立村が実は相当な兵だったこと。そして、さっきたんの行動力と想い。すべて僕が目をふさいでいたことばっかりが、今ごろになってやってきた。
　見つめていたのは、佐賀さんのことばかりだった。寝ても冷めても、鈴蘭優のポスターを通じて佐賀さんばかり追っていた。今なら分かる。佐賀さんをどんな 卑怯な真似しても守りたかっただけだった。おとひっちゃんに嫌われることを覚悟で、佐賀さんに評価してもらいたかった、それだけだった。
　――けど、結局守ったのは、おとひっちゃんたちの手でなんだ。
　僕はただ、取り返しできない寸前まで問題をふくらませただけだった。

　ベンチ五つ分離れたところに、人影を見つけた。
　ふたりだった。おとひっちゃんだってことは、ひとりの背が異様に高いことからすぐにわかった。もうひとりは誰だろう？
　野郎だってことは見当がついた。しばらく様子を見ながら少しずつ近づいた。
「おとひっちゃん？」
　一つ分のところで声をかけた。ふたりの影がこっちを向いた。
「雅弘か」
　何か用か、とは言わなかった。隣りの奴だけが、冷たく僕を見据えている。何か言わないとまずいだろう。僕の方から先制攻撃をしてみた。
「貸し借り、これでゼロだな」
　蝋人形がかすかに微笑んだ。冷たそうだが、それでいて全く動じないって風に見えた。
　隣りのおとひっちゃんは、そいつに向かい、もう潮時だろって顔で顎でしゃくった。
「悪かった。そろそろ行くよ」
「弾劾裁判か？」
　僕もできるだけ冷たい響きを持たせるようにして尋ねた。同じトーンで話をしたかった。
「そうだ。覚悟はしている」
　濃い目のチェックが入ったグレーのブレザー制服姿野郎は、かばんのとってを持ち直すと、おとひっちゃんに軽く一礼した。後、僕に向かい、

「関崎に感謝するんだな」
　また捨て台詞を残して歩いていった。初めて会った時とは違う、堂々とした態度だった。最初からああいうところを見せていたら、僕も「腹下しの蝋人形」だなんて見くびらなかっただろう。黙って見送り、後姿が角を曲がるまで待っていた。

　僕とおとひっちゃん、ふたりきりになった。ベンチの黒い背に片手を置き、僕はおとひっちゃんの脳天に向かって語りかけた。
「おとひっちゃん、みんな聞いたよ」
　返事はなかった。
「さっきたんにみんな話を聞いたんだ。俺が聞き出したんだからさっきたんは悪くないよ」
　さららと木々の擦れる音がした。
「ほんとにごめん」
　身動きしなかった。無視したいんだろうか。急に身体が冷えた。
「俺、いつになったらおとひっちゃんの弟分から脱皮できるのかな」
　何か言うべきことがもっとあったような気がした。くどくど説明したかったけれども、なんだか照れくさかった。いつもだったらおとひっちゃんに言われていることを、繰り返すことはしたくなかった。ただ、伝える言葉だけぽんと投げ出した。
　おとひっちゃんは少しうつむき加減になり、がくんと頷いた。そのまま態勢を崩さなかった。僕が離れていっても追ってこなかった。

　頭をこつっと叩かれた。総田だった。
「いや、なんでもないよ」「じゃあちっと俺の話を聞け」
　上の空で返事しているのがまずいんだろう。自分でもわかる。総田は口を一回への字のした後、いつもの調子でしゃべくった。
「なんかなあ、青大附中の『忠臣蔵』テープ、あれを聴いてからってもの、生徒会連中の目の色ががらっと変わっちまったんだ。佐川、お前には悪いがあのさむ いぼ症候群のくさい演劇台本、あれは却下だ。内川の奴、すっかり目を輝かせてさ、『ぜひ六月に、時代劇をやりましょう！演劇だと大変ですから、放送委員 会を巻き込んで、ラジオドラマっぽくやりませんか！　やっぱり、時代劇は男のロマンですよ！』って騒ぎ出したんだ。もうあいつも、燃えるとやるからなあ。 俺もお口あんぐりよ。勧善懲悪ラジオドラマ・生徒会製作で決定だぜ、おい」
　いいかもしれない。公立の水鳥中学なんだから、あまりお金の掛かることはできないだろう。それにラジオドラマだったら、声だけ演技するだけでいいはず だ。即席声優でもＯＫだろう。例の「中学演劇脚本集」から選ばなくたっていい。放送委員会を巻き込んで、昼の放送で流してもいい。頭いいこと考えるもん だ。やっぱり総田と内川、この二人、よくやるよ。僕の出番はもうないんじゃないか？
「ったく、天才参謀の名が泣くぜ。お前にはこれから、関崎を丸め込むっていう大きなお仕事が待ってるんだぜ。なんとかお茶わんこ娘は追っ払うことできたみたいだけどな。世の中まだまだ先が長いんだ。第二、第三の悲劇が続かないとも限らんぜ」
　――誰が天才参謀なんだよ。
　また物思いにふけった。

　ふたっつにしばったあの髪の、あの人のことを。
　　健吾くんが誤解したまま笑顔で帰った日のことを、僕は思い出していた。
　おとひっちゃんとさっきたんの演技が完璧だったおかげでその場は凌げたけれども、結局は騙したことになってしまったわけだ。真っ正直なおとひっちゃんが嘘八百をつきとおしたことにびっくりしたってのもある。
　この展開、きっと立村評議委員長がすべて計算したものだろう。そう信じて疑わない。　おとひっちゃんがひとりで思いつくわけないじゃないか。あいつみた いな一本気な奴が、こんな入り組んだ計画を立てられるわけがない。もっともおとひっちゃん本人はきっとひとりで立てた計画だと勘違いしているだろう。用務 員室か帰り道か次の日の電話か、とにかく立村に「佐川の尻拭いは次のようにしたほうがいい」と吹き込まれて、それはいい、と素直に判断したというのが妥当 だ。僕がもっと早く気づいていたら、ちゃんと進路修正してやったのに。
　ほんとだ。どうして僕は気付かなかったんだろう。　本当の敵は、別にいるってことを。　隣りの総田がひたすらしゃべりまくっているのを聞き流し、僕は改めて後悔した。
　「おい、佐川、聞いてるのか？」

　総田が、いきなりこめかみのあたりを握りこぶしでぐいぐいやりだした。つぼマッサージ、気持ちいい。
「いいいい、もっとやって」
「お前変態じゃねえか」
「いいよ、もっと締めて」
「こええなあ」
　手を離してくれた。僕は押えられていたこめかみを自分でもう一度もんだ。「あのなあ、お前さ、あの青大附中の女子、気にいってたんだろ？」
「はあ？」
　とぼけるべきか否か。たぶん気付いているさ。隠すのもおとひっちゃんみたいでみっともない。
「どうやら図星らしいな」
「関係ないだろ」
　もう会えないかもしれない。やりきれなくなってくる。
「あのな佐川、お前自分で自分がわかんねえだろ。ほら、俺が聞いてやる。今までの礼だ。思春期の男子が持つ性欲処理その他、ご相談にのりまっせ」
「総田の方がそっちの問題、まだてこずってるんだろ」
　怒らせないぎりぎりのとこで、からかい口調で返事した。
「せっかく俺が心配してやってるのになあ、いやな、この前例の集まりで、気になる噂を小耳に挟んだんだが、どうしたのかなあ」
　どうした総田、いきなり意味ありげな口のゆがませ方は。僕はそっぽを向いた。
「ほらほら、すねねえでさ。つまりだな、四月以降の交流会については、しばらく佐川、お前を降ろしたいっていうだれだかさんの希望があるみたいでなあ」
　総田の言葉の意味が、一瞬読み取れなかった。
「だれだかさんって誰だよ」
「お前の大親友」
　ごくんと空気を飲み込んでしまった。むせそうになった。げほげほやってると総田が背中をばしばし叩いた。かなり痛いんだけどな。
「俺も耳を疑ったけどな、あいつ本気だぜ。お前、思い当たる節あんの？」
　　総田はどのくらい気づいているのだろう。僕にはわからなかった。
　はっきりしているのは、総田の言うことが全くガセネタではないということだろうか。そう言えば四月以降の交流会について予定は決まっているはずなのに、あいつは一言も教えてくれなかった。
　青大附中の連中にも僕が、渉外役だって伝えてあるはずなのにだ。変だとは、思っていたんだ。「それについてはただ今、内川と俺との二人体制で反対運動を やっているけれど、なにせあのシーラカンス野郎、燃えたらとことんだろ？　俺としても事実関係を掴まない限り動けねえからなあ。おいおい、動揺してるん じゃねえの？」

　とことん総田は攻めてくる。怖い、怖い。去年までの僕だったらもっとつらっとした顔でいられたのに、どうしてか今だけは駄目だった。唇がかさかさしていて、乾いた皮をはいだ。ひりひりした。
「それ、おとひっちゃんが俺を外したいって言ってるのか？」
「そうなんだよ。やたらと意地になっちまってさあ。『雅弘があの会に出ると、かえってひどいめに遭う可能性があるから、涙をのんで出さない。理由について は言えない』ってな。いかにも理由を知りたいなあといわんばかりの、言い方だろ？　となったら聞かずにはいられない性分なもんでね」
　――俺がひどいめにって、誰にひどい目に遭わせられるんだよ。立村か？
　――大丈夫だよ、今度は俺だって殴り返せるよ。この前は油断していたから。
　あいつの性格上、想像できないことではない。僕があのまま佐賀さんといちゃついていたってことになったら、たぶん健吾くんあたりから決闘の申し込みが届 くだろうし、立村委員長だって黙ってはいないだろう。それをうまくとりなして、何事もなく終わらせるために僕を外しておくっていうのも、一つの手だろう。 けどそれは裏を返すと、もう二度と佐賀さんに会えないってことにもなる。だって佐賀さんも、僕も委員会には関係ない奴だ。佐賀さんはもしかしたら二年で評 議委員を狙えるかもしれないけど、万年学習委員でもう三年、後のない僕にはおとひっちゃん経由の通り道しかないのだから。
　文句を言いたくても、言えない。
　おとひっちゃんの判断は確かに、正しかったんだから。たとえ立村に吹き込まれた案だとしても、僕がこれ以上酷い目にあわないで済むにはこれが一番なんだ。佐賀さんに会えない、もう連絡できない、それさえ飲み込めばだった。
「ほらほら、言ったら楽になるぜ、あの子のことかなあ。うちの川上が鋭くチェックしていたぜ、『あの子、なんだか佐川の生き血をすすりにきたみたい』ってな。俺もそう思うぞ」
「そんなんじゃねえよ！」
　かっとなったのを押えきれなかったのは失言だ。いつものパターンじゃない、完全に総田のペースに乗せられた。僕が言い訳をすればするほどどつぼにはまる。　あきらめた。素直にうなだれるに限る。総田に対してはそれが利く。
　僕は所々曖昧にぼかしながらごたごたの説明をすることにした。あんまりにも自分が情けなくなるようなところはもちろん飛ばして、だ。

「しくじったよ、ほんと」
　総田は一通り聞き終えた後、ぽんと膝を打った。
「あの蝋人形がなあ。そうかそうか。まあ、そういうことだったら関崎も大事な弟分を魔女の手から守りたいだろうなあ」
　だから、なんで魔女なんだよ！
　ふたつに分けた髪型が良く似合う、かすみ草の雰囲気の子なのにだ。きっと川上さんになにか吹き込まれたんだ。きっとそうだ。訂正しとかなきゃ。

　ゆっくりと、顎のところに親指と人差し指でブーメラン形をこしらえ、総田は髭剃り後の白っぽい所をさすった。
「けどなあ、佐川、お前もうとっくに、一番いい方法知ってるんだろ」
　総田は僕をじんわりと見た。ちっとも焦っていない。当事者じゃないからな。
「なんだよそれ」
「とぼけるなって、お前がわからねえわけないだろ。さっき言ってたよなあ。なんか、バスケ部野郎が言ったんだってな。お前に彼女がいるなら、安心して自分の彼女を手伝いに出せるってな」
　確かに。健吾くんはおとひっちゃんとさっきたんに騙されたんだ。あいつってもしかして、おとひっちゃん以上に単純野郎なのかもしれない。ふつう、疑うだろう？　僕だったら絶対に裏を取ろうとするけれども。総田はさらに声を低めて言う。
「なら、そう思わせちまえばいいだろ。どうせ生徒会関係は熱血関崎と、蝋人形立村とが仲良く話し合いするんだ。表舞台は二人に押し付けて、佐川は例の子とよろしくやりつつ、ちゃんとカモフラージュをこしらえるってな。お前、そういうの得意だろ。ていうか」
　また言葉を切った。僕を横目で見た。
「そのつもりだったろ、佐川」

　いつもの僕だったら、何も考えずに選んでいた方法のはずだった。総田に言われる前から、答えは出ていたはずだ。それを選べないのは、まだ僕が総田の求める「天才参謀」へ復活していないからだ。
「ま、これから俺も、佐川にもう少し活躍してもらわねえと困るからな、今日のことは貸しにしといてやるわ。ま、人間生きてたら、いろいろあらあな」
　やはり総田は話がわかる。たくさんの修羅場をくぐりぬけてきただけある。説教じみた言い方一言もしないのに、僕がしたいと思っていて忘れていたことをさらりと教えてくれる。しかもそれをおとひっちゃんと違って僕の負担にしないところがまたいい。
　僕は立ち上がり、敬礼した。

　青潟の四月はまだたんぽぽが咲いた土のとこに雪が残っている。スニーカーのつま先も真っ黒くなり、たまに滑りそうになる。僕の後ろには誰もいないから、 学校でグラウンドを走っている時と違って、泥ひっかけて文句言う奴もいない。僕だってそれほど足が遅いわけじゃないんだけど、やっぱり元陸上部には負け る。
　先頭のおとひっちゃんとは、一軒、家が挟まるだけの間が空いている。
　――早く終わろうよ、おとひっちゃん。もう苦しいよ。
　途中おとひっちゃんが飛ばしすぎて姿見えなくなったところで、少し歩いたりもしたけれど、結局、疲れの度合いは一緒だった。へろへろになりながら、ゴー ルの駅前にたどり着いた。すっかり太陽が昇っている。駅終点の市営バスから降りてくるのは、スーツ姿の大人ばかりだった。制服を着た高校生っぽい奴らも数 人たむろしている。ゴールはうちの店だった。朝七時前でも駅

前は人が結構いるんだから、もっと目立たないところにしてくれたらいいのに、おとひっちゃんは やっぱり抜けているんだ。
「雅弘、お前、宿題やったのか？」
　まだ春休みの宿題に手をつけていない僕の状況を、長年の勘でおとひっちゃんは気付いているみたいだった。首を振る。
「じゃあ昼に届ける」
「え？」
　いつものことだった。おとひっちゃんは始業式三日前くらいに、わざわざ宿題を完璧に仕上げたノートを貸してくれる。全部それを写しておけばいい。おと ひっちゃんの答えは大抵当たっている。僕の成績レベルで宿題全問正解だと確実に怪しまれるので、少しだけわざと間違えたりしておけば完璧だ。
「おとひっちゃん、ごめんな」
「じゃあ、後で」
　おとひっちゃんは背を向けた。僕が裏口から入ろうとした時、
「あ、雅弘」
　声だけでぐいと呼び止められた。短い言葉。
「なんだよ」
　しばらく口篭もり、おとひっちゃんは紺ジャージ上のチャックを上まで締めた。つめえりっぽく見えるように着こなしていた。
「学校始まってからはしばらく生徒会室に寄り付くな」
　それだけ早口につぶやくと、おとひっちゃんは軽く跳ねるようにして、自分のうちの方へ走っていった。まだ走り足りないんだ。元陸上部は体力のけたが違う。帰宅部の僕と一緒にするなって思った。
　やっぱりそうなんだ。総田の言ってた通りだ。

　汗をかいて身体があったかい。おなかがすいた。たっぷりご飯を食べたい。味噌汁の匂いに誘われて、僕はいったん考えるのをやめた。食欲こそ一番だ。　お とひっちゃんがこんな風に僕を「朝のジョギング」へ誘い出したのは、三学期終業式の翌日からだった。いくら「水に流す」と言ったところで、奴は簡単に許し てくれないだろう。親友扱いしなくなるだろう。覚悟していた。もうひとりで宿題やらなくちゃいけないし、おとひっちゃんとも口を利いたらいけないんではな いかと思っていた。
　けど、おとひっちゃんはほんとに、きれいさっぱり水に流してくれた。
　いきなり電話をかけてきて、
「明日からお前、俺と朝走るんだからな。準備しとけ」
　と言い残し、またがっちゃり切った。冗談かと思った。本気だった。おとひっちゃんは朝六時半ちょうどに裏口までやってきて強引に連れ出し、スニーカーの 履き方ひとつにも文句をつけ……結び方が甘いとか、足を痛めるから別の靴を履けとか……二十分から三十分間、しっかり走り

つづけた。
　おとひっちゃんが元陸上部の長距離ランナーだったことを知らぬものはいない。けど、今までは早朝トレーニングなんてしてなかったんじゃないかなあ。本人曰く、
「現役だった頃はもっといけたんだけどなあ、身体なまったな」
　と悔しそうだったけれども、帰宅部の僕にとってはしんど過ぎた。もういいかげんにして欲しい、と思う一方で、大人しくくっついて走っていた方がいいんじゃないか、っていう気もしていた。
　言葉を使うのが苦手だ、おとひっちゃんって奴は。枝をぽきんと折って投げつけるような言い方をする。身体を使った言葉ならすぐにぴんとくる。顔を見た り、動作をチェックしているだけでおとひっちゃんの考えていることがよくわかる。へばる寸前で顎上げている僕を、曲がり角のとこで緩めることなく待ってい てくれているおとひっちゃん。ひたすら追っかけていた。終わった後で、どこでくすねてきたのかガムを一枚渡して走り去っていくおとひっちゃん。何も言わないけれども、まっすぐ見つめてくるおとひっちゃんがいた。
　やっぱり俺は、おとひっちゃんの「弟分」なんだ。
　逆らえない。
　どんなに理不尽だってわかっていても、だ。
　あいつにとって僕は、まだ面倒を見ることが必要な弟分であることを改めて実感した。いつもおとひっちゃんにあわせて「弟」の顔をこしらえてきたけれど、とっくの昔に卒業したと思っていた。けどやっぱり、おとひっちゃんに最後はかばわれてしまったというわけだ。
　――俺はやっぱり、守られるだけの奴なのかなあ。
　走れば走るほど、重たくなっていく鉛みたいなものが心臓のあたりに落ちてくる。
　中学三年用の参考書と、うちの母さんが買ってくれた真新しい下着一式を机の上に投げたまま、僕はベットに横たわった。天井にはだいぶ古ぼけてはがれかけた鈴蘭優が笑っていた。
　――やっぱり、俺はもう、佐賀さんに会えないのかな。
　何度も鈴蘭優のポスターに話し掛けてみたりした。野郎友だちにばれたら何言われるだろう、不気味がられるだろうな。
　もう一度鈴蘭優を見上げて、同じ髪型のあの子のことを思った。
　そう、「想った」。

　人手がないってこともあって鈴蘭優ポスターで夢見る時間はすぐに遮られた。父さんに言いつけられ、仕方なく店のドア拭きに専念していた。自動ドアの硝子 がまぶしくて目が痛くなりそうだった。ゴールデンウイーク時期は夏っぽい気温になるんじゃないかとうちの父さん母さん、真剣な顔で話していた。手の油がつ いた部分を、へっぴり腰でごしごし拭いていると、声をかけられた。
「佐川さん、今、大丈夫ですか」
　僕の名前を「佐川さん」と呼ぶ人は、ひとりしかいない。
　ぞうきんをしっかり握り締めたまま腰を伸ばし、振り向いた。喉からばくんと爆弾が飛び出し

そうだった。あの声、全身ピンク、ピンク、ピンクの女の子。あの子だ。身体が一気に春体温で上昇していくのがわかる。早く、早く、なんか言わなくちゃ。ほら、あの。
「佐賀さん！」
　それしか言葉が出なかった。

「今日、エレクトーンのお稽古だったんです。久しぶりに寄ってみました。あの時のこともお礼が言いたくて」
　僕が大嘘言った時のことだろうか。ちくっと痛む気持ちを押えつつ、僕は首を振った。
「たいしたことないよ。けどあれから大丈夫だった？　佐賀さんは」
「はい、私、評議委員になりました！」「あれ？　まだ新学期始まってないんだろう？」
「いいえ、うちの学校は公立よりも始業式が三日早いんです」
　今日の髪型はいつものお団子ふたっつ。やっぱり佐賀さんはこの髪型が一番似合っている。
「今度の交流会は、それじゃ堂々と参加できるね！」
「はい、佐川さんもいらっしゃられるんですか？」
「うん、なんとかさ」
　口篭もった。僕もおとひっちゃんに言い渡されたのは今朝のことだ。おとひっちゃんはすでに裏で手を回しているらしい。総田に気付かれるくらいだから、参加できる可能性は七割方、ないだろう。
　仕事中だと気、遣ってくれたんだろう。佐賀さんはピンクのかばんを開いて、何かをさっと取り出した。別に、佐賀さんと一緒だったらガラス磨きなんてさぼったっていいのにな。
「それでなんですけど、これ、新井林くんから頼まれて預かってきました。後で読んでくださいね」
　両手で一度胸に当てた後、僕を見つめてすうっと差し出した。漫画で見たことのあるラブレターを渡す場面みたいだった。そんなわけないけどさ。こっちもなんというか言葉が出ない。
　――ああそうなんだ。俺にはさっきたんがいるから、安心して連絡できるんだよな。
　三月末のことを思い出した。痛いところをつついてしまった。あの時佐賀さんはずうっと、健吾くんに寄り添っていたっけ。僕の隣りにもさっきたんがいたのに、なんだかぐさぐさくるような気がしてならなかったことを覚えていた。
「ありがとう。じゃあ後で読むよ」
　ソフトクリームに見える複雑な折り方の手紙だった。僕は佐賀さんがいなくなるまで見送った後、大急ぎでガラス拭きを終わらせた。途中雑になってしまったところがあるけれども、まあいっか。

　部屋に戻り、だいぶ色あせた鈴蘭優のポスターを眺め、ベッドの上へ横たわった。
　文字を読む時だけはちゃんと目を開け、ポスターを眺めるときは目を寄り目にして少しぼやけるようにしてみた。ぼやあと佐賀さんの姿と声が蘇ってくる。自分に言い聞かせ、ソフトクリーム型の手紙を開いた。もう、元の形には折れないぞ。

佐川さんへ
ずっとお手紙を書こうと思ってました。お話したいことがたくさんありました。けど、私の周りではいろいろなことが起こって、話せば話すほど大変なことになりそうなので、お手紙にします。
まず、私のことなんですけど、ちゃんとお約束通り三年Ｄ組の評議委員になりました。もちろん新井林くんも一緒です。クラス全員満場一致でした。担任の先 生がもちろん力を入れてくれたのもあるんですけど、やはり女子がみな、杉本梨南ちゃんのことをあきらめてくれたのが大きかったんだと思います。もう梨南 ちゃんの存在は、クラスでも薄くなってきています。先生は最初、梨南ちゃんを、「人の心がわかるように」という理由で保健委員にするつもりでいたみたいでした。けど、保健委員の人たちがそれ以来必死に仲良くなって、どの委員の男女も一気に理解しあおうと動くようになり、結局梨南ちゃんはどの委員にもなれま せんでした。
この前お会いしたときにお話したとおり、私は梨南ちゃんをかばってあげなくちゃいけないと思いました。だから、これからはクラスから嫌われてしまった梨南ちゃんを、さりげなく面倒見てあげるようにしなくてはと思っています。
決して、私は梨南ちゃんのことを好きなんじゃありません。佐川さんとお話してわかりました。嫌いです。大嫌いです。でも、嫌いだからいじめるという発想 自体が間違っているような気がしてなりません。嫌いだったら、哀れんであげること、そういう考えしかできない人のことを同情してあげること。自分とは違う 世界の人なんだと思って、接すること。これが大切なんじゃないかなあと、お母さんと話してて思いました。
嫌うんじゃなくて、許すこと。そういう人がいるんだと思ってあきらめること。
今、あらためてお母さんの言う言葉が本当だって思いました。
だから、私はいじめたりしようとは思いません。ちゃんと、クラスをまとめて堂々と評議委員を務めようと思ってます。

佐賀さんってほんと、文章がうまいなあ。あらためて思う。
僕なんてまだ小学生と間違えられるような書き方しかできないのに。公立高校入試に作文の試験が無くて本当によかったって思った。
佐賀さんの手紙はまだまだ長かった。

新井林くんも、今は完全に梨南ちゃんのことを無視しています。もうどうでもいいみたいです。さすがにクラスで悪口言う人がいるとたしなめることもありますけれど、もういてもいなくて

もどうでもいい人になっちゃった梨南ちゃんにかまう人がいなくなったというのもあります。
　梨南ちゃんは、暇さえあれば関崎さんの手紙を眺めています。折れ目がつかないように下敷きの間に挟んでいます。立村評議委員長が毎朝様子を見に着ます。「関崎さんは今度いついらっしゃいますか」と繰り返してます。いつかは関崎さんと会えるのだと信じているみたいです。
　でも、新井林くんが話していましたけれど、立村評議委員長は、もう二度と水鳥中学の方へ梨南ちゃんを送らないつもりだそうです。
　ここからは絶対に誰にも見せないでください。関崎さんにも話さないでください。

　なんだろう、おとひっちゃんのことだろうか。
　気になって続きを読みつづけた。

三月に、関崎さんと佐川さんと、もうひとりの女子の人と会った後、卒業した先輩に思いっきり怒られたそうです。新井林くんが言うには、叩かれたりしたらし いです。けれど、梨南ちゃんを交流関係のサークルに入れるということだけは、絶対に譲らなかったそうです。もしそれをさせてもらえないのならば、自分は委 員長を降りるつもりだ、とまで言ったそうです。最後は健吾が割って入り、なんとか納まったらしいです。
　ですから、梨南ちゃんは表に出ないけど、一応、交流関係のグループにはいます。
　今の三年の女子先輩で評議委員から降ろされた人がいて、その人が仕切っています。一生懸命梨南ちゃんはくっついて、関崎さんのことを聞き出そうとしています。もちろん仕事もきちんとやるし、周りは女子ばかりなので、楽しそうです。

　おいおい、なんだよ。ということは立村、約束が違うんじゃないか。
　僕は何度もつぶやいた。

でも、その時に、梨南ちゃんをもう二度と関崎さんには会わせないと約束したそうです。関崎さんは梨南ちゃんから本当は逃げたいんだということを、きちんと説明したのにわかってもらえなかったから、なんとかしなくてはという理由らしいです。
　立村評議委員長は、毎日、梨南ちゃんの様子を見に来てはいろいろ相談に乗ってあげているみたいです。梨南ちゃんは立村先輩のことを「不細工で頭が悪いけ ど考え方はまとも」という言い方をしてました。評議委員会から降ろされたということで逆恨みして、最近は失礼なことばかり言ってますけれど、立村先輩は全 然怒りません。それどころか、梨南ちゃんを連れて図書館へ行って話し掛けたりしています。どうして梨南ちゃんは、立村先輩にしないんだろうと不思議に思い ます。そうすればみんなが幸せになれるはずです。梨南ちゃんも幸せになるし、周りの人

たちも迷惑をかけられないですむし、立村先輩も満足するはずなのに、 どうしてみんなが楽しくなるようなことをしないんでしょうか。不思議でなりません。

佐賀さんは一番幸せになれるようなこと、しているのかなあ。
僕自身もしているとは思えない。

関崎さんを追いかければ追いかけるほど嫌われるのはわかっているはずなのに、どうして梨南ちゃんはそういうことがわからないのでしょうか。みんなが梨南 ちゃんのせいで不幸になっているのに気付かないなんて、本当にかわいそうだと思いました。私は幸せになりたいです。だから今日、思い切ってお手紙を書きま した。
やっぱり、私は、佐川さんに会いたいです。

身体が痺れた！　目の前の手紙が顔に着陸した。ばらばらになって慌ててまとめた。

佐川さんとお話していると、私がだんだん見えてくるような気がします。どうしてかわかりませんが、新井林くんや他の人たちと話してくるより、本当の私を掘り出してしまったような気になり、怖くなります。こんな気持ちになるのは初めてでした。
佐川さんが話してくれたことで覚えているのが「職業高校に行く」という話です。
私はそれまで、職業高校なんて頭の悪い人が行く学校なんだと馬鹿にしてました。ごめんなさい。本当に馬鹿なのは私でした。私は何にも考えないで、ただ 黙って青大附高、大学へ進むものだと思って、ぼおっとしてました。きっと健吾も梨南ちゃんも同じだと思います。けど、佐川さんがなぜ職業科を選びたいか、 その理由聞いて目が覚めました。
自立したい、大人になりたい。初めてわかりました。

その通りだ。いつも口やかましく成績のことで文句言われる生活から脱出したいし、何よりも自分の力で働いてみたい。自分の能力がどこまで伸びるか試して みたい。勉強なんかじゃなくて、僕の持っている能力そのものを専門で伸ばしてみたいなって思っていたからだ。おとひっちゃんのように、中学入試の雪辱戦と は違う意味で言ったつもりだった。
低レベルな奴だって馬鹿にされたかもしれないって思っていた。でもちゃんと、覚えててくれたんだ。

私も、佐川さんのように、自分の意志と能力でもって歩いてみたいと思いました。ずっと梨南ちゃんの言うことばかり聞いていた頃は、私ってのろまで泣き虫 で何にもできな子だと思ってました。けど、佐川さんに会ってからすべてが変わりました。私ももしかしたら、何かができるかもしれない。評議委員になれば、 もっといいことができるかもしれない。梨南ちゃんとか立村先輩なんかよりもずっと、上手にできるかもしれない。そんな自信がついてきました。女子とはなか なかうまくいかないことも多いけど、男子のみんなが助けてくれるので、だいぶスムーズに動くようになりました。

そうかそうか、よかったよかった。

ただ、どうしても気になるのが立村先輩のことです。梨南ちゃんのことを気に入っているのはわかってますが、私のことを冷たい視線で見ることが多くて ちょっと怖いです。私は梨南ちゃんのために、いいようにしてあげようって思っているのにです。もしかしたら交流サークルのことも、評議委員会関連とは関係 ない形で梨南ちゃんと関崎さんを会わせようとしているからじゃないかって、噂もあります。そんなことしたらまた梨南ちゃんは同じように関崎さんに嫌われるだけでなく、水鳥中学の人たちにまた迷惑をかけるはずです。私はそれを止めたいのですが、立村先輩は私のことを嫌っているみたいで、丁寧だけど冷たい言い 方をします。梨南ちゃんに本当のことを教えてあげたいのに、わざと私が梨南ちゃんに近づくのを避けるようなことします。
それだったらどうして立村先輩は、梨南ちゃんとお付き合いしてあげないのでしょうか。
責任取らないなんて、男らしくないと思います。梨南ちゃんもかわいそうです。

嫌な予感がぞわっとしたのは、気のせいだろうか。
僕のほっぺたが妙にひりひりしてきた。奴にぶん殴られた跡だ。

私は今、こういうことを相談できる人が、誰もいません。新井林くんは最近、立村先輩にいろいろ言い含められてるみたいです。私のことを疑うような目で見 るので、いつも私はいらいらしてしまいます。だんだん本当のことが言えなくなってます。言いたいのに言えないのが辛いです。　きっと私は、佐川さんでない とどういうことができるかどうか見つけられないんだと思います。幸い、佐川さんにはちゃんとお付きあいしている人がいるそうですから、安心して会えます。　すごくうれしかったです。お付きあいしてくれている人がいるってことを聞いて安心しました。新井林くんにも怒られずにお話ができるのが嬉しいです。お願 いします。今度の金曜日、またお店に寄ります。

――佐賀　はるみ――

　やられた。さされた。完全に壊れた。
　もうほとんど全身がゆでダコ状態のままベットの上でごろごろした。もだえていた。
　でんぐり返し、えびぞり、ありとあらゆる技を繰り出し、僕はひたすら笑いころげていた。天井の鈴蘭優がにこやかに僕を見下ろしていた。同じ言葉だけ、頭の中で叫んでいた。やんや、やんやって感じだった。
　――また、会えるんだ。佐賀さんと！
　笑い納めにエビぞりを三階くらいした後、僕はベットの上にあお向けで倒れた。口の中で何度も空気をかみ締めた。
　国語の成績は悪くないんだ。だから読み間違えることなんてない。
　佐賀さんが何を言いたいかがよっくわかる。
　――俺に会いたいって、ことだろ、要するに。
　鈴蘭優のポスターに並べた格好で読み返した。

　立村が僕と佐賀さんを二の次に見ているのと同じく、僕も葉牡丹の君・杉本さんのことはどうでもよかった。これ以上かまう気はない。佐賀さんもこの手紙読 む限りだと、「かわいそうな子」としか思っていないみたいだ。はっきり負けが決まっている可哀想な相手叩いたって、後味悪いだけだ。
　あのまま杉本さんを放置しておいたらどうなるか。
　おとひっちゃんはしょせん、他校の生徒だ。僕が無理に動かなくたっても大丈夫だ。あいつだっていざとなったら強い言葉で撥ね付けるだろう。
　けど一緒のクラスで顔を合わせている佐賀さんはどうなる？
　佐賀さんは評議委員に選ばれたという。相棒はあの健吾くんだし、同じクラスの連中も杉本さんのことなんか無視の一手で通しているという。これって一種の いじめに近い状態だ。もっとも当然過ぎるだけ当然な制裁される理由が杉本さんにはあるんだから、それは自業自得だと思う。周りだってそう考えているから、 先生も大目に見ているんだろう。
　だけど、いくら佐賀さんが頭のいい子だったとしても、あんなに涙もろい、傷つきやすい女の子であることには変わりないじゃないか。陰で杉本さんに八つ当 たりされて傷ついてしまう可能性だって大いにある。杉本さんみたいな人は日本語が通じないんだ。そんな奴に傷つけられて泣き寝入りなんてさせたくない、絶 対に。
　さらに立村が杉本さんの背後霊として立っているのも危険だろう。
　そうだ、問題はあの蝋人形だ。

　立村は自分自身を含めた「交流準備会騒動記」の脚本を書き、おとひっちゃんに読み聞かせ、

いつのまにか舞台設定を整えてしまった。想像だけど、一番近い予想だろう。僕も立村と同じ立場だったら、きっと似たようなことをしたに違いない。
「友情は音楽とともに」の脚本あらすじを聞かされた段階で立村は全て気づいたに違いない。脚本に盛った杉本さんあての毒なんて、一発でばれていたのだろ う。ピアノが弾けなくてやっかみの末に佐賀さんをいじめた杉本さん、このエピソードももしかしたら立村は知っていたのかもしれない。杉本さんを連れて佐賀 さんがトイレにひっぱって行った段階で、あいつもぴんと来たに違いない。ピーピー腹を装いさりげなく生徒会室を抜け出したのもそのためだろう。男子の恥を さらけ出す振りをして、佐賀さんたちを追いかけていったんだ
佐賀さんを追い返そうとしたのも、僕と佐賀さんと会おうとしたのを見抜いたからに違いない。杉本さんが途中で吐いちゃったりしたのはアクシデントかもし れない。けど、すぐに逆手に取り僕と佐賀さんとの繋がりを確認するのに使うとは、さすがだ。僕も同じことときっと考えたに違いない。
おとひっちゃんに取引を持ちかけたのはそれからだろう。　立村が何をまくしたてたかわからないけど、口八丁でおとひっちゃんを説き伏せ、図書準備室まで 押しかけた。もしあの時、佐賀さんと一緒のところを見られていたら、立村よりも先に、おとひっちゃんにぶん殴られていたに決まってる。
立村は冷静に全部計算して、僕が逃げられないところまで追い詰めた。佐賀さんがいることを確かめ、最後の逃げ場だけ作って去った、ってわけだ。後々佐賀さんを脅すかなにかするために。
杉本さんへ紳士的対応をしてもらうためには、自分のことを多少恥さらしだと思われても一向に構わない。奴にとっては葉牡丹もかすみ草と同じように見える花だったんだろう。

――どうして気づかなかったんだよ、俺は！
敵は毒花・葉牡丹なんかじゃない、葉牡丹の花を守っている、あいつだった。

佐賀さんの手紙が百パーセント正しいとするならば、立村の奴、杉本さんをおとひっちゃんとくっつけるのをまだあきらめていないんだ。正気かよって言いた い。あれだけ露骨に振られたにも関わらず、杉本さんはおとひっちゃんの手紙と写真を見つめているという。表向き「評議委員会と生徒会」の関連する行事には 参加させないにしても、個人的にだったら別だろう。抜け道は確かにある。個人のお付き合いに口出しするほど野暮でもないだろう。おとひっちゃん、そのとこ ろ、気がついているんだろうか。絶対気がついてないに決まってる。
立村は杉本さんに関することだったら見境なくなる奴だ。張り倒された僕がほっぺたでよっく理解しているつもりだ。しかも佐賀さんに対していわゆる「慇懃 無礼」な態度を取っているという。それだけでも僕には腹立たしいことだけど、何かの拍子で佐賀さんが自己防衛してしまった場合修羅場が繰り広げられるのは 目に見えている。杉本さんの行為が非常識であろうがなかろうが立村には関係ない。評議委員長の肩書きを盾に、全身全霊で佐賀さんをつぶしにかかるだろう。 杉本さんのためなら、腹下しのふりするのも、先輩連中にぶん殴られるのも、全く意に介

さない奴なんだ。
　そんな奴に睨まれてしまった佐賀さんの立場を考えると、僕だってこのままじゃあいられない。　もし何か間違いが起こったら大変なことになるぞこれは。

　　――私は佐川さんに会いたいです。

　おとひっちゃんは僕を「守る」ために、交流関連の行事から引き離そうとしている。「弟分」である以上しょうがないことなんだって、半ばあきらめていた。
　さっきたんもカモフラージュのためにって申し出てくれた。そんなの汚いやり方だってすぐに跳ね除けた。二股なんて、いくらなんでも佐賀さんとさっきたんに失礼すぎるじゃないか。
　けど、事情が変わった以上、僕は守られる「弟分」のままではいられない。佐賀さんに会わなくちゃ。どんな汚い手を使っても、僕は佐賀さんの想いに精一杯答える義務があるんだから。佐賀さんを「守りたい」って気持ちだけ、本物なんだから。

――さっきたん、俺とカモフラージュで付き合ってくれないかなあ？
　しばらくさっきたんと顔を合わせることを避けていた。そりゃそうだろう。あんな救いのない振り方をしてしまったんだから、できれば無制限に会わないですめばいいって思うのも当然だろう。僕だって言い過ぎたって思っている。
　でも、さっきたんってよくわからない子だ。
　何度もうちの店に来て、母さんに、「チューリップのつぼみがそろそろ咲きそうなんです。うちの母がおすそ分けしましょうか、って言ってます」　とかなんとか声をかけているんだそうだ。その うち数回は僕も二階の部屋にいて呼び出されたけれども、風邪引いて寝込んでいるとか言ってごまかしてしまった。それでもめげずに通ってくるところ見ると、 そろそろ一度は顔を合わせないとまずいかもしれない。そんな覚悟はしていた。
　佐賀さんの手紙をもらってから、僕はもう一度さっきたんが来てくれるのを今か今かと待ち構えていた。だって、これからの計画は、僕が直接さっきたんと話 をして了解を得ないと、意味がないんだから。おとひっちゃんも誰も間に挟まないで、きちんと説得しなくちゃいけないんだ。
　ＯＫしてくれるだろうか？　 してくれるわけないだろ？　 いや、さっきたんの方から最初に提案してくれたんじゃないか、だったら。
　何度も天秤にかけて見比べてみたけれど、やっぱりさっきたんがＯＫしてくれる方に傾いているように思えてならなかった。僕の直感が正しければ。

　朝、部屋から降りてみると、店はけっこうばたついていた。僕くらいかそのちょっと上くらいの中学生高校生がうじゃうじゃしている。あと二日でうちの学校 を含め公立中学の新学期もあいまって、学習参考書がやたらと売れているときいた。万引きする奴もかなりいるらしい。入荷した本からビニールを引き剥がしな がら目配りする母さんは、普段以上にぴりぴりしていた。手伝いたくないのだけど、人手が足りない以上無視するわけにもいかない。すっかり寝癖がついた頭の まま、レジに入った。
「ああら、ちょうどよかった。雅弘、五月ちゃんよ」
　母さんが僕の顔を見るなり、にこやかに手招きした。
　いつもだったら愛想悪く逃げるけれども、今日は違う。一度目で合図しておいた。目が合うとさっきたんは僕に向かってにっこりと笑った。相変わらずはつか ねずみのようなきょとんとした表情だけど、怒っていないってことだけはちゃんと伝わってきた。がくん、と心の中が重たくなった。レジでひとり前のお客さん に、文庫のカバーをかけている振りをして目をそらしていた。
「ほら、いいわよ、雅弘、行きなさいよ。五月ちゃんごめんね。今、ぼんくら息子を花の運び人に出しますからね、どんどん使ってやってね」
　母さんとは花のことで話が盛り上がってしまうらしく、結構お気に入りにしているみたいだ。女子同士だからか。僕の方を見てさっきたんは、いつものように優しい笑顔を見せた。目が合っ

て僕もちゃんと「おはよう」と呟いた。
「佐川くん、たくさんチューリップ、咲いたのよ。大きな花ばかりなの」
　なんで女子ってみんな、花をくれたがるんだろう。
「チューリップって、そんなにあるんだ」
「うん、佐川くんが抱えるくらいよ」
　どうせ俺は身体小さいよ。
　そんなひがみっぽいこと、思いたくないのに。
　むっとしたまま、僕はさっきたんと一緒に店から出た。別にさっきたんに対してむかついたわけじゃない。あとであやまっとこう。
　母さんがさっきたんに手作りのお菓子を持たせていた。
「ありがとうございます。うちのみんなでいただきます」
「五月ちゃんはほんと、礼儀正しくていい子ねえ。雅弘、あんたも見習いなさい！」
　きちんとお礼を言った後、はつかねずみのような瞳で見つめるとこが、女の人には好感度大らしい。

　外は制服姿の女の人たちがたくさんうろついていた。十一時くらいだと、ちょっと早い昼ごはんを食べる時間帯なのかもしれない。
「おなか空いたね」
「うん、佐川くんのお母さんからもらったお菓子、あとでいただくわ」
　どうせあぶらっこいドーナツなんだろう。母さんの作るおやつはまずい。好きじゃない。けどさっきたんの口には合うようだった。やっぱりさっきたん、見た目より好みがきわものだなって思った。
「あと一年なのね。受験まで」
　さっきたんが空の白い月を眺めながら小さな声で呟いた。少しはにかんでいた。
「さっきたんはどこ受けるの」
「青潟商業なんだけど、私頭よくないから先生にランク落としなさいって言われているの」
「僕も同じだよ。青潟工業。怒られっぱなしだよなあ」
　さっきたんの志望校が青潟商業高校だと聞かされて妙に納得していたりした。同じ職業科志望同士、気持ちが少しまぎれた。互いに仕入れた志望校情報と内申点計算について、なごみながら話していた。

　さっきたん家の塀の裾には、びっしりと背の高いたんぽぽが生え揃っていた。学校近くのたんぽぽにくらべてこの生きのよさはなんだ、と驚くくらいだった。茎をちぎって、首チョンパしたら、きっと遠くに飛びそうな厚みのある、しっかりした黄色い花だった。
　黄色の延長線上に、鉢植えのやはり茎が長い花。十字の親指大の大きさ。葉牡丹の花が満開だった。
　僕は立ち止まって見下ろした。あの時見た、毒々しい紫っぽい葉とキャベツに似た縮れた葉っ

ぱは、すでに下のところでまあるく広がっていた。もう「葉牡丹」って花の雰囲気じゃない。ただの葉っぱだった。なあんだって感じだった。
　さっきたんは柄の変わった縦楕円形のはさみを持ってきた。花を切る時はいつもそれを使うんだという。花壇いっぱいに咲き誇ったチューリップの花、その周 りを囲むようにやさしく花を広げているのはパンジー、その他紫色、白、もちろん桜の細い枝、僕の知らない種類の花が溢れていて、一面花のじゅうたんそのも のだった。そのまんま座り込んで、お花見気分でござ広げてお弁当を食べたくなった。
　びっくりするくらい大胆に、ざくざくチューリップの茎を切っていくさっきたん。
「いいよ、そんなに包まなくたって」
　かかえきれないくらいの花束って、初めて見た。気障っぽく「君の瞳に乾杯！」とかいって、渡したら笑えるだろうなあ。ただでもらってくなんてなんだか申しわけない。
「球根を大きくするためには、早めに花を切っておいたほうがいいのよ。そうするとね、花に行くはずの栄養が球根に集まって、来年もっと大きな花が咲くんだって、お父さんが言ってたの」
　しかし、やっぱり、なんか悪い。
　鉄バケツに水を張り、チューリップのの茎をつけて、中でまたちょきちょきやっていた。緑色のちょん切られた茎が浮いていた。
「こうするとね、お花が長持ちするのよ」
　丁寧に新聞紙でくるみ、僕にそのまま渡した。
「さっきたん、お花の先生になれるよ」
　意味のないことを口走ってしまったような気がする。いつもと変わんないさっきたんの優しい瞳と、はつかねずみに似た表情。今日はお下げにしている。やっぱり普段着にもお下げ髪が一番似合う。

　口に出したらすべてがぶっ壊れる。わかっていた。僕がこれから何をしようかと思っているかを、さっきたんは知らない。知ってたら二十本も赤と黄色のきれ いなチューリップを包んでくれるわけがない。さっきたんの素直な想いを僕はためらうことなく切り捨てた。さっきたんと、おとひっちゃんに対して、僕は最低 だ。
　そのくせに僕は真剣に考えているわけだ。佐賀さんを守るためにはどんな汚いやり方もするって。おとひっちゃんにはばれないようにこっそり佐賀さんと連絡 を取り合い、健吾くんたちには「俺には彼女がいるから付き合う気ないよ」ってアピールして、立村の攻撃をなんとしても食い止めようって思っている。佐賀さ んを傷つける奴を、僕なりの手で追い払ってやりたい、それだけのために。
　さっきたんは構わないって言ってくれたけど、あの日からだいぶたったんだ。心変わりしている可能性だってあるのに、どうしても僕は言わずにいられないのだろうか。
　僕のために、こんなに尽くしてくれているさっきたんを、どうして。
　どうしてさっきたんを好きになってあげられなかったんだろう。
　しばらく僕は受け取ったチューリップの花束を覗き込んでいた。チューリップの香りはそれほ

どきつくない。中の花粉が少し花びらの裏にくっついているのが見えた。もう一度抱え直し、さっきたんの髪をもう一度見つめた。
　やっぱりお下げでなくっちゃ、嘘だ。 ふたっつに分けても似合わない。

　――さっきたん、この前提案してくれたことなんだけど、今からでも、だめかな。
　まず、花束に話し掛けた。むせてこほんと咳をした。
　――ちゃんと、俺なりに、大切にするから。
　――ほんと、さっきたんのしてほしいこと、俺なりにするから。
　――だから、さっきたん、僕とカモフラージュで付き合ってくれないかな。

「さっきたん、あのさ」
そのまま発しようとした。
　まんまるな瞳で、さっきたんは僕を見つめた。
　びっくりするとこんな顔をする。花壇の中でまた一輪、花を摘もうとしていたらしい。立ち上がろうとして中腰になった。ちゃんとするっと出てくるはずだっ た。なのに、さっきたんの顔を見つめたとたん、喉がこわばってしまった。胸が詰まって、それしか出てこなかった。なんかちょっといがいがした声だって、僕 にもわかった。首を小さく振ってごまかそうとしたけどやっぱりだめだった。
　言えるわけ、ないよ、絶対。

　さっきたんの顔見てたら、絶対にできるわけない。絶対僕を受け入れてくれるって顔してるから。どんなにやなことだって、きっと「いいわ」って言ってくれ るってわかってるから。僕が佐賀さんのことを考えているように、さっきたんも僕のことを同じように思ってくれてるってこと、今いやってほどわかっているか ら。
　――佐賀さんにそうされたくないのは俺だってわかってるのにさ！
「俺は、さっきたんが思ってるような、いい奴なんかじゃないよ」
　自爆するしかなかった。もう逃げ道、ふさぐしかない。
　さっきたんがふたつに髪の毛分けたところを、僕は一瞬想像し、すぐにさっと頭の中から消した。
「俺、最低な奴だってこの前、わかっただろ。だからもう俺のことなんか、考えるなよ」
　はさみを両手で抱え、小首をかしげた。
「佐川くん、私そんなこと、思わせるようなことしてたらごめんなさい、私頭悪いから」
「悪くないよ、ちっとも悪くないんだ。さっきたんはいい人なんだよ」
　かぶりを振った。なんだかガキっぽいことしそうだった。片手でチューリップの花束をぶら下げた。折れそうな程、茎を握った。
「俺、違うんだよ、今なんでさっきたんとくっついて来たか、知りたいだろ？　母さんに頼まれて花をもらいにきただけだと思ってるんだろ。違うんだよ、俺、さっきたんにまた変なこと言お

うとしてたんだよ、最低なんだよ」
　桜の木に雀が留まっている。鶯だったら春っぽく聞こえるのに。さっきたんは僕の剣幕にびびったのか、すっかり固まっていた。
「さっきたん、終業式のあと、青大附中の連中と会った時のこと、覚えてる？」
　僕はゆっくりと尋ねた。首を振ってさっきたんが何かを言おうとした。
「あの時の子から手紙を昨日、もらったんだ。俺と会いたいんだって」
　ぴくんと咽元が動いた。また僕はさっきたんの気持ちをはさみでちょん切っている。
「けど、条件があるんだってさ。俺が、さっきたんと付き合っていることなんだってさ」
「どうして？」
　きょとんとして、さっきたんが手元のはさみをぶら下げた。濃いブルーのジャンバースカートが風で揺れた。
「俺が、さっきたんと付き合っていれば、あの子と付き合っている男子がやきもち妬かないから、安心して会えるんだ。この前会った、バスケ部のことばかり話 していた、一年だよ。俺、あいつと話してて楽しかったし友だちでいたかったからあきらめようとしてたんだ。笑っていいよ、さっきたん。さっきたんが花摘ん でくれてた時、俺はずっとあの子のことばっかり考えてたんだよ」
　ゆっくり、かみ締めるように言い聞かせた。納得するしかないみたいに。
「今日、さっきたんにもう一度、俺の方からつきあいかけて、あの子に会うための条件を整えようって思ったんだ。最低だよな。俺、本当に、よくしてもらう価値のない人間だってこと、よくわかったよ。だから、もう俺のことなんて、無視したっていいんだ。ごめん。さっきたん」
　風が強く吹きはじめた。さっきたんが砂埃を目に入れたらしく痒そうに目をこすっていた。泣いているように見えた。
「ちゃんと好きになってあげられなくて、ごめん」
　不意に僕の眼にも涙が溜まってきた。砂埃が入ったせいだった。目の玉がごろごろして、また目をこすった。こう言う時、上まぶたを引き上げて、無理やり涙を流すとごみが取れるはずだ。空を仰いで、まぶしい白い太陽を見ながら、まぶたをひっぱった。

「佐川くん、あのね」
　呼び止めるさっきたんを振り切り、僕は家の門から出ようとした。
「聞いてほしいの」
　さっきたんも両目を激しくこすっていた。同じくらい、涙目だった。
「関崎くんが交流会の帰りに話していたの聞いたの。内緒にしなくちゃいけないことだってわかっているけど、ちゃんと話すわ」
　おとひっちゃん、まただ。あいつ、さっきたんに声かけるだけでも顔が真っ赤になる奴だったのにやたらと行動的だ。信じられなくって、僕は思わずぽかんと口をあけてしまった。
　さっきたんはまぶたを片目だけ押えて、こくんと頷いた。
「関崎くんは、佐川くんのことを心配していたの。青大附中の人たちと会わせると、またごたご

たするから、これからは交流関係に出さないって決めたって言ったの。青大附中の委員長さんも、それがいいって言ってたわ」
　なんでさっきたんに先に打ち明けるんだ？　絶対、おとひっちゃんらしくない。
　さっきたんは少し咳き込んだ。
「だから、クラスが別になっても、佐川くんのことを力づけてやってくれって頼まれたの」
　そんな器用な真似、誰が教えたんだよ。信じられない。さっきたんの言葉もそうだけど、何よりもおとひっちゃんの行動が、おかしすぎる。行動が！
「それで、関崎くん、言ってたの。私なら、佐川くんのことを一番わかってやってくれるから、これからも友だちでいてやってほしいんだって。あの、この前の交流準備会の時も話してたのよ」
　親みたいなうざったいこと言うなって言いたい。さっきたんに八つ当たりできない代わり、僕は思いっきりチューリップを地面に叩きつけたくなった。さすがに思いとどまった。代わりに石を蹴飛ばした。側の葉牡丹の鉢にぶつかった。
「よけいなことするなよな！　おとひっちゃんも」
「私もそう思うわ、だって」
　いつも通りの大人しい口調からこぼれた。息継ぎして、もういちど「だって」を繰り返した。
「佐川くんは、青大附中の人に、会いたいのでしょう」
　はっとして、さっきたんの顔をまじまじと見つめた。
「私より、ずっと、青大附中の人に。だから」
　お下げ髪を両肩に垂らし、両手を胸に当てた。
「私、もう一度言うわ」
　春風だろうか、また埃っぽい空気を吸いすぎ僕は咳こんだ。聞いたら、おなかのところがどうにかなっちゃいそうだった。足を踏ん張り花束を持ったまま僕はさっきたんの口もとをじっと見つめた。
「関崎くんと、青大附中の人たちの前では、私とお付きあいしたことにすればいいの。そうすれば佐川くんあの人に堂々と逢えるし、無理に交流会に出なくたっていいの」
　またぐぐっとむせびそうになる。予定通りなのに、これでいいはずなのに。頭の中が真っ赤になった。首を振りながら僕は違うって言おうとした。さっきたんの真剣な眼差しに、阻まれた。
「私、それでかまわないの」

　どんな気持ちで言ってくれたのか、どうして許せるのか、さっきたんの気持ちが僕には到底理解できそうにない。僕だったら絶対に許せない。 もし佐賀さんにそんなことされたら、と想像するだけでもむかっときそうだ。目の前で僕はじっとさっきたんを見つめなおした。
　花壇の中で花の茎を切り刻んでいるさっきたんはきれいだった。目をこするしぐさも、花をそろえて包んでくれるしぐさも。僕がもし、さっきたんに告白されていたら。もし、佐賀さんと一度も会わないですんだとしたら。もし、僕がおとひっちゃんの親友でなかったとしたら。

――好きになってあげたい人を、好きになってあげられなかった。
　さっきたんの横顔を見ながら、僕は佐賀さんの顔を思い浮かべていた。佐賀さんが僕に、ソフトクリーム型の手紙を渡してくれた時のはにかみを、重ねてい た。さっきたんに心の中でごめんって言うことしか、今は思い浮かばなかった。やっぱり僕は最低な奴だった。敗者復活戦で手に入れたものを、もう手放すこと はできなかった。

　学校でさっきたんとふたりで話をしている時だけは、絶対さっきたんのことだけ考えようと決めた。佐賀さんにふたりきりで会っている時以外は、さっきたんを大切にするって決めた。
　今、なによりも欲しいものを、さっきたんは花束と一緒にプレゼントしてくれたんだから。
　僕は顔を上げた。唇を思いっきり堅く結んだ。じっとさっきたんを見据えた。そうしないとうまく言葉が出てこなかった。声が震えた。
「俺、絶対、水鳥中学の中ではさっきたんをないがしろになんかしない」
　言葉が詰まった。
「もちろん外でだってさっきたんがそうしてほしいってこと、きちんとするよ」
　僕はしばらく涙目でうつむいていた。風を避けるためだった。
「恥ずかしいって顔もしないで、さっきたんのこと、大切にする」
　さっきたんがポケットからティッシュを取り出し、そっと差し出してくれた。
　受取って目を拭い、僕は無理矢理笑った。

まだ花がしおれないうちに母さんへチューリップの巨大な花束を渡した。大喜びして玄関に飾る母さんを放っておいて、部屋に戻った僕はもう一度佐賀さんからの手紙を読み直した。僕は部屋に戻り机に向かった。手にはまだ花の茎から出たつゆが緑っぽくついていた。
　もう後戻りはできない。二段目の引き出しを開いたまま、手紙を載せた。すぐ覗き込めるようにだった。写すためのノートを開いた。
　手紙から、水鳥中学生徒会および交流準備関係で必要な情報を抜き出した。
　僕はすぐにそらんじている電話番号をダイヤルした。
　男の声。思った通り総田本人が出た。

「よお、佐川、どうした、少しは明るい未来が開けたか！」
「あのさ、総田」
　僕は口元をふっとゆがませてみた。
「青大附中の内部に関する最新情報が手に入ったんだけど、聞きたいか。もちろん、おとひっちゃんには内緒だよ」
　総田と話をしていると、さっきまでチューリップ抱えてめそめそしていた僕が姿を隠して、「水鳥中学の天才参謀」だった僕が悪役笑いをしながら現れる。今のどうしようもない自分を立て直すには、総田と話をすることが絶対必要だった。弟分じゃない僕を引っ張り出したかった。
「まず、杉本さんがこれから先、うちら水鳥中学との交流を中心とするグループに参加する、これが大問題だよ、総田」
　かいつまみつつ僕は佐賀さんの手紙内容を説明した。
「立村はもう二度と杉本さんを、水鳥中学へ送り込まないっておとひっちゃんに約束したらしいんだ。噂によると、先輩たちからリンチされたかなんかしたみたいだよ」
「へえ、まじかよ」
　あの蝋人形だったら一発張り倒した段階でこなごなだろう。きっと総田、甘く見ているだろう。あいつのストレートパンチを食らう瞬間までは、僕もそう思っていた。頬の辺りが思い出したようにひりひりしてきた。
「けどさ、交流グループかなんかに入っているってことは、へたしたら顔合わせる可能性がないとも限らない、ってことだよね」
「まあな。行きはしないが待ちはする、って奴だな」
「しかもおとひっちゃんへお熱の状態は全く変わってないんだって。おとひっちゃん、確か青大附中に手紙で挨拶状みたいなの書いただろ？　どうもさ、それを立村経由で手に入れて毎日眺めているらしいんだよ。気持ち悪いよな」
「さむいぼだあ」
「きっとおとひっちゃん、杉本さんのこと可哀想だなって思ったんだと、僕思うんだ。一度はきっちり振ろうとしたけど、相手が常識的日本語理解できなかった のは計算違いでさ。さすがのお

とひっちゃんもそれ以上説得するのをあきらめたらしいんだ。見事にそれ、裏目に出ているよ」
　やっぱりおとひっちゃんはそういうとこが抜けている。僕だったらやっぱり、救いようのないくらいきっぱり振るのに。
「甘い」
　僕もそう思う。
「おとひっちゃんの本音はきっと、『もう二度と勘弁』だろうなあ。立村に頭下げられて、仕方なく望みは残してやったけど、相手は自分に都合のいいことしか耳に入れないこまったちゃんだろ」
「けどなあ佐川、ひとつ疑問があるんだがいかに？」
「なんなりとどうぞ」
「佐川を生徒会関連から外したがってだ、お前を水野さんとくっつけたがってだ、いろいろとあいつなりに頭を使っているけどなあ、関崎シーラカンスがあんなこと、普通思いつくと思うか？」
　やはり、総田も同じこと考えていたんだろう。思わずにやっと笑いが洩れた。
「そうだよ、総田の言う通り。あれは、おとひっちゃんがはめられたんだ」
「誰にだよ、まさか」
「あの、蝋人形だよ」
　あの日、おとひっちゃんと公園で並んで座っていた、蝋人形立村のかすかな微笑みと繋がった。どうしようもなく惨めだったあの日のこと。どうしようもない苦い気持ちを。
「立村が僕を目の仇にしているのは、杉本さんを侮辱したからだよきっと」
「まさか、あんなお茶わんこ娘のために、なんでだあ？」
　総田にはわからないだろう。僕だって理解不能だ。ただ、すべての出来事を僕が佐賀さんのために仕組んだのに対して、立村は杉本さんとおとひっちゃんを軸 にすえて動かした。僕や佐賀さんを吊るし上げることだってあの状況だったら簡単だったろう。けど立村はおとひっちゃんと取引をして……たぶんおとひっちゃ んにその意識はないと思うけど……杉本さんと話をしてもらい、いい思い出に持って行ってもらうこと、百パーセント振るよりもほんの少しだけ希望が持てる言 葉で話してくれるよう頼んだってわけだ。そのためだったらおとひっちゃんの要求、佐賀さんとさっきたんとの入れ替えを了解し、立村自身が恥をかかせられる こともいとわない。
　全部話すわけにも行かなくて、僕は総田にもう一度繰り返すだけだった。
「すべては、杉本さんを守るためだったんだ」
　皮肉なことだけど同じ気持ちを、今、僕も理解している。

　僕はできるだけ落ち着いた声で総田に今後の展望を語った。
「これから考えなくちゃなんないのは、向こうの蝋人形がこれから先、どういう罠をしかけてくるかだよ。今も言ったけど、あいつはとにかく杉本さんを守るた めだったら手段を選ばないよ。おとひっちゃんがすっかり忘れてぼおっとしている間に、杉本さんと会わせたりするかもしれないよ。おとひっちゃんのところで 止まるならともかく、水鳥中学生徒会にも飛び火したら、また

大変なことになるよ。二重スパイが絶対必要だと俺、思うんだ。総田、俺だったらベストキャスト だろ？　この前総田が言った通りの計画を、そのまま実行するんだ。さすが総田教授って、俺言いたくなっちゃったよ」
　一通り説明を終えて僕は総田に話を振った。
「ナイスだな、けどなあ佐川、それってかなりやばくないか？　あおった俺が言うのもなんだけどな」
　言葉を濁した。
「無謀じゃないよ。簡単だよ。この前総田も言っただろ？　お互い彼氏彼女がいれば、噂立ってもちゃんと違うっていえるって」
「おいおい、まさか」
「そうだよ、まさかだよ。仕入先はもう用意してあるんだよな」
　僕は悪役のお殿様が作るような口許をこしらえてみた。鏡がないから見えないけれども、たぶんそうなってると思う。
「お前がめろめろの、例の彼女か？」
「了解済みだ。いいだろ」
「や、やばくねえかそれ。それに水野さんもＯＫしたのかよ？」
　自分で提案したくせに総田の奴、まじであせってる。なんだかおかしくなった。
「そうだよ、ちゃんと話はついているんだ。あとは総田、お前だけ」
「俺はどうしろってんだよ」
「ほら、俺生徒会室に暫く近づけないだろ？　どうしても生情報手にいれられないだろ？」
　僕の口だけがするするすべる。ここんところはきっちりと約束しておかないと。自分の学校情報が曖昧なまま動きたくはない。無駄な動きはしたくない。
「俺はひとりで青大附中の子と連絡を取るよ。けど水鳥中学生徒会の状況がわかんないと、俺だってうまく質問できないよ。だから、おとひっちゃんに気づかれないように、こっそり情報教えてほしいんだ。総田、お前しかいないんだよな、その点頭のいい奴ってさ」
　あいつの「教授」たるプライドをくすぐってやった。やっぱり反応した。
「まあそのくらいならいっくらでもできるよなあ。けどな、佐川、お前まじでばれたらどうするんだ。関崎はともかくも、彼女の彼とか」
「その彼氏は僕のことちゃんと知ってるし、何の問題もないよ。おとひっちゃんは僕とさっきたんが付き合えば安心するよ。要はあいつに、俺のことを手のかか る弟分だと思い込ませておけばいいんだよ。そんなのお茶の子さいさいだ。水鳥中学生徒会のためでもあるんだよ、これって。俺だっておとひっちゃんをこれ以 上、杉本さんと絡ませて神経ぼろぼろな運命に落としたくないし」
「ジェラシーの炎に対する対策ってねえのか？」
　僕は首を振った。おとひっちゃんに限ってそれは心配ない。だって、
「おとひっちゃんは、さっきたんが笑っていれば、それでいいと思ってるよきっと」
　関崎乙彦はそういう男だ。誰よりも、自分にとって大切な人が幸せだったらそれでいい。たと

え親友に片想いの子を取られても、純粋に応援してくれる奴なんだ。
　俺だっておとひっちゃんのことは大好きだ。ばかだけどひたむきなあいつのことを助けてやりたい。けど、今のままの弟分のままではだめなんだ。
　守られてるんでなく、守りたいんだ、おとひっちゃんも、佐賀さんも、なにもかも！

　ふふふっと笑った後、総田は調子よく掛け声をかけてきた。
「待ってました、天才参謀佐川雅弘復活だな！」
　総田の声を聞きながらも僕はしっかり冷めていた。今までは素直に喜んでいられた「天才参謀」の肩書きも、もうはしゃいで受取れない。僕しか気づいていないかもしれないけど、言っておかなくちゃ。きっちり念押して。

「忘れるなよ総田、敵は立村、奴だけだ」

　―終―

葉牡丹の花

http://p.booklog.jp/book/77995

著者：舞夜じょんぬ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/77995

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/77995

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ